繋Ⅴ遺跡

－繋小学校校舎等増改築工事事業に伴う発掘調査報告書－

２０１３．３

盛岡市教育委員会

序

盛岡市は，東北地方の東部を南北に縦断する北上川と，その支流である雫石川・中津川が合流する地点に中心市街地が形成され，北に雄大な岩手山と姫神山を望む，岩手県の県庁所在地です。その骨格は，約400年前に南部氏により築城された盛岡城を中心とした城下町であり，藩政そして県政の中心として，また交通の要衝として栄えてきました。近年の盛岡市は，平成4年4月に南に隣接する都南村と，平成18年1月に北に隣接する玉山村と合併し，人口約30万人，面積約886平方キロメートルという北東北の拠点都市となるとともに，平成20年4月には中核市へ移行しました。

繋地区は，その新生盛岡市の西部，御所ダムの南湖畔に位置し，「盛岡の奥座敷」と呼ばれる岩手県内有数の温泉地です。その地名は八幡伝説に由来し，縄文時代から近世に至るまで各時代にわたる遺跡が数多くあります。近年は，観光振興と防災対策のため道路整備等が実施され，それら市公共事業に伴う発掘調査や，個人住宅建築に伴う緊急発掘調査を盛岡市教育委員会が行っており，地域の歴史を知る上で貴重な資料が数多く発見されています。

そのような重要な遺跡群の中心部に位置するのが市立繋小学校であり，昭和26年の校庭整地工事の際には，完形の縄文土器7個体が出土，昭和63年に日本を代表する美しい縄文中期の土器として国重要文化財に指定され，現在は市遺跡の学び館に所蔵・展示されています。

盛岡市教育委員会では，老朽化した繋小学校校舎・体育館の増改築工事を計画し，貴重な遺跡をできるだけ保存することを目的に平成14年度に敷地内の試掘確認調査を実施。その結果，残存する竪穴住居跡等の遺構量の最も少ない既存校舎・体育館の場所に改築をおこなうことと決定し，工事の進捗に応じて発掘調査を平成16・18 ～ 22年度の計6次にわたって実施しました。この間，市民・地域住民の方々，繋小学校の児童を対象とした現地説明会を実施して多数の参加をいただいき，また平成22年3月には発掘調査概報を刊行，市遺跡の学び館で展示会を行うなど，その成果の公開・普及を図ってきたところであります。

本報告書は，その繋小学校校舎等増改築工事事業に伴う発掘調査の詳細な調査成果をまとめたものであり，市民の皆様をはじめ，各学校や教育機関・研究者等の方々に，当該地域の歴史を知るためにご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが，発掘調査を実施するにあたり，多大なるご協力やご指導を賜りました文化庁文化財部記念物課ならびに岩手県教育委員会生涯学習文化課に対し深く感謝申し述べると共に，発掘調査にご理解とご協力をいただきました地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成 25 年 3 月

盛岡市教育委員会
教育長　千葉　仁一

例　　言

1．本書は、盛岡市繋字舘市地内に所在する繋Ⅴ遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書は、繋小学校校舎等増改築工事事業に伴い実施した平成 16・19 ～ 22 年度の調査成果の報告書である。

3．本書は遺構および遺物の実測図などの資料呈示を意図して、編集は神原雄一郎、佐々木紀子が担当し千田和文、室野秀文、津嶋知弘、花井正香、佐々木亮二、三品花菜子が協力した。

4．遺構の平面位置は、平面直角座標Ｘ系を座標変換した調査座標で表示した。

調査座標原点　　Ｘ－ 36,000,000　＝　ＲＸ± 0.000

Ｙ＋ 16,000,000　＝　ＲＹ± 0.000

5．高さは標高値をそのまま使用している。

6．土層図は堆積のあり方を重視し、線の太さを使いわけた。土層註記は層理ごとに本文でふれ、個々の層位については割愛した。なお、層相の観察にあたっては『新版標準土色帖』（1994 小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業㈱発行）を参考にした。

7．遺構記号は次のとおりである。なお、縄文・弥生時代の遺構番号は 001 ～、奈良・平安時代の遺構番号は 0501 ～、中世及び近世の遺構番号は 1001 ～としている。

	遺　構	記号	遺　構	記号	遺　構	記号	番　　号
記号	竪穴住居跡	ＲＡ	土　　坑	ＲＤ	配石・集石	ＲＨ	縄文・弥生　001～
	建　物　跡	ＲＢ	竪　　穴	ＲＥ	井　戸　跡	ＲＩ	古代（竪穴住居跡）0501～ 古代（土　坑）0501～
	柱　列　跡	ＲＣ	溝　　跡	ＲＧ	遺物集中区	ＲＰ	中世・近世　1001～
	その他	ＲＸ					

8．土器の区分は、縄文土器・弥生土器・続縄文土器・土師器・須恵器・あかやき土器にわけた。

9．発掘調査に伴う出土遺物および諸記録は、盛岡市教育委員会で保管してある。

10．本遺跡関係で盛岡市教育委員会刊行の報告書は次のとおりである。

「繋遺跡－昭和 58 年度発掘調査概報－」（1984）

「繋遺跡－昭和 60 年度発掘調査概報－」（1986）

「繋遺跡－平成 5・6 年度発掘調査概報－」（1995）

「繋遺跡－平成 7 年度発掘調査概報－」（1996）

「繋遺跡－平成 9 年度発掘調査概報－」（1998）

「盛岡市内遺跡群　繋Ⅳ遺跡－平成 14 年度発掘調査概報－」（2003）

「繋Ⅴ遺跡－繋小学校校舎等増改築工事事業に伴う緊急発掘調査概要報告書－」（2010）

「盛岡市内遺跡群　繋Ⅴ遺跡－平成 20・21 年度発掘調査報告書－」（2011）

11.　調査体制

[調査主体]	盛岡市教育委員会	
	教育長	千葉 仁一
	教育部長	佐藤 義見
	教育次長	柴田 道明
[調査総括]	歴史文化課　遺跡の学び館	
	参事・館長事務取扱	田山 浩充
	主幹兼館長補佐	千田 和文
[調　査]	文化財主査	室野 秀文
	文化財主査	津嶋 知弘
	文化財主査	神原 雄一郎　※調査・資料整理
	文化財主任	花井 正香
	文化財主任	佐々木 亮二
	文化財調査員	佐々木 紀子　※調査・資料整理
	文化財調査員	三品 花菜子
	文化財調査員	鈴木 賢治
	文化財調査員	木幡 里美
[管理・学芸]	主査	吉田 尚
	主任	江本 敦史
	学芸調査員	山岸 佳澄
	学芸調査員	山野 友海

＜発掘調査・室内整理＞　阿部正幸、伊藤敬子、長内理恵、及川京子、嘉糠和男、工藤則子、小林勢子、小松愛子、紺野志保子、斉藤静子、佐藤和子、佐野光代、白岩千佳、千葉留里子、日野杉節子、谷藤貴子、田村祐一、袴田英治、原田敦子、福田香乃、藤田友子、細田幸美、柾木絵理、宮田輝彦、村田麗子、女鹿麗子

＜業務委託＞　タックエンジニアリング株式会社（石器実測 173 点）

＜御指導・御協力＞

＜関係機関＞　岩手県教育委員会、（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター、滝沢村教育委員会、八戸市教育委員会、盛岡広域障害者就業・生活支援センター

＜個　人＞　井上雅孝 (滝沢村教育委員会)、市川健夫（八戸市教育委員会）、小保内裕之（八戸市教育委員会）、鎌田勉 (岩手県教育委員会)、菅野智則（東北大学）、日下和寿 (白石市教育委員会)、菅原哲文（財団法人山形県埋蔵文化財センター）、武田良夫（日本考古学協会）、中村良幸（花巻市教育委員会）、星雅之（公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター）

目　　次

例　　言
目　　次
表　目　次
挿　図　目　次
写　真　図　版

Ⅰ．遺跡の概要
　１．遺跡の環境 …… 1
　２．過去の調査 …… 2
Ⅱ．調査内容
　１．調査経過 …… 12
　２.遺跡の基本層位と遺構検出状況 …… 13
　３.検出された遺構と遺物
　（１）縄文時代の竪穴住居跡 …… 14
　（２）縄文時代の土坑 …… 48
　（３）縄文時代の埋設土器 …… 53
　（４）縄文時代のピット群 …… 55
　（５）縄文時代の遺物包含層 …… 56
　（６）平安時代の竪穴住居跡 …… 61
Ⅲ．総括 …… 62

表　目　次

第１～３表　縄文時代土坑計測表 …… 50～52

挿　図　目　次

第１図　繋遺跡位置図(1：100,000) …… 1
第２図　繋遺跡全体図(1：2,500) …… 3・4
第３図　繋Ｖ遺跡第29・36・37次発掘調査全体図 …… 7・8
第４図　繋Ｖ遺跡第33・34次発掘調査全体図 …… 11
第５図　繋Ｖ遺跡第29・33・34・36・37次発掘調査区位置図 …… 12
第６図　ＲＡ221竪穴住居跡、ＲＤ465 ～ 469土坑 …… 69
第７図　ＲＡ222竪穴住居跡、ＲＤ512土坑 …… 70
第８図　ＲＡ223・227竪穴住居跡、ＲＤ504・505・507土坑 …… 71
第９図　ＲＡ224竪穴住居跡、ＲＤ513・518土坑 …… 72
第10図　ＲＡ225・232竪穴住居跡、ＲＡ226・228炉跡、ＲＤ509 ～ 511土坑 …… 73
第11図　ＲＡ229 ～ 231竪穴住居跡、ＲＤ514土坑 …… 74
第12図　ＲＡ233Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡、ＲＤ522土坑 …… 75
第13図　ＲＡ234・257竪穴住居跡、ＲＡ235炉跡 …… 76
第14・15図　ＲＡ236・263竪穴住居跡(1)・(2) …… 77・78
第16図　ＲＡ237竪穴住居跡、ＲＡ267・272・282炉跡 …… 79
第17図　ＲＡ242・243・249竪穴住居跡、ＲＡ239・241・245炉跡(1) …… 80
第18図　ＲＡ243(2)・248・249(2)竪穴住居跡、ＲＡ239・241・245炉跡(2) …… 81
第19図　ＲＡ244・251竪穴住居跡、ＲＤ521土坑(1) …… 82
第20図　ＲＡ238・244(2)・246・251(2)竪穴住居跡、ＲＤ521(2)・525土坑 …… 83
第21図　ＲＡ252竪穴住居跡(1) …… 84
第22図　ＲＡ252(2)・266竪穴住居跡 …… 85
第23図　ＲＡ253竪穴住居跡 …… 86
第24図　ＲＡ258Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡 …… 87
第25図　ＲＡ258Ⅲ期・Ⅳ期・Ⅵ期竪穴住居跡 …… 88
第26図　ＲＡ258Ⅴ期竪穴住居跡 …… 89
第27図　ＲＡ259竪穴住居跡、ＲＤ519土坑(1) …… 90
第28図　ＲＡ259竪穴住居跡、ＲＤ519土坑(2)、ＲＥ260竪穴跡 …… 91
第29図　ＲＡ261・264竪穴住居跡 …… 92
第30図　ＲＡ262・268竪穴住居跡 …… 93
第31図　ＲＡ265・270・271竪穴住居跡 …… 94
第32図　ＲＡ269Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡 …… 95
第33図　ＲＡ273・279・288竪穴住居跡 …… 96
第34図　ＲＡ274Ⅰ期竪穴住居跡、ＲＤ527土坑 …… 97
第35図　ＲＡ274Ⅱ期竪穴住居跡 …… 98
第36図　ＲＡ275・276竪穴住居跡、ＲＤ523土坑 …… 99

第37図　ＲＡ277竪穴住居跡、ＲＤ520土坑(1) …… 100
第38図　ＲＡ277(2)・281竪穴住居跡、ＲＤ520土坑(2) …… 101
第39図　ＲＡ283・285・286竪穴住居跡 …… 102
第40図　ＲＡ287・289・290竪穴住居跡、ＲＥ291竪穴跡、ＲＤ517・529・530土坑 …… 103
第41図　ＲＡ292・0501竪穴住居跡、ＲＡ0501竪穴住居跡出土遺物 …… 104
第42図　ＲＥ293竪穴跡、ＲＤ377 ～ 403土坑 …… 105
第43図　ＲＤ404 ～ 464土坑 …… 106
第44図　ＲＤ470 ～ 493土坑 …… 107
第45図　ＲＤ494 ～ 503・506・508土坑 …… 108
第46図　ＲＤ515・516・524・526・528・531 ～ 549土坑 …… 109
第47図　ＲＥ293竪穴跡、ＲＤ377 ～ 420・423土坑断面 …… 110
第48図　ＲＤ421・422・424 ～ 464・470 ～ 479土坑断面 …… 111
第49図　ＲＤ480 ～ 503・506・508・515・516・524・526・528・531 ～ 539土坑断面 …… 112
第50図　ＲＤ540 ～ 549土坑断面、ＲＰ001 ～ 007埋設土器 …… 113
第51図　ＲＡ221竪穴住居跡出土遺物 …… 117
第52 ～ 54図　ＲＡ222竪穴住居跡出土遺物(1) ～ (3) …… 118 ～ 120
第55 ～ 57図　ＲＡ223竪穴住居跡出土遺物(1) ～ (3) …… 121 ～ 123
第58図　ＲＡ224竪穴住居跡出土遺物 …… 124
第59 ～ 62図　ＲＡ225竪穴住居跡出土遺物(1) ～ (4) …… 125 ～ 128
第63図　ＲＡ225(5)・226竪穴住居跡出土遺物 …… 129
第64図　ＲＡ227・229(1)竪穴住居跡出土遺物 …… 130
第65図　ＲＡ229竪穴住居跡出土遺物(2) …… 131
第66図　ＲＡ229(3)・230・232竪穴住居跡出土遺物 …… 132
第67 ～ 70図　ＲＡ233Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物(1) ～ (4) …… 133 ～ 136
第71図　ＲＡ233Ⅰ期(5)・233Ⅱ期・234竪穴住居跡出土遺物 …… 137
第72図　ＲＡ235・236(1)竪穴住居跡出土遺物 …… 138
第73・74図　ＲＡ236竪穴住居跡出土遺物(2)・(3) …… 139・140
第75図　ＲＡ237竪穴住居跡出土遺物 …… 141
第76 ～ 78図　ＲＡ238竪穴住居跡出土遺物(1) ～ (3) …… 142 ～ 144
第79図　ＲＡ239・241竪穴住居跡出土遺物 …… 145
第80・81図　ＲＡ242竪穴住居跡出土遺物(1)・(2) …… 146・147
第82図　ＲＡ243竪穴住居跡出土遺物 …… 148
第83 ～ 85図　ＲＡ244竪穴住居跡出土遺物(1) ～ (3) …… 149 ～ 151
第86図　ＲＡ244(4)・245・246(1)竪穴住居跡出土遺物 …… 152
第87図　ＲＡ246竪穴住居跡出土遺物(2) …… 153
第88図　ＲＡ248・251竪穴住居跡出土遺物 …… 154
第89 ～ 94図　ＲＡ252竪穴住居跡出土遺物(1) ～ (6) …… 155 ～ 160
第95・96図　ＲＡ253竪穴住居跡出土遺物(1)・(2) …… 161・162

第97図　ＲＡ257・258Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物 …… 163
第98・99 図　ＲＡ258Ⅱ期竪穴住居跡出土遺物(1)・(2)…… 164・165
第100図　ＲＡ258Ⅲ期・Ⅴ期・Ⅵ期竪穴住居跡出土遺物 …… 166
第101・102図　ＲＡ259竪穴住居跡出土遺物(1)・(2) …… 167・168
第103図　ＲＡ261竪穴住居跡出土遺物(1) …… 169
第104図　ＲＡ261(2)・262竪穴住居跡出土遺物 …… 170
第105図　ＲＡ263・264・266 ～ 268竪穴住居跡出土遺物 …… 171
第106図　ＲＡ265竪穴住居跡出土遺物 …… 172
第107図　ＲＡ269Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡出土遺物 …… 173
第108図　ＲＡ271 ～ 273・275竪穴住居跡出土遺物 …… 174
第109 ～ 114図　ＲＡ274Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物(1) ～ (6) …… 175 ～ 180
第115図　ＲＡ274Ⅱ期竪穴住居跡出土遺物 …… 181
第116図　ＲＡ277・282・285・289・290竪穴住居跡、ＲＥ293竪穴跡出土遺物 …… 182
第117 ～ 125図　ＲＡ281竪穴住居跡出土遺物(1) ～ (9) …… 183 ～ 191
第126図　ＲＤ377・379・381・383・384・393・398・399・413土坑出土遺物 …… 192
第127図　ＲＤ423土坑出土遺物 …… 193
第128図　ＲＤ390・408・414・437・451・473・478・480・489・491土坑出土遺物 …… 194
第129図　ＲＤ487・514・517・523・528・541・543・546・549土坑出土遺物 …… 195
第130図　ＲＰ001 ～ 004埋設土器 …… 196
第131図　ＲＰ005 ～ 007埋設土器 …… 197
第132図　ピット出土遺物 …… 198
第133 ～ 150図　遺物包含層・遺構外出土遺物(1) ～ (18) …… 199 ～ 216

写　真　図　版

第１図版　繋Ｖ遺跡遠景、盛岡市立繋小学校全景
第２図版　第34次発掘調査区全景、第36次発掘調査区遠景
第３図版　第36次発掘調査区全景、第36次発掘調査区南東部土層堆積状況
第４図版　ＲＡ222竪穴住居跡全景、ＲＡ224竪穴住居跡全景・伏甕出土状況
第５図版　ＲＡ233Ⅰ期竪穴住居跡全景、伏甕出土状況1・2
第６図版　ＲＡ236竪穴住居跡全景、伏甕出土状況
第７図版　ＲＡ238・246竪穴住居跡全景、ＲＡ238竪穴住居跡検出段階遺物出土状況・床面石冠出土状況
第８図版　ＲＡ244竪穴住居跡全景、伏甕出土状況
第９図版　ＲＡ252竪穴住居跡全景、石囲炉、Ａ層遺物出土状況
第10図版　ＲＡ253竪穴住居跡全景、伏甕出土状況、複式炉
第11図版　ＲＡ259竪穴住居跡全景、伏甕出土状況
第12図版　ＲＡ265竪穴住居跡全景・複式炉、ＲＡ269Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡全景
第13図版　ＲＡ274Ⅰ期・274Ⅱ期・277竪穴住居跡全景
第14図版　ＲＡ274Ⅰ期竪穴住居跡土層堆積状況・Ｂ層遺物出土状況、Ⅱ期竪穴住居跡石棒埋設状況
第15図版　ＲＡ277竪穴住居跡および周辺部遺構検出状況、全景
第16図版　ＲＡ281竪穴住居跡全景、土層堆積状況、検出状況、検出段階遺物出土状況
第17図版　土器展開写真　ＲＡ236・253竪穴住居跡伏甕
第18図版　ＲＡ224・233Ⅰ期・263竪穴住居跡伏甕
第19図版　ＲＡ244竪穴住居跡伏甕
第20図版　ＲＡ258Ⅱ期・259竪穴住居跡伏甕
第21図版　ＲＡ223・233Ⅰ期・234 ～ 236・252竪穴住居跡出土土器
第22図版　ＲＡ258Ⅱ期・261・262・265・269Ⅱ期・274Ⅰ期・281竪穴住居跡出土土器
第23図版　第36次発掘調査区出土土偶・土製品・蛇紋岩製磨製石斧、第34次発掘調査区出土垂飾品
第24図版　ＲＡ222・223・233Ⅰ期・238・246・253・281竪穴住居跡、遺物包含層出土石製品

《遺物の表現について》

１．土器

ａ．土器及び陶器類は1/3スケールとしたが、60cm以上の土器については１/4スケールとした。

ｂ．挿図の土器配列については、出土層位を重視しさらに器種・モチーフでまとめた。

ｃ．縄文･弥生時代の土器で隆線･沈線の表現は上端･下端の実線･破線で表し､陰影は表現していない。

２．石器

ａ．剥片石器の実測図は1/2とし、礫石器は1/3とした。

ｂ．石器の展開順序は、基本的には左に表面（本文では背面とする)、中央に右側縁、右に裏面（本文中では腹面とする－主要剥離面）を並べ、必要に応じて側縁および縦断面下に横断面を付け加えた。

ｃ．剥片石器の摩滅痕は網目スクリーントーンで示し、礫石器の自然面はドットで示した。

☆挿図中の記号・番号は、出土遺物の出土地点および層位を表す。

（例）Ｉ４－Ａ１―Ａ１

↓　↓　↓

※１　※２　※３

※１　調査座標原点ＲＸ±０　ＲＹ±０を起点として、Ｘ・Ｙ両軸を50ｍ毎に区切る大グリットを設定し、Ｘ軸線上を西から東へＡ・Ｂ・Ｃ…Ｗ・Ｘ・Ｙ、Ｙ軸線上を北から南へ１・２・３…23・24・25と付し、北西隅のこれらのアルファベットとアラビア数字の組合せを、大グリットと呼称した（第３・４図)。

※２　大グリットを２ｍ毎に細分割し、小グリットを設定し大グリットの呼称を再び用いた。よって、大グリット－小グリットという組合せで、遺物の平面出土地点を２ｍごとに表示した。

（例）Ｉ４－Ａ１はＲＸ－150　ＲＹ－100を北西隅とする２ｍグリットからの出土を示す。

※３　遺物の出土層位を表す。

Ⅰ．遺跡の概要

1　遺跡の環境

遺跡の位置　繋Ⅴ遺跡は盛岡市街地から西に約 10km の盛岡市繋字舘市地内に所在する。

地形・地質　繋地区は、奥羽山脈から東流する雫石川により形成された雫石盆地東端、箱ヶ森（865 m）、南昌山（848 m）が連なる篠木・東根山山地の北麓に位置し、北辺には雫石川が流れる。周辺の地形は雫石川の北岸と南岸で大きく相違し、北岸では火砕流堆積物（小岩井泥流）を基盤とした台地が発達し、南岸では前述した東根山山地が迫り、北岸で見られるような広い平坦面は発達していない。

篠木・東根山山地は主に新第三紀中新世の飯岡層・男助層・舛沢層より構成され、飯岡層は輝石安山岩・緑色凝灰角礫岩、男助・舛沢層は古雫石湖に堆積した緑色凝灰角礫岩や砂岩・泥岩等によって構成される。これらの岩石は雫石川河床に転石として見られ、繋Ⅴ遺跡を含め雫石川流域の縄文時代遺跡では石器の石材として利用されている。なお、繋小中学校より南東約 2kmの箱ヶ森北西斜面に露出する凝灰岩帯には、地元で「かざあな」と呼ばれる洞穴が位置する。

第１図　繋遺跡位置図（1：100,000）

2　過去の調査

繋遺跡は古くから土器や石器の出土があったが、一般にひろく知られるようになったのは、昭和26年（1951）8月、繋小中学校（当時　岩手郡御所村大字繋字舘市、御所中学校繋分校）校舎増築に伴う敷地造成工事の際に、縄文時代中期の底部穿孔土器が7個体出土したことによる。倒立した状態で発見されたと云われ、発見した7個体の土器の内3個体は装飾性に富む文様が器面全体に広がり、その美しさから東北地方を代表する縄文土器の一つに数えられている。これらの土器は昭和63年に国重要文化財に指定されている。

昭和32年の調査　昭和32年（1957）10月、校庭拡張に際して初の発掘調査が実施された。発掘調査は盛岡市教育委員会と岩手大学によって行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡7棟と縄文時代中期から後期にかけての遺物が多量に出土した（昭和35年 草間俊一、吉田義昭「岩手県盛岡市繋遺跡」盛岡市公民館）。

昭和39年の調査　昭和39年（1964）4月、岩手大学の学術調査として実施された。詳細は不明であるが、縄文時代の竪穴住居跡が数棟検出されたようである。

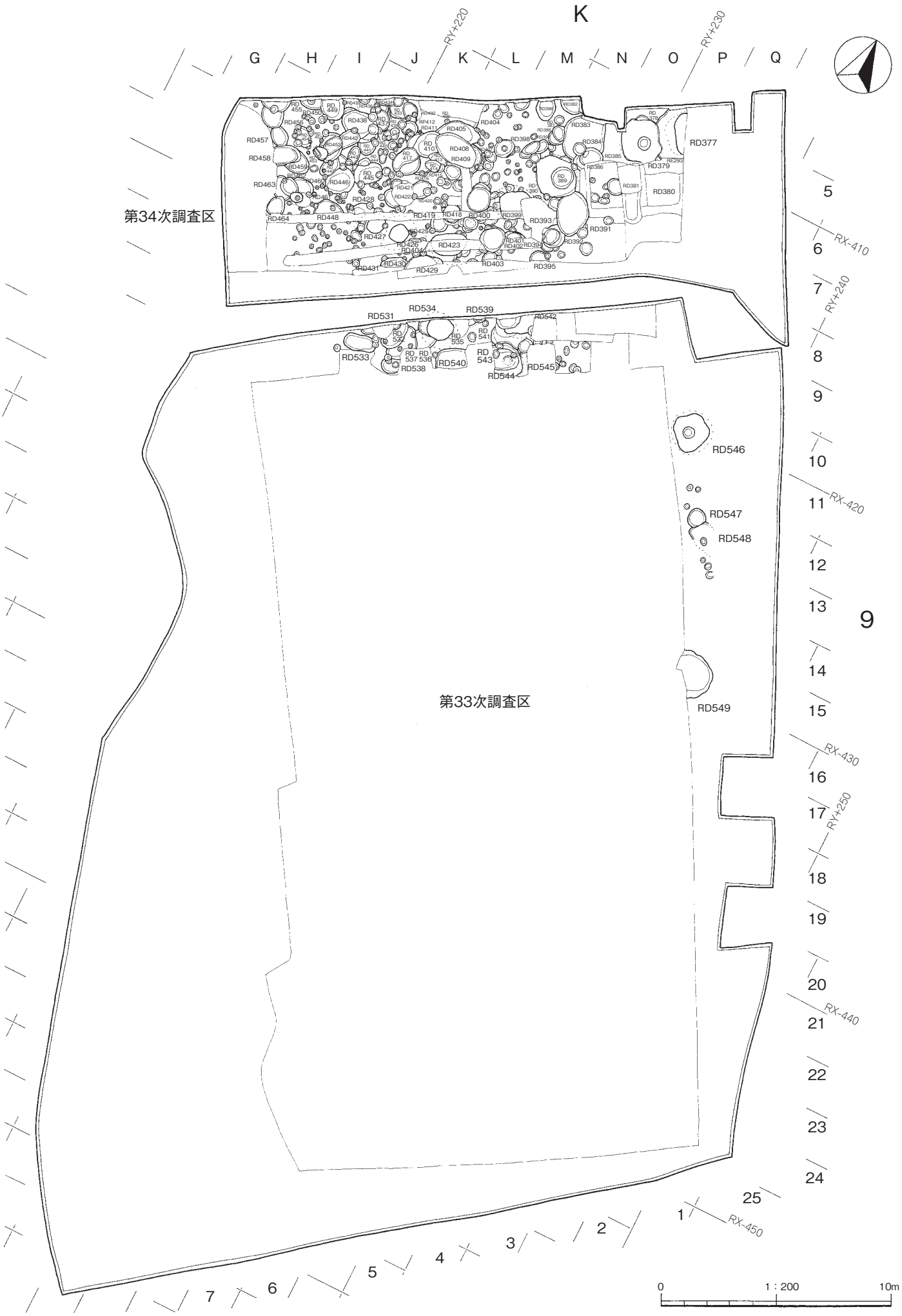
御所ダム建設　昭和48年（1973）から昭和55年（1980）に至る8年間に御所ダム建設に伴う事前の緊急発掘調査が実施されたが、これに先立つ分布調査によって、盛岡市から雫石町にまたがる700haの用地内に37遺跡が確認された。繋地区においても新たに7遺跡（繋Ⅰ～Ⅶ遺跡、南ノ又遺跡）の所在が確認され、これまでの「繋遺跡」は「繋Ⅴ遺跡」と変更されることとなった。

御所ダム建設に伴う繋Ⅴ遺跡の発掘調査は昭和48年8月に行われ、縄文時代中期の竪穴住居跡11棟、土坑58基が検出された。出土遺物は縄文時代中期から晩期にかけての土器・石器が多量に出土しており、特に中期初頭から中葉にかけての遺物が主体的であった。

第1～37次調査　昭和58年（1983）より個人住宅など各種開発に伴う事前の緊急発掘調査が盛岡市教育委員会で行われ、繋遺跡群（繋Ⅰ～Ⅶ遺跡）全体で平成22年度までに37次に及ぶ緊急発掘調査が実施されている。発掘調査は主に遺跡南東部の住宅地で行われ、縄文時代中期から後期の竪穴住居跡、土坑が確認されている。特に平成4～6年度の第13・15次発掘調査、平成8年度の第21次発掘調査では繋Ⅴ遺跡の集落を知る上で重要な成果が得られた。第13・15次発掘調査では縄文時代中期中葉から末葉、後期初頭の竪穴住居跡が重複した状態で72棟検出されたことから長期間集落が継続していたことが明らかになり、約46,000㎡の台地全体が縄文時代中期の大規模集落であることが確認された。遺跡の北東段丘縁辺に調査区がある第21次発掘調査では、第13・15次調査区と近接していながらも様相が異なり、縄文時代中期の土坑が134基確認された。土坑の多くは楕円形を呈し、内部よりヒスイ製玉類など、特殊な遺物が出土したことから土坑墓であることが考えられる。また、第34次調査区においても第21次調査と同様に土坑墓と考えられる土坑が88基検出されたことから、第13・15次調査区より北西に位置する第21次調査区付近から第34次調査区付近にかけての北東段丘縁辺に墓域が拡がることが明らかにされた。竪穴住居は昭和48年度調査区北東部、第12・13・15・36次調査区の竪穴住居跡検出状況を見る限り、墓域を中心とした扇状の住居域が展開していることが確認されつつある。

第２図　繋遺跡全体図（1：2,500）

第３図　繋Ⅴ遺跡第 29・36・37 次発掘調査全体図



第４図　繋Ｖ遺跡第 33・34 次発掘調査全体図

Ⅱ．調査内容

1．調査経過

試掘調査　平成 14 年 9 月、盛岡市教育委員会において繋小学校増改築工事に関する事前協議が持たれた。協議を受け現地の状況を観察した結果、過去の繋小中学校建設で破壊された箇所もあるが、地下に縄文時代の遺構・遺物が破壊を免れて存在していることが考えられ、平成 14 年 11 月 11 ～ 13 日にかけて繋小学校校舎周辺を試掘調査した結果、敷地内より縄文時代の遺構・遺物が多数検出されたことから工事着手前の緊急発掘調査が必要とされた。

発掘調査　本調査は工事の進捗状況に応じ、工事予定面積 10,629㎡の内 4,219.1㎡を下記の日程で調査した。平成 16 年 9 月 7 日～ 10 月 20 日（第 29 次　調査面積 16.9㎡）、平成 18 年 10 月 2 日～ 10 月 31 日（第 33 次　調査面積 2,144㎡）、平成 19 年 9 月 18 日～ 11 月 30 日（第 34 次　調査面積 288㎡）、平成 20 年 10 月 1 日～平成 21 年 12 月 24 日（第 36 次　調査面積 1,752㎡）、平成 22 年 7 月 5 日～ 7 月 13 日（第 37 次　調査面積 18.2㎡）。

第５図　繋Ⅴ遺跡第 29・33・34・36・37 次発掘調査区位置図

各調査区における検出遺構は下記のとおりである。

第 29 次調査－縄文時代　竪穴住居跡 2 棟・竪穴 1 基・土坑 2 基・ピット 18 口

第 33 次調査－縄文時代　土坑 19 基・ピット 44 口

第 34 次調査－縄文時代　竪穴 1 基・土坑 88 基・ピット 284 口

第 36 次調査－縄文時代　竪穴住居跡 66 棟（うち炉跡 9 基）・竪穴 1 基・土坑 64 基・埋設土器 7 基・ピット 388 口

平安時代　竪穴住居跡 1 棟

第 37 次調査－縄文時代　竪穴住居跡 1 棟・ピット 1 口

出土遺物の時代・時期は、縄文時代中期初頭から中期末葉にかけての土器・石器が主体的で、前期初頭・後期初頭の遺物が少量出土している。遺物総数は収納コンテナ（54cm × 35cm × 15cm）467 箱分である。

２．遺跡の基本層位と遺構検出状況

繋Ⅴ遺跡第 29・33・34・36・37 次調査区は、北西に向かって緩やかに傾斜する段丘斜面部に位置する。第 36 次調査区西壁付近以外は旧校舎の基礎等による撹乱が著しく、第Ⅱ層については第 36 次調査区西辺で部分的に確認されたのみである。縄文時代中期初頭の遺構掘込面はⅡ層中と思われるが、前述した要因から掘込面が明確なのはＲＡ 274・281 竪穴住居跡のみである。

基本層序　上位より現代の盛土、色調・混入物の違いによってⅠ～Ⅳ層に大別される。盛土は旧繋小学校建築に伴う盛土で、層厚は一定しないが第36次調査区北東部では約60cmの盛土であった。Ⅰ層はａ・ｂ層に細分され、Ⅰａ層は黒褐色土を主体に、暗褐色土・褐色土が混入する混合土（旧耕作土？）。Ⅰｂ層は黒褐色土を主体に、スコリア粒を含む暗褐色土が粒～塊状に混入する。層内には弥生時代の土器片、縄文時代前期から晩期の土器・石器が含まれる。Ⅱ層はａ・ｂ・ｃの 3 層に細分され、Ⅱａ層には粒状の黄褐色土・褐色土と微細な炭化物が含まれ、縄文時代中期後葉（大木 10 式）以前の土器が多量に出土する。Ⅱｂ層は暗褐色土を主体に、塊状の黒褐色土・褐色土・焼土粒・炭化物片を多量に含む混合土で縄文時代中期中葉以前（大木 7a ～ 8a 式）の土器を主体的に含む。Ⅱｃ層はⅡｂ層に比べ黒褐色土が多く含まれ、包含される遺物は縄文時代中期初頭から前葉頃（大木 7a・ｂ式）の遺物が主体的になる。Ⅲ層は赤褐色・黄褐色のスコリア粒を含む黒褐色土層で、局地的に硬く締まる。層の上部より縄文時代前期初頭から中期初頭にかけての土器が出土する。Ⅳ層は粘質のシルト質明黄褐色土を主体に安山岩・凝灰岩の小角礫（1mm～ 5cm）を含み、量は少ないが、玉随や水晶も混入する層。今回報告する調査箇所においては確認されなかったが、遺跡南東部の第 15 次調査区付近では本報告におけるⅣ層上にスコリア粒を多量に含む暗褐色土層が形成されており、縄文時代早期の遺物が含まれることが確認されている。

検出状況　第 36 次調査区南西部以外は過去の学校建設時に削平されており、大部分は基本土層Ⅳ層に相当する面で検出作業が行われた。しかし、第 36 次調査では竪穴住居跡の重複が激しく、部分的にⅣ層が確認できる面まで掘り下げ、個々の遺構検出を行った。

検出遺構　繋小学校増改築事業に伴う発掘調査で検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡70棟（ＲＡ221～239・241～249・251～253・257～259・261～277・279・281～283・285～290・292、うち炉跡9基）、竪穴跡3棟（ＲＥ260・291・293）土坑173基（ＲＤ377～549）、埋設土器7基（ＲＰ001～007）、ピット735口（第29・33・34・37次347口、第36次388口）、平安時代の竪穴住居跡1棟（ＲＡ0501）である。

３．検出された遺構と遺物

（１）　縄文時代の竪穴住居跡（第６～42図）

縄文時代の竪穴住居跡が70棟検出されている。竪穴住居跡が集中するのは第36・37次調査区で、繋Ｖ遺跡全体でみると遺跡南西縁部にあたる。検出された竪穴住居跡の多くは重複しており、完全な平面形を見ることが出来る竪穴住居跡は少ない。

検出された竪穴住居跡70棟のうち、67棟が縄文時代中期初頭から末葉にかけての竪穴住居跡で、3棟のみ後期初頭の竪穴住居跡（ＲＡ221・225・227）であった。

ＲＡ２２１竪穴住居跡（第６図）

時　　期　後期初頭　　**位　　置**　Ｊ９－Ｙ13区　　**平 面 形**　不明

規　　模　長軸7.75ｍ以上・短軸4.35ｍ以上　　**重複遺構**　ＲＤ469

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　撹乱により凹凸が激しいがほぼ平坦

土器埋設炉　口縁部・底部を欠いた深鉢が正立して埋設される（第51図1）

ピ ッ ト　Ｐ１～24が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｆ層に大別され、Ａ～Ｃ層は炉埋土、Ｄ～Ｆ層はピット埋土である。

出土遺物（第51図１～13）　1は炉に埋設された深鉢である（土器埋設炉）。体部上半・下半を欠くもので、器面には縦位の単節縄文が施される。2は口縁部に刺突列が並行する隆帯をＬ字状に施す深鉢で、隆帯下には沈線によるＪ字状の文様が施される。3は押引文が並行する鰭状の隆線が施される深鉢体部片で、地文には縦位の撚糸文が施される。4は縦位の撚糸文が施される深鉢体部片である。5は沈線による区画文が見られる深鉢体部片で、文様区画内には複節縄文が充填施文される。6は土器片を剥離加工した土製円盤である。7は未完成の石箆、8は両面に刃部加工が施される削器と思われるものである。9・10は腹面に一次剥離面を残す石錐である。9は両面機能部、10は背面全周縁に入念な押圧剥離が施され、10の腹面左側縁には刃部調整剥離が施される。11は扁平な円礫を素材とした敲打痕のある磨石で、一辺に磨面を持つ。12・13は敲打による凹みがある敲石である。

ＲＡ２２２竪穴住居跡（第７図）

時　　期　中期末葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｎ18区　　**平 面 形**　不整楕円形

規　　模　長軸5.10ｍ以上・短軸3.42ｍ以上、深さ0.38ｍ

重複遺構　ＲＡ 223 ～ 225・229・230　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　平坦

石 囲 炉　中央部付近より東寄りに構築され、石組部は砲弾形を呈する

ピ ッ ト　Ｐ１～ 18 が検出され、壁に沿って周溝が巡る

埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴・炉埋土、Ｃ～Ｅ層はピット埋土である。Ａ～B_3層は住居埋土、B_4～Ｅ層はピット・炉など付属遺構埋土である。Ａ層は２層に細分され、暗褐色土を主体とする。Ｂ層は暗褐色土を主体に粒～塊状の黄褐色土を含む。石囲炉埋土上部はB_1層が流入したもので、下部には赤褐色を呈した焼土（Ｊ層）が認められる。

遺物の出土状況　床面より第 52 図１・４～６の土器が出土している。

出土遺物（第 52 図１～第 54 図 31）　１は石囲炉西端部より潰れた状態で出土した深鉢で、器面には単節縄文が縦位に施される。２～４は沈線による逆Ｕ字状文と楕円文が施される深鉢で、２・３は小形のキャリパー状を呈し、文様区画内には単節縄文が充填施文される。５は隆線による蕨手状の文様が施される浅鉢で口縁部を欠く。文様区画内には単節縄文が充填施文される。６は沈線によるＣ字状の文様が施される深鉢片で、文様区画内には単節縄文が充填施文される。７・８・10・15 は逆Ｕ字状もしくは楕円状の区画文が施された深鉢体部片である。９は口縁部に列点文が並行する横位の平行沈線が施される深鉢口縁部片である。11 は波状突起を持つ深鉢口縁部片で、突起下に鍵状の区画文が施される。区画内には単節縄文が充填施文される。12 は隆沈線による楕円状の区画文内に刺突を充填して施す深鉢体部片である。13・14 は沈線による区画文内に刺突を施した深鉢体部片である。16 は体部下半に最大径を持つ無文のミニチュア土器である。17 は土器片を剥離加工した土製円盤である。

18 は炉石に転用された敲打磨石で、断面形状は三角形を呈する。19 は頁岩製の石冠で、断面形状は三角形を呈する。側面下部には円・鍵状を呈する陽刻が施され、底辺には台形状を呈した陰刻が施される。20 は背面下側縁に微細剥離を施す削器である。21・22 は剥片の両極に打面を持つ楔形石器である。23 は全周縁に粗い剥離を施す掻器である。24 は先端部・片脚部を欠く石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。基部にはアスファルトが付着する。25 は腹面に一次剥離面を残す石錐で、背面全周縁および腹面端部に入念な押圧剥離が施される。26 は基部のみ抉りを施す縦刃の石匙である。27 は磨製石斧で刃部欠損後、楔として再利用された可能性がある。28 ～ 30 は敲石で、28 は敲打による凹みを持つ。29 は両端に敲打による剥離が生じたもので、30 は一端に敲打痕を残す。31 は砂岩製の円盤形石製品で、平坦面に円形と見られる陰刻が見られる。

ＲＡ２２３竪穴住居跡（第８図）

時　　期　中期後葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｌ 19 区　**平 面 形**　不整楕円形

規　　模　長軸 5.22 m・短軸 3.02 m以上、深さ 0.36 m

重複遺構　ＲＡ 222・224・229・231　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　残存する石組部は不整円形を呈する　**ピ ッ ト**　Ｐ１～ 14 が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｈ層に大別され、Ａ～Ｃ層は竪穴・炉埋土、Ｄ～Ｈ層はピット埋土である。

伏　　甕　炉の東延長上より第 55 図１の伏甕が検出されている。全体の約 70％は過去における繋小学校建設により失われている。伏甕を埋設したピットは黄褐色シルトによって人為的に埋

められる。

埋設土器　中央部北西寄りの床面下に正立して埋設される（第55図2）。

出土遺物（第55図1～第57図36）　1は住居床面下に倒立させて埋設した伏甕で、全体の約70％は過去の撹乱により失われている。口縁部は4単位の有孔突起を持つ波状を呈していたものと思われ、波頂下には隆沈線による懸垂文・楕円文・小渦巻文が施される。地文には縦位の単節縄文が施される。2は住居床面下に埋設された小形深鉢で、口縁部を欠くラッパ形を呈する。器面には隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文を施し、地文には斜位の複節縄文が施文される。3～5は波状口縁を持つラッパ形を呈する小形深鉢片で、器面には隆沈線による小渦巻文が施される。地文には3・4に縦位の複節縄文、5に単節縄文が施され、5の口唇部下には補修孔が認められる。6は隆沈線による懸垂文が施される深鉢底部で、地文には縦位の複節縄文が施される。7・8は同一個体の小形深鉢口縁部片で、口縁下に沈線による小渦巻文を描き、描いた小渦巻文より沈線を垂下させるものである。9～11はラッパ形を呈する深鉢片で、器面には沈線による渦巻文・懸垂文が描かれる。9の渦巻文には有棘がみられ、地文には縦位の複節縄文が施される。12は底部欠損の浅鉢で、体部は無文となる。口縁部文様帯には隆沈線による渦巻文・楕円文が横位に施され、区画内には横位の複節縄文が充填施文される。

13・14は削器で、13の先端部には入念な調整剥離が施される。15は掻器で、剥片打面部を刃部としたものである。16は石鏃未製品、17は両面に押圧剥離を施す有脚の石鏃である。18～20は一次剥離面を残す石錐で、機能部には押圧剥離が施される。21は黒曜石製の石匙で、両面全周縁から入念な押圧剥離が施される。22～26は削器で、両面端部には調整剥離が施される。27･28は石篦で、両面全周縁から剥離整形が施される。29･30は磨製石斧で、29は刃部、30は刃部欠損の小形のものである。31は砂岩製の有溝砥石、32～34は斧状を呈した砂岩製の石製品である。35はシルト岩製の匙状石製品で、基部に貫通孔が穿たれる。36はアスファルトが付着する土器片で、アスファルト痕は条痕状に残ることから、パレットとして土器片を利用していたことが考えられる。

ＲＡ２２４竪穴住居跡（第９図）

時　　期　中期後葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｍ20区　　**平 面 形**　楕円形

規　　模　長軸6.85ｍ以上・短軸5.81ｍ、深さ0.45ｍ

重複遺構　ＲＡ222・223・225・ＲＤ513・518　　**掘 込 面**　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　中央部付近より東寄りに構築され、石組部は楕円形を呈する

ピ ッ ト　Ｐ１～41が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ～Ｅ層はピット埋土である。

伏　　甕　床面下より３基の伏甕（第58図1・3・4）が検出された。全てのピットは小角礫を含む黄褐色シルトで埋められる。伏甕内部には黒褐色・暗褐色土の混合土が流入する。

出土遺物（第58図1～16）　1･3･4は伏甕に転用された深鉢である。1は4単位の有孔突起を持つキャリパー形深鉢で、口縁下には隆沈線による小渦巻文が施され、小渦巻文間の楕円区画内には大粒の刺突が充填施文される。頸部は無文帯となり、体部には沈線による渦巻文と懸垂

文が施される。地文には縦位の複節縄文が施され、底部には外部からの穿孔が施される。2は1の伏甕内部より出土した砂岩製斧状石製品で刃部を欠く。3はラッパ形の深鉢で、口縁部の大波状部と底部は人為的に破壊されている。口縁部には無文帯が設けられ、下位の体部文様帯との間には刺突列が巡る。体部には大渦巻文を中心に隆沈線で連結された小渦巻文が施され、地文には縦位の撚糸文が施文される。4は口縁部・底部欠損のキャリパー形深鉢で、器面には隆沈線による小渦巻文と文様間を連結する隆沈線が施される。地文には縦位の複節縄文が施される。5はラッパ形を呈した口縁部を欠く小形深鉢で、体部には隆沈線による小渦巻文と懸垂文が施される。地文には縦位の複節縄文が施される。6は底部欠損のミニチュア土器で、単節縄文が縦位に施される。

7・11は有脚の石鏃である。7は一次剥離面を残すもので、11の両面には入念な押圧剥離が施される。8は板状、9・12は棒状を呈する石錐で、両面機能部には入念な押圧剥離が施される。10・13・15は削器で、10は腹面全周縁に剥離が施される。13は背面2側縁、15は横長剥片下側縁に刃部調整が施される。14は石匙基部で、つまみ部および両面端部には押圧剥離が施される。16は石核である。17は砂岩製の長方形を呈する石製品で、用途は不明である。

ＲＡ２２５竪穴住居跡（第10図）

時　　期　後期初頭　**位　　置**　Ｊ９－Ｏ19区　**平 面 形**　楕円形

規　　模　長軸3.8ｍ以上・短軸3.12ｍ、深さ0.37ｍ

重複遺構　ＲＡ222・224・226・228・232・ＲＤ511

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　Ｐ１～11が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴・周溝埋土、Ｃ・Ｄ層はピット埋土である。

出土遺物（第59図1～第63図36）　1～3は床面より出土した深鉢片である。1は口縁部が外反し、口縁下に1条の横位平行沈線を巡らす深鉢片で、沈線下には縦位の撚糸文が施される。2はＪ字状？の沈線文を施す深鉢口縁部片で、文様間には単節縄文が充填施文される。3は波状口縁を持つ深鉢片である。波頂部下にはＣ字状の沈線による文様が施され、文様区画内には単節縄文が充填施文される。4は隆線によるＪ字状・楕円状の文様が施される深鉢片で、口縁下・楕円状文の縁には列点文が施される。5は口縁部が内湾し鰭状突起が施される深鉢口縁部片で、方形に区画する文様内には刺突が充填施文される。6・7はＪ字状の沈線文が施される深鉢口縁部片で、文様間には縦位の撚糸文が施される。8は沈線による楕円状文が施される深鉢体部片で、文様間には単節縄文が充填施文される。9は口縁部が外反する深鉢口縁部片で、口縁下には1条の横位平行沈線、下位には無節縄文が縦位に施される。10・11は沈線による文様区画内に単節縄文が充填施文される深鉢片である。12は沈線によるＪ字状の文様が施された深鉢で体部上半を欠く。文様区画外には複節縄文が縦位に施される。13は単節縄文が縦位に施された深鉢底部である。14は体部から底部にかけての深鉢で、縦位の単節縄文が施される。15は土偶で、右胸部から腕部にかけての部位である。胸の貼付痕が認められ、側面および裏面には沈線文が体形に沿って施される。

16 は整形された石球状の敲石である。17 は縦刃の石匙で、つまみ部および両面機能部には入念な押圧剥離が施される。18・20・21 は板状を呈する石錐で、機能部には押圧剥離が施される。19 は先端部を欠く有脚の石鏃で、両面には入念な押圧剥離が施される。22 ～ 26 は頁岩製の石核である。22 は多角形を呈し、25・26 の縁部には敲打痕・擦痕がみられる。27 ～ 33 は接合する頁岩製の石核及び剥片である。34 は欠損した磨製石斧を使用した楔状の石器で、石器両端には衝撃による敲打痕が観察される。35 は完形の打製石斧で、両面端部から整形剥離が施される。36 は溶岩質安山岩を利用した石皿で脚部が 1 対残る。

ＲＡ２２６炉跡（第 10 図）

時　　期　不明　**位　　置**　Ｊ９－Ｏ 18 区　**平 面 形**　不明　**規　　模**　不明
重複遺構　ＲＡ 225・232　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
石 囲 炉　石組部は楕円形を呈する　**ピ ッ ト**　なし　**埋　　土**　Ａ層は炉埋土である
出土遺物（第 63 図 37・38）　37 は板状の石錐で、両面機能部には入念な押圧剥離が施される。38 は縦刃の削器で、背面両側縁には調整剥離が施される。このほか図示していないが、隆沈線による渦巻文・円文が施される深鉢片などが出土している。

ＲＡ２２７竪穴住居跡（第 8 図）

時　　期　後期初頭　**位　　置**　Ｊ９－Ｒ 15 区　**平 面 形**　楕円形
規　　模　長軸 2.06 m以上・短軸 1.02 m、深さ 0.30 m　**重複遺構**　なし
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
土器埋設炉　中央部付近に体部上半を人為的に欠いた深鉢が正立して埋設される（第 64 図 1）。
ピ ッ ト　Ｐ１・２が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ｃ・Ｄ層はピット埋土である。
出土遺物（第 64 図 1 ～ 6）　1 は炉内に埋設された深鉢で、地文には縦位の単節縄文が施される。2 は縦位の単節縄文が施される深鉢底部である。3 は中空の橋状突起を持つ深鉢口縁部片である。4・5 は削器で、4 の背面右側縁および腹面先端部には調整剥離が施される。6 は打製石斧基部で、両面端部から剥離整形が施される。

ＲＡ２２８炉跡（第 10 図）

時　　期　不明　**位　　置**　Ｊ９－Ｏ 17 区　**平 面 形**　不明　**規　　模**　不明
重複遺構　不明　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　不明
石 囲 炉　石組部は不整楕円形を呈する　**埋　　土**　Ａ層は炉埋土である
出土遺物　図示していないが、沈線による逆Ｕ字状文が施される鉢形土器口縁部片や頁岩の剥片などが出土している。

ＲＡ２２９竪穴住居跡（第 11 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｍ 17 区　**平 面 形**　隅丸方形
規　　模　長軸 4.20 m・短軸 2.20 m以上、深さ 0.46 m　**重複遺構**　ＲＡ 222・223・230・231

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　Ｐ１～９が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ層はピット埋土である。

出土遺物（第 64 図７～第 66 図 31）　７は隆線による懸垂文が施される小形深鉢体部片で、地文には縦位の複節縄文が施される。８は斜位の単節縄文が施される深鉢底部で、内面には炭化した付着物が認められる。９はキャリパー形を呈する深鉢で、口縁部には隆線による楕円状文・渦巻文が施され、地文には縦位・横位の複節縄文が施される。10 は円形の孔のある口縁部突起を持つ深鉢口縁部片で、下位には隆沈線による渦巻文が施される。11 は隆沈線による懸垂文が施される深鉢底部で、内面には朱が付着する。12・13 はキャリパー形深鉢体部で、原体圧痕が並行する隆線による区画文が施される。14 は口縁下に短沈線・波状文を横位に施す深鉢口縁部片である。15 は浅鉢口縁部片で、口縁下に小突起を持ち、突起下に隆沈線による波状文、渦巻文が施される。16 は口縁部が外反する深鉢口縁部片で、突起部には隆線による渦巻文が施される。

18・19 は打製石斧である。18 は剥離整形後に敲打整形を施すものである。20 は有脚の石鏃、21・22 は棒状を呈する石錐で、両面に入念な押圧剥離が施される。23・26 は楔形石器、24・25 は削器で、端部には調整剥離が施される。27 はシルト岩製の石冠である。断面形状は三角形を呈し、底面には滴形の窪みがあり端部には孔が穿れる。28 は磨製石斧刃部で、破損後に刃部を再利用したものである。29 はシルト岩製の環状石製品で、平坦面には形状に沿った陰刻が施される。30 は両端に敲打痕を持つ棒状の礫石器である。31 はアスファルト塊で、表面は凹凸が激しく、部分的に握られたような痕跡が残る。

ＲＡ２３０竪穴住居跡（第 11 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｎ 17 区　**平 面 形**　円形

規　　模　長軸 2.54 m以上・短軸 2.34 m以上、深さ 0.35 m　**重複遺構**　ＲＡ 228・229

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　中央部付近に構築され、石組部は楕円形を呈する

ピ ッ ト　Ｐ１～ 10 が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ａ～Ｃ層は竪穴埋土、Ｄ・Ｅ層はピット埋土である。

出土遺物（第 66 図 32 ～ 36）　32 はＣ字状突起を持つキャリパー形深鉢で、体部には沈線による渦巻文・懸垂文を連結させて施文する。地文には縦位の複節縄文が施される。33 は橋状把手を持つ樽形土器口縁部片で、隆線による渦巻文が把手下に施される。34・35 は土器片を剥離加工した土製円盤である。36 は敲打による剥離が全周に見られる扁平な敲石である。

ＲＡ２３１竪穴住居跡（第 11 図）

時　　期　中期中葉？　**位　　置**　Ｊ９－Ｋ 18 区　**平 面 形**　不明

規　　模　長軸　1.62 m以上・短軸 1.08 m以上、深さ 0.14 m

重複遺構　ＲＡ 222・223・229・ＲＤ 514

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　Ｐ１～６が検出されている

埋　　土　Ａ・Ｂ層に大別され、Ａ層は竪穴埋土、Ｂ層はピット埋土である。

出土遺物　図示していないが、隆沈線による渦巻文が施される深鉢片や磨石などが出土している。

ＲＡ２３２竪穴住居跡（第 10 図）

時　　期　不明　**位　　置**　Ｊ９－Ｏ 15 区　**平 面 形**　不明　**規　　模**　不明

重複遺構　ＲＡ 222・225・226・228

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　Ｐ１～８が検出されている

埋　　土　Ａ・Ｂ層に大別され、Ｂ層はさらに２層に細別される。

出土遺物（第 66 図 37）　37 は磨製石斧であるが、両極に衝撃による剥離と敲打痕がある。このほか図示していないが、隆沈線による渦巻文が施される深鉢片などが出土している。

ＲＡ２３３Ⅰ期竪穴住居跡（第 12 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｈ 22 区　**平 面 形**　隅丸方形

規　　模　長軸 4.06 m以上・短軸 4.02 m以上、深さ 0.52 m　**重複遺構**　ＲＡ 253・273・275

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　中央部付近に構築され、石組部は楕円形を呈する

ピ ッ ト　Ｐ１～ 30 が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ・Ｄ層はピット埋土である。

伏　　甕　石囲炉の延長上、住居の中軸線上より第 67 図１の伏甕が出土している。伏甕が埋設されていたピット上面からは土器片が出土しているが、伏甕との関係は不明である。

出土遺物（第 67 図１～第 71 図 41）　１は伏甕に転用された底部穿孔のキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には隆線による山形文と付加する渦巻文・弧状文が描かれ、文様の転換部には原体圧痕が施される。地文には縦位・横位の複節縄文が施される。２～４は床面より出土した土器である。２は渦巻文を施す把手を持つ浅鉢で、地文には縦位の複節縄文が施される。３は体部下半から底部欠損のキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には隆線による波状文が施され、波状文内には沈線による渦巻文、棘のある区画文が施される。地文には縦位・横位の複節縄文が施される。４は口縁部文様帯に隆線による山形文と弧状文、棘のある幾何学文、原体圧痕による渦巻文を施すキャリパー形深鉢である。地文には縦位・横位の単節縄文が施される。５・６は口縁下に隆線による波状文を施す深鉢口縁部片で、器面には沈線による蕨手状文・連弧文などが施される。７は渦巻文を施す小突起を持つ深鉢口縁部片で、口唇部には刻目文が施される。口縁部下には楕円状の区画文が巡り、下位に隆線による曲線的モチーフが描かれる。８はＳ字状突起、９～ 11・14 ～ 17 は孔のある弁状突起を持つ深鉢口縁部片で、下位には隆線・沈線による渦巻文・山形文・波状文などが施される。12 は横位平行沈線と渦巻文が施される深鉢体部片である。13 は口縁部が外反する深鉢口縁部片で、口唇部下には縦位の原体圧痕が並列して巡る。下位には横位の平行沈線と懸垂文が施される。18 は口縁部が大きく内湾する深鉢片で、口縁下には隆線による渦巻文が施される。19 は連鎖する

橋状の把手状突起を持つ深鉢口縁部片で、口唇部には半截竹管による刻目文を施す。口縁下には隆線による棘のある区画文が施される。20 は隆線による縦位方向の文様が、横位に延びる鍵状の文様によって連結される深鉢体部片である。21 は口縁部に渦巻文を施す突起を持つキャリパー形深鉢口縁部片で、突起下には隆沈線による山形文と渦巻文が施される。22 は舟形状を呈する浅鉢口縁部片で、頂部となる先端部には隆線による菱形文と垂下する波状文が稜に沿って施される。23 は単節縄文を縦位に施す深鉢底部である。24 は無文のミニチュア土器底部である。

25 は部分的に敲打痕を残す敲石で、床面から出土したものである。26 は両面に剥離調整を施す両面加工石器である。27 は全周縁に押圧剥離による調整を施す掻器である。28・29 は剥離整形痕を残す石斧で、29 は使用によって刃部が丸く潰れる。30・31 は石錐と思われる石器、32・33 は石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。34 ～ 36 は削器で、34・35 は背面右側縁、36 は下端にも調整剥離が施される。37 は未完成品と思われる打製石斧である。38 は磨製石斧基部であるが、破損部に剥離痕が見られることから再利用されたものと思われる。39 は半月形を呈し、一辺に磨り面を持つ敲打磨石である。40 は両側縁が鋸歯状を呈する砂岩製の石製品で、41 は同じく砂岩製の方形を呈した石製品である。

ＲＡ２３３Ⅱ期竪穴住居跡（第 12 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｉ22 区　**平 面 形**　円形？

規　　模　長軸 2.28 m以上・短軸 1.34 m以上、深さ 0.36 m

重複遺構　ＲＡ 253・269 Ｉ期・269 Ⅱ期・273

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　Ｐ１～８が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ａ～Ｃ層は竪穴埋土、Ｄ・Ｅ層はピット埋土である。

出土遺物（第 71 図 42 ～ 44）　42 は板状土偶頭部で、眼帯と鼻を表現する隆線が貼付される。表裏には平行沈線が形状に沿って施される。43 は無文のミニチュア土器で、底部を欠く。44 は底面欠損のシルト岩製の石冠である。このほか図示していないが、弁状突起・原体圧痕が施される深鉢口縁部片や土製円盤、複数の砥石などが出土している。

ＲＡ２３４竪穴住居跡（第 13 図）

時　　期　中期後葉　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｐ５区　**平 面 形**　楕円形？

規　　模　長軸 3.68 m以上・短軸 3.86 m以上、深さ 0.17 m　**重複遺構**　ＲＡ 235・263

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦

複 式 炉　中央部付近より北東寄りに構築されるが、石囲部・前庭部ともに大きく削平される。

ピ ッ ト　Ｐ１～ 11 が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ・Ｄ層はピット埋土である。

埋設土器　中央部南西寄りの床面下に正立して埋設される（第 71 図 45）。

出土遺物（第 71 図 45 ～ 51）　45 は住居床面下に埋設された小形深鉢で、底部を欠く。口縁部がラッパ状に開き、4 単位の波状口縁を呈する。口唇部には孔のある小突起があり、体部文様帯と

の間には無文帯が設けられる。体部には隆沈線による大・小渦巻文と懸垂文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。46 ～ 48 は体部上半に屈曲部を持つ、ラッパ状を呈する小形深鉢である。器面には隆沈線ないし沈線による大･小渦巻文と懸垂文が連結して施され、地文には 46 に複節縄文、47・48 に単節縄文が縦位に施文される。49 は腹面に一次剥離面を残す石槍で、全周縁に押圧剥離による調整が施される。50 は片脚部を欠く石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。51 はつまみ部が明瞭ではないが、基部に入念な調整剥離を施す石匙である。

ＲＡ２３５炉跡（第 13 図）

時　　期　中期後葉　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｏ４区　**平 面 形**　不明　**規　　模**　不明
重複遺構　ＲＡ 234・236・263　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
ピ ッ ト　なし　**炉**　石組部は円形を呈する　**埋　　土**　Ａ層は炉埋土である
出土遺物（第 72 図１～４）　１は口縁部が「く」字状に屈曲し、４個の突起を持つ小形深鉢である。器面には隆沈線による小渦巻文と有棘懸垂文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。２は把手のある小形深鉢で、器面には沈線による逆Ｕ字状文が施される。底部欠損で、地文には縦位の複節縄文が施文される。３は腹面左側縁に刃部を持つ削器である。４は先端部に衝撃剥離と思われる剥離がある石鏃で、基部にアスファルトが付着する。このほか図示していないが、土製円盤が出土している。

ＲＡ２３６竪穴住居跡（第 14・15 図）

時　　期　中期後葉　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｍ４　**平 面 形**　多角形
規　　模　長軸 6.76 m以上・短軸 6.22 m、深さ 0.28 m　**重複遺構**　ＲＡ 235・263
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
複 式 炉　中央部付近より北東寄りに構築される。長半円状の石囲部と前庭部で構成され、前庭部の壁寄りは浅く掘り込まれる。前庭部東縁には 30cm × 40cm の範囲に土器片を敷き詰めた箇所がある。
ピ ッ ト　Ｐ１～ 46 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｇ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴・炉埋土、Ｃ層は周溝埋土、Ｄ～Ｇ層はピット埋土である。
伏　　甕　炉延長上、住居跡の中央を通る中軸線上より第 72 図５の伏甕が出土している。床面下に倒立した状態で埋設され、土器底部には穿孔が施される。内部はほぼ空洞であった。
出土遺物（第 72 図５～第 74 図 28）　５は伏甕に転用された深鉢で、口縁部は緩やかなカーブを描いて内湾する。器面には隆沈線による大渦巻文と連結する有棘のある小渦巻文と楕円文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。６は隆沈線による懸垂文が施される深鉢底部で、地文には縦位の複節縄文が施文される。７は底部欠損のキャリパー形深鉢である。中空の把手状突起と入組文を口縁下に巡らし、突起部には渦巻文、突起間には刺突が施される。体部には隆沈線による大渦巻文と連結する小渦巻文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。８は口縁部欠損の１対の吊手状突起を持つ樽形土器である。体部上半には隆沈線

による渦巻文が施される。9～14は隆沈線による渦巻文が施される深鉢体部片、15は沈線による円文と逆U字状文が施される深鉢口縁部片である。

16・17は棒状、19は基部幅広形を呈する石錐で、16・17の両面全周縁、19の背面全周縁には入念な押圧剥離が施される。18は炉石に転用された敲打磨石である。一辺に磨面を持ち、両面に敲打痕が認められる。20・25・26は石核で、20は同じ側縁に交互剥離を施す頁岩製の石核石器である。21・27・28は削器で、21は先端が鋭く尖り、背面全周縁に剥離が施される。27・28は背面両側縁に刃部調整を施すものである。22は石斧で、剥離整形後に敲打による整形を施すものである。23・24は刃部欠損の磨製石斧で、23は刃部欠損後に再利用したようである。

このほか図示していないが、複数の土製円盤や板状石製品などが出土している。

ＲＡ２３７竪穴住居跡（第16図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｆ24区　**平 面 形**　長楕円形？

規　　模　長軸6.80ｍ・短軸3.68ｍ以上、深さ0.32ｍ

重複遺構　ＲＡ238・244・266・268・273・275・ＲＤ523・525

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　中央部付近より北東寄りに構築され、石組部は方形を呈する

ピ ッ ト　Ｐ１～19が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴・炉埋土、Ｃ・Ｄ層はピット埋土である。

出土遺物（第75図１～10）　１はキャリパー形深鉢体部片で、隆沈線による小渦巻文が施される。2は孔のあるＣ字状突起を持つ深鉢口縁部片である。3は有茎の石鏃で、両面全周縁に入念な押圧剥離が施される。4・5は切出状の刃部を持つ削器である。6は床面から出土した大形の打製石斧である。両面全周縁に整形剥離が施され、側縁は敲打によって整形される。7は基部が欠損する打製石斧で、両面全周縁に整形剥離が施される。8は基部欠損の斧状石製品である。9は基部が欠損する磨製石斧で、両側縁に敲打痕と衝撃剥離が認められる。10は一辺に磨面を持つ敲打磨石で、縁辺には敲打による剥離痕が認められる。

ＲＡ２３８竪穴住居跡（第20図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｅ25区　**平 面 形**　不整楕円形？

規　　模　長軸4.05ｍ以上・短軸3.01ｍ、深さ0.41ｍ　**掘 込 面**　削平

重複遺構　ＲＡ237・246・266・ＲＤ525　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　不明　**埋　　土**　Ａ～Ｃ層に大別され、ともに竪穴埋土である。

出土遺物（第76図１～第78図27）　１は弁状突起を持つキャリパー形深鉢の口縁部から体部上半で、隆沈線による波状文と波状文内に横位に延びる蕨手状の文様が施される。地文には縦位の単節縄文が施される。2は口縁部を欠く小形のキャリパー形深鉢で、沈線によるクランク状の文様が施される。地文には縦位の単節縄文が施される。3は口唇部に渦巻文を施す突起を配した小形のキャリパー形深鉢で、口縁部下には渦巻文と連結する隆線による区画が巡る。地文には縦位・横位の単節縄文が施される。4は隆線によるＳ字状の文様を持つ深鉢口縁部

片である。5は口縁部が緩やかに膨らむ小形のキャリパー形深鉢で、体部下半から底部を欠く。地文には縦位の単節縄文が施される。6は隆沈線による波状文と波状内に幾何学文が施されるキャリパー形深鉢体部片である。7は中空の把手状突起を持つキャリパー形深鉢口縁部片で、隆線による渦巻状の装飾が施される。8は口縁部が外反する深鉢体部片で、隆線によるクランク状の文様が施される。9は渦巻文を施す突起を持つキャリパー形深鉢口縁部片である。10は孔のある弁状突起を持つキャリパー形深鉢口縁部片で、沈線による波状文が施される。11は地文のみが施されるキャリパー形深鉢口縁部片である。

12・13・19は有脚の石鏃、20は有茎の石鏃または石錐、21は木葉形の石鏃または削器である。12・13・19・20の両面機能部には入念な押圧剥離が施され、21は縦長剥片全周縁に整形剥離を施す。14は腹面端部に刃部調整剥離が施される削器である。15･16は磨製石斧で、16は剥離整形痕を残すものである。15は基部欠損で、両極に敲打による剥離痕が認められる。17は礫皮面を残す頁岩製の石核である。18は背面全周縁に調整剥離が施される掻器である。22は楕円形を呈する石篦で、両面全周縁より押圧剥離を施して整形する。23は一辺に磨面を持つ敲打磨石で、縁辺には敲打痕と敲打による剥離痕が見られる。24～26は床面から出土した軟質のシルト岩製の石冠で、断面形状は三角形を呈する。24は側縁底部に魚眼状の陰刻が施され、底面に滴形の凹部を持つ。25は陰刻等がないものである。26は側面に擦痕状の陰刻、端に十字状の陰刻を持ち、底面には長楕円状の凹部が施される。27は椀状を呈した有孔土製品である。このほか図示していないが、半月形状や棒状の石製品などが出土している。

ＲＡ２３９炉跡（第17図）

時　　期　中期後葉　**位　　置**　Ｊ10－Ｉ２区　**平 面 形**　不明　**規　　模**　不明

重複遺構　ＲＡ241・242・243・249　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　残存する石組部は楕円形を呈する。しかし、中央部付近で角度を変える炉石があることから２基の石囲炉が重複していることも考えられる。

ピ ッ ト　なし　**埋　　土**　Ａ層は炉埋土である

出土遺物（第79図１～３）　１は窪みのある突起を持つ深鉢口縁部片で、隆沈線による小渦巻文が施される。２は沈線による多重の横位平行線、曲線を描く深鉢体部片である。３は基部に剥離整形痕を残す磨製石斧である。このほか図示していないが、頁岩製の石核や削器などが出土している。

ＲＡ２４１炉跡（第17図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ10－Ｉ２区　**平 面 形**　不明

規　　模　不明　**重複遺構**　ＲＡ239・242・243・245・249

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**石 囲 炉**　残存する石組部は楕円形を呈する

ピ ッ ト　なし　**埋　　土**　Ａ層は炉埋土である

出土遺物（第79図４・５）　４は床面から出土した口唇部に刻目を持つ深鉢で、器面には縦位の単節縄文が施される。５は一辺に磨面を持つ断面三角形を呈する敲打磨石である。このほか図示し

ていないが、隆沈線による渦巻文が施される深鉢口縁部片や削器などが出土している。

ＲＡ２４２竪穴住居跡（第 17 図）

時　　期　中期後葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｈ３区　　**平 面 形**　円形？

規　　模　長軸 4.97 m・短軸 3.44 m以上、深さ 0.12 m

重複遺構　ＲＡ 239・241・243・245・248・249・277

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　中央部付近より東寄りに構築され、残存する石組部は楕円形を呈する

ピ ッ ト　Ｐ１～ 11 が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ層は竪穴埋土、Ｂ・Ｃ層はピット埋土である。

埋設土器　中央部北西寄りの床面下に正立して埋設される（第 80 図 1）。

出土遺物（第80図1～第81図26）　1は住居床面下に埋設されていた口縁部がラッパ状を呈する深鉢で、体部下半から底部を欠く。体部には沈線による有棘渦巻文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。2 は床面から出土したキャリパー形を呈する深鉢で、隆線による波状文と波頂下に渦巻文･連結文を施すものである。地文には縦位･横位の単節縄文が施文される。3 はラッパ状を呈する深鉢片で、体部には隆沈線による大渦巻文と小渦巻文が施される。4 はキャリパー形深鉢口縁部片で、隆線による渦巻文と連結文が施される。5 はキャリパー形深鉢頸部から体部上半にかけての部位で、縦位の単節縄文が施される。6 はキャリパー形深鉢口縁部片で、口縁部文様帯には隆沈線による有棘渦巻文が施される。体部には沈線による横位平行線、縦位の平行線が描かれる。7 はミニチュア土器底部で、縦位の複節縄文が施される。8 は人面が表現される小形土器体部片で、顔面の輪郭と目・鼻が表現される。

9 は側縁に敲打痕が残される打製石斧である。10・11 は床面から出土した石器である。10 は窪みのある敲石で、11 は剥離整形痕のある磨製石斧である。12 は背面全周縁から押圧剥離を施す円形掻器である。13 ～ 15・17・18 は有脚の石鏃、16・19 は有茎の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。20・21 は切出状の刃部を持つ削器、22 は両面全周縁から剥離整形を施した楕円形を呈する石篦である。23 は礫皮面を残す頁岩製の石核である。24 は腹面端部に刃部調整剥離が施される掻器である。25 は扁平な円礫に抉りを入れた石錘である。26 は一辺に磨面を持つ敲打磨石で、粗い剥離により半円状に整形される。

このほか図示していないが、板状土偶胴部や石冠の未製品などが出土している。

ＲＡ２４３竪穴住居跡（第 17 図）

時　　期　中期後葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｉ３区　　**平 面 形**　不整楕円形？

規　　模　長軸 2.72 m以上・短軸 4.86 m、深さ 0.08 m

重複遺構　ＲＡ 239・241・242・245・248・249・277

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　中央部付近に構築される。残存する石組部は楕円形を呈し、西辺は土器片によって囲部を形成する（第 82 図 1）。

ピ ッ ト　Ｐ 12 ～ 29 が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ｂ・Ｃ層はピット埋土である。

出土遺物（第82図１～10）　１は炉の囲部に転用された深鉢である。口縁部には隆線による渦巻文が施され、体部には単節縄文が縦位に施文される。２はラッパ状を呈する深鉢片で、口縁部の無文帯下には刺突列が巡る。体部には隆沈線による「の」字状・逆Ｕ字状の文様が施され、地文には斜位の複節縄文が施文される。３は口縁部に渦巻文を施す突起を持つ深鉢口縁部片である。４・５は隆沈線による小渦巻文が施される深鉢体部片である。６・10は石錐で、６は両面に入念な押圧剥離が施される。10は機能部のみ入念に造り出したものである。７は基部欠損､８は刃部欠損の磨製石斧で､衝撃剥離が認められる。９は両極に打面を持つ削器である。このほか図示していないが、土製円盤や磨石などが出土している。

ＲＡ２４４竪穴住居跡（第19・20図）

時　　期　中期後葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｉ25区　　**平 面 形**　不整円形

規　　模　長軸6.1ｍ・短軸5.22ｍ、深さ0.16ｍ

重複遺構　ＲＡ237・251・253・259・268・273・275・288・ＲＤ521

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　中央部付近より東寄りに構築され、石組部はアーチ状を呈する

ピ ッ ト　Ｐ１～28が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ｂ～Ｃ層はピット埋土である。

伏　　甕　竪穴住居内より３個体の伏甕が検出された（第83図１・第84図２・第85図10）。炉の中心をとおる長軸線上からは伏甕３が、伏甕２は長軸線上より南、伏甕１は北に外れた地点より検出されている。

出土遺物（第83図１～第86図23）　１・２・10は伏甕に転用された深鉢である。１は底部中央に7㎝程の孔を穿つ伏甕で、口唇部は平坦に調整される。口縁部下に隆線による波状文を施し、体部には単節縄文が縦位に施される。２は底部を全て欠いた伏甕で、口唇部は平坦に調整される。口縁部が内湾し、体部には単節縄文を縦位に施すものである。３・９は２の伏甕内部より出土した遺物である。３は縦位の単節縄文が施されるミニチュア土器底部である。９は全周縁より剥離整形が施される石箆である。10は口縁部と底部を欠いた伏甕で、体部には複節縄文が縦位に施される。４は床面から出土したラッパ状を呈する小形深鉢で、波状口縁を呈する。体部には沈線によるＹ字状の文様と小渦巻文が施され、地文には縦位の複節縄文が施文される。５は沈線による渦巻文を施すミニチュア土器で、底部を欠くものである。地文には斜位の複節縄文が施される。６は４つの孔のある器台で、下端に１条の沈線が巡る。７は体部が大きく膨らむ深鉢体部で、隆沈線による渦巻文と逆Ｕ字状文が施される。地文には縦位の複節縄文が施文される。８は台を持つ小形深鉢で、孔を持つ２単位の波状口縁を呈する。隆沈線による大渦巻文と連結する小渦巻文が施され、地文には斜位の複節縄文が施文される。11は口縁部が外反する深鉢で、口縁部は波状を呈し、口唇下には隆沈線による３条の横位平行線文が施される。体部には隆沈線による懸垂文と有棘渦巻文が施され、地文には斜位の複節縄文が施文される。

12は大形の石錐状の両面加工石器である。13は木葉形を呈した石槍で、両面全周縁より

剥離が施される。14 は有脚の石鏃、15 は腹面に一次剥離面を残す有茎の石鏃で、両面に押圧剥離が施される。16 は機能部に入念な剥離調整が施される石錐である。17・18・20 は削器で、18 は腹面右側縁、20 は両面一側縁に刃部調整を施す。19 は機能部が欠損する石匙で、背面端部には押圧剥離が施される。21 は縁辺に敲打痕と敲打による剥離痕が認められる打製石斧である。22 は完形の磨製石斧で、剥離整形痕が認められる。23 は孔のある斧状土製品で基部のみ残存する。地文には単節・複節縄文が施される。このほか図示していないが、複数の土製円盤や砥石、基部欠損の石棒などが出土している。

ＲＡ２４５炉跡（第 17 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｉ２区　**平 面 形**　不明　**規　　模**　不明
重複遺構　ＲＡ 239・241 ～ 243・249　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
石 囲 炉　炉石は抜き取られており、石抜痕から楕円形を呈していたものと考えられる。
ピ ッ ト　なし　**埋　　土**　Ａ層は熱浸透層で赤褐色を呈する
出土遺物（第 86 図 24）　24 は口縁部に隆線による平行線文を施す深鉢口縁部片で、口縁部は外反する。このほか図示していないが、頁岩の剥片などが出土している。

ＲＡ２４６竪穴住居跡（第 20 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｅ１区　**平 面 形**　楕円形？
規　　模　長軸 3.90 ｍ以上・短軸 3.97 ｍ、深さ 0.34 ｍ
重複遺構　ＲＡ 237・238・266・267・268・ＲＤ 525・528
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
石 囲 炉　中央部付近に構築され、石組部は方形を呈する
ピ ッ ト　Ｐ１～ 10 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ・Ｄ層はピット埋土である。
出土遺物（第 86 図 25 ～第 87 図 42）　25 は浅鉢で、隆線による小渦巻文を中心とした弧状文が施される。地文には縦位・横位の単節縄文が施文される。26 は小突起を施す複合口縁を呈し、口縁部が大きく外反する深鉢片である。体部には単節縄文が横位に施される。27 は口縁部が内湾する、キャリパー形を呈する深鉢である。口縁部には隆線による波状文が施され、波頂下には渦巻文が施される。地文には縦位・横位の単節縄文が施文される。28 は口縁部が直立気味にやや外反する、キャリパー形を呈する深鉢である。口縁部には沈線による波状文が描かれ、部分的に前述した文様に沿うように原体圧痕が施される。地文には縦位・横位の複節縄文が施文される。

29 ～ 31・35・36 は有脚の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。32 はつまみ部が欠損する石匙または削器で、背面全周縁に調整剥離が施される。33・34 は削器で、33 は背面一側縁に刃部調整が施される。37 は横刃の石匙で、つまみ部および両面端部には押圧剥離が施される。38 は両面下端に押圧剥離による調整が施される掻器である。39 は断面形が楕円状を呈する両面加工された石器である。40 は基部が欠損する小形の磨製石斧である。41 は土偶の下半部で、胴部より上部は失われている。貼付文により臍が表現され、表裏およ

び側面には沈線文が体形に沿って左右対称に施される。42は石冠で、底面に方形の窪みと孔を穿つ。側面下には帯状のレリーフに入組状の線刻が施される。石材はシルト岩を用いたものである。このほか図示していないが、板状土偶胴部や複数の砥石、円柱状を呈する小形の石製品などが出土している。

ＲＡ２４８竪穴住居跡（第18図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ10－Ｊ4　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸3.24ｍ以上・短軸1.25ｍ以上、深さ0.06ｍ
重複遺構　ＲＡ242・243・249・277　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
石 囲 炉　残存する石組部は方形を呈する　**ピ ッ ト**　Ｐ１～７が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ層は竪穴埋土、Ｂ・Ｃ層はピット埋土である。
埋設土器　中央部北東寄りの床面下に正立して埋設される（第88図1）。
出土遺物（第88図１～７）　１は住居床面下に埋設された口縁部と底部を欠いたキャリパー形深鉢である。僅かに隆沈線による文様がみられ、地文には縦位の羽状縄文が施される。２は渦巻文を施す弁状突起を持つキャリパー形深鉢口縁部片で、口縁部には隆沈線による波状文が施される。３は床面から出土した小形深鉢で、器壁が直線的に外傾する。口唇部には４単位の小突起を持ち、口唇下には縦位の原体圧痕が横位に並列して施される。口縁部文様帯下には沈線による弧状文が描かれ、地文には斜位の単節縄文が施される。４はキャリパー形深鉢頸部片で、隆沈線による文様が施される。５は有脚の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。６は横刃の石匙で、つまみ部および両面端部には押圧剥離が施される。７は基部を欠く掻器で、背面端部に機能部を持つ。このほか図示していないが、板状土偶胴部や砥石、環状石製品などが出土している。

ＲＡ２４９竪穴住居跡（第17図）

時　　期　不明　**位　　置**　Ｊ10－Ｊ4区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸・短軸不明、深さ0.12ｍ　**重複遺構**　ＲＡ239・241～243・245・248・277
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明
ピ ッ ト　なし　**埋　　土**　Ａ層は炉埋土である
出土遺物　図示していないが、地文のみを施す深鉢体部片や頁岩の削器・剥片などが出土している。

ＲＡ２５１竪穴住居跡（第19・20図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ10－Ｇ1区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸不明・短軸3.81ｍ以上、深さ0.14ｍ　**重複遺構**　ＲＡ244・259・ＲＤ521
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
石 囲 炉　中央部付近より南西寄りに構築され、残存する石組部は方形を呈する
ピ ッ ト　Ｐ１～４が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ層はさらに５層に細別される。
出土遺物（第88図８～12）　８は口唇部に原体圧痕による刻目が施される深鉢口縁部片である。口唇

下には２条の押引文に挟まれた原体末端押圧列が施され、体部には浅く単節縄文が施される。9は浅鉢口縁部片で、原体圧痕による波状文が施される。10は縦位多条の平行沈線が施される深鉢口縁部片である。11は半截竹管を連続施文した深鉢体部片である。12は断面形状が正方形を呈した小形の磨製石斧である。このほか図示していないが、頁岩製の石核や板状を呈する石製品などが出土している。

ＲＡ２５２竪穴住居跡（第21・22図）

時　　期　中期後葉　　**位　　置**　Ｊ10－Ｍ８区　　**平 面 形**　長楕円形

規　　模　長軸9.25ｍ・短軸4.12ｍ以上、深さ0.24ｍ　　**重複遺構**　ＲＡ283・ＲＰ005

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦

複 式 炉　中央部付近に構築される。石囲部はⅠ・Ⅱの２段あり、石囲部Ⅱには個体の異なる土器片が平坦に敷き詰められる（第89図1）。

ピ ッ ト　Ｐ１～23が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴・周溝埋土、Ｃ層は炉埋土、Ｄ・Ｅ層はピット埋土である。

出土遺物（第89図１～第94図46）　1は石囲部Ⅱ内に敷き詰められた短胴のキャリパー形深鉢で、口縁部は大きく内湾し、隆沈線による文様が施される。体部には沈線による有棘渦巻文が描かれ、地文には縦位の単節縄文が施される。2は床面から出土した小形深鉢で、口縁部は波状を呈しやや外反する。頸部には横位平行沈線が３条、体部には３条の懸垂文が描かれる。地文は縦位の単節縄文が口唇下より施され、口唇付近のみ磨消される。3は３単位の大波状突起を持つ小形深鉢で、口縁は頸部より直線的に外反する。器面には隆沈線による大渦巻文と懸垂文が施され、地文は口唇下より縦位の単節縄文が施される。4は平縁の口縁部が頸部より直線的に外反する小形深鉢片で、沈線による横位平行沈線、大小の渦巻文が施される。地文は口唇下より縦位の単節縄文が施される。5は体部に膨らみを持つ小形深鉢体部で、沈線による有棘渦巻文・懸垂文が描かれる。6は口縁部が外反し、頸部に括れを持つ小形深鉢で底部を欠く。頸部には列点文が巡り、体部には沈線による有棘渦巻文が施される。地文には縦位の複節縄文が施される。7は４単位の突起を持つキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯には隆沈線による渦巻文を起点にした文様を横位に展開施文する。体部上半から底部にかけては沈線による有棘渦巻文と懸垂文が描かれ、地文には縦位の単節縄文が施される。8は波頂部に隆沈線による渦巻文が施されるキャリパー形深鉢で、体部下半から底部を欠く。体部上半から下半にかけて沈線による有棘渦巻文と懸垂文が描かれ、地文には縦位・横位の複節縄文が施される。9は体部下半から底部欠損の波状口縁を持つ深鉢である。器面には沈線による横位平行線、大きな弧文が描かれ、地文には縦位の単節縄文が施される。10は口縁部が外反するラッパ形の小形深鉢で、器面には沈線による横位平行線・有棘渦巻文・懸垂文が描かれる。地文には縦位の無節縄文が施される。11は対となる波状突起を持つ小形深鉢で、器面には沈線による横位平行線、渦巻文と懸垂文が描かれる。地文には縦位の単節縄文が施される。12は体部下半から底部欠損の深鉢で、口縁部が外反し、器面には縦位の複節縄文が施される。13は深鉢体部下半から底部にかけての部位の深鉢で、器面には沈線

による有棘渦巻文と半円状の文様を付加する懸垂文が描かれる。地文には縦位の複節縄文が施される。14 は口縁部に膨らみを持ち、頸部に無文帯を持つ深鉢体部片である。口縁部文様帯には隆沈線による渦巻文と楕円区画文が施され、体部には隆沈線による有棘渦巻文と懸垂文が施される。15 は頂部に渦巻文を施す波状突起を持つ深鉢で、体部下半から底部を欠く。体部には隆沈線によって連結される有棘を持つ小渦巻文が施され、地文には附加条縄文が縦位に施文される。16・17 は頂部に渦巻文を施す波状突起を持つ深鉢片で、隆沈線による有棘渦巻文と懸垂文が施される。地文には16は複節縄文、17は単節縄文が縦位に施文される。18 は体部下半から底部にかけて残存する深鉢で、器面には沈線による渦巻文と懸垂文が施される。地文には縦位の複節縄文が施文される。19 は体部下半が窄まる深鉢で底部を欠く。器面には単節縄文が縦位に施される。20 は深鉢体部片で、沈線による有棘渦巻文が施される。21 は隆沈線による大渦巻文と小渦巻文を連結させて施文する深鉢体部片である。22 は波状口縁を呈する深鉢口縁部片で、隆沈線による渦巻文が施される。23 は頂部に渦巻文を施す波状突起を持つ深鉢片で、体部には隆沈線によって連結される小渦巻文が施される。24 はキャリパー形深鉢の口縁部片で、口縁部文様帯には隆沈線による楕円区画文・円文・有棘文が施される。25・26 は頂部に渦巻文を施す波状突起を持つ深鉢口縁部片で、25 の体部には隆沈線による渦巻文、26 には有棘円文が施される。27 は口縁部を欠く小形深鉢で、器面には沈線による渦巻文と懸垂文が施される。地文には縦位の単節縄文が施文される。28 は口縁部が外反する小形深鉢で、体部には沈線による有棘渦巻文と懸垂文が施される。地文には縦位の単節縄文が施文される。29 は波状口縁頂部に渦巻文を施し、口唇部に沈線を巡らすラッパ形の小形深鉢で体部下半から底部を欠く。体部には沈線による有棘渦巻文と懸垂文が描かれ、地文には縦位の複節縄文が施される。30 は器高のある浅鉢で、口縁部には隆沈線による渦巻文と楕円区画文が施される。地文には口縁部文様帯のみに横位の単節縄文が施される。31 は把手付の樽形土器片である。把手部は中空となり、体部には単節縄文が縦位に施される。32・33 は同一個体の深鉢体部片で、沈線による文様区画帯に列状に刺突が施される。

34・42 は敲打磨石である。34 は 2 辺に磨面を持ち、断面形状は三角形を呈する。42 は一辺に磨面を持ち、両面全周縁に剥離がみられる。35 は両面両側縁に刃部加工を施す削器である。36・37 は有脚、38 は有柄の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。39 は背面の刃部が粗い剥離によって整形される石箆である。40 は刃部欠損の横刃の石匙で、つまみ部および両面端部には押圧剥離が施される。41 は基部に再加工したものと思われる剥離痕がみられる磨製石斧である。43・44 はミニチュア土器で、43 の器面には縦位の沈線文が並列して巡る。44 は口唇部に小突起を持ち、地文には縦位の無節縄文が施される。45 は基部に孔のある斧状土製品で、先端部は欠損する。地文には縦位の無節縄文が施される。46 は石製の円盤である。このほか図示していないが、複数の土製円盤や礫石器、石冠の未製品などが出土している。

ＲＡ２５３竪穴住居跡（第 23 図）

時　　期　中期後葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｊ 24 区　　**平 面 形**　不整楕円形

規　　模　長軸 7.16 m・短軸 5.38 m、深さ 0.45 m

重複遺構　ＲＡ 233 Ⅰ期・233 Ⅱ期・244・259・261・262・269 Ⅰ期・273・275・279・288

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦

複 式 炉　中央部付近より東寄りに構築される。アーチ状の石囲部に接して浅い掘り込みがあり、壁寄りにピットが掘り込まれる。

ピ ッ ト　Ｐ１～ 19 が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｆ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ～Ｆ層はピット埋土である。

伏　　甕　炉の中央線を通る住居の長軸線上より、体部下半から底部を欠く伏甕が検出されている（第 95 図 1）。伏甕が出土した箇所は平安時代のＲＡ 0501 竪穴住居跡が重複しており、その際に破損したものと考えられる。

出土遺物（第 95 図 1 ～第 96 図 20）　1 は伏甕に転用された大形深鉢で、体部下半から底部を欠いたものである。口縁は平縁で、器面には隆沈線による大渦巻文を中心に小渦巻文が連結して施される。地文には斜位の複節縄文が施される。2 ～ 4・6 は小形深鉢で、2・4 は体部下半から底部にかけての部位が残り、3 は底部を欠くものである。2 ～ 4 の器面には隆沈線による小渦巻文・懸垂文、6 には沈線による横位平行線・渦巻文・懸垂文が施される。地文には 2・4・6 は単節縄文、3 は複節縄文が縦位に施される。5 は口縁部欠損のミニチュア土器で、沈線による渦巻文・懸垂文が連結して施される。地文には縦位の単節縄文が施される。

7・14・16 は削器である。7 は横刃を呈し、両面全周縁に調整剥離が施される。14・16 は切出状の刃部を呈し、14 は基部を欠くものである。8・12・17 は縦刃の石匙で、8 のつまみ部および背面全周縁には丁寧な整形剥離が施される。12 はつまみ部欠損で、両面全周縁より押圧剥離を施すものである。17 のつまみ部の抉れは浅く、両面機能部には刃部調整剥離が施される。9・15 は抉りが深い有脚の石鏃、11 は平基の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。10 は頁岩製の石核で、全体的に礫皮面を残すものである。13 は刃部幅広形の石篦で、基部のみ両面両側縁より整形剥離が施される。18 は刃部を再加工した磨製石斧である。19 は環状、20 は棒状を呈する石製品で線刻が施される。

このほか図示していないが、土製円盤や複数の敲打磨石、石皿などが出土している。

ＲＡ２５７竪穴住居跡（第 13 図）

時　　期　中期中葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｈ３区　　**平 面 形**　隅丸方形

規　　模　長軸 2.54 m・短軸 1.95 m、深さ 0.22 m　　**重複遺構**　ＲＡ 239・242

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦

土器埋設炉　中央部付近に構築される。残存する石組部は不整長方形を呈し、口縁部・底部を欠いた深鉢が埋設される（正位）。

ピ ッ ト　Ｐ１～ 9 が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ層は竪穴埋土、Ｂ・Ｃ層はピット埋土である。

出土遺物（第 97 図 1 ～ 8）　1 は口縁部を欠く深鉢で、器面には単節縄文が縦位に施される。2 は抉りの浅い有脚の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。3 は一次剥離面を残す石篦で、刃部と基部に調整剥離が施される。4・5 は削器で、4 の剥片先端部には調整剥離、5 の背面両

側縁には刃部調整が施される。6は横刃の石匙で、つまみの部分は再加工される。7は破損した磨製石斧を再利用した楔形石器である。8･9は完形の磨製石斧で､9は小形のものである。このほか図示していないが、隆沈線による区画文・波状文が施されるキャリパー形深鉢体部片や礫石器などが出土している。

ＲＡ２５８Ⅰ期竪穴住居跡（第24図）

時　　期　中期中葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｌ25区　　**平 面 形**　不整円形

規　　模　長軸3.68ｍ・短軸3.54ｍ、深さ0.23ｍ　　**重複遺構**　ＲＡ258Ⅱ～Ⅵ期・262・286

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦

土器埋設炉　中央部付近に構築され、口縁部・底部を欠いた深鉢が正立して埋設される（第97図10）。石囲部は楕円形を呈し、一部深鉢口縁部片が転用される。

ピ ッ ト　Ｐ１～11が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ａ～Ｃ層は竪穴埋土、Ｄ層はピット埋土である。

出土遺物（第97図10～14）　10は石囲炉内に埋設されたキャリパー形深鉢で、口縁部から体部上半部にかけて残る。口縁部文様帯には隆沈線による渦巻文を付加した波状文が施され、地文には縦位・横位の単節縄文が施される。11は口唇部に小突起を持つ無文の小形深鉢である。12は口縁部が外反するミニチュア土器で、地文には縦位の単節縄文が施される。13は炉石に転用された打製石斧である。基部に礫皮面を残し、両面端部には整形剥離が施される。14は刃部に使用による剥離が見られる磨製石斧である。このほか図示していないが､弁状突起･原体圧痕が施される深鉢片や砥石、敲打磨石などが出土している。

ＲＡ２５８Ⅱ期竪穴住居跡（第24図）

時　　期　中期中葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｍ25区　　**平 面 形**　不整方形

規　　模　長軸4.03ｍ・短軸3.61ｍ以上、深さ0.05ｍ

重複遺構　ＲＡ258Ⅰ期・258Ⅲ～Ⅵ期・262・265・286

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦　　**炉**　不明

ピ ッ ト　Ｐ１～15が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ層はさらに３層に細別される。

伏　　甕　住居北西壁付近より２基検出されている（第98図１・２）。

埋設土器　住居の長軸線上の床面下に２基正立して埋設される（第99図３・４）。

出土遺物（第98図１～第99図９）　１・２は伏甕に転用された深鉢である。１の口縁部は人為的に打ち欠かれ、底部には外部からの穿孔が施される。器面には単節縄文が縦位に施される。２は底部を欠く伏甕で、口縁部には原体圧痕による格子状の文様が施され、下位には単節縄文が縦位に施される。３・４は住居床面下に埋設された深鉢である。３は体部下半から底部を欠く深鉢で、口縁部にはＳ字状貼付文と刻目を施す波状の隆線文が連結して巡る。体部には隆線による平行線文から蕨手状文・波状文が連結して垂下し、地文には複節縄文が縦位に施される。４は口縁部と底部を欠くキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯には隆線及び隆沈線による波状文が施される。地文には縦位・横位の単節縄文が施される。５は床面から出土し

た大小の突起があるキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には隆沈線による波状文が横位に展開し、地文には縦位の単節縄文が施される。6は有柄、7は抉りの浅い有脚の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。8は横刃の石匙で、刃部端部が尖る。9は整形剥離痕がみえる磨製石斧である。このほか図示していないが、敲打磨石や砥石などが出土している。

ＲＡ２５８Ⅲ期竪穴住居跡（第25図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｎ25区　**平 面 形**　楕円形

規　　模　長軸4.21ｍ・短軸3.72ｍ、深さ0.12ｍ

重複遺構　ＲＡ258Ⅰ期・258Ⅱ期・258Ⅳ～Ⅵ期・262・265・286・289

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　Ｐ１～18が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ層は竪穴埋土、Ｂ・Ｃ層はピット埋土である。

出土遺物（第100図1）　1は装飾把手のあるキャリパー形深鉢口縁部片で、口縁部文様帯には原体圧痕が縦位に施される。頸部より下位には沈線による横位平行線と弧状文が描かれ、地文には縦位の単節縄文が施される。このほか図示していないが、隆沈線による山形文が施されるキャリパー形深鉢口縁部片や土製円盤、礫石器などが出土している。

ＲＡ２５８Ⅳ期竪穴住居跡（第25図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｎ25区　**平 面 形**　不明

規　　模　長軸・短軸不明、深さ0.05ｍ　**重複遺構**　ＲＡ258Ⅰ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅵ期

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　Ｐ１が検出されている

埋　　土　Ａ層は２層に細別され、竪穴・ピット埋土である　**出土遺物**　なし

ＲＡ２５８Ⅴ期竪穴住居跡（第26図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ10－Ｍ１区　**平 面 形**　不整長楕円形？

規　　模　長軸6.19ｍ以上・短軸4.53ｍ

重複遺構　ＲＡ258Ⅰ～Ⅳ期・258Ⅵ期・262・286

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　Ｐ１～36が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、ともにピット埋土である

出土遺物（第100図2～5）　2・3は粘板岩製の打製石斧で、両面端部には整形剥離が施される。4は両側縁に敲打痕を残す敲石である。5は砂質凝灰岩製の石冠で、断面形状は三角形を呈する。底面には整形痕と思われる敲打痕が見られる。このほか図示していないが、隆沈線による渦巻文・山形文が施されるキャリパー形深鉢口縁部片や砥石、擦痕状の陰刻が認められる石製品などが出土している。

ＲＡ２５８Ⅵ期竪穴住居跡（第 25 図）

時　　期　中期中葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｍ２区　　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸 3.53 ｍ以上・短軸 1.09 ｍ以上　　**重複遺構**　ＲＡ 258 Ｉ～Ｖ期・262・286
掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦　　**炉**　不明
ピ ッ ト　Ｐ１～９が検出されている
埋　　土　Ａ・Ｂ層に大別され、ともにピット埋土である
出土遺物（第 100 図 6）　6 は背面全周縁に整形剥離、腹面の打瘤除去が施された掻器である。このほか図示していないが、渦巻文・山形文が施される深鉢片や凹石などが出土している。

ＲＡ２５９竪穴住居跡（第 27・28 図）

時　　期　中期中葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｊ１区　　**平 面 形**　隅丸長方形
規　　模　長軸 5.82 ｍ・短軸 3.86 ｍ、深さ 0.20 ｍ
重複遺構　ＲＡ 244・251・253・262・273・286・288・ＲＤ 519
掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦
石 囲 炉　中央部付近に構築され、石組部は長方形を呈する
ピ ッ ト　Ｐ１～ 40 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｈ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ～Ｈ層はピット埋土である。
伏　　甕　石囲炉の延長上に伏甕が２基縦列して検出された（第 101 図 1･2）。口縁部の膨らみがなく、直線的な形状であることから、大木８ａ式期でも古い段階であることが考えられる。
出土遺物（第 101 図 1 ～第 102 図 15）　1・2 は伏甕に転用されたキャリパー形深鉢である。1 の口縁部には対をなす小突起が施され、口縁部文様帯には隆線による弧状文・渦巻文が施される。頸部には２条の横位平行の隆線が貼付され、下位方向に Y 字状を呈する懸垂文が施される。底部欠損で、地文には縦位・横位の単節縄文が施文される。2 は口縁部が直線的に外反する器形のキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯には隆沈線・沈線による波状文と渦巻文が施される。地文には縦位の単節縄文が施文され、底部には外部からの穿孔が施される。3 は床面から出土した弁状突起を持つ深鉢で、器面には隆沈線による弧状文が横位に施される。地文には単節縄文が縦位に施される。4 は口縁部が外反しながら、口唇部付近で膨らみを持たせるキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には隆沈線による波状文と渦巻文が、頸部より下位には隆線・沈線による懸垂文が施される。体部下半から底部欠損で、地文には縦位の複節縄文が施される。5 は竪穴住居埋土上部から出土した小形のキャリパー形深鉢で、上記した土器よりも口縁部が膨らむ。口唇部には小突起を持ち、口縁部文様帯には沈線による曲線的モチーフが描かれる。地文には単節縄文が施される。

6 は礫皮面を残す剥片を加工した石錐で、両面機能部には入念な押圧剥離が施される。7 は抉りの深い有脚の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。8 ～ 12 は石篦で、8 ～ 10 は刃部が狭く丸みを帯びる。8・11 の背面全周縁および腹面端部、9・10・12 の両面全周縁には剥離整形が施される。13 は腹面端部に押圧剥離を施す掻器である。14 は小形の磨製石斧で整形剥離痕が残る。15 は軟質のシルト岩製の石冠である。底面に方形の凹部があり、

一端に孔を穿ち端部の凹部にある孔と繋がるものである。このほか図示していないが、複数の削器や砥石、打製石斧などが出土している。

ＲＥ２６０竪穴住居跡（第 28 図）

時　　期　中期後葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｍ22 区　**平 面 形**　不整円形？
規　　模　長軸 2.10 m以上・短軸 2.24 m、深さ 0.22 m　**重複遺構**　ＲＡ 265・289
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**ピ ッ ト**　Ｐ１・２が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ層はピット埋土である。
出土遺物　図示していないが、沈線による逆Ｕ字状文が施される深鉢口縁部片や斧状土製品、頁岩の剥片などが出土している。

ＲＡ２６１竪穴住居跡（第 29 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｋ23 区　**平 面 形**　不整円形？
規　　模　長軸 5.11 m以上・短軸 3.88 m、深さ 0.28 m
重複遺構　ＲＡ 233 Ⅱ期・253・269 Ⅰ期・270・273・279・288
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
石 囲 炉　中央部付近に構築され、石組部は方形を呈する
ピ ッ ト　Ｐ１～ 26 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ・Ｄ層はピット埋土である。
埋設土器　中央部北東寄りの床面下に正立して埋設される（第 103 図 1）。
出土遺物（第 103 図 1 ～第 104 図 10）　1 は住居床面下に埋設された浅鉢で、口縁部文様帯には隆線による横長の方形区画文が施される。地文には単節縄文を縦位･横位に施す。2 はキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯には隆沈線による波状文が施される。底部欠損で、地文には縦位・横位の複節縄文が施文される。3 は底部欠損の口縁部に突起を持つ浅鉢で、突起下には隆沈線による渦巻文が施され、楕円状の区画文と連結して横位に展開する。体部の地文には横位の単節縄文が施文される。4 は背面先端部に刃部調整がみられる掻器である。5 は腹面両側縁に刃部調整剥離が施される削器である。6 は両面に一次剥離面を残す有脚の石鏃である。7 は両面全周縁に押圧剥離がみられる小形の両面加工石器で、石鏃の未完成品である可能性が考えられるものである。8 は先端部欠損のつまみ部を持つ錐状の石器で、両面機能部には入念な押圧剥離が施される。9 は整形剥離痕、敲打痕を残す打製石斧と考えられる。10 は礫皮面を残す頁岩製の石核である。このほか図示していないが､耳栓や船形状を呈する土製品、石冠などが出土している。

ＲＡ２６２竪穴住居跡（第 30 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｋ１区　**平 面 形**　楕円形？
規　　模　長軸 5.14 m以上・短軸 2.65 m以上、深さ 0.21 m
重複遺構　ＲＡ 253・258 Ⅰ～Ⅵ期・259・286・ＲＤ 519
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦

土器埋設炉　中央部付近より北西寄りに構築される。残存する石組部は方形を呈し、深鉢が正立して埋設される（第104図11）。

ピ ッ ト　Ｐ１～19が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ層は竪穴・炉埋土、Ｂ・Ｃ層はピット埋土である。

出土遺物（第104図11～17）　11は石囲炉内に埋設されていた小形の樽形土器である。口縁部は直立し、体部が緩やかに膨らむ。頸部には把手状の装飾が施され、体部には隆線による懸垂文と鈎状の文様が施される。12は孔のある斧状土製品の基部で、器面には縦位の複節縄文が施される。13～15は床面から出土した石器である。13は再調整が加えられた磨製石斧、14・15は全周縁に整形剥離が施される打製石斧である。16は有柄の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。基部を欠くが、基部付近にはアスファルトが付着する。17は背面３側縁、腹面１側縁に整形剥離が施される削器と考えられる石器である。このほか図示していないが、隆沈線による渦巻文・山形文が施されるキャリパー形深鉢口縁部片や砥石、炉石に転用された敲石などが出土している。

ＲＡ２６３竪穴住居跡（第14・15図）

時　　期　中期後葉　**位　　置**　Ｊ10－Ｏ４区　**平 面 形**　円形？

規　　模　長軸5.65ｍ以上・短軸1.86ｍ以上、深さ0.08ｍ　**重複遺構**　ＲＡ234・235・236

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　Ｐ47～69が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、さらにＡ層は３層、Ｂ・Ｃ層は２層に細別される。

伏　　甕　伏甕が１基検出されている（第105図1）。ＲＡ263竪穴住居跡内より検出されているが、検出面に貼床等が確認できなかったことから、別住居の伏甕である可能性がある。

出土遺物（第105図1）　１は伏甕に転用された深鉢で、口唇下に刻目のある隆帯を貼付し、体部には複節縄文を横位・縦位に施す。底部穿孔は外面から施され、内面が放射状に剥離する。このほか図示していないが、渦巻文や平行線文が施される深鉢体部片などが出土している。

ＲＡ２６４竪穴住居跡（第29図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ10－Ｋ７区　**平 面 形**　不明　**規　　模**　不明

重複遺構　ＲＡ252　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦

土器埋設炉　石組部はアーチ状を呈し、深鉢が正立して埋設される（第105図2）。

ピ ッ ト　Ｐ１～７が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ層はさらに２層に細別される。

出土遺物（第105図2）　２は石囲炉中央に埋設されていたキャリパー形深鉢で、口縁部・底部を欠く。口縁部文様帯には隆線・原体圧痕による波状文が施され、地文には単節縄文が縦位・斜位に施される。このほか図示していないが、複合口縁を呈する深鉢口縁部片や頁岩の剥片などが出土している。

ＲＡ２６５竪穴住居跡（第 31 図）

時　　期　中期後葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｍ23 区　　**平 面 形**　不整楕円形？
規　　模　長軸 2.93 m以上・短軸 2.85 m以上、深さ 0.27 m
重複遺構　ＲＡ 258 Ⅱ期・258 Ⅲ期・271・289・ＲＥ 260
掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦
複 式 炉　中央部付近より北東寄りに構築され、石囲による燃焼部Ⅰ・Ⅱと袖状の石列を配する前庭部によって構成される。
ピ ッ ト　Ｐ１～７が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ層は竪穴埋土、Ｂ・Ｃ層はピット埋土である。
出土遺物（第 106 図１～６）　1・3・4 は床面から出土した土器である。1 は口縁部が外反し、体部下半に膨らみを持たせる小形深鉢である。器面には沈線による逆Ｕ字状文が描かれ、文様外の地文は磨り消される。3 は口縁部が直立し、体部上半に最大径を持たせる深鉢で底部を欠く。器面には沈線による逆Ｕ字状文と鈎状の文様が描かれ、文様外の地文は磨り消される。4 は体部上半から底部にかけての部位を残す深鉢で、器面には複節縄文が縦位に施される。2 は口縁部が緩やかな波状を呈するキャリパー形深鉢である。器面には沈線による逆Ｕ字状文と円文が描かれ、文様外の地文は磨り消される。5 は半月状を呈した敲打磨石である。一辺に磨面を持ち、縁辺には敲打痕が認められる。6 は棒状を呈する石錐で、両面全周縁に押圧剥離が施される。このほか図示していないが、土製円盤や頁岩製の石核、棒状石製品などが出土している。

ＲＡ２６６竪穴住居跡（第 22 図）

時　　期　不明　　**位　　置**　Ｊ９－Ｅ 25 区　　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸 6.25 m以上・短軸 3.66 m以上、深さ 0.34 m
重複遺構　ＲＡ 237・238・244・246・268・273・275・ＲＤ 523・525・528
掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦
石 囲 炉　石組部は方形を呈する　　**ピ ッ ト**　Ｐ１～ 15 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ａ･Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ層は周溝埋土、Ｄ･Ｅ層はピット埋土である。
出土遺物（第 105 図３）　3 は刃部にのみ入念な押圧剥離が施される石箆である。このほか図示していないが、山形文・肋骨文が施される深鉢体部片や磨製石斧、敲打痕が認められる水晶などが出土している。

ＲＡ２６７炉跡（第 16 図）

時　　期　中期前葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｆ１区　　**平 面 形**　不明　　**規　　模**　不明
重複遺構　ＲＡ 237・246・266　　**掘 込 面**　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦
地 床 炉　体部下半を人為的に欠いた深鉢が正立して埋設される (第 105 図 4)
ピ ッ ト　なし　　**埋　　土**　Ａ層は炉埋土である
出土遺物（第 105 図４）　4 は地床炉中央に埋設されていた深鉢である。体部中央付近から底部を欠き、

複合口縁を呈する。口縁部は体部と段で区画され、器面には単節縄文のみが横位に施される。このほか図示していないが、表裏に半截竹管による沈線文・押引文が施される板状土偶胴部が出土している。

ＲＡ２６８竪穴住居跡（第 30 図）

時　　期　不明　**位　　置**　Ｊ９－Ｆ 25 区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸・短軸不明、深さ 0.28 m
重複遺構　ＲＡ 237・238・244・246・266・ＲＤ 525
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明
ピ ッ ト　Ｐ１～ 16 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ～Ｅ層はピット埋土である。
出土遺物（第 105 図 5・6）　5 は横刃の石匙である。つまみ部が入念な押圧剥離により作り出され、両面端部には刃部調整剥離が施される。6 は両面両側縁からの整形剥離痕を残す磨製石斧である。このほか図示していないが、渦巻文・山形文が施されるキャリパー形深鉢口縁部片や複数の石核、砥石などが出土している。

ＲＡ２６９Ⅰ期竪穴住居跡（第 32 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｋ 22 区　**平 面 形**　不整楕円形？
規　　模　長軸 3.09 m以上・短軸 4.71 m以上、深さ 0.43 m
重複遺構　ＲＡ 223・233 Ⅰ期・233 Ⅱ期・253・261・269 Ⅱ期・270・271・279
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
石 囲 炉　中央部付近に構築され、残存する石組部は方形を呈する
ピ ッ ト　Ｐ１～ 34 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ・Ｄ層はピット埋土である。
出土遺物（第 107 図 1 ～ 4）　1 は石篦で、背面刃部には再調整と考えられる大きな剥離がみられる。2 は先端部が尖る削器で、背面両側縁に細かい剥離痕がみられる。3・4 は磨製石斧で、4 は小形のものである。3 の基部には衝撃痕と思われる剥離痕がある。このほか図示していないが、渦巻文・波状文が施されるキャリパー形深鉢口縁部片や敲石などが出土している。

ＲＡ２６９Ⅱ期竪穴住居跡（第 32 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｊ 21 区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸・短軸不明、深さ 0.34 m
重複遺構　ＲＡ 233 Ⅰ期・233 Ⅱ期・269 Ⅰ期・ＲＤ 515
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明
ピ ッ ト　Ｐ 35 ～ 48 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ層は周溝埋土、Ｂ～Ｄ層はピット埋土である。
出土遺物（第 107 図 5 ～ 8）　5 は緩やかなカーブを描く深鉢である。口唇下には隆帯で連結する隆線による渦巻文が巡り、体部には複節縄文が縦位に施される。6 は把手状の装飾を持つ無文の

鉢形土器片である。7は背面全周縁、腹面一側縁に刃部調整剥離を施す削器であるが、端部が錐状に尖り、錐としての機能を持たせていたことも考えられる。8は側縁に敲打痕を残す打製石斧で、刃部を欠くものである。このほか図示していないが、弁状突起・原体圧痕文が施されるキャリパー形深鉢口縁部片や砥石、土製円盤などが出土している。

ＲＡ２７０竪穴住居跡（第31図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｋ22区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸・短軸不明、深さ0.12ｍ　**重複遺構**　ＲＡ253・261・269Ⅰ期・271・279
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明
ピ ッ ト　なし　**埋　　土**　Ａ層は竪穴埋土である
出土遺物　図示していないが、隆沈線による渦巻文が施される深鉢片や頁岩の剥片が出土している。

ＲＡ２７１竪穴住居跡（第31図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｌ22区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸・短軸不明、深さ0.17ｍ　**重複遺構**　ＲＡ261・265・269Ⅰ期・270
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明
ピ ッ ト　Ｐ１～11が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ・Ｄ層はピット埋土である。
出土遺物（第108図1）　1は刃部幅広形を呈する石箆で、背面全周縁および腹面両側縁に剥離整形が施される。このほか図示していないが、隆沈線による区画文が施される深鉢体部片などが出土している。

ＲＡ２７２炉跡（第16図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｇ23区　**平 面 形**　不明　**規　　模**　不明
重複遺構　ＲＡ233Ⅰ期・253・244・273・275　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
土器埋設炉　残存する石組部は方形を呈し､口縁部･底部を大きく欠いた深鉢が正立して埋設される（第108図2)。
ピ ッ ト　なし　**埋　　土**　Ａ層は炉埋土である
出土遺物（第108図2）　2は石囲炉内に埋設された深鉢体部片で、縦位の単節縄文が施される。このほか図示していないが、削器・砥石・棒状石製品などが出土している。

ＲＡ２７３竪穴住居跡（第33図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｈ24区　**平 面 形**　楕円形？
規　　模　長軸5.19ｍ以上・短軸3.74ｍ以上、深さ0.23ｍ
重複遺構　ＲＡ233Ⅰ期・233Ⅱ期・237・244・251・253・259・266・275・288・ＲＤ523
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
土器埋設炉　中央部付近より南東寄りに構築される。残存する石組部は方形を呈し、口縁部を欠いた深鉢が正立して埋設される（第108図3)。

ピ ッ ト　Ｐ１～25が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ～Ｅ層はピット埋土である。

出土遺物（第108図３～７）　３は石囲炉内に埋設された深鉢で、縦位の単節縄文が施される。４は口縁部および底部欠損の深鉢で、縦位の単節縄文が施される。５は刃部欠損の磨製石斧で、表面にはくっきりした稜線が認められる。６は錐部幅広形を呈する石錐で、背面右側縁および腹面全周縁に調整剥離が施される。７は楕円形を呈する石箆で、両面端部に剥離整形が施される。このほか図示していないが、弁状突起・渦巻文・連弧文が施される深鉢片などが出土している。

ＲＡ２７４Ⅰ期竪穴住居跡（第34図）

時　　期　中期前葉　**位　　置**　Ｊ10－Ｇ７区　**平 面 形**　隅丸長方形

規　　模　長軸6.41ｍ・短軸4.79ｍ、深さ0.40ｍ

重複遺構　ＲＡ274Ⅱ期・276・277・ＲＤ527　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦

土器埋設炉　中央部付近に構築される。石組部は多角形を呈し、口縁部を欠いた深鉢が正立して埋設される（第109図1）。

ピ ッ ト　Ｐ１～17が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｆ層に大別され、Ａ～Ｃ層は竪穴・周溝埋土、Ｄ～Ｆ層はピット埋土である。

出土遺物（第109図１～第114図38）　１は石囲炉内に埋設された深鉢である。体部上半には原体圧痕が並行するクランク状の隆線文が横位に展開し、地文には単節縄文が横位に施される。２は床面から出土した深鉢で、口縁部を欠く。体部上半には原体圧痕による平行線文が巡り、地文には縦位の無節縄文が施される。３～６は弁状突起を持つ深鉢で、４単位の波状口縁を呈する。３は波頂部に刻みを持ち、口縁部文様帯には原体圧痕を施す隆線による区画文が展開する。体部の地文には横位の単節縄文が施される。４は複合口縁を呈し、波頂部下には楕円状文と隆線が連結して垂下する。口縁部文様帯は体部と段で区画され、原体圧痕による平行線文・連弧文が充填施文される。地文には縦位の単節縄文が施される。５は波状文に加飾された複合口縁を呈し、波頂部下には孔が穿たれる。口縁部文様帯はボタン状貼付文・押引文が充填施文される平行線文で体部と区画され、菱形状文・押引文が横位に展開する。体部の地文には縦位の単節縄文が施される。６の口縁部文様帯には隆線による山形状の区画が横位に展開し、区画内には原体圧痕による平行線文・鋸歯状文が充填施文される。地文には単節縄文が施される。7･8は浅鉢で、口縁部文様帯には原体圧痕による平行線文･波状文･鋸歯状文・渦巻文が懸垂文と連結して横位に展開する。７の体部には横位の無節縄文が施される。９・10は舟形状を呈した浅鉢である。９は長軸方向の口唇部に波状文を施す複合口縁を呈し、地文には斜位の単節縄文が施される。10は２単位の大波状口縁を呈し、口唇部には４単位の小突起が施される。小突起間の対する２辺のみが小波状口縁を呈し、波頂部下には原体圧痕を施す隆線が垂下する。口唇部下には隆線が巡り体部と区画され、地文には結束を持つ単節縄文が縦位・横位に施される。11は原体圧痕を施す波状文に加飾された複合口縁を呈する深鉢片で、口縁部下には原体圧痕が並行する隆線による区画文が描かれる。12は口縁部および底部欠損の深鉢で、体部上半には多条の平行沈線が巡る。地文には結束を持

つ単節縄文が横位に施される。13 は口唇部に二山突起を持つ深鉢片で、口唇部下には原体圧痕文が巡る。地文には横位の単節縄文が施される。14 は 2 個 1 対で 4 単位の波状口縁を呈する深鉢で、屈曲を持つ頸部は押引文を施す隆線で体部と区画される。口縁部文様帯には押引文を施す隆線による渦巻文と半截竹管による波状文・平行線文が連結して展開する。体部には結束を持つ無節縄文が縦位に施される。15 は 2 単位の大波状口縁を呈する深鉢で、口唇部には 2 個 1 対の小突起が 4 単位施され補修孔を持つ。口縁部文様帯は沈線による波状文で体部と区画され、原体圧痕による曲線的モチーフが横位に展開する。体部には縦位の単節縄文が施される。16 は口縁部にかけて内湾する深鉢片で、口唇部には二山突起を持つ。口縁部文様帯は原体圧痕が並行する隆線で体部と区画され、区画内には原体圧痕による連弧文が充填施文される。地文には横位の単節縄文が施される。17 は波状口縁を呈する深鉢片である。波頂部下には隆線が垂下し、口唇部下には原体圧痕に加飾された隆線による区画文が巡る。地文には横位の単節縄文が施される。18 は体部上半に屈曲を持つ深鉢片である。口縁部文様帯には隆線による楕円状の区画文が展開し、区画内には多条の原体圧痕が充填施文される。体部には縦位の単節縄文が施される。19 は体部下半から底部欠損の深鉢で、屈曲を持つ頸部は原体圧痕が並行する隆線により体部と区画される。口縁部文様帯には貼付文に加飾された隆線による山形文が展開し、区画内には原体圧痕による連弧文・平行線文が充填施文される。体部の地文には結束を持つ縦位の単節縄文が施される。20 は体部上半欠損の深鉢で、縦位の単節縄文が施される。底部には網代痕が認められる。21 は板状土偶上半部である。表面には貼付文･貫通孔により胸が表現され、表裏には沈線文が体形に沿って左右対称に施される。22 は口唇部に二山突起を持つミニチュア土器で、口唇部下には原体圧痕による平行線文・懸垂文が施される。地文には縦位の無節縄文が施される。

23 は床面から出土した安山岩製の石皿である。24・30・31・33 は石匙で、24・30・33 は縦刃、31 は横刃を呈する。つまみ部および 30 の背面機能部には入念な押圧剥離が施され、24・33 の両面端部、30 の腹面下端、31 の背面下端には刃部調整剥離が施される。25・26・32・34 は石箆で、25・34 は楕円形、32 は刃部幅広形を呈する。25・26 は両面全周縁、32・34 は背面全周縁および腹面端部に剥離整形が施される。27・28 は平基の石鏃で、28 は一次剥離面を残すが両面に入念な押圧剥離が施される。29 は両面に入念な押圧剥離が施される石錐である。35・36 は敲石である。35 の両面には敲打痕、35 の下端、36 の両極には衝撃剥離が認められる。37 は礫皮面を残す流紋岩製の石核である。38 は軟質のシルト岩製の石冠で、断面形状は三角形を呈する。側面には整形時における剥離や鼠歯状の痕跡、底面には擦痕が認められる。

このほか図示していないが、複数の土偶や石冠の未製品、基部欠損の石棒などが出土している。

ＲＡ２７４Ⅱ期竪穴住居跡（第 35 図）

時　　期　中期前葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｈ６区　　**平 面 形**　隅丸多角形

規　　模　長軸 6.63 m・短軸 5.25 m以上、深さ 0.40 m

重複遺構　ＲＡ 274 Ｉ期・276・277　　**掘 込 面**　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦

土器埋設炉　中央部付近に構築される。残存する石組部は方形を呈し、口縁部・底部を大きく欠いた深鉢が正立して埋設される（第115図1）。

ピ ッ ト　Ｐ１～31が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｆ層に大別され、Ａ～Ｃ層は竪穴・周溝埋土、Ｄ～Ｆ層はピット埋土である。

埋設土器　南西壁寄りの床面下に正立して埋設される（第115図2）。

出土状況　北壁付近に石棒が直立した状態で埋設されており、全長は45cmのうち約14cmが床面下であった。屋内において祭祀的な空間が設けられていた可能性がある。

出土遺物（第115図１～12）　１は石囲炉内に埋設された深鉢で、結束を持つ縦位の無節縄文が施される。２は住居床面下に埋設された深鉢で、２個１対で４単位の波状口縁を呈する。口縁部文様帯は体部と段で区画され、原体圧痕による区画文が展開する。地文には斜位の単節縄文が施される。３は口縁部が直線的に外反し、口縁下に膨らみを持たせるキャリパー形深鉢で、体部下半を欠くが直線的に底部に至るものと考えられる。口唇部には小突起が施され、隆帯が垂下する。屈曲部はそれぞれ段で区画され、地文には単節縄文が横位に施される。４は基部欠損の石槍で、両面全周縁より入念な押圧剥離が施される。5･7･9は石匙で、5は縦刃、7･9は横刃を呈する。つまみ部が入念な押圧剥離により作り出され、５は背面全周縁および腹面機能部、７・９は両面端部に刃部調整剥離が施される。６は基部に抉りのある石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。８・11は両面端部には剥離整形が施される石箆である。10は背面全周縁および腹面側縁に押圧剥離による調整が施される掻器である。12は基部欠損の磨製石斧で、敲打痕と衝撃剥離が認められる。このほか図示していないが、板状土偶や石冠の未製品、複数の石棒などが出土している。

ＲＡ２７５竪穴住居跡（第36図）

時　　期　中期中葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｇ23区　　**平 面 形**　不明

規　　模　長軸・短軸不明、深さ0.17ｍ

重複遺構　ＲＡ233 Ⅰ期・237・266・272・273・ＲＤ523

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦　　**炉**　なし

ピ ッ ト　Ｐ１～13が検出されている

埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ層は竪穴埋土、Ｂ・Ｃ層はピット埋土、Ｄ層は周溝埋土である。

出土遺物（第108図８～10）　８は床面から出土したキャリパー形深鉢で、体部下半から底部欠損を欠く。口唇部は平坦に調整され、口唇部下には４単位の小突起を持つ。口縁部文様帯は体部と段で区画され、原体圧痕が並行する隆線による区画文が横位に展開する。地文には縦位の単節縄文が施される。９は蛇紋岩製の打製石斧で、両面端部には整形剥離が施される。10は両面側縁に調整剥離が施される削器である。

ＲＡ２７６竪穴住居跡（第36図）

時　　期　中期中葉　　**位　　置**　Ｊ10－Ｉ７区　　**平 面 形**　不明

規　　模　不明　　**重複遺構**　ＲＡ264・274 Ⅰ期・274 Ⅱ期・277・ＲＤ520

掘 込 面　削平　　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　一部石組みが残存するが形状不明　**ピ ッ ト**　Ｐ１～９が検出されている
埋　　土　Ａ・Ｂ層に大別され、ともにピット埋土である
出土遺物　図示していないが、隆沈線による有棘渦巻文が施されるキャリパー形深鉢口縁部片や敲打磨石などが出土している。

ＲＡ２７７竪穴住居跡（第 37・38 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｉ５区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸 7.01 m以上・短軸 5.41 m以上、深さ 0.31 m
重複遺構　ＲＡ 242・243・248・249・274 Ⅰ期・274 Ⅱ期・276・ＲＤ 520
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
土器埋設炉　中央部付近に構築される。石組部は長方形を呈し、口縁部・底部を大きく欠いた深鉢が正立して埋設される（第 116 図 1）。
ピ ッ ト　Ｐ１～ 47 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｈ層に大別され、Ａ～Ｃ層は竪穴・炉埋土、Ｄ層は周溝埋土、Ｅ～Ｈ層はピット埋土である。
出土遺物（第 116 図１～８）　１は石囲炉内に埋設された深鉢で、地文には単節縄文が縦位に施される。２は両面全周縁から剥離整形が施される石槍である。３は背面端部に押圧剥離が施される円形掻器である。４は礫皮面を残す流紋岩製の石核である。５は横刃の石匙で、機能部を欠くが両面全周縁に入念な調整剥離が施される。６は平基の石鏃、７は石錐で、両面に入念な押圧剥離が施される。８は機能部欠損の石篦で、両面全周縁から剥離整形が施される。
　このほか図示していないが、石棒などが出土している。

ＲＡ２７９竪穴住居跡（第 33 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｊ 23 区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸・短軸不明、深さ 0.16 m
重複遺構　ＲＡ 233 Ⅰ期・233 Ⅱ期・253・261・269 Ⅰ期・269 Ⅱ期・270・273・288
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明
ピ ッ ト　Ｐ１・２が検出されている
埋　　土　Ａ・Ｂ層に大別され、Ａ層は竪穴埋土、Ｂ層はピット埋土である。
出土遺物　図示していないが、原体圧痕が施される小形深鉢口縁部片、頁岩製の石核や剥片などが出土している。

ＲＡ２８１竪穴住居跡（第 38 図）

時　　期　中期初頭　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｉ 10 区　**平 面 形**　隅丸長方形
規　　模　長軸 4.17 m・短軸 3.05 m、深さ 0.35 m　**重複遺構**　なし
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
地 床 炉　中央部付近に認められる　**ピ ッ ト**　Ｐ１～３が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｄ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ層は周溝埋土、Ｄ層はピット埋土である。

出土遺物（第 117 図 1 ～第 125 図 54） 1 ～ 5 は弁状突起を持つ深鉢で 4 単位の波状口縁を呈する。1 は口縁部文様帯にボタン状貼付文に加飾された半截竹管による押引文・菱形文・波状文が連結して展開し、体部には弧状文と結束を持つ縦位の単節縄文が施される。2 は隆線と半截竹管文による三角形の区画文が全面に展開し、地文には単節縄文が施される。3 は体部下半から底部欠損で、口縁部文様帯は刻目文･原体圧痕に加飾された隆線により体部と区画される。体部には結束を持つ縦位の単節縄文が施される。4 は口唇部下にボタン状貼付文に加飾された隆線と 2 条 1 組の原体圧痕文が施され、波頂部からはＹ字状の隆線が垂下する。体部には単節縄文が横位に施される。5 は口縁部文様帯に原体圧痕が平行する隆線による区画文が展開し、波頂部下には波状文が垂下する蕨手状文が施される。地文には単節縄文が横位に施される。6・7 は 2 個 1 対で 4 単位の波状口縁を呈する深鉢である。6 は口縁部文様帯に隆線による蕨手状･菱形状の区画文が展開し、文様区画内には原体圧痕による多条の平行線文･弧状文が施される。体部には結束を持つ単節縄文が横位に施される。7 は原体圧痕が並行する複合口縁を呈し、波頂部からはＹ字状の隆線が垂下する。口縁部文様帯は体部と段で区画され、地文には単節縄文が横位に施される。8 は屈曲する頸部からＹ字状に垂下する隆線に沿って原体圧痕による連弧文が施される深鉢体部片である。地文には羽状縄文が縦位に施される。9 ～ 11 は口縁部に小突起を持つ深鉢である。9 の小突起はボタン状貼付文に加飾され、口縁部文様帯は原体圧痕が並行する隆線により体部と区画される。地文には単節縄文が巡る。10 はボタン状貼付文に加飾された小突起から隆線が垂下し、口唇部下には 2 条の原体圧痕が施される。地文には単節縄文が縦位に施され、底部に木葉痕が認められる。11 は二山突起を持つ口唇部下に多条の原体圧痕文が巡り、体部には口縁部文様帯から垂下する逆Ｔ字状の原体圧痕文が施される。地文には単節縄文が横位に施される。12 ～ 18 は口唇部が平坦に調整される深鉢で、口縁部文様帯には原体圧痕を主体とする文様が展開する。12 は口唇部より垂下する波状文と原体圧痕が並行する隆線による区画が展開し、地文には結束を持つ単節縄文が縦位に施される。13 は逆Ｙ字状の懸垂文と隆線による区画文内に連弧文が施され、体部には単節縄文が斜位に施文される。14 は体部下半から底部欠損で、貼付文に加飾される矢羽状の原体圧痕文が横位に展開する。15 ～ 17 は口唇部下に 2 条の原体圧痕文が巡り、地文には単節縄文が横位に施される。18 はキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯には原体圧痕による 2 条の平行線文・楕円状文・弧状文が横位に展開する。19・20 は舟形状を呈した土器である。19 は小波状口縁を呈し、体部は無文となる。20 は 2 個 1 対で 2 単位の大波状口縁を呈し、口縁部にかけて大きく開く大形の器形のものである。波頂部下には隆線によるＶ字状文が垂下する。口唇部下には原体圧痕による 2 条の平行線文が巡り、地文には単節縄文が横位に施される。21 ～ 25 は浅鉢である。21 は口縁部下に狭い無文帯が設けられ､刻目文を施す隆線により体部と区画される。地文には横位の単節縄文が施される。22 は口唇部下に原体圧痕が並行する隆線が巡り、小渦巻文・連弧文が垂下する。地文には結束を持つ縦位の単節縄文が施される。23 は口唇部下に 2 条の原体圧痕が巡り、地文には横位の単節縄文が施される。24・25 は無文の浅鉢である。26 ～ 28 は体部に地文のみが施される深鉢である。26 は口縁部下に 4 つの小突起を持ち､地文には単節縄文が縦位に施される。27 は屈曲する頸部に段を持ち下半と区画され、地文には横位の無節縄文が施される。28 は

体部上半欠損で、地文には縦位の単節縄文が施される。29･30･32はミニチュア土器である。29は口縁部欠損で、地文に縦位の複節縄文が施される。30は器面全体に矢羽状の沈線文が不規則に施される。32は指頭押圧による整形痕が残る鉢状を呈したミニチュア土器である。31は内部にアスファルト状のものが付着する小形深鉢底部で、底部には貫通孔が認められる。

33～38は石鏃で、33～37は基部に抉りのある石鏃、38は有茎の石鏃である。33・34は一次剥離面を残すが、一様に両面に入念な押圧剥離が施される。39は石錐で、機能部には入念な調整剥離が施される。40～45は石匙で、40･45は横刃、41～44は縦刃を呈する。41は黒曜石製で、40～45のつまみ部は入念な押圧剥離により作り出され、40・42～45の両面端部には刃部調整剥離が施される。46は背面端部に刃部調整剥離が施される掻器である。47・48は楕円形、49は刃部の両端が突出する三角形状を呈する石箆で、両面全周縁から剥離整形が施される。50は頁岩製の石核である。51～53は敲打磨石で、52・53は一辺に磨面を持ち、51・52の縁辺には敲打痕と敲打による剥離痕が見られる。54は靴形状を呈する砂岩製の石製品である。扁平な砂岩を素材としたもので、基部には貫通孔が穿たれる。

このほか図示していないが、耳栓や複数の土製円盤、石棒などが出土している。

ＲＡ２８２炉跡（第16図）

時　　期　不明　**位　　置**　Ｊ10－Ｊ９区　**平 面 形**　不明　**規　　模**　不明

重複遺構　ＲＡ283　**掘 込 面**　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦

石 囲 炉　残存する石組部は長方形を呈する　**埋　　土**　Ａ層は炉埋土である

出土遺物（第116図9）　9は床面から出土した礫皮面を残す珪岩製の石核で、縁部には擦痕が認められる。このほか図示していないが、複合口縁や刻目文、短沈線などが施される深鉢土器片が出土している。

ＲＡ２８３竪穴住居跡（第39図）

時　　期　中期前葉　**位　　置**　Ｊ10－Ｋ９区　**平 面 形**　不明

規　　模　長軸4.83ｍ以上・短軸3.97ｍ以上　**重複遺構**　ＲＡ252・282・285

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**ピ ッ ト**　Ｐ１～８が検出されている

石 囲 炉　中央部付近に構築され、残存する石組部は楕円形を呈する

埋　　土　Ａ～Ｃ層に大別され、Ａ層は炉埋土、Ｂ・Ｃ層はピット埋土である。

出土遺物　図示していないが、半截竹管文が施される深鉢口縁部片や頁岩の剥片が出土している。

ＲＡ２８５竪穴住居跡（第39図）

時　　期　中期前葉　**位　　置**　Ｊ10－Ｋ10区　**平 面 形**　不整方形？

規　　模　長軸2.97ｍ以上・短軸1.46ｍ、深さ0.21ｍ　**重複遺構**　ＲＡ282・283

掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明

ピ ッ ト　なし　**埋　　土**　Ａ層は竪穴埋土である

出土遺物（第116図10）　10は背面両側縁に刃部調整剥離が施される削器である。このほか図示して

いないが、原体圧痕が施される深鉢口縁部片などが出土している。

ＲＡ２８６竪穴住居跡（第 39 図）

時　　期　中期前葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｋ 25 区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸 3.32 m以上・短軸 1.02 m以上、深さ 0.09 m
重複遺構　ＲＡ 253・258 Ⅰ～Ⅲ期・258 Ⅴ期・259・262
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明
ピ ッ ト　Ｐ１～ 21 が検出されている
埋　　土　Ａ・Ｂ層に大別され、Ａ層はさらに３層に細別される。
出土遺物　図示していないが、原体圧痕が施される深鉢口縁部片や礫石器などが出土している。

ＲＡ２８７竪穴住居跡（第 40 図）

時　　期　中期中葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｏ 21 区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸・短軸不明、深さ 0.34 m　**重複遺構**　ＲＡ 224・290・ＲＤ 517
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　なし
ピ ッ ト　なし　**埋　　土**　Ａ層は竪穴埋土である
出土遺物　図示していないが、沈線による区画文が施される深鉢片と頁岩の剥片が出土している。

ＲＡ２８８竪穴住居跡（第 33 図）

時　　期　不明　**位　　置**　Ｊ９－Ｊ 24 区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸・短軸不明、深さ 0.09 m
重複遺構　ＲＡ 244・251・253・259・261・273
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明　**ピ ッ ト**　なし
埋　　土　Ａ・Ｂ層に大別され、ともに竪穴埋土である。　**出土遺物**　なし

ＲＡ２８９竪穴住居跡（第 40 図）

時　　期　中期後葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｎ 23 区　**平 面 形**　不整円形？
規　　模　長軸 2.81 m・短軸 2.87 m以上、深さ 0.27 m
重複遺構　ＲＡ 258 Ⅲ期・265・290・ＲＥ 260・291
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦
石 囲 炉　中央部付近より北東寄りに構築され、残存する石組部は楕円形を呈する
ピ ッ ト　Ｐ１～ 18 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｆ層に大別され、Ａ・Ｂ層は竪穴埋土、Ｃ～Ｆ層はピット埋土である。
出土遺物（第 116 図 11・12）　11 は口縁部にかけて直線的に外傾する深鉢口縁部片で、口唇部は平坦に調整される。口唇部の無文帯下には単節縄文が縦位に施される。12 は沈線による逆Ｕ字状または楕円状の文様が施される深鉢体部片である。地文には複節縄文が施されるが、文様区画外の地文は磨り消される。このほか図示していないが、渦巻文・短沈線が施される深鉢土器片や敲石などが出土している。

ＲＡ２９０竪穴住居跡（第 40 図）

時　　期　中期後葉　**位　　置**　Ｊ９－Ｎ 22 区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸・短軸不明、深さ 0.35 m　**重複遺構**　ＲＡ 224・287・289
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明
ピ ッ ト　Ｐ 19 ～ 25 が検出されている
埋　　土　Ａ～Ｅ層に大別され、Ａ層は竪穴埋土、Ｂ～Ｅ層はピット埋土である。
出土遺物（第 116 図 13 ～ 15）　13 ～ 15 は沈線による逆Ｕ字状または楕円状の文様が施される深鉢体部片で、文様区画外の地文は磨り消される。このほか図示していないが、同一母岩の頁岩の剥片が多量に出土している。

ＲＥ２９１竪穴住居跡（第 40 図）

時　　期　不明　**位　　置**　Ｊ９－Ｏ 24 区　**平 面 形**　円形？
規　　模　長軸 1.89 m・短軸 1.17 m以上、深さ 0.13 m　**重複遺構**　ＲＡ 289
掘 込 面　削平　**床面の状態**　凹凸が激しい　**ピ ッ ト**　Ｐ 26 ～ 28 が検出されている
埋　　土　Ａ・Ｂ層に大別され、Ａ層は竪穴埋土、Ｂ層はピット埋土である。
出土遺物　図示していないが、沈線による連弧文が施される深鉢片と頁岩の剥片が出土している。

ＲＡ２９２竪穴住居跡（第 41 図）

時　　期　不明　**位　　置**　Ｊ９－Ｈ 21 区　**平 面 形**　不明
規　　模　長軸 3.82 m・短軸 0.72 m以上、深さ 0.08 m　**重複遺構**　なし
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**炉**　不明
ピ ッ ト　Ｐ１・２が検出されている
埋　　土　Ａ層はピット埋土である　**出土遺物**　なし

ＲＥ２９３竪穴住居跡（第 42 図）

時　　期　中期前葉　**位　　置**　Ｋ９－Ｐ５区　**平 面 形**　不整円形？
規　　模　長軸 2.14 m以上・短軸 0.88 m以上、深さ 0.08 m　**重複遺構**　ＲＤ 377・379
掘 込 面　削平　**床面の状態**　ほぼ平坦　**ピ ッ ト**　なし
埋　　土　Ａ層は竪穴埋土である
出土遺物（第 116 図 16）　16 は口唇部が平坦に調整され、口縁部にかけて内湾する浅鉢の口縁部片である。口唇部下には狭い無文帯が設けられ、交互刺突を施す隆線により体部と区画される。地文には縦位の単節縄文が施される。このほか図示していないが、頁岩の剥片などが出土している。

（2） 縄文時代の土坑（第 42 ～ 50 図）

縄文時代の土坑は調査区全域で検出されているが、その多くは第 36 次調査区北東部、第 33･34 次調査区において集中的に検出される。土坑は形状から大きく 3 形状（円形･楕円形･溝状）に分類される。本報告書では概要を記し、規模等については第 1 ～ 3 表にまとめた。

円形土坑　平面形が円形を呈する土坑は遺跡全域より検出されているが、特に第 36 次調査区北東部に集中する。

検出された円形土坑は、断面形状がフラスコ形を呈するもの（ＲＤ 377・379・390・399・403・415・417・423・426・427・429・433・434・453・461・473・498・515・517・520・521・535・539・542・544・546）と、壁が外傾するもの（ＲＤ 378・381 ～ 389・392・394・395・400 ～ 402・410 ～ 413・419・421・425・436・446・448 ～ 450・455・456・464 ～ 466・470・472・473・475・476・478 ～ 483・486 ～ 490・492・494・495・505・509・510・512・513・516・518・527・529・547・549）に分けられる。

楕円形土坑　平面形が楕円形を呈する土坑は、第 33・34 次調査区より数多く検出された（ＲＤ 391・393・396 ～ 398・405・407 ～ 409・414・420・422・428・431・432・437 ～ 443・445・447・451・452・454・457 ～ 460・462・463・467・469・471・474・477・484・485・491・493・496・497・499・501 ～ 504・506 ～ 508・511・519・522 ～ 526・528・531 ～ 533・536 ～ 538・540・541・543・548）。

楕円形土坑からはヒスイ垂飾品（ＲＤ 451 土坑・第 128 図 8）が出土するなど、土坑墓である可能性がある。楕円形土坑が集中して発見された第 34 次発掘調査区では、ヒスイ・蛇紋岩製の玉類が出土しており（第 150 図 109･110）、特別な区域であることが考えられよう。このことから、第 33・34 次調査区を含めた周辺地区は縄文中期の墓域である可能性が考えられる。その地域は段丘北東端にあたり、墓域の外側には扇状に竪穴住居域が展開していることが確認されつつある。

出土遺物（第 126 図 1 ～ 14）　1 は体部上半に沈線によるアルファベット状の区画文が横位に展開する深鉢口縁部片で、区画文内には単節縄文が充填施文される。2 は両面端部に調整剥離が施される削器である。3 ～ 5 は口唇部が平坦に調整され、口縁部文様帯が刻目文を施す隆線により体部と区画される深鉢である。3 は体部下半から底部欠損の深鉢で、口縁部の区画内には斜位の短沈線が充填施文される。体部の地文には結束を持つ単節縄文が縦位に施される。4 は体部下半から底部欠損の頸部に屈曲を持つ深鉢で、口縁部下には多条の平行沈線が施される。体部の地文には結束を持つ羽状縄文が縦位に施される。6 は無文のミニチュア土器である。7 は削器または両面加工石器で、両面に入念な調整剥離が施される。8・9 は石錐で、8 は背面機能部に調整剥離が施される。9 は礫皮面を残す石錐で、腹面端部には調整剥離が施される。10 は平行沈線による波状文と渦巻文が連結して施される深鉢口縁部片である。11 は砂岩製の棒状石製品で、端部に 3 つの孔が穿たれる。12 は地文に縦位の単節縄文が施される深鉢底部である。13 は一次剥離面を残す掻器で、両面端部には調整剥離が施される。14 は断面形状が三角形を呈する棒状の石錐で、機能部には入念な調整剥離が施される。

（第 127 図 1 ～ 7） 1･3･4 は弁状突起を持つ土器片で、3 は浅鉢、4 はキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には原体圧痕が平行する隆線による山形状・弧状の区画文が展開すし、4 の文様区画内には原体圧痕による渦巻文・連弧文が連結して施される。2 は縦位の単節縄文が施される深鉢体部である。5・6 は同一個体のキャリパー形深鉢片で、口唇部は平坦に調整される。口縁部文様帯には原体圧痕が平行する隆線による渦巻文･連弧文が連結して展開する。7 は扁平な円礫に抉りを入れた石錘である。

（第 128 図 1 ～ 13） 1 は複合口縁を呈する深鉢口縁部片で、口唇部の小突起からは渦巻文と隆線が連結して垂下する。口縁部文様帯は体部と段で区画され、地文には単節縄文が縦位・横位に施される。2 は削器または両面加工石器で、両面に調整剥離が施される。3 は下端に抉りを持つ両面加工石器である。4 ～ 6 は深鉢の土器片を剥離加工した土製円盤である。7 は打製石斧で、剥離整形後に敲打による整形を施すものである。8 は鰹節形のヒスイ製大珠である。片面には 2 方向からの擦切痕がみられることから、素材からの切り離しが擦切技法によるものであることがわかる。9 は石核様石器で、腹面には擦痕が認められる。10 は敲石で、粗い剥離により半円状に整形される。11 は側面に貫通孔を持つ土偶胴部で、体形に沿って円形刺突列が施される。12 は口縁部にかけて窄まる一輪挿し状の小形土器体部片で、内外面に朱痕が認められる。体部上半には沈線による区画文が横位に展開し、地文には単節縄文が施される。13 は刃部欠損の斧状土製品で、基部に孔を持つ。地文には縦位の単節縄文が施される。

（第 129 図 1 ～ 13） 1 は板状土偶脚部で、両面に沈線による平行沈線・渦巻文・円形刺突列が施される。2 は有茎、10･12 は基部に抉りのある石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。3・11 は楕円状を呈する石箆で、両面周縁より剥離整形が施される。4 は削器で、両面に調整剥離が施される。5 は内外面に漆膜が認められる小形深鉢体部片である。体部上半には隆沈線による区画文が展開し、区画内には単節縄文が充填施文される。6 は衝撃剥離が認められる磨製石斧である。7 は軟質のシルト岩製の石冠である。断面は三角形状を呈し、側面に擦痕状の陰刻と敲打痕が認められる。8 は背面全周縁に刃部調整剥離が施される掻器である。9 は粒状の貼付文に加飾された複合口縁を呈する深鉢で、口唇部は平坦に調整される。地文には単節縄文が体部上半のみに施される。13 は体部下半から底部欠損の深鉢で、口唇部は平坦に調整された複合口縁を呈し頸部に屈曲を持つ。口縁部文様帯は刻目文を施す隆線により体部と区画され、区画内には斜位の原体圧痕が充填施文される。地文には結束を持つ単節縄文が縦位に施される。このほか図示していないが、両端を欠く石棒（ＲＤ 520 土坑）や土玉（ＲＤ 535 土坑）などが出土している。

遺構番号	平　面　形	規　模		深さ（m）	時　期	備　考
		上端（m）	下端（m）			
RD377	不明（フラスコ）	1.90	1.80	0.40	後期初頭	第37・121図
RD378	円形	0.72	0.61	0.31	中期初頭	第37図
RD379	円形（フラスコ）	1.99	1.87	0.49	中期初頭	第37・121図
RD380	方形？	―	1.49	0.14	中期初頭	第37図
RD381	円形	0.71	0.63	0.62	中期初頭	第37・121図
RD382	円形	0.81	0.76	0.11	中期初頭	第37図
RD383	円形	2.09	1.97	0.19	中期初頭	第37・121図
RD384	円形	0.56	0.44	0.27	中期初頭	第37・121図
RD385	円形	0.95	0.84	0.23	中期初頭	第37図
RD386	円形	0.64	0.47	0.17	中期初頭	第37図
RD387	不整円形	0.64	0.51	0.22	中期初頭	第37図
RD388	円形	0.64	0.54	0.20	中期初頭	第37図
RD389	円形	0.98	0.84	0.45	中期初頭	第37図
RD390	楕円形（フラスコ）	1.82×1.73	2.01×1.80	0.30	中期初頭	第37・123図
RD391	楕円形	1.95×1.89	1.77×1.30	0.35	中期初頭	第37図
RD392	不整円形	0.97	0.71	0.40	中期初頭	第37図
RD393	楕円形	0.76×0.61	0.69×0.48	0.47	中期初頭	第37・121図
RD394	円形？	0.46	0.40	0.09		第37図
RD395	円形	0.80	0.69	0.11	中期初頭	第37図
RD396	楕円形	0.89×0.82	0.71×0.62	0.37	中期初頭	第37図
RD397	不整楕円形	0.69×0.43	0.59×0.35	0.11	中期初頭	第37図
RD398	楕円形	0.79×0.48	0.64×0.35	0.17	中期初頭	第37・121図
RD399	不整円形（フラスコ）	1.29	1.65	0.60	中期初頭	第37・121図
RD400	円形	1.05	0.97	0.59	中期初頭	第37図
RD401	不整円形	0.87	0.62	0.40	中期初頭	第37図
RD402	不整円形	1.03	0.89	0.63	中期初頭	第37図
RD403	楕円形（フラスコ）	0.61×0.33	0.53×0.35	0.31	中期初頭	第37図
RD404	不明	0.68	0.64	0.21		第38図
RD405	不整楕円形	1.50×0.97	1.20×0.71	0.41	中期初頭	第38図
RD406	不明	0.71	0.61	0.17	中期初頭	第38図
RD407	楕円形？	1.14	0.91	0.06	中期初頭	第38図
RD408	楕円形	1.94×1.19	1.97×1.07	0.50	中期初頭	第38・123図
RD409	楕円形？	0.74	―	0.23	中期初頭	第38図
RD410	不整円形	1.15	0.98	0.39	中期初頭	第38図
RD411	円形？	0.74	0.68	0.08	中期初頭	第38図
RD412	円形	0.68	0.58	0.16	中期初頭	第38図
RD413	円形	0.85	0.68	0.38	中期初頭	第38・121図
RD414	楕円形	0.89×0.50	0.85×0.46	0.62	中期初頭	第38・123図
RD415	円形？（フラスコ）	0.36	0.25	0.62		第38図
RD416	不明	0.81	0.68	0.36	中期初頭	第38図
RD417	不整円形（フラスコ）	1.27	1.23	0.46	後期初頭	第38図
RD418	円形（フラスコ）	0.88	0.82	0.47	中期初頭	第38図
RD419	円形	0.76	0.54	0.29	中期初頭	第38図
RD420	楕円形	0.80×0.77	0.71×0.62	0.24	中期初頭	第38図
RD421	円形	0.53	0.46	0.17		第38図
RD422	楕円形	0.88×0.34	0.72×0.24	0.22		第38図
RD423	楕円形（フラスコ）	1.54×1.01	2.41×2.10	1.21	中期中葉	第38・122図
RD424	不明	1.42	―	0.42	中期初頭	第38図
RD425	円形？	0.56	0.37	0.56	中期初頭	第38図
RD426	円形（フラスコ）	0.85	1.57	0.79	中期後葉	第38図
RD427	不整円形（フラスコ）	0.82	1.22	1.09	中期初頭	第38図
RD428	楕円形？	0.93～×0.42～	0.88～×0.38～	0.29	中期初頭	第38図
RD429	不明（フラスコ）	1.74	1.50	0.73	中期初頭	第38図
RD430	不明	1.30	1.00	0.34		第38図
RD431	楕円形？	0.97	0.93	0.26	中期初頭	第38図
RD432	楕円形	0.77×0.60	0.61×0.47	0.15		第38図
RD433	不明（フラスコ）	1.32	1.10	0.30	中期中葉	第38図
RD434	円形？（フラスコ）	0.95	0.80	0.68	中期初頭	第38図

第１表　縄文時代土坑計測表

遺構番号	平　面　形	規　模		深さ（m）	時　期	備　考
		上端（m）	下端（m）			
RD435	不明	0.60	0.46	0.14	中期初頭	第38図
RD436	円形？	0.52	0.38	0.16	中期初頭	第38図
RD437	楕円形？	0.88×0.61	0.80×0.58	0.21	中期初頭	第38・123図
RD438	楕円形	1.52×0.98	1.34×0.85	0.34	中期初頭	第38図
RD439	楕円形	0.66×0.52	0.52×0.35	0.11	中期初頭	第38図
RD440	不整楕円形	1.06×0.77	0.84×0.54	0.15	中期初頭	第38図
RD441	楕円形？	0.74×0.51	0.64×0.50	0.07	中期初頭	第38図
RD442	楕円形	1.05×0.61	0.91×0.49	0.29	中期初頭	第38図
RD443	楕円形	0.81×0.50	0.76×0.39	0.09		第38図
RD444	不明	0.49	0.37	0.24		第38図
RD445	楕円形	1.23×0.88	0.92×0.57	0.33	中期初頭	第38図
RD446	円形	1.28	0.99	0.32	中期初頭	第38図
RD447	楕円形	1.02×0.64	0.88×0.55	0.15	中期初頭	第38図
RD448	円形	1.26	1.18	0.21		第38図
RD449	円形	0.91	0.82	0.48	中期初頭	第38図
RD450	不整円形？	0.90	0.84	0.23	中期初頭	第38図
RD451	楕円形	1.22×0.94	1.07×0.67	0.19	中期初頭	第38・123図
RD452	不整楕円形	0.71×0.58	0.68×0.52	0.21	中期初頭	第38図
RD453	楕円形（フラスコ）	0.70×0.50	0.68×0.56	0.65	中期初頭	第38図
RD454	楕円形	0.92×0.63	0.80×0.56	0.08	中期初頭	第38図
RD455	不整円形？	1.29	1.09	0.21	中期初頭	第38図
RD456	不整円形	1.06	0.92	0.24	中期初頭	第38図
RD457	楕円形	0.91×0.64	0.81×0.52	0.17	中期初頭	第38図
RD458	楕円形	1.26～×0.83	1.09～×0.67	0.33	中期初頭	第38図
RD459	楕円形	0.92～×0.91	0.82～×0.83	0.20	中期初頭	第38図
RD460	楕円形	0.99×0.54～	0.80×0.53～	0.13	中期初頭	第38図
RD461	楕円形（フラスコ）	0.50×0.47	0.69×0.66	0.50	中期初頭	第38図
RD462	楕円形	0.78×0.66	0.73×0.48	0.58		第38図
RD463	楕円形	1.05×0.78	0.96×0.67	0.14		第38図
RD464	不整円形	0.92	0.78	0.15	中期初頭	第38図
RD465	円形	1.26	1.09	0.25	中期後葉	第1図
RD466	円形？	1.06	0.92	0.17		第1図
RD467	楕円形？	1.42×0.56～	1.23×0.48～	0.44		第1図
RD468	不明	0.74	0.65	0.20	中期中葉	第1図
RD469	楕円形	1.04～×0.75	0.96～×0.44	0.31		第1図
RD470	不整円形	0.97	0.69	0.30		第39図
RD471	楕円形	0.75×0.62	0.62×0.47	0.23	中期末葉	第39図
RD472	円形	0.65	0.39	0.42	中期末葉	第39図
RD473	円形（フラスコ）	0.60	0.48	0.83	中期末葉	第39・123図
RD474	楕円形	0.84×0.58	0.34×0.27	0.57		第39図
RD475	円形	0.92	0.80	0.40		第39図
RD476	円形	0.84	0.58	0.57	中期後葉	第39図
RD477	楕円形	1.02×0.71	0.78×0.36	0.50	中期末葉	第39図
RD478	円形	1.61	1.32	0.31	中期後葉	第39・123図
RD479	円形	0.72	0.53	0.47		第39図
RD480	円形	0.85	0.55	0.46	中期後葉	第39・123図
RD481	円形	0.71	0.48	0.36	中期末葉	第39図
RD482	円形	0.94	0.46	0.94	中期末葉？	第39図
RD483	不整円形	0.95	0.59	0.33	中期初頭	第39図
RD484	楕円形	1.14×0.85	0.75×0.68	0.44		第39図
RD485	不整楕円形	0.81×0.64	0.71×0.53	0.54		第39図
RD486	円形	0.82	0.49	0.50	中期後葉	第39図
RD487	円形	1.62	1.56	0.45	中期末葉	第39・124図
RD488	円形	0.84	0.62	0.53	中期末葉	第39図
RD489	円形？	0.66	0.42	0.44	中期後葉	第39・123図
RD490	円形	0.80	0.48	0.48	中期後葉	第39図
RD491	楕円形	0.78×0.66	0.40×0.40	0.55	中期後葉	第39・123図
RD492	円形	0.71	0.51	0.63	中期後葉	第39図

第 2 表　縄文時代土坑計測表

遺構番号	平　面　形	規　模		深さ（m）	時　期	備　考
		上端（m）	下端（m）			
RD493	不整楕円形	0.81×0.66	0.67×0.46	0.41	中期末葉	第39図
RD494	円形	1.23	0.95	0.41	中期初頭	第40図
RD495	不整円形	0.95	0.62	0.18	中期末葉	第40図
RD496	楕円形	0.81×0.60	0.32×0.28	0.55		第40図
RD497	不整楕円形	0.85×0.62	0.65×0.48	0.35		第40図
RD498	楕円形（フラスコ）	1.55×1.20	1.52×1.26	0.92	中期末葉	第40図
RD499	楕円形	0.81×0.64	0.44×0.31	0.64		第40図
RD500	不明	1.15	0.34	0.37	中期末葉	第40図
RD501	不整楕円形	1.05×0.93	0.73×0.70	0.27	中期末葉	第40図
RD502	楕円形	0.94×0.75	0.56×0.54	0.58		第40図
RD503	楕円形	0.91～×0.69	0.47～×0.45	0.64		第40図
RD504	楕円形	0.60×0.30～	0.31×0.26～	0.84		第3図
RD505	円形	0.77	0.48	0.75	中期後葉	第3図
RD506	楕円形	0.66×0.33～	0.26×0.25～	0.38		第40図
RD507	楕円形	0.82～×0.75	0.76～×0.50	0.29		第3図
RD508	楕円形	1.16×0.92	0.84×0.54	0.42	中期中葉	第40図
RD509	円形	0.91	0.80	0.25	中期中葉	第5図
RD510	円形	0.92	0.56	0.39	後期初頭	第5図
RD511	楕円形	0.93×0.72	0.78×0.51	0.16		第5図
RD512	不整円形	0.86	0.52	0.33		第2図
RD513	円形	0.74	0.62	0.10		第4図
RD514	不明	0.88	0.63	0.27	中期後葉	第6・124図
RD515	円形（フラスコ）	1.12	1.22	0.34	中期後葉	第41図
RD516	円形	1.11	0.84	0.11		第41図
RD517	円形（フラスコ）	1.08	1.40	1.19	中期後葉	第35・124図
RD518	不整円形	1.02	0.72	0.24	中期後葉	第4図
RD519	楕円形	1.29×0.82	0.90×0.35	0.74	中期初頭	第22・23図
RD520	円形（フラスコ）	1.16	1.12	0.59	中期後葉	第32・33図
RD521	円形（フラスコ）	1.30	1.22	0.68	中期初頭	第14・15図
RD522	楕円形	0.56～×0.51	0.41～×0.32	0.22		第7図
RD523	不整楕円形	1.86×1.47	1.39×1.17	0.26	中期初頭	第31・124図
RD524	楕円形	1.17×0.84	0.80×0.37	0.65	中期後葉	第44図
RD525	楕円形	1.78×0.98	1.40×0.39	0.43	中期中葉	第15図
RD526	楕円形	2.02×1.62	1.79×1.45	0.18	中期初頭	第44図
RD527	円形	0.92	0.72	0.64		第29図
RD528	楕円形	2.10×1.56	1.90×1.33	0.20	中期初頭	第44・124図
RD529	円形	0.62	0.52	0.14		第35図
RD530	不明	0.56	0.36	0.12		第35図
RD531	楕円形？	1.73×0.28～	1.55×0.24～	0.38	中期中葉	第44図
RD532	楕円形	1.20～×0.79～	1.07～×0.69～	0.30	中期中葉	第44図
RD533	楕円形	1.43×0.66	1.11×0.52	0.21	中期中葉	第44図
RD534	不明	0.58	0.43	0.25		第44図
RD535	円形（フラスコ）	1.16	1.56	1.27	中期中葉	第44図
RD536	不整楕円形	0.92～×0.59	0.72～×0.59	0.16	中期中葉	第44図
RD537	不整楕円形	1.50×1.20	1.29×1.11	0.23	中期中葉	第44図
RD538	楕円形	0.84～×0.65～	0.76～×0.57～	0.17	中期中葉	第44図
RD539	円形？（フラスコ）	0.65	0.60	0.29	中期中葉	第44図
RD540	楕円形？	1.34～×0.94～	1.31～×0.86～	0.28		第45図
RD541	楕円形？	1.28～×0.72～	1.14～×0.70～	0.34	中期中葉	第45・124図
RD542	不明（フラスコ）	1.73	1.72	0.49	中期初頭	第45図
RD543	楕円形	1.11～×0.92	0.97～×0.71	0.44	中期中葉	第45・124図
RD544	円形？（フラスコ）	1.70	1.74	0.83	中期中葉	第45図
RD545	不明	0.85	0.78	0.27		第45図
RD546	不整円形（フラスコ）	1.62	1.92	0.85	中期初頭	第45・124図
RD547	円形	0.84	0.73	0.08		第45図
RD548	不整楕円形	－×0.83	1.41～×0.72	0.10	中期中葉	第45図
RD549	円形？	2.06	1.51	0.29	中期初頭	第45・124図

第 3 表　縄文時代土坑計測表

（３） 縄文時代の埋設土器（第 50 図）

ＲＰ００１埋設土器（第 50 図）

時　　期　中期中葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｖ14 区

規　　模　掘方は円形を呈し、掘方上端直径 0.21 ｍ・下端 0.18 ｍ、深さ 0.10 ｍをはかる。

埋　　土　内部には暗褐色土が堆積する。

出土状況　深鉢は正立の状態で埋設され、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。

土　　器（第 130 図 1）　１は地文に単節縄文が縦位に施される深鉢で、体部上半および底部は人為的に大きく壊される。

ＲＰ００２埋設土器（第 50 図）

時　　期　中期中葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｈ１区

規　　模　掘方は円形を呈し、掘方上端直径 0.26 ｍ・下端 0.22 ｍ、深さ 0.25 ｍをはかる。

埋　　土　内部には暗褐色土が堆積しており、堆積土中には多量の炭化物・骨片が含まれる。

出土状況　深鉢は正立の状態で埋設され、本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。

土　　器（第 130 図 2）　２は地文に単節縄文が縦位に施される深鉢で、体部上半および底部は人為的に壊される。

ＲＰ００３埋設土器（第 50 図）

時　　期　中期前葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｇ５区

規　　模　掘方は円形を呈し、掘方上端直径 0.32 ｍ・下端 0.10 ｍ、深さ 0.32 ｍをはかる。

埋　　土　内部には暗褐色土が堆積する。

出土状況　深鉢は正立の状態で埋設され、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。

土　　器（第 130 図 3）　３は頸部に段が施され、緩やかに屈曲する深鉢である。口縁部は複合口縁を呈し、地文には単節縄文が横位に施文される。

ＲＰ００４埋設土器（第 50 図）

時　　期　中期前葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｅ７区

規　　模　掘方は円形を呈し、掘方上端直径 0.24 ｍ・下端 0.17 ｍ、深さ 0.20 ｍをはかる。

埋　　土　内部には黒褐色土が堆積する。

出土状況　深鉢は正立の状態で埋設され、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。

土　　器（第 130 図 4）　４は地文に単節縄文が斜位に施される深鉢で、口縁部から体部上半は人為的に壊される。

ＲＰ００５埋設土器（第 50 図）

時　　期　中期前葉　　**位　　置**　Ｊ 10 －Ｋ９区（ＲＡ 252 内）

規　　模　掘方は円形を呈し、掘方上端直径 0.27 m・下端 0.14 m、深さ 0.28 mをはかる。

埋　　土　内部には暗褐色土が堆積する。

出土状況　深鉢は正立の状態で埋設され、掘方も深鉢の大きさに合わせたものと考えられる。本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。

土　　器（第 131 図 5）　5 は地文に複節縄文が斜位に施される深鉢で、口縁部から体部上半は人為的に壊される。

ＲＰ００６埋設土器（第 50 図）

時　　期　中期中葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｋ 24 区

規　　模　掘方は不正円形を呈し、掘方上端直径 0.41 m・下端 0.26 m、深さ 0.24 mをはかる。

埋　　土　内部には暗褐色土が堆積する。

出土状況　深鉢は正立の状態で埋設され、本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。

土　　器（第 131 図 6）　6 はキャリパー形深鉢で、口縁部および体部下半は人為的に壊される。口唇部は小突起を持ち、口唇部下の区画文内には刺突列が充填施文される。口縁部文様帯には隆沈線による波状文・蕨手状文が連結して横位に展開し、地文には複節縄文が縦位・横位に施される。

ＲＰ００７埋設土器（第 50 図）

時　　期　中期後葉　　**位　　置**　Ｊ９－Ｋ 24 区

規　　模　掘方は不正円形を呈し、掘方上端直径 0.31 m・下端 0.16 m、深さ 0.19 mをはかる。

埋　　土　内部には黒褐色土が堆積する。

出土状況　深鉢は正立の状態で埋設され、本来の埋設面は後世の削平によって破壊される。

土　　器（第 131 図 7）　7 は地文に単節縄文が縦位に施される深鉢で、体部上半および底部は人為的に壊される。

（4） 縄文時代のピット群（第３・４図）

出土遺物（第 132 図１～９） １は口縁部を欠く小形深鉢で、器面には平行沈線文が施される。地文には単節縄文が縦位に施される。２は平基の石鏃で、両面に入念な押圧剥離が施される。３は縦位の櫛目文が施されるミニチュア土器である。４は内面にアスファルトが付着する深鉢体部片である。アスファルトは条痕状に残ることから、パレットとして利用していたことが考えられる。５は体部下半から底部欠損の深鉢で、平坦に調整された口唇部下には無文帯を設ける。地文には体部上半に撚糸文、下半に単節縄文が施される。６は砂岩を利用した脚付石皿の一部である。７は体部上半を欠く深鉢で、羽状縄文が縦位に施される。８は板状の石錐で、機能部欠損後に削器として再利用された可能性がある。９は深鉢の土器片を剥離加工した土製円盤である。このほか図示していないが、両端を欠く石棒（Ｐ 293）や石冠（Ｐ 682）などが出土している。

（5） 縄文時代の遺物包含層（第 133 ～ 150 図）

遺物包含層　繋Ⅴ遺跡第 29・33・34・36・37 次調査では、縄文時代前期から弥生時代、平安時代の遺物が確認された。主体となるのは縄文時代中期の遺物群で、第 36 次調査区南西部では中期初頭から前葉にかけての遺物包含層が確認されている。（第 3 図）。

上位より現代の盛土、色調・混入物の違いによってⅠ～Ⅳ層に大別される。盛土は旧繋小学校建築に伴う盛土で、層厚は一定しないが第36次調査区北東部では約60cmの盛土であった。

Ⅰ層はａ・ｂ層に細分され、Ⅰａ層は黒褐色土を主体に、暗褐色土・褐色土が混入する混合土（旧耕作土？）。Ⅰｂ層は黒褐色土を主体に、スコリア粒を含む暗褐色土が粒～塊状に混入する。層内には図示していないが、弥生時代の土器片、縄文時代前期から晩期の土器・石器が含まれる。

Ⅱ層はａ・ｂ・ｃの 3 層に細分され、Ⅱａ層には粒状の黄褐色土・褐色土と微細な炭化物が含まれ、縄文時代中期後葉（大木 10 式）以前の土器が多量に出土する。Ⅱｂ層は暗褐色土を主体に、塊状の黒褐色土・褐色土・焼土粒・炭化物片を多量に含む混合土で縄文時代中期中葉以前（大木 7a ～ 8a 式）の土器を主体的に含む。Ⅱｃ層はⅡｂ層に比べ黒褐色土が多く含まれ、包含される遺物は縄文時代中期初頭から前葉頃（大木 7a・ｂ式）の遺物が主体的になる。

Ⅲ層は赤褐色・黄褐色のスコリア粒を含む黒褐色土層で、局地的に硬く締まる。層の上部より縄文時代前期初頭から中期初頭にかけての土器が出土する。

Ⅳ層は粘質のシルト質明黄褐色土を主体に安山岩・凝灰岩の小角礫（1mm～ 5cm）を含み、量は少ないが、玉随や水晶も混入する層。

今回報告する調査箇所においては確認されなかったが、遺跡南東部の第 15 次調査区付近では本報告におけるⅣ層上にスコリア粒を多量に含む暗褐色土層が形成されており、縄文時代早期の遺物が含まれることが確認されている。

縄文時代前期（第 133 図 1 ～第 134 図 46）　1 ～ 46 は縄文時代前期初頭の土器片で、胎土には繊維を多量に含む。1 は口唇部下に不整撚糸文が横位に施される。2 は口唇部に刺突列、3 ～ 5 には原体圧痕が施され、1 ～ 5･7 ～ 9 の地文には条と節が整然と表出する所謂「ぴっちり縄文」が施される。6 は口唇部下に狭い無文帯を設け、地文には羽状縄文が縦位に施される。

10 ～ 12 は口唇部に小突起を持ち、波状口縁を呈する。口唇部下には刻目文が施され、11・12・16 ～ 18 の地文には結束を持つ単節縄文、13・19 ～ 20 には羽状縄文が横位に施される。14・15・24 は口唇部下に刻目文が施され、24 ～ 37 の体部には横位のＳ字状連鎖撚糸文が施される。

38 は半截竹管による菱形文内に刺突文が充填施文され、地文には結束を持つ単節縄文が縦位に施される。39 は複合口縁を呈し、器面には半截竹管の押引による長楕円状文が横位に描かれる。

40 は口唇部下に半截竹管による平行線文・鋸歯縄文が横位に施される。41 は口唇部下に

押引文に加飾された隆線が巡る。42 は口唇部に押引文に加飾されたボタン状の小突起を持ち、器面には半截竹管による斜位の平行線文が充填施文された区画文が展開する。43 は口唇部下に刻目文が施される。44 の体部には羽状縄文が横位に施される。45・46 は口唇部下に狭い無文帯を持つ。

縄文時代中期（第 134 図 47 ～第 141 図 78） 47 は体部下半から底部欠損の深鉢で、4 単位の波状口縁を呈する。口縁部文様帯は押引文を施す隆線により区画され、区画文内には半截竹管による多条の平行線文が充填施文される。体部の地文には結束を持つ無節縄文が縦位に施される。48 は口縁部が直線的に外反し、口縁下に膨らみを持たせるキャリパー形深鉢で、体部は直線的に底部に至るものである。複合口縁の波状口縁を呈し、口縁部文様帯には刻目文を施す隆線による山形文・渦巻文が連結して横位に展開する。体部の地文には結束を持つ羽状縄文が縦位に施される。

49 は底部欠損の深鉢で、4 単位の波状口縁を呈する。口縁部文様帯は段で体部と区画され、波頂部から垂下する隆帯と半截竹管文が連結して横位に展開する。体部には半截竹管による懸垂文が巡り、区画内には単節縄文が縦位に充填施文される。50 は複合口縁を呈する口縁下に膨らみを持たせるキャリパー形深鉢で、体部下半から底部を欠くが直線的に底部に至るものと考えられる。口唇部に小突起を持ち、単節縄文のみが横位に施される。51 は体部下半から底部欠損の深鉢で 4 単位の波状口縁を呈する。口縁部文様帯にはボタン状貼付文・原体圧痕・半截竹管による押引文に加飾された隆線による区画が横位に展開する。体部にはボタン状貼付文に加飾されたＹ字状の隆線が上部文様帯より垂下し、地文には結束を持つ羽状縄文が縦位に施される。52 は口唇部に小突起を持ち、口縁が直線的に外反する壺形を呈する深鉢で、屈曲する頸部は段で体部と区画される。小突起下には橋状把手様の貼付文が施され、器面には沈線による曲線的モチーフが描かれる。地文には横位の単節縄文が施される。53 はボタン状貼付文、55 は多条の原体圧痕文に加飾される複合口縁を呈する深鉢で、口唇部下には 4 単位の隆線による矢印状貼付文が施される。53 の地文には体部上半に横位の無節縄文、下半に縦位の櫛目文が施される。54 は体部下半から底部欠損の深鉢で、口縁部文様帯は体部と段で区画される。口縁部および体部文様帯には交互刺突文が施される隆線が垂下し、地文には単節縄文が縦位・横位に施される。56 は口唇部に 4 単位の小突起を持つ深鉢で波状口縁を呈する。複合口縁を呈し、波頂部からは隆線による渦巻文と刻目を施す隆帯が垂下する。地文には単節縄文が施される。57 は 4 単位の波状口縁を呈する小形深鉢で、屈曲する頸部は段で体部と区画される。波頂部からは隆線が垂下し、地文には単節縄文が横位に施される。

58・59 は口唇部に二山突起を持つ小形深鉢である。58 はキャリパー形を呈し、隆線により区画される口縁部文様帯には縦位の原体圧痕が並列して充填施文される。上部文様帯からは隆線が垂下し、地文には単節縄文が縦位に施される。59 は口唇部下に狭い無文帯が設けられ、屈曲部の平行沈線により下位の体部文様帯と区画される。体部には沈線による連弧文・円文・懸垂文が連結して展開し、地文には単節縄文が施される。

60 は緩やかな屈曲部を持つ樽形状を呈する無文の深鉢である。複合口縁を呈し、体部上半には貼付文に加飾された隆沈線が巡り下半と区画される。61 ～ 63・66・67 は弁状突起を

持つ土器で4単位の波状口縁を呈し、61・62の波頂部には刻みが施される。61は体部下半から底部欠損のキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯にはボタン状貼付文・原体圧痕に加飾された隆線による山形状の区画文が展開する。頸部には原体圧痕による連弧文が巡り、体部の地文には結束を持つ単節縄文が施される。62は体部下半から底部欠損の深鉢で、口縁部文様帯は貼付文に加飾された隆沈線により体部と区画される。地文には区画内に横位の羽状縄文が充填施文され、体部には単節縄文が縦位・横位に施される。63は複合口縁を呈する深鉢で、口縁部文様帯には原体圧痕を施す隆線による区画文が横位に展開する。体部の地文には羽状縄文が縦位に施される。64・66は口唇部下に原体圧痕による鋸歯状の区画文が巡る浅鉢である。64の口唇部は平坦に調整され、体部の地文には64が横位、66が縦位の単節縄文が施される。65は渦巻文を施す4単位の把手を持つ浅鉢で、把手下には原体圧痕による蕨手状文が垂下する。口唇部下には原体圧痕が並行する隆線による区画文が横位に展開し、地文には単節縄文が縦位に施される。67は複合口縁を呈する浅鉢で、口縁部文様帯には原体圧痕を施す隆線による弧状の区画文・懸垂文が横位に展開する。区画内には原体圧痕による連弧文が充填施文され、地文には単節縄文が横位に施される。68は複合口縁を呈する無文の浅鉢である。

69・70は口唇部下に隆線による波状文を施す深鉢で、地文には縦位・横位の単節縄文が施される。69は複合口縁を呈し、体部上半には原体圧痕を施す隆線による弧状文・山形文の区画が連結して展開する。70は波頂部に孔が施されるキャリパー形深鉢で底部を欠く。口縁部文様帯には波頂部下に隆線による弧状文が垂下し、原体圧痕による刺突列・連弧文が展開する。71は渦巻文を施す4単位の把手を持つ浅鉢で、把手下には沈線によるクランク状の文様が垂下する。口唇部下には隆線による弧状の区画文が横位に展開し、区画内には原体圧痕が充填施文される。体部の地文には縦位・横位の複節縄文が施される。72は複合口縁を呈する浅鉢で、地文には単節縄文が縦位に施される。73は底部欠損のキャリパー形深鉢である。4単位の波状口縁を呈し、波頂部にはC字状突起が施される。口縁部文様帯には隆線による弧状文と付加する渦巻文が展開し、地文には単節縄文が縦位に施される。74は口縁部が内湾する器形の深鉢で、体部下半から底部を欠く。口唇部は平坦に調整され、口唇部下には刻目文・原体圧痕を施す隆帯が巡る。地文には単節縄文が施される。

75は体部下半から底部欠損のキャリパー形深鉢で、多条の平行線文により各部位が区画される。口唇部は平坦に調整され、口縁部および頸部には波状文が横位に展開し、体部には沈線による渦巻文・懸垂文が連結して描かれる。地文には縦位・横位の単節縄文が施される。76は頸部に無文帯を設けるキャリパー形深鉢である。口唇部は平坦に調整され、口縁部文様帯には隆沈線による有棘渦巻文と懸垂文が連結してに描かれる。体部には横位の平行沈線文から垂下する波状文が巡り、地文には縦位・横位の単節縄文が施される。77・78は口縁部がラッパ状に開く器形の小形深鉢で、口唇部下には無文帯が設けられる。77は2単位の大波状口縁を呈し、体部上半が大きく屈曲する。器面には隆沈線による渦巻文・円文・懸垂文が連結して展開し、地文には複節縄文が斜位に施される。78は体部に隆沈線による有棘渦巻文・懸垂文が連結して描かれ、地文には単節縄文が縦位に施される。

土製品（第141図79～第142図93・第150図113） 79～81はミニチュア土器である。79は鉢形を

呈する無文の土器片で、口唇部下には貫通孔が認められる。80 は底部片で、地文には縦位の無節縄文が施される。81 は無文土器で、内面に付着物が認められる。82 ～ 84 は深鉢の土器片を剥離加工した土製円盤である。85 は椀状を呈する無文の有孔土製品である。86 は石冠状の土製品で、断面形状はアーチ状を呈する。側面には孔が穿たれ、下端に帯状の隆線が巡る。

87 は腕部欠損の土偶上半部である。頭部は楕円形の皿状を呈し、貼付文により眉・胸が表現される。頭部および胸部には 2 対の貫通孔が施され、表裏には半截竹管による曲線的モチーフが左右対称に描かれる。88 は腕部および体部下半欠損の板状土偶である。隆線により眉、貫通孔により目、指頭押圧により口が表現される。表面には多条沈線文が縦位に施され、裏面には鋸歯文が左右対称に描かれる。89 は体部上半欠損の板状土偶である。胴部には臍の貼付痕が認められ、下端には抉りで脚が表現される。表裏には沈線文が体形に沿って左右対称に施される。90 は頭部欠損の板状土偶である。表面には貼付文と貫通孔により胸・臍が表現され、裏面には刻目文が施される隆線が背中心に認められる。91・92 は無文の土偶上半部で、貼付文と貫通孔により胸が表現される。92 は楕円形で皿状の頭部を呈し、両腕部を欠損する。93 は土偶下半部で、側面には 2 対の刺突が認められる。表裏には半截竹管による刺突列が左右対称に描かれる。

113 は内面にアスファルトが付着する深鉢体部片である。アスファルトは条痕状に残ることから、パレットとして土器片を利用していたことが考えられる。

このほか図示していないが、斧状土製品や土製円盤（39 点）、土偶（14 点）などが出土している。

石器（第 143 図 1 ～第 149 図 102） 1 は有柄の石槍で、両面全周縁より入念な押圧剥離が施される。2 ～ 39 は石鏃で、2 ～ 8・10 ～ 32 は有脚、9・35 ～ 38 は有茎、33・34 は平基、39 は木葉形を呈する。5・22 は黒曜石製で、3・36 の基部にはアスファルトが付着する。6・9・11・15・23・31・33・34・38・39 には一次剥離面が残っているが、一様に両面に入念な押圧剥離が施される。

40 ～ 58 は石匙で、40 ～ 48 は縦刃、49 ～ 56 は横刃を呈する。41・44 ～ 46・49 ～ 53・55 はつまみ部および背面機能部、54・56 は両面全周縁に入念な押圧剥離が施され、41・46・50 ～ 53 の腹面端部には刃部調整剥離が施される。40 は背面全周縁および腹面右側縁、42 は両面側縁、43・47 はつまみ部、48 は背面機能部に調整剥離が施される。57・58 は異形石器である。

59 ～ 61 は掻器である。59 は両面全周縁、61 は両面端部に押圧剥離による調整が施される。60 は縁辺に敲打痕と敲打による剥離痕が認められる。

62 ～ 82 は石箆で、62・63・65・68・69・74・78・80・82 は楕円形、64・70・73・76 は刃部幅広形を呈する。62・65・66・69・71 ～ 75・79 ～ 82 は両面全周縁、63・64・67・70・76・77 は背面全周縁および腹面側縁、78 は背面全周縁に剥離整形が施される。

83 ～ 87 は削器である。83 は屈曲をもつ削器で、腹面全周縁に入念な調整剥離が施される。84 は縦長剥片の両側縁に刃部加工が施される。85 は腹面左側縁、86・87 は横長剥片の背面下端に刃部調整剥離が施される。

88 ～ 94 は磨製石斧である。88 は基部欠損で、刃部に擦痕が認められる。89 は両極に敲打痕と衝撃剥離が見られる。92 は擦切磨製石斧である。93 は刃部欠損後、楔として転用したものか。95・96 は打製石斧で、両面端部には整形剥離が施される。97 ～ 101 は敲打磨石である。97・98・101 は一辺に磨面を持ち、97 ～ 101 の縁辺には敲打痕と敲打による剥離痕が認められる。102 は安山岩製の石皿である。

石製品（第 150 図 103 ～ 112） 103 は砂岩製の小形の石皿で、表面縁部には溝状の条痕が認められる。

104・105 は軟質のシルト岩製の石冠で、断面形状は三角形を呈する。104 の側面および底面には滴形の窪みが設けられ、端部に孔が穿れる。105 の側面には擦痕状の陰刻と敲打痕が認められ、底面には細長い台形状を呈する陰刻が施される。106 は蛇紋岩製の垂飾品である。107 は鼻形状を呈する粘板岩製の石製品である。108 は溶岩質安山岩製の環状石製品である。109 は逆三角形を呈する蛇紋岩製垂玉である。110 は基部に孔を持つ三角形を呈するヒスイ製小珠である。111 は渦巻状の線刻が施されるシルト岩製の石製品である。112 は放射状の彩色が施される粘板岩製の環状石製品である。このほか図示していないが、円盤状や斧状を呈する石製品、石棒（4 点）などが出土している。

（6） 平安時代の竪穴住居跡（第 41 図）

ＲＡ０５０１竪穴住居跡（第 41 図）

位　　置　Ｊ９－Ｉ23区　**平 面 形**　西側に張り出し部を持つ方形　**主軸方向**　Ｓ 25° Ｅ

規　　模　南－北上端 2.57 m・下端 2.21 m、東－西上端 2.85 m以上・下端 2.48 m、深さ 0.36 m

重複遺構　ＲＡ 233 Ｉ期・244・253・273・288　**掘 込 面**　削平

検 出 面　Ⅳ層上面　**埋　　土**　Ａ～Ｅ層に大別され、ともに竪穴埋土である。

壁の状態　外傾して立ち上がる　**床面の状態**　ほぼ平坦

カ マ ド　カマドは南東壁中央に位置する。煙道平面形は溝状で、底面は燃焼部や煙出部より一段高い構造になっている。規模は南東壁から煙出し先端までの長さ 0.78 m・幅 0.49 m・深さ 0.50 mをはかる。燃焼部は角礫・円礫などの石材で構築し、褐色シルト・黄褐色粘質土・白色粘土の混合土で石組部を補強する。規模は焚口－煙道基部 0.45 m・基底部幅 0.40 m・高さ 0.26 m（カマド残存部）をはかる。

出土遺物（第 41 図 1）　1はロクロ成形による須恵器坏である。内面には火襷が観察され、底部切り離しは回転糸切無調整である。このほか図示していないが、土師器坏や須恵器長頸瓶の小片、環状石製品などが出土している。

Ⅲ．総 括

1．縄文時代

繋Ⅴ遺跡第29・33・34・36・37次発掘調査の結果、縄文時代中期初頭から末葉にかけての竪穴住居域と土坑域が確認された。検出された遺構数は縄文時代の竪穴住居跡70棟（ＲＡ221～239・241～249・251～253・257～259・261～277・279・281～283・285～290・292、うち炉跡9基)、竪穴跡3棟（ＲＥ260・291・293)、土坑173基（ＲＤ377～549)、埋設土器7基（ＲＰ001～007)、ピット735口である。

竪穴住居跡　竪穴住居は繋Ⅴ遺跡が立地する段丘南西縁に沿うように集中して検出された。中期初頭から前葉にかけては縁辺部の緩い斜面部に、中期中葉以降になると段丘上の平坦部まで住居域が拡大する。特に、傾斜面から平坦部にかかる地形を選択するようで、時期を問わず竪穴住居が構築される。

中期初頭～前葉　竪穴住居のうち8棟（ＲＡ267・274Ⅰ期・Ⅱ期・281・283・285・286・ＲＥ293）は、出土した土器の特徴から中期初頭から前葉（大木7ａ～7ｂ式）にかけて構築された竪穴住居跡と思われる。ＲＡ281竪穴住居跡以外は平面形が長方形を呈し、長方形の石囲炉が伴う。ＲＡ274竪穴住居跡は増改築があったものと思われ（Ⅰ・Ⅱ期)、Ⅰ期は北西―南東方向に長軸を持ち、Ⅱ期では北―南に長軸を変える。しかし、建替であった場合、Ⅰ期の北西端・南東端が窪みとなるため窪みを埋める必要性が考えられるが、調査においては人為的な埋土は確認できなかった。このため、ＲＡ274Ⅱ期竪穴住居跡はＲＡ274Ⅰ期竪穴住居跡の埋没が進行した段階で、新たに構築された時期の近い竪穴住居跡とも考えることができる。また、ＲＡ274Ⅱ期竪穴住居跡北東壁際より石棒を直立させた遺構が検出されている。祭祀的な意味を持つものと思われるが、用途については不明である。

中期中葉　今回の調査で最も多く検出された竪穴住居は、中期中葉（大木8a式）段階の竪穴住居（ＲＡ229～231・233Ⅰ期・233Ⅱ期・237・238・241・245・246・248・251・258Ⅰ～Ⅵ期・259・261・262・264・269Ⅰ期・269Ⅱ期・270～273・275～277・279・287）である。重複により破壊され、全体形が残されているものは少ないが、ＲＡ259竪穴住居跡のように長方形を呈するものが多いと思われる。また、ＲＡ259竪穴住居跡では住居の長軸線、石囲炉の延長上で2基の伏甕が検出された。伏甕に転用された土器はキャリパー形を呈するもので、大木8a式に特徴的な土器である。これまで盛岡市内では、大木8b式から大木9式前葉にかけての伏甕が検出されていたが、大木8a式期の伏甕検出例は少ない。盛岡市内では繋Ⅴ遺跡第15次調査(盛岡市教委1995「繋遺跡 - 平成5･6年度発掘調査概報」)、川目Ｃ遺跡（未報告）より各遺跡1例検出されているに過ぎない。今回の調査では、ＲＡ233Ⅰ期（1基)・258Ⅱ期（2基)・259（2基）竪穴住居跡の3棟より5個体出土するなど、検出例の少ない初期の伏甕埋設を知る上で重要な成果が得られた。

中期後葉　大木8b式期の竪穴住居が8棟（ＲＡ234・239・242～244・252・253・263)、9式期の竪穴住居が9棟（ＲＡ223・224・226・235・236・265・280・290・ＲＥ260）検出された。

平面形は不整楕円形（ＲＡ 223・253)、多角形（ＲＡ 236)、長楕円形（ＲＡ 252）など多様である。大木９式期でも古段階に、燃焼部と前庭部をもつ所謂「複式炉」を持つ住居（ＲＡ 236・253）が構築される。住居内からは渦巻文を特徴とする深鉢が出土するため、大木 8b 式期のものとも思われるが、口唇部の装飾が退化、小渦巻文を起点とした楕円文の発達、大木 8b 式では有棘であった文様が他文様との連結部に変化するなど、文様が変化する過程にある土器と思われる。そして、逆Ｕ字状文のみを描く土器も存在することから大木９式の範疇で考えても良い土器と思われる。このことから繋Ｖ遺跡における複式炉の出現は大木９式期以降と考えたい。

中期末葉～後期初頭　繋Ｖ遺跡において住居が減少する時期である。大木 10 式期の竪穴住居が１棟（ＲＡ 222)、後期初頭の観音堂式併行期の竪穴住居が３棟（ＲＡ 221・225・227）検出された。ＲＡ 225 竪穴住居跡以外は壁等が撹乱によって失われており、炉や部分的な壁の有無により確認されたものである。

土　　坑　縄文時代の土坑は調査区全域より検出されているが、第 36 次調査区北東部、第 33・34 次調査区において集中的に検出されている。特に第 33・34 次調査区には楕円形を呈した土坑が多い。ＲＤ 451 土坑内からはヒスイ製の大珠（第 128 図 8)、土坑域の撹乱層からはヒスイ製小珠・蛇紋岩製垂玉（第 150 図 109・110）など特殊な装飾品が出土している。

出土遺物　繋Ｖ遺跡ではこれまでの調査により縄文時代早期から晩期、弥生時代前期から後期、古墳時代（続縄文)、平安時代の遺物が出土している。今回の調査では縄文時代前期初頭から後期初頭にかけての土器が出土し、特に中期初頭（大木７ａ式）から中期後葉（大木９式）にかけての土器が主体的であった。また、各時期を通して石器の出土量が多いことも特徴的である。これは、繋遺跡群の立地する地域によるもので、遺跡背後の東根山山地からは頁岩・玉髄・凝灰岩・砂岩・水晶等が産出し、眼下の雫石川でも円礫となった頁岩を容易に採集することができる。そのため、石器製作が盛んに行われており、今回の調査では 13,000 点（剥片を含む）を超える石器が出土している。また、付近で採取することができる砂岩等の軟質な石材を加工した石製品も多い。特に目を引くのが断面三角形を呈した所謂「石冠」で、出土総数 22 点（第 53 図 19・第 66 図 27・第 71 図 44・第 78 図 24 ～ 26・第 87 図 42・第 100 図 5・第 102 図 15・第 114 図 38・第 129 図 7・第 150 図 104、実測外 10 点）を数え、未完成品や破損品もあることから集落内で加工していたことが考えられる。

土器について

縄文時代前期　遺構に伴うものはないが、調査区全域より土器破片が出土している（第 133 図１～第 134 図 46)。千鶏Ⅱ式に類似する繊維を多量に含む縄文土器（第 133 図１～ 9)、口縁部に突起を持ち、口唇部に刻目を持つ大木１～２ｂ式併行と思われる土器群（第 133 図 10 ～ 13)、大木 2b 式併行と思われる「Ｓ字状連鎖撚糸文」を特徴とする土器群が出土している（第 133 図 14 ～第 134 図 37)。盛岡市内において大木２ｂ式に類似する土器の出土例は少なく、主な出土遺跡として向館・畑・薬師社脇・西黒石野・繋Ⅲ遺跡があげられる。畑・西黒石野遺跡では隅丸長方形を呈した竪穴住居跡も検出されている（西黒石野遺跡については平成 24 年度に報告予定)。

縄文時代中期　中期初頭の大木 7a 式から中期末葉の大木 10 式に類似する土器、円筒上層 c・

d 式に類似する土器が出土している。

大木７ａ式　大木７a 式に併行するものと思われる土器（第 134 図 47 ～第 135 図 52）は遺物包含層・遺構外より出土しているが、当該期の土器が伴う遺構はＲＤ 379 土坑（第 42 図）のみである。この段階の土器は、直線的な体部から大きく口縁部が外反するキャリパー形深鉢（第 134 図 48）に強い特徴をみることが出来、主体となる文様に縦位・横位・斜位の沈線を充填する。個々の詳細な特徴は述べないが、全体的な様相から関東地方の五領ヶ台式との関連性を思わせる。

大木７ｂ式　上記した大木７a 式の土器よりも新しい段階と思われる大木７ｂ式土器が多量に出土している。代表的なのはＲＡ 281 竪穴住居跡Ａ層より出土した土器群で、上記した特徴的なキャリパー形深鉢や文様がみられなく、大ぶりな弁状突起を有するキャリパー形深鉢（第 117 図 1)、半截竹管による押引文が施される土器（第 118 図 2)、原体圧痕による文様を主体とする土器（第 118 図 3 ～第 122 図 20）が出土している。第 119 図 5 の口縁部文様帯には原体圧痕で縁取りされた隆線による波状文が施され、波頂部には渦巻文が施される。

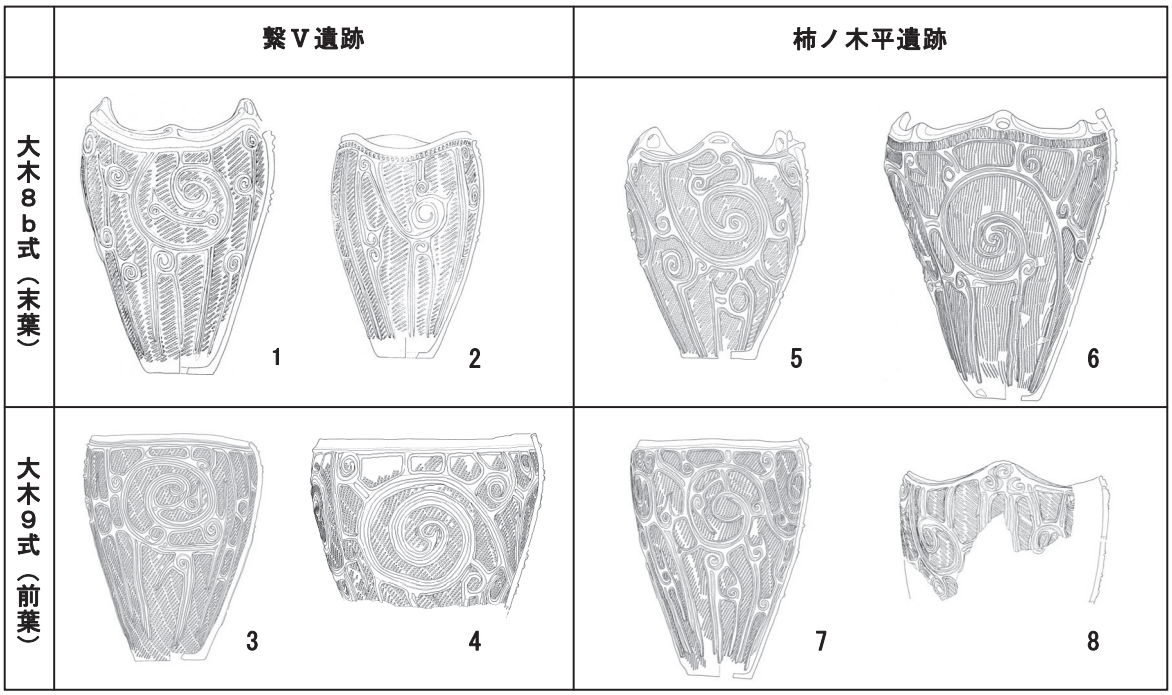
ＲＡ 281 竪穴住居跡出土土器とほぼ同時期と思われる土器は、ＲＡ 274 Ｉ期竪穴住居跡からも出土している。ＲＡ 274 Ｉ期竪穴住居跡では大木７ｂ式土器以外に円筒上層ｃ式（第 110 図 5）が出土しているほか、円筒上層式の影響と思われる波状の粘土紐を口唇下に貼付する深鉢（第 111 図 11）も出土している。

大木８ａ式　ＲＡ 281 竪穴住居跡出土土器群に後続する土器群として、ＲＡ 259 竪穴住居跡出土の土器が考えられる。ＲＡ 259 竪穴住居跡から出土したキャリパー形深鉢の口縁部は直線的に外反し、口縁部の概観はＲＡ 274 Ｉ期竪穴住居跡出土のキャリパー形深鉢（第 109 図 4）に近似する。しかし、文様的には主文様に沿う原体圧痕が少なくなり、かわって沈線によって隆線が縁取られ、文様が浮彫りのように表現されるようになる。一方でＲＡ 233 Ｉ期竪穴住居跡出土のキャリパー形深鉢（第 67 図 1・3・4）の口縁部形状は全体的に内湾し、直線的な形状はみられない。口縁部形状が内湾するキャリパー形深鉢は中期後葉の大木８ｂ・9 式段階までみられることから、ＲＡ 233 Ｉ期竪穴住居跡出土の土器は新しい傾向にある土器と考えることができる。

なお、ＲＡ 259 竪穴住居跡床面からは円筒上層ｄ式に近似する深鉢が出土している（第 101 図 3)。しかし、地文となる縄文の回転方向が縦位であるほか、体部には隆線による懸垂文が施されるなど大木式の特徴も併せ持つ資料である。

大木８ｂ式　ＲＡ 224・236・242・244・252・253 竪穴住居跡よりまとまった量の土器が出土している。注目されるのはＲＡ 236 竪穴住居跡から出土した伏甕に転用された深鉢（第 72 図 5）である。特徴は口縁部が平縁、体部には隆沈線による大渦巻・小渦巻文・懸垂文が短い隆沈線で連結されることである。大木 8b 式段階では、主要文様が棘のある大渦巻文・小渦巻文が主体的であったのが、ＲＡ 236 竪穴住居跡出土深鉢は有棘部が懸垂文や他の文様との連結に多用され、連結部間が長楕円文・楕円文となる。また小渦巻文の渦巻部が省略され、円文になるものもある。概要のみ説明したが、これらの諸特徴は後続する大木 9 式前葉の文様に特徴的なものであり、大木 8b 式から 9 式への移行期の土器とみていいであろう。同様の土器は大館町遺跡・上米内遺跡・柿ノ木平遺跡・堰根遺跡・山王山遺跡・猪去館遺跡・

川目遺跡など盛岡市内に所在する縄文時代中期の遺跡でも確認されており、特に柿ノ木平遺跡では該期の竪穴住居跡と土器が多数検出され、比較検討する上で好資料となるであろう。



繋Ｖ・柿ノ木平遺跡出土大木８ｂ・９式土器

後期　今回の調査では出土量が少なかったことから、出土した事実のみ記述するが、第36次調査区の北（繋小中学校校庭）では試掘調査の際、多量の後期初頭の土器を含む遺物包含層が確認されている。このことから、後期初頭における遺跡中心部は段丘北部を中心に拡がっていることが考えられる。

２．平安時代

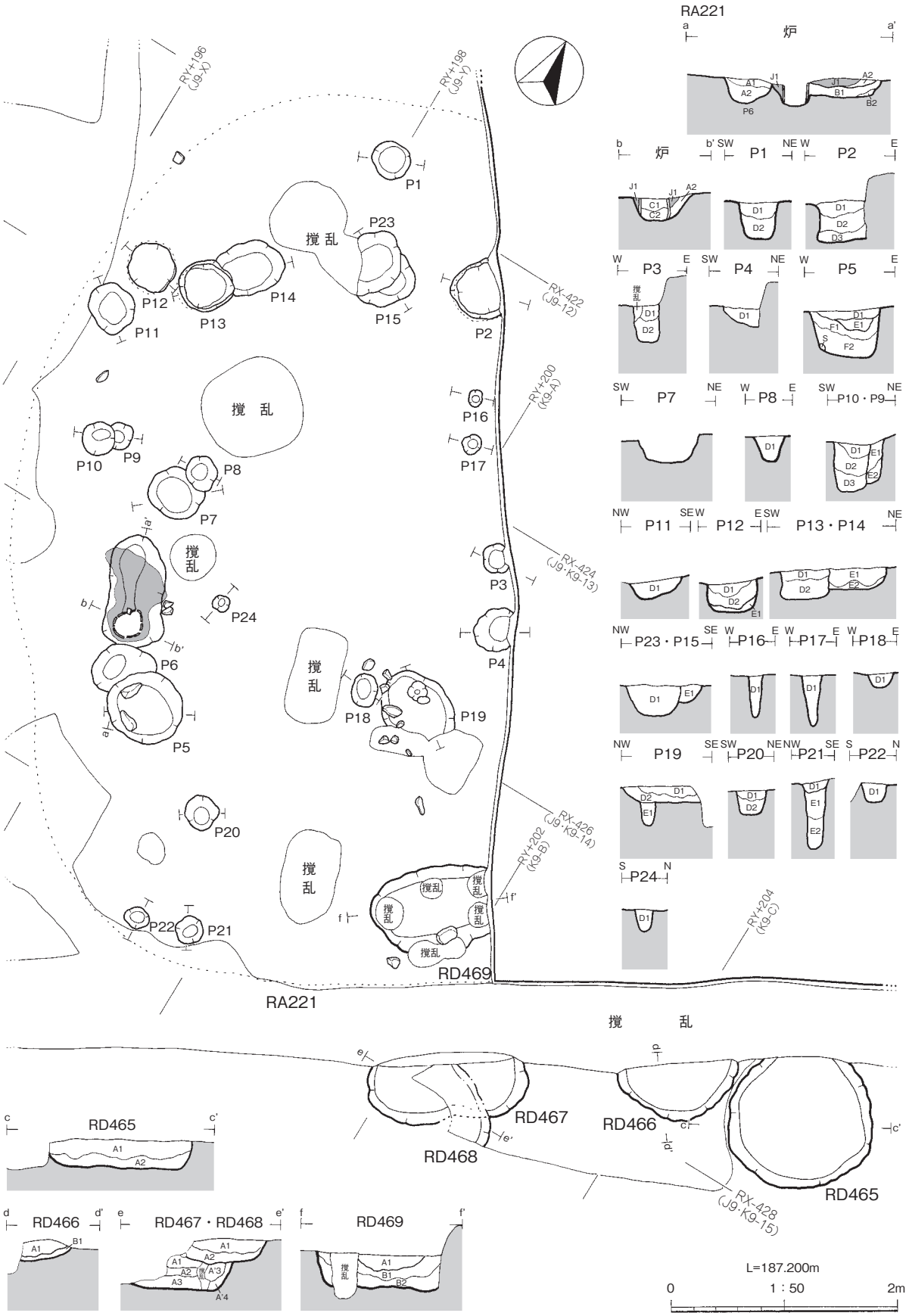
繋Ｖ遺跡における過去の調査では、昭和32年の校舎増築に伴う発掘調査の際に土師器甕破片の出土が報告されているのみである。今回の調査では１棟の竪穴住居跡（ＲＡ 0501）が確認され、平安時代の集落の存在が明らかにされた。竪穴住居跡埋土には十和田ａ火山灰が堆積することから、構築されたのは西暦915年以前と考えられる。

３．結　語

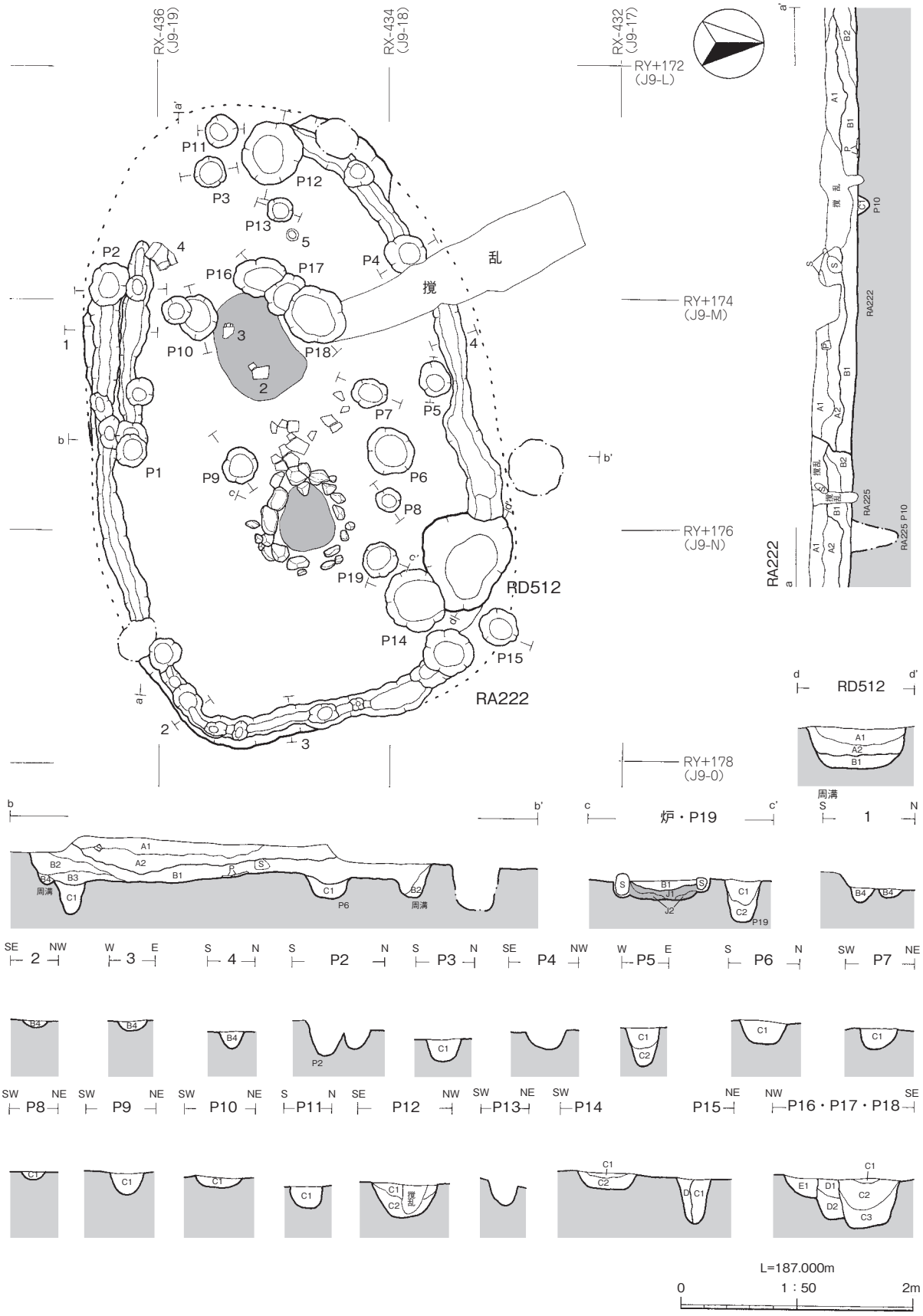
以上のように、第29・33・34・36・37次発掘調査の結果、今回の調査区及び周辺は縄文時代中期初頭から末葉にかけての集落を中心とする地区であることが確認された。また、縄文時代の竪穴住居跡内外より多量の石器類が出土したことから石器製作・石材供給の拠点遺跡であった可能性が高まった。

（神原 雄一郎．佐々木 紀子）

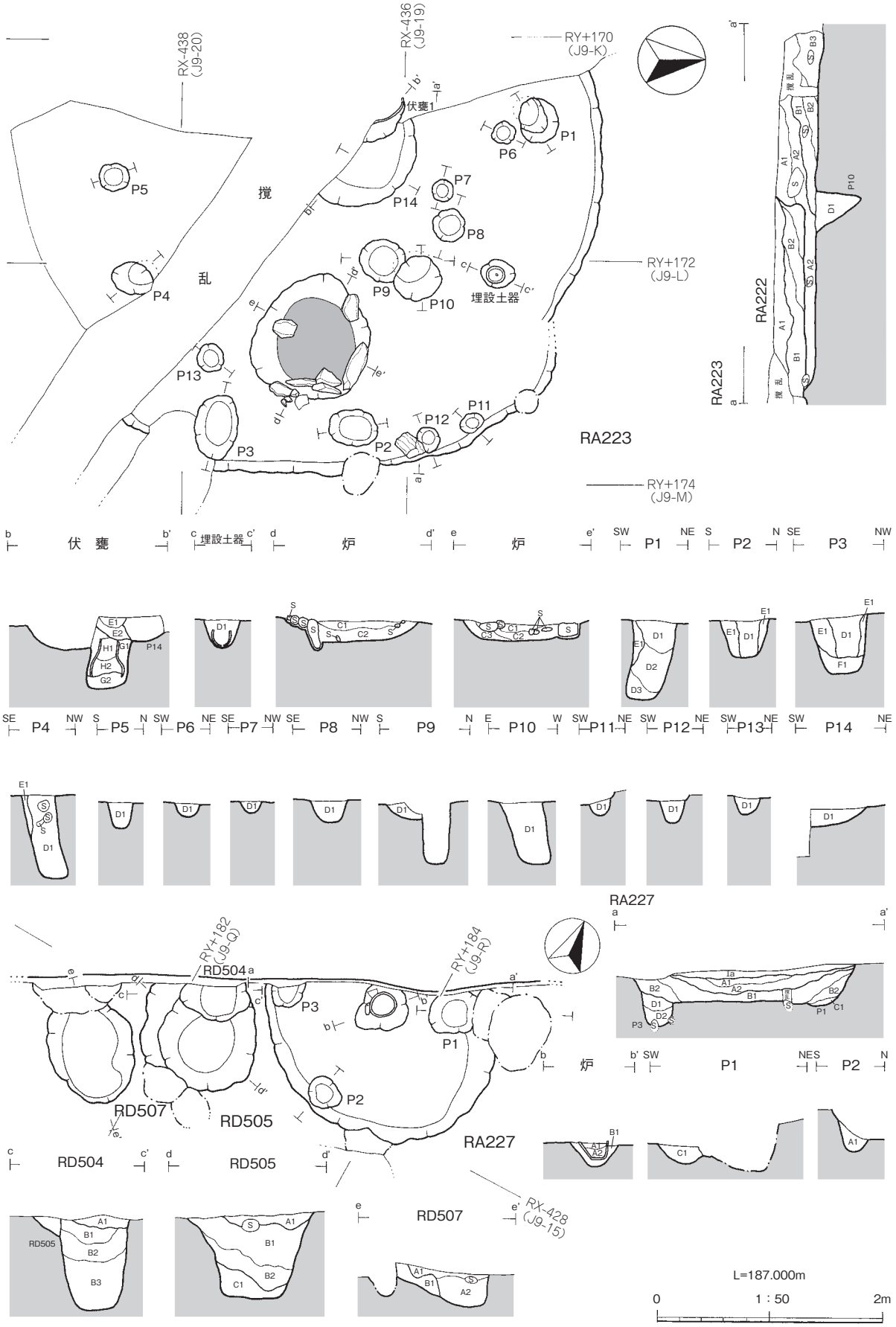
遺　構　図　版



第６図　RA221 竪穴住居跡、RD465 ～ 469 土坑

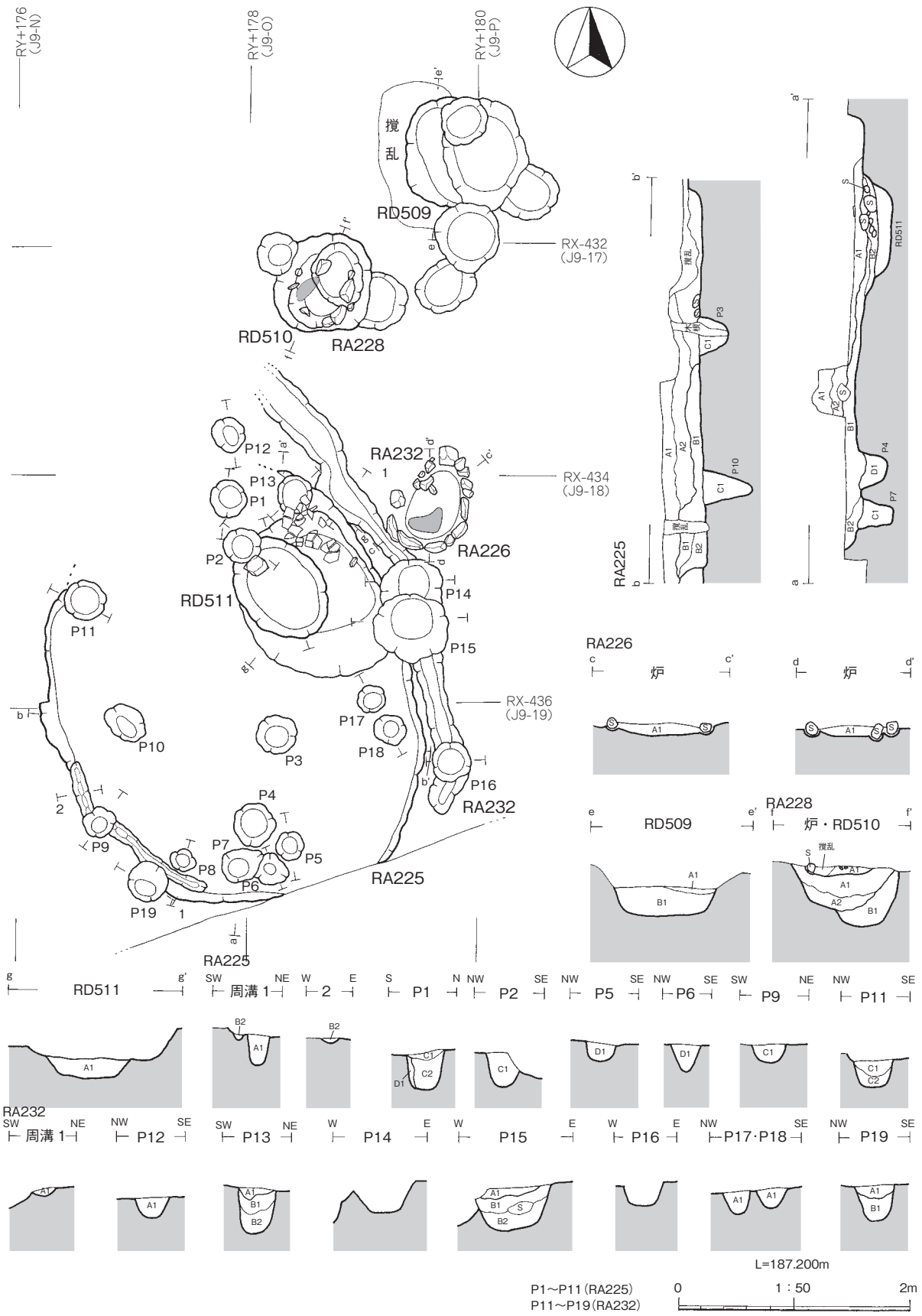


第７図　RA222 竪穴住居跡、RD512 土坑

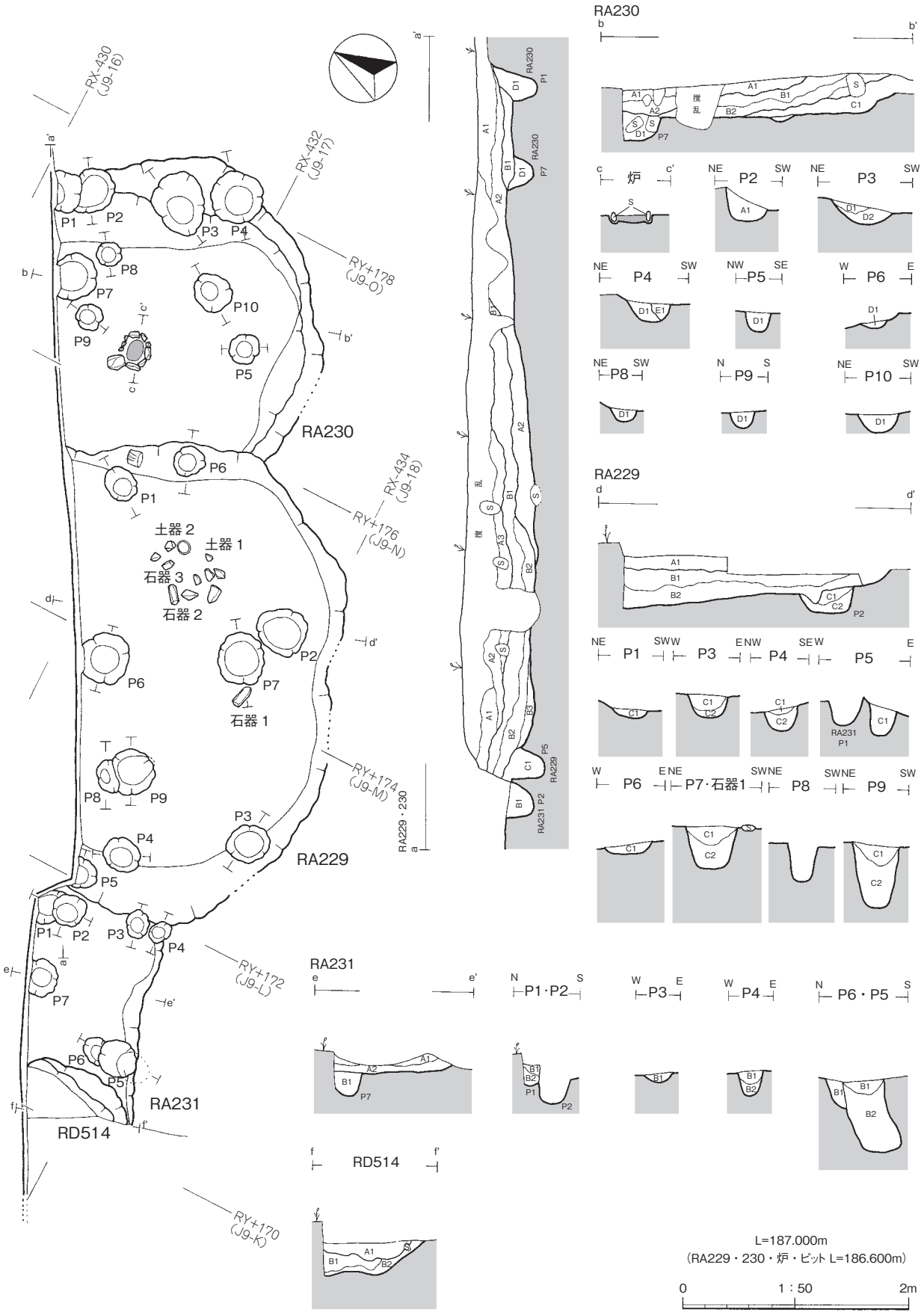


第８図　RA223・227 竪穴住居跡、RD504・505・507 土坑

第９図　RA224 竪穴住居跡、RD513・518 土坑

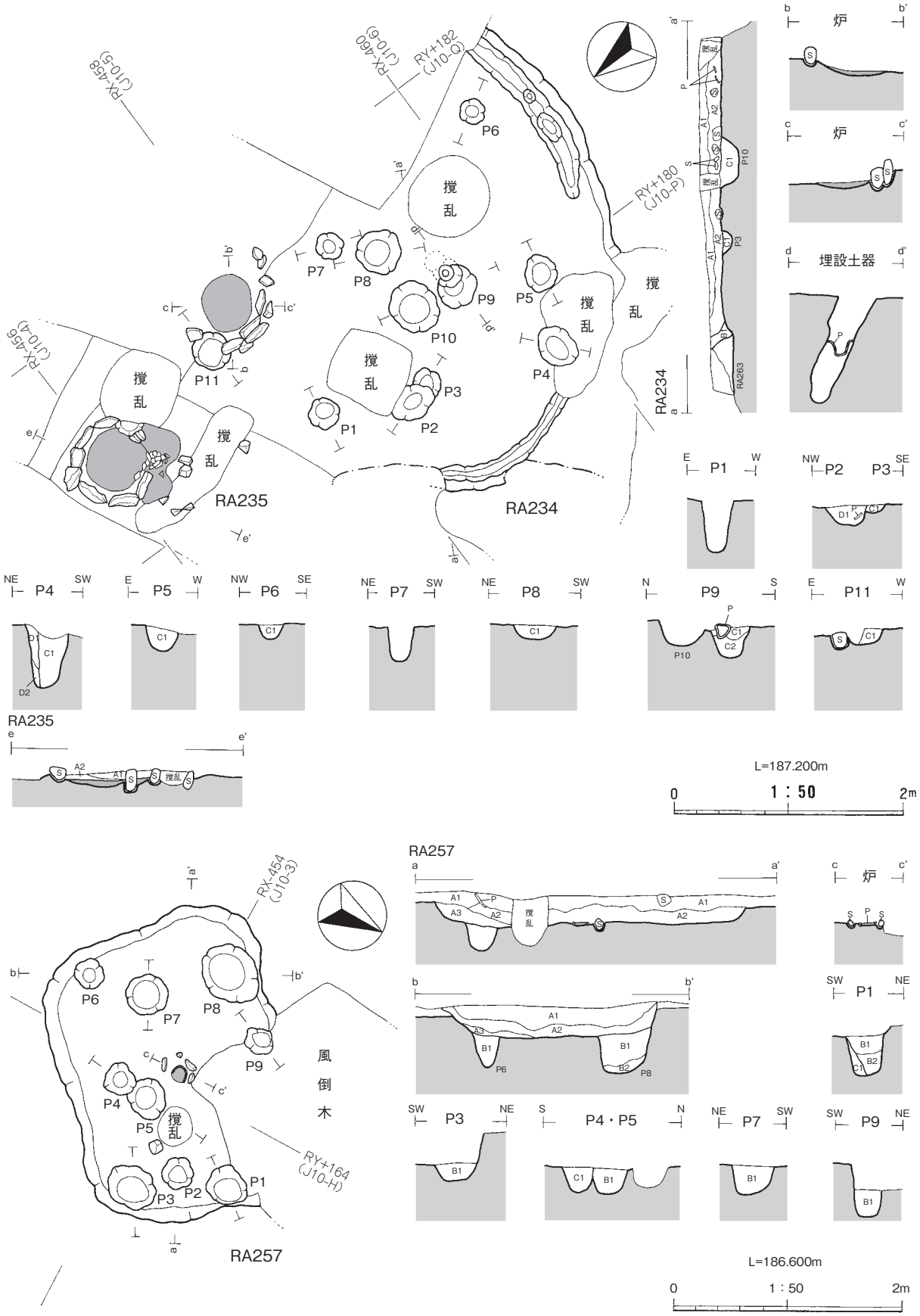


第 10 図　RA225・232 竪穴住居跡、RA226・228 炉跡、RD509 ～ 511 土坑

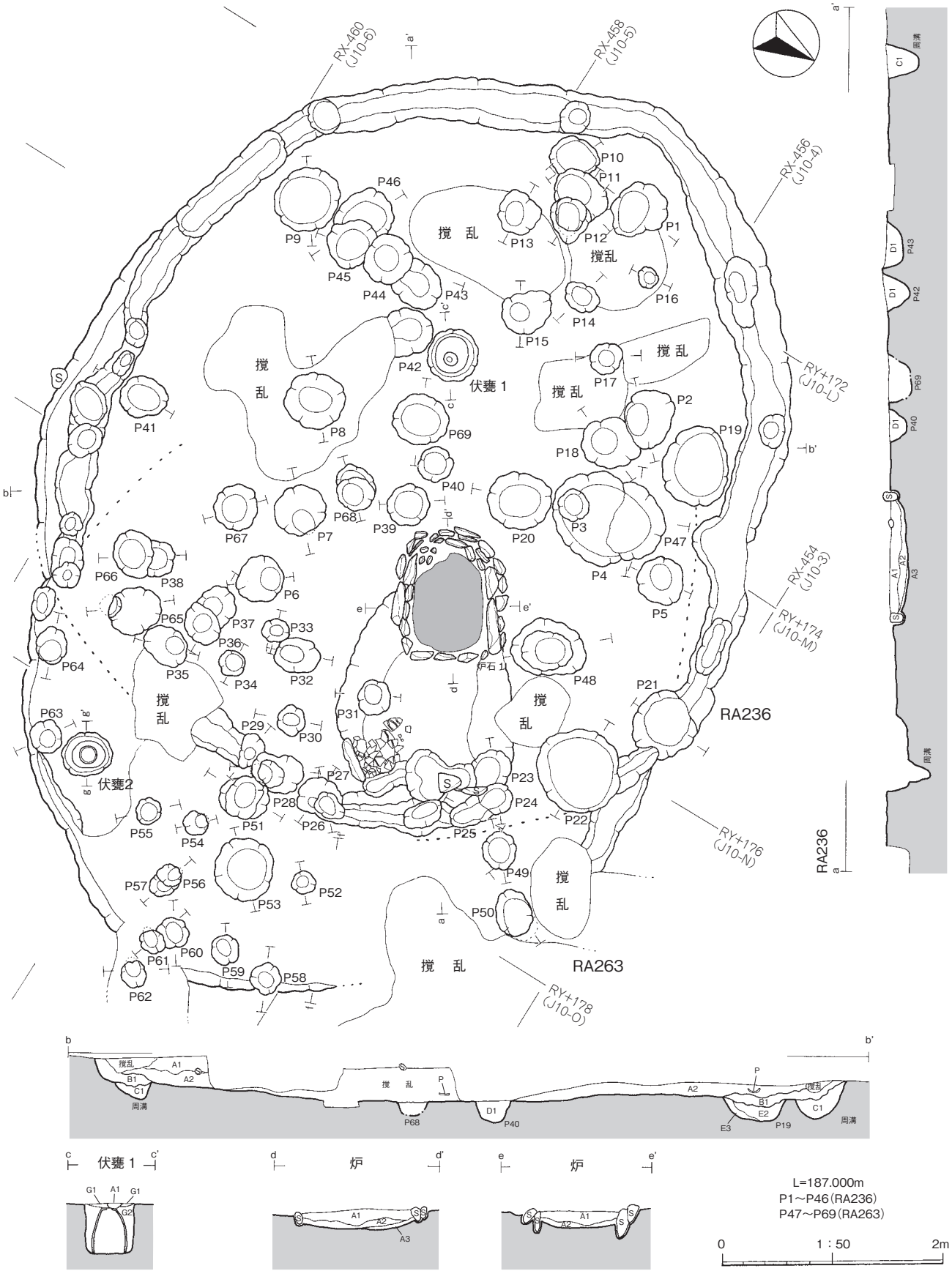


第 11 図　RA229 ～ 231 竪穴住居跡、RD514 土坑

第 12 図　RA233 Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡、RD522 土坑

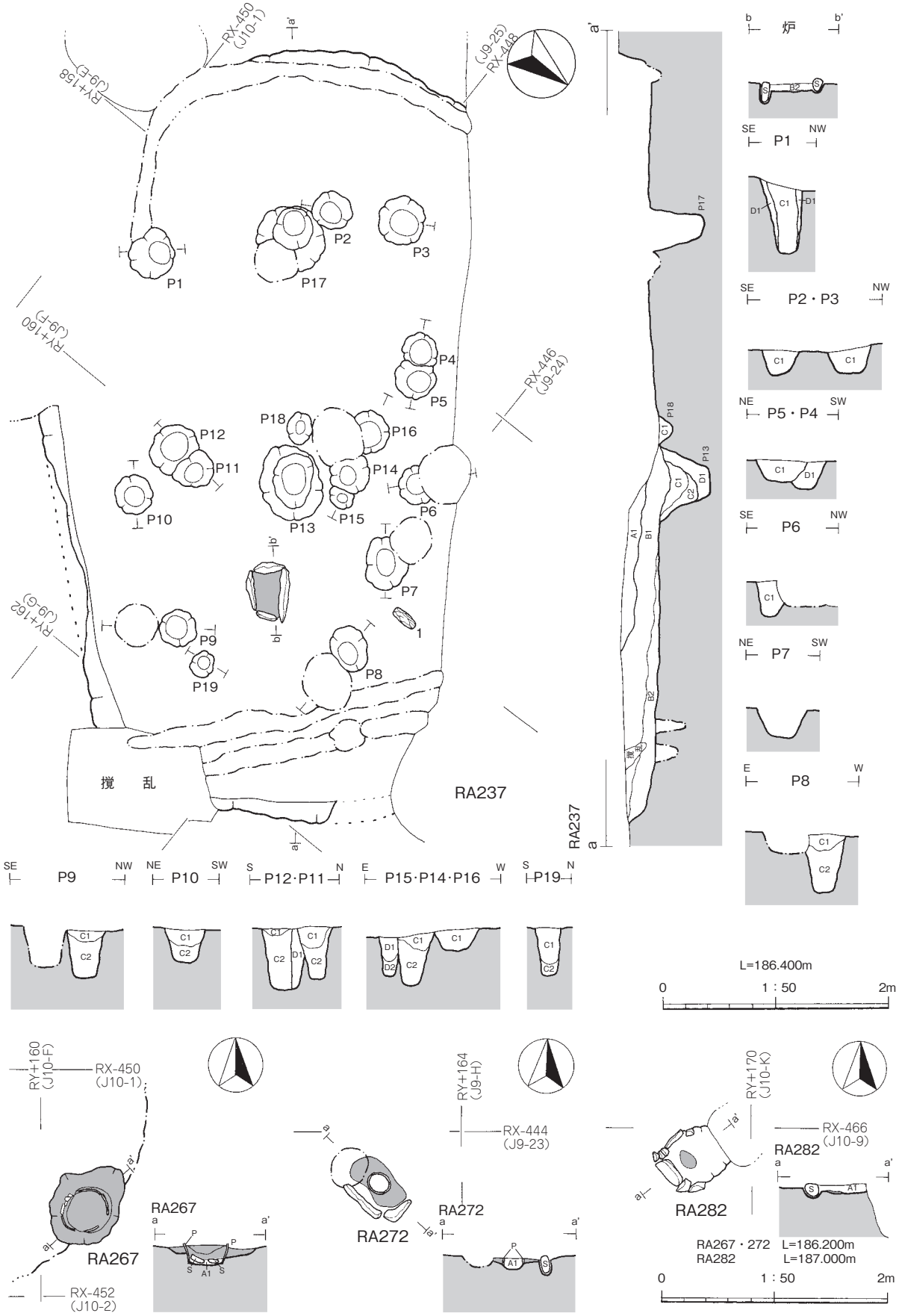


第 13 図　RA234・257 竪穴住居跡、RA235 炉跡



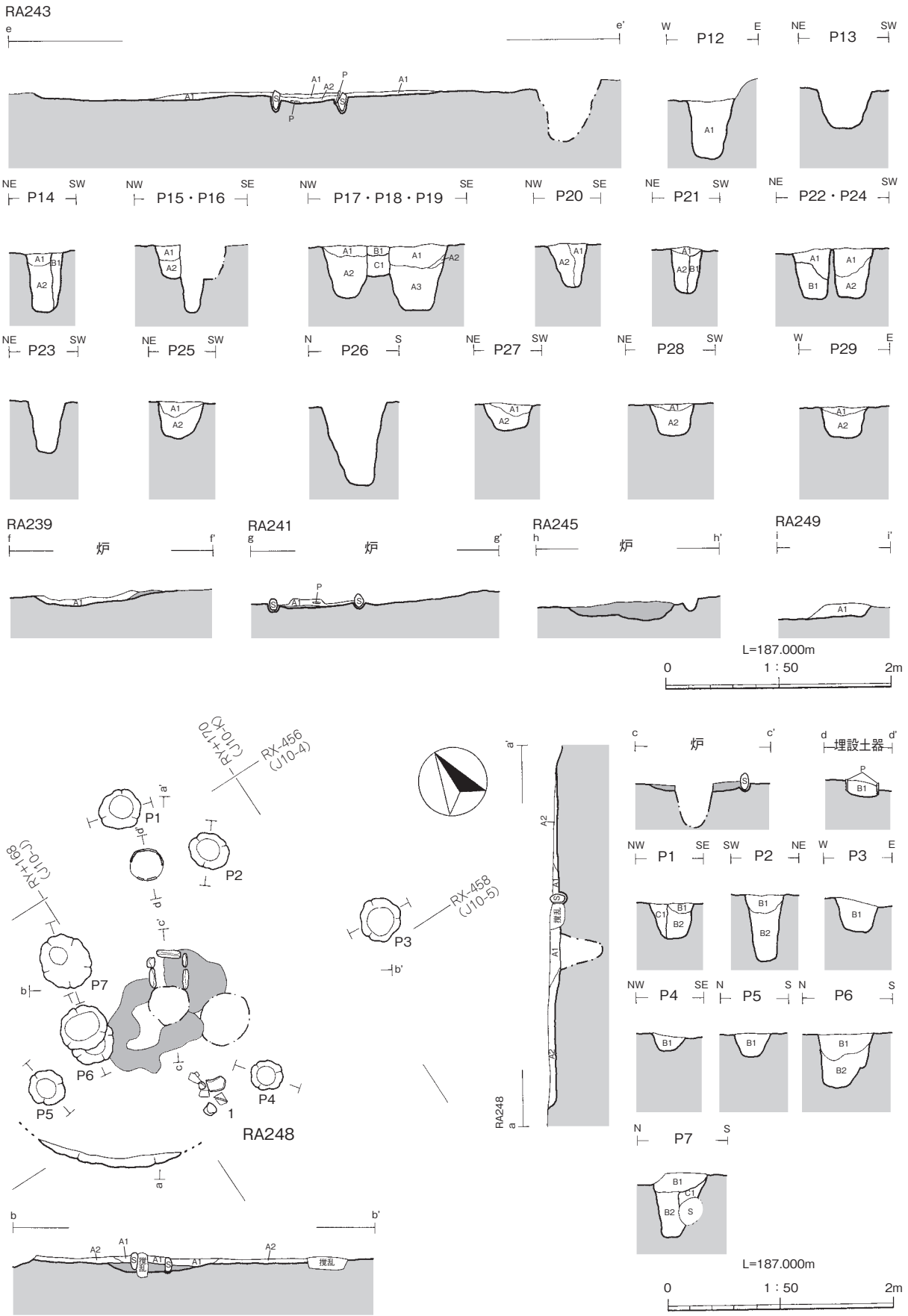
第 14 図　RA236・263 竪穴住居跡（1）

第 15 図　RA236・263 竪穴住居跡（2）

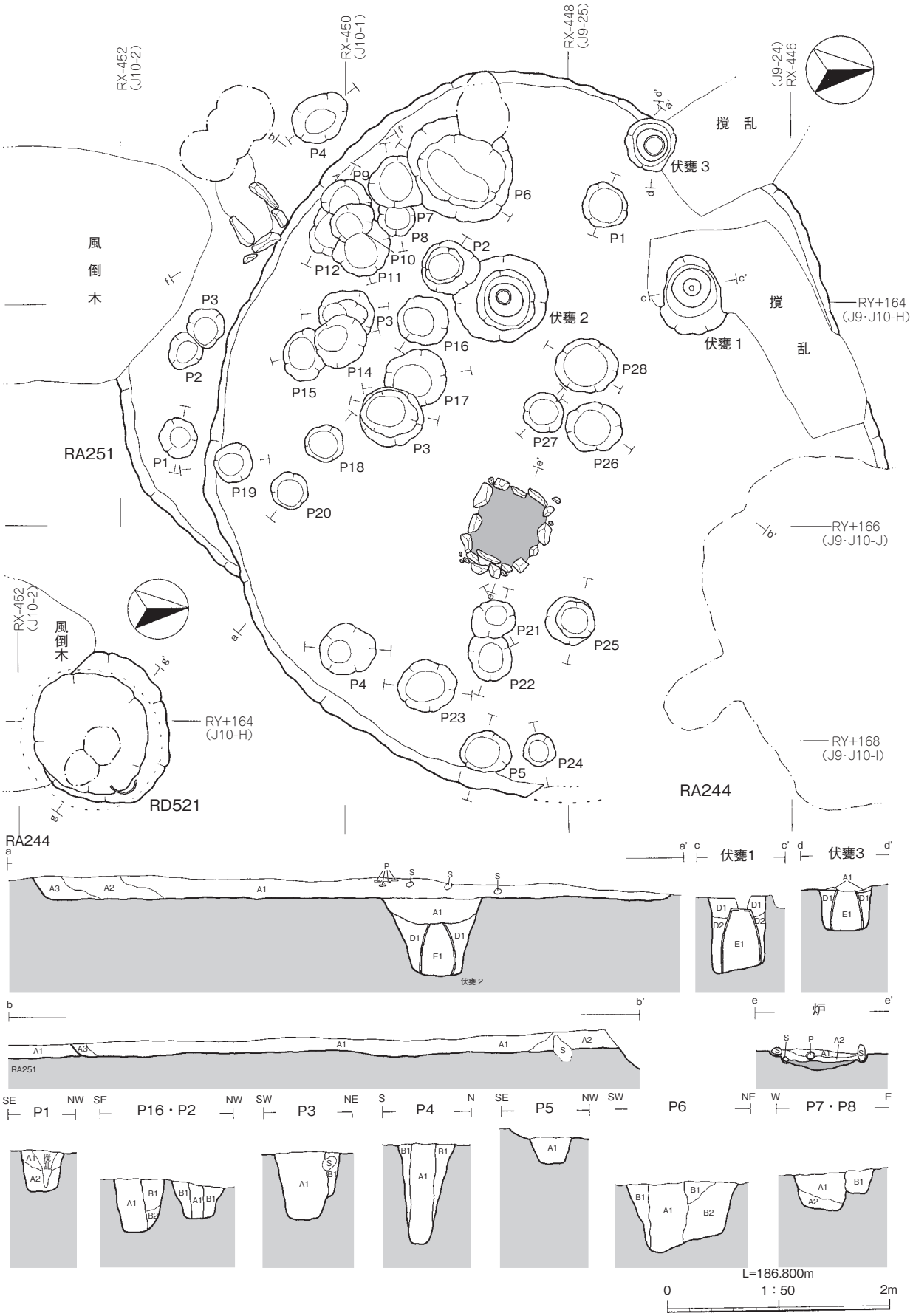


第 16 図　RA237 竪穴住居跡、RA267・272・282 炉跡

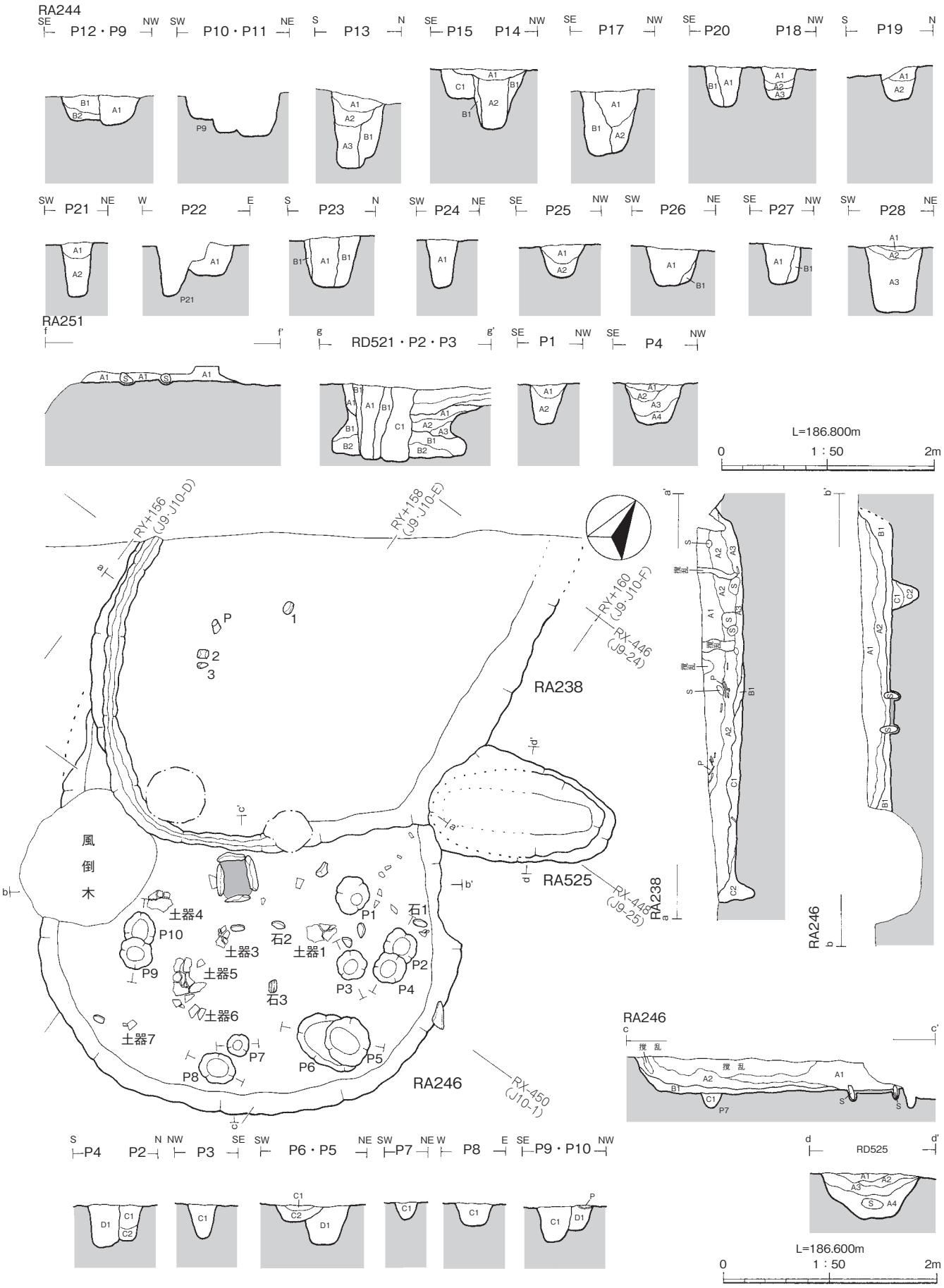
第 17 図　RA242・243・249 竪穴住居跡、RA239・241・245 炉跡（1）



第 18 図　RA243（2）・248・249（2）竪穴住居跡、RA239・241・245 炉跡（2）

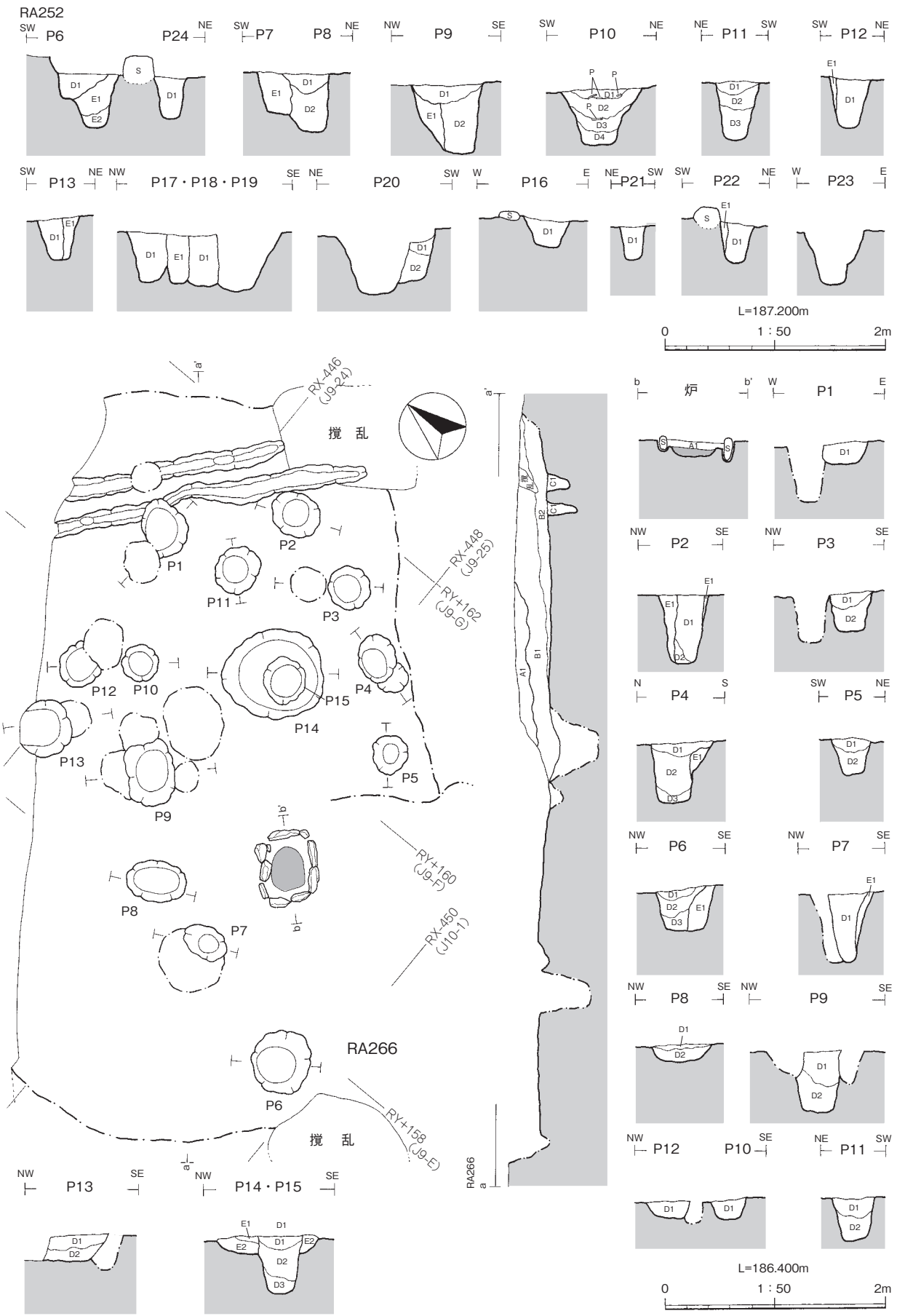


第 19 図　RA244・251 竪穴住居跡、RD521 土坑（1）



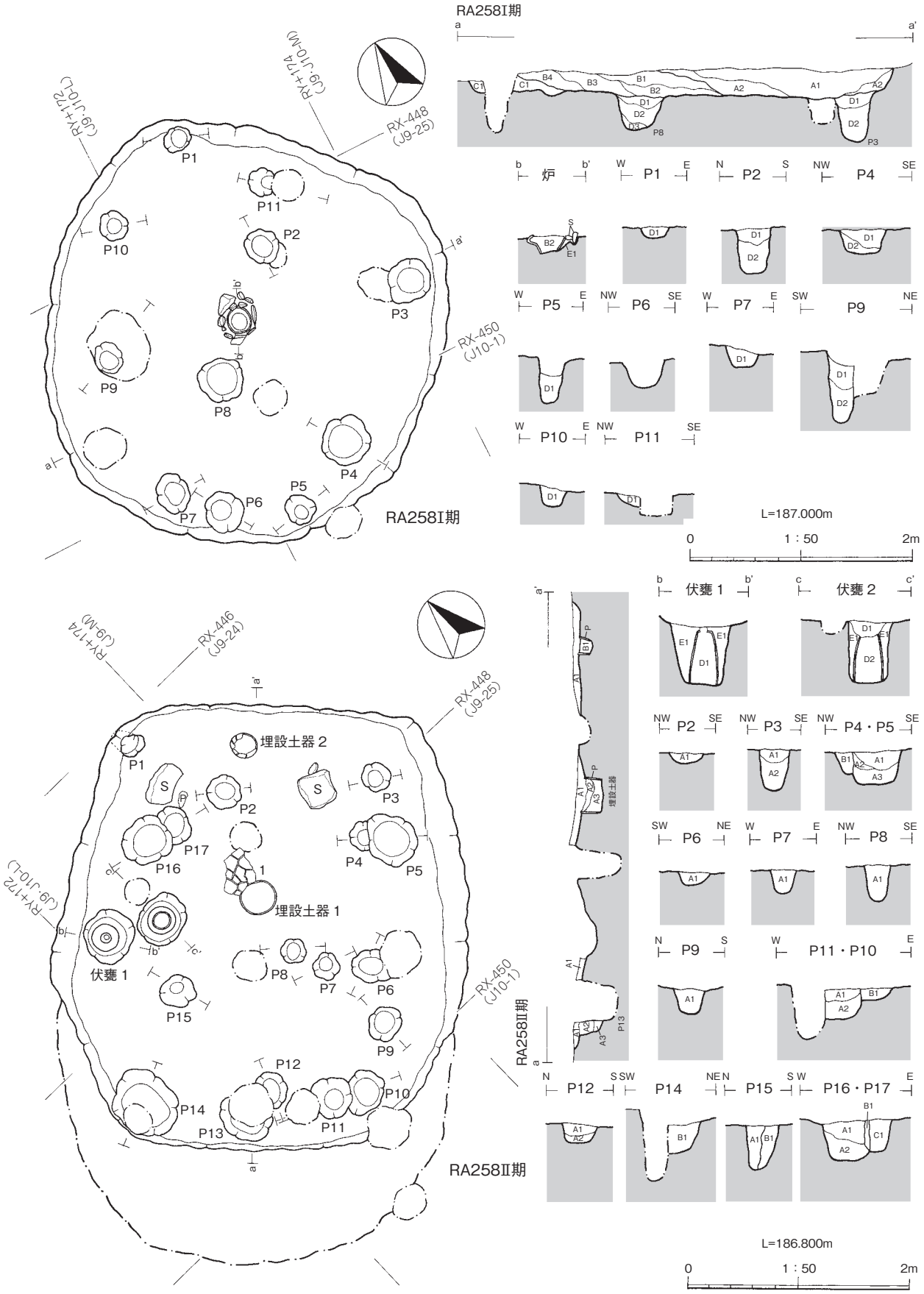
第 20 図　RA238・244（2）・246・251（2）竪穴住居跡、RD521（2）・525 土坑

第 21 図　RA252 竪穴住居跡（1）

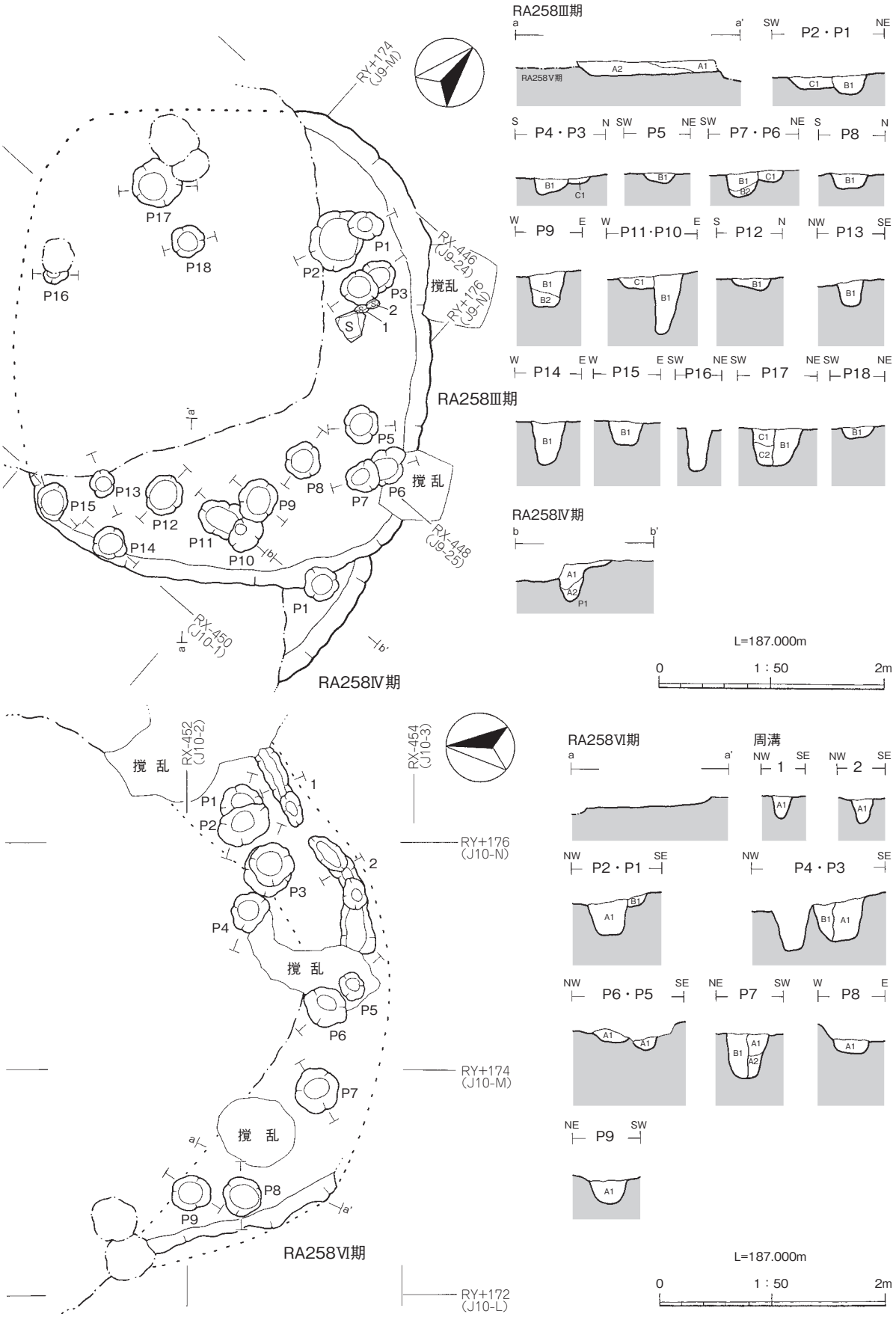


第 22 図　RA252（2）・266 竪穴住居跡

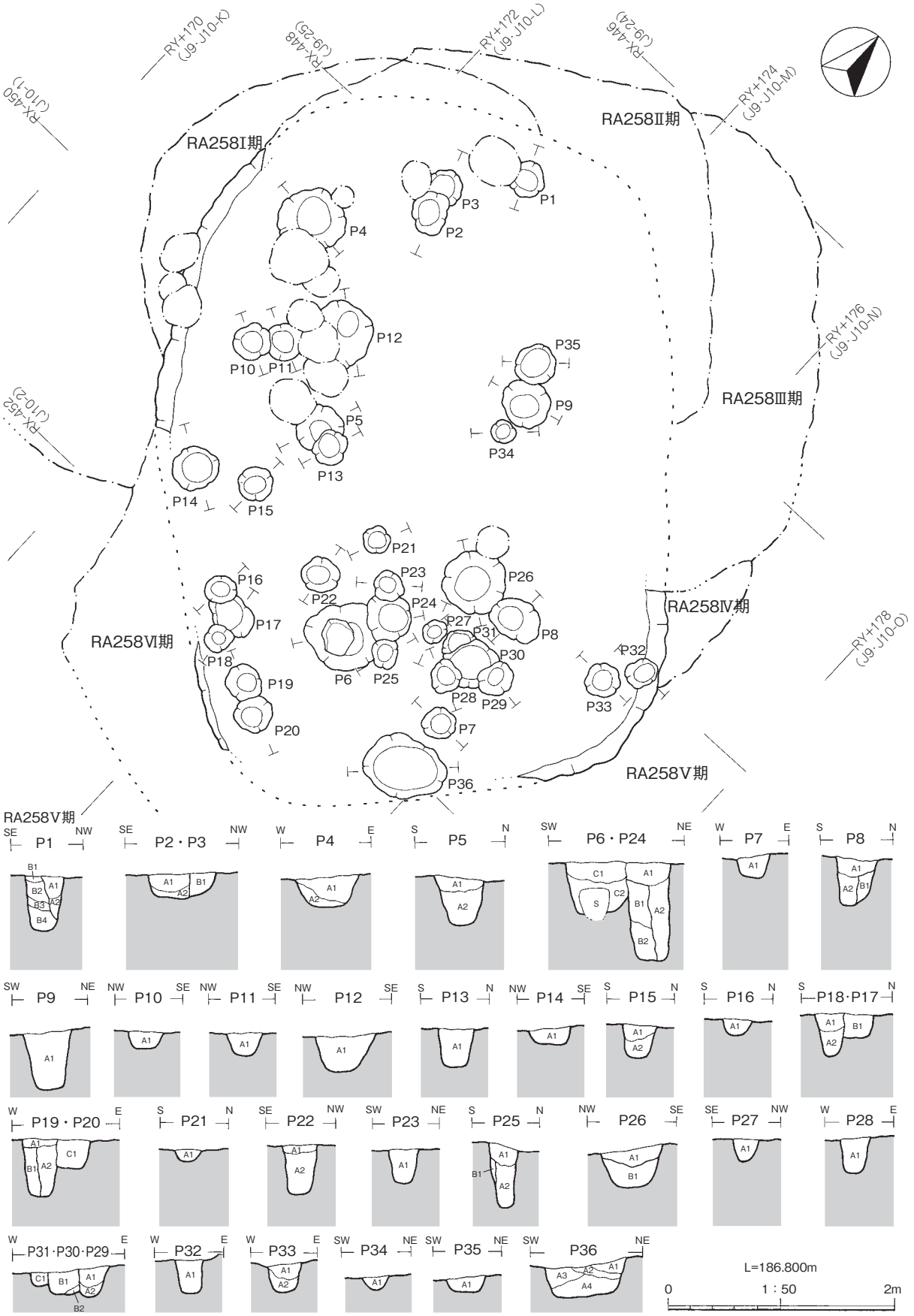
第 23 図　RA253 竪穴住居跡



第 24 図　RA258 Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡

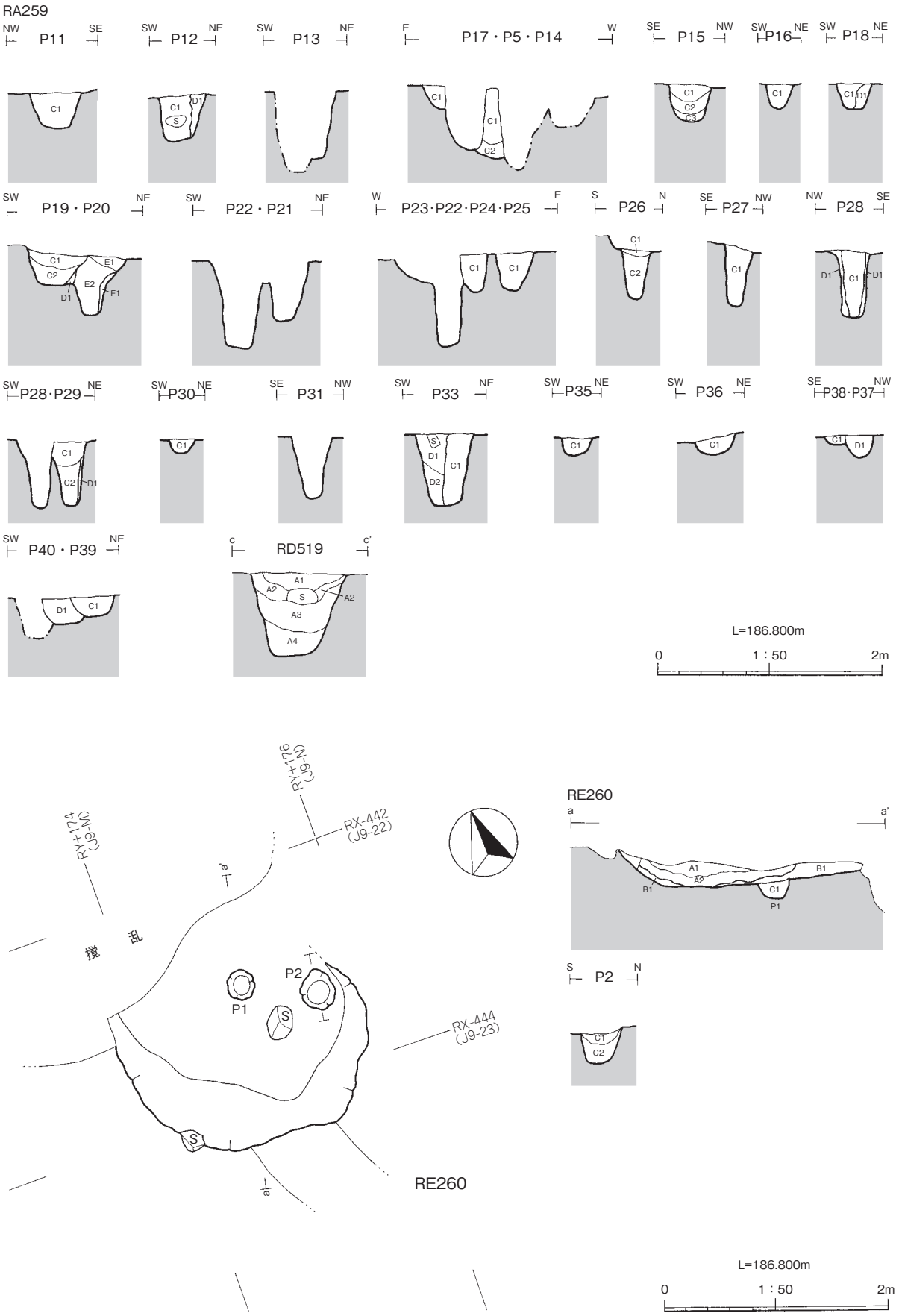


第 25 図　RA258 Ⅲ期・Ⅳ期・Ⅵ期竪穴住居跡

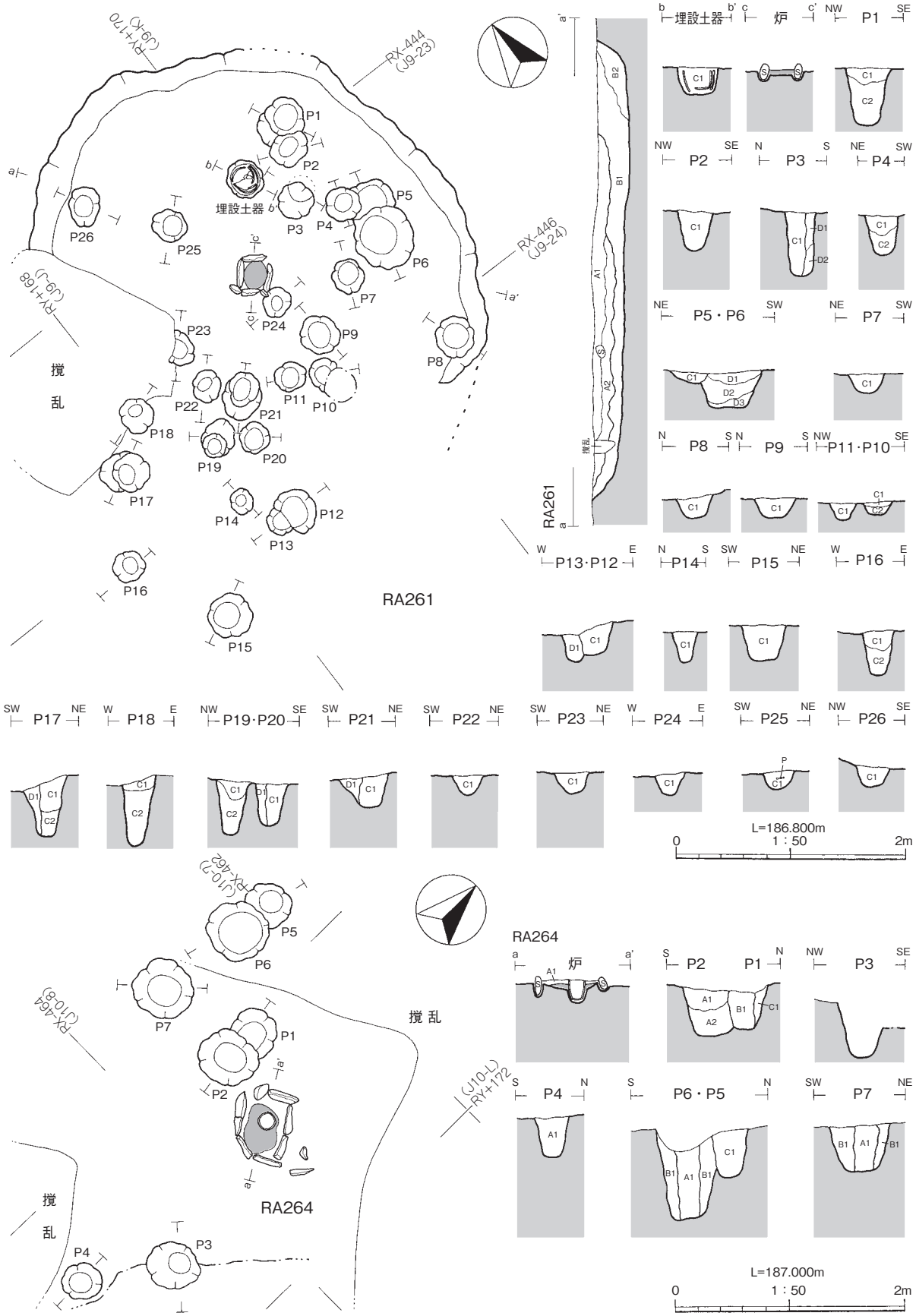


第 26 図　RA258 Ⅴ期竪穴住居跡

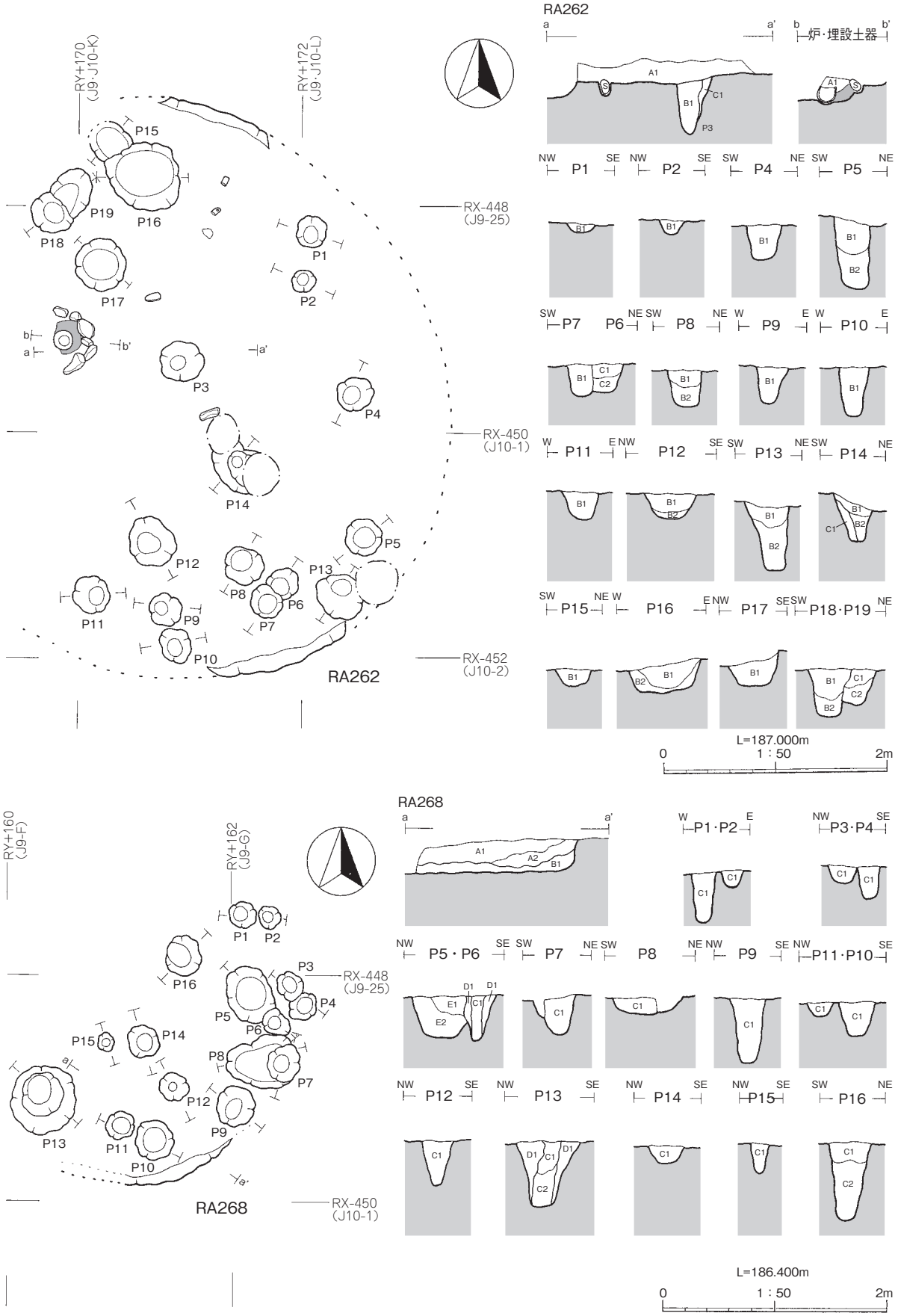
第 27 図　RA259 竪穴住居跡、RD519 土坑（1）



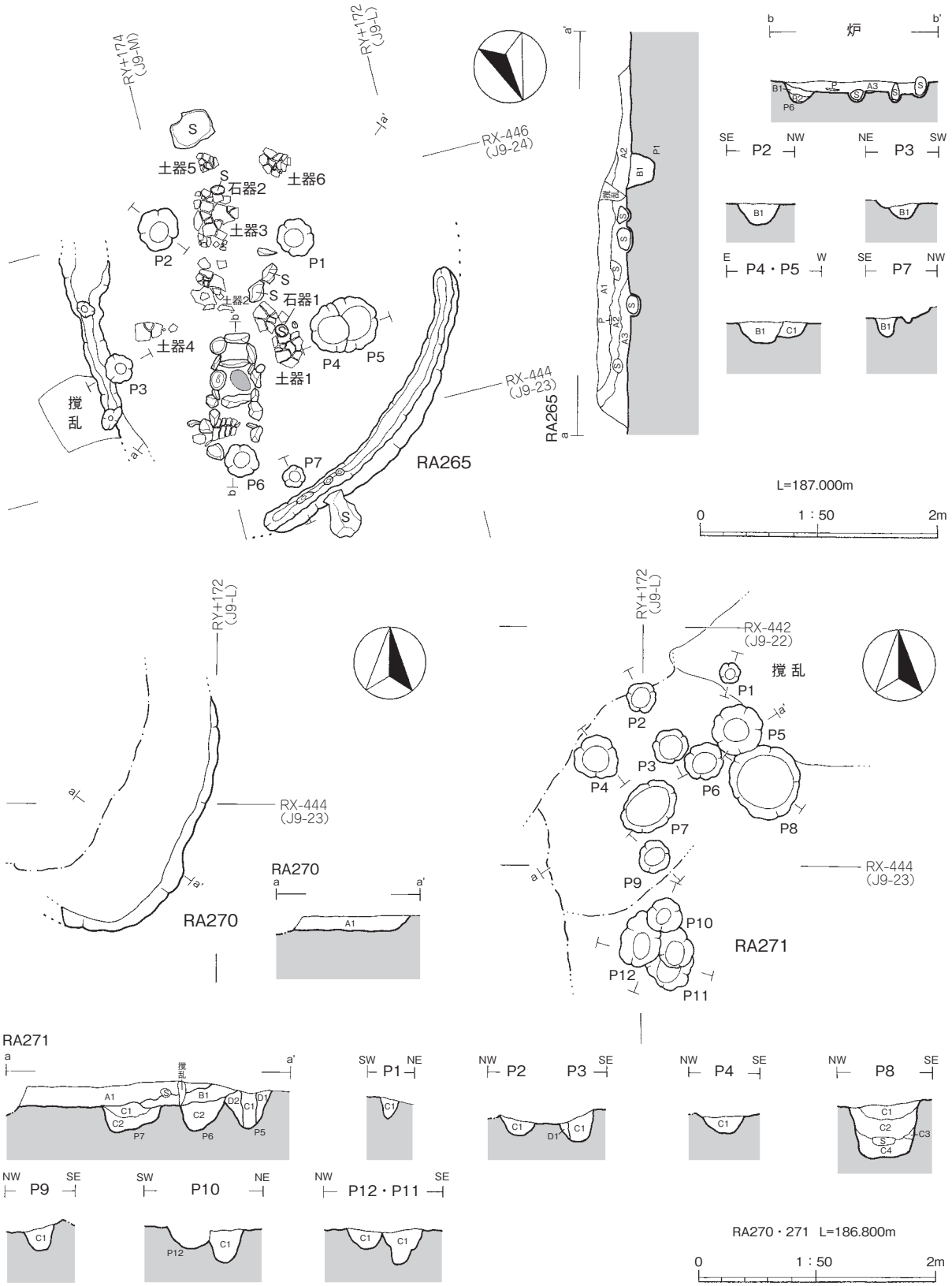
第 28 図　RA259 竪穴住居跡、RD519 土坑（2）、RE260 竪穴跡



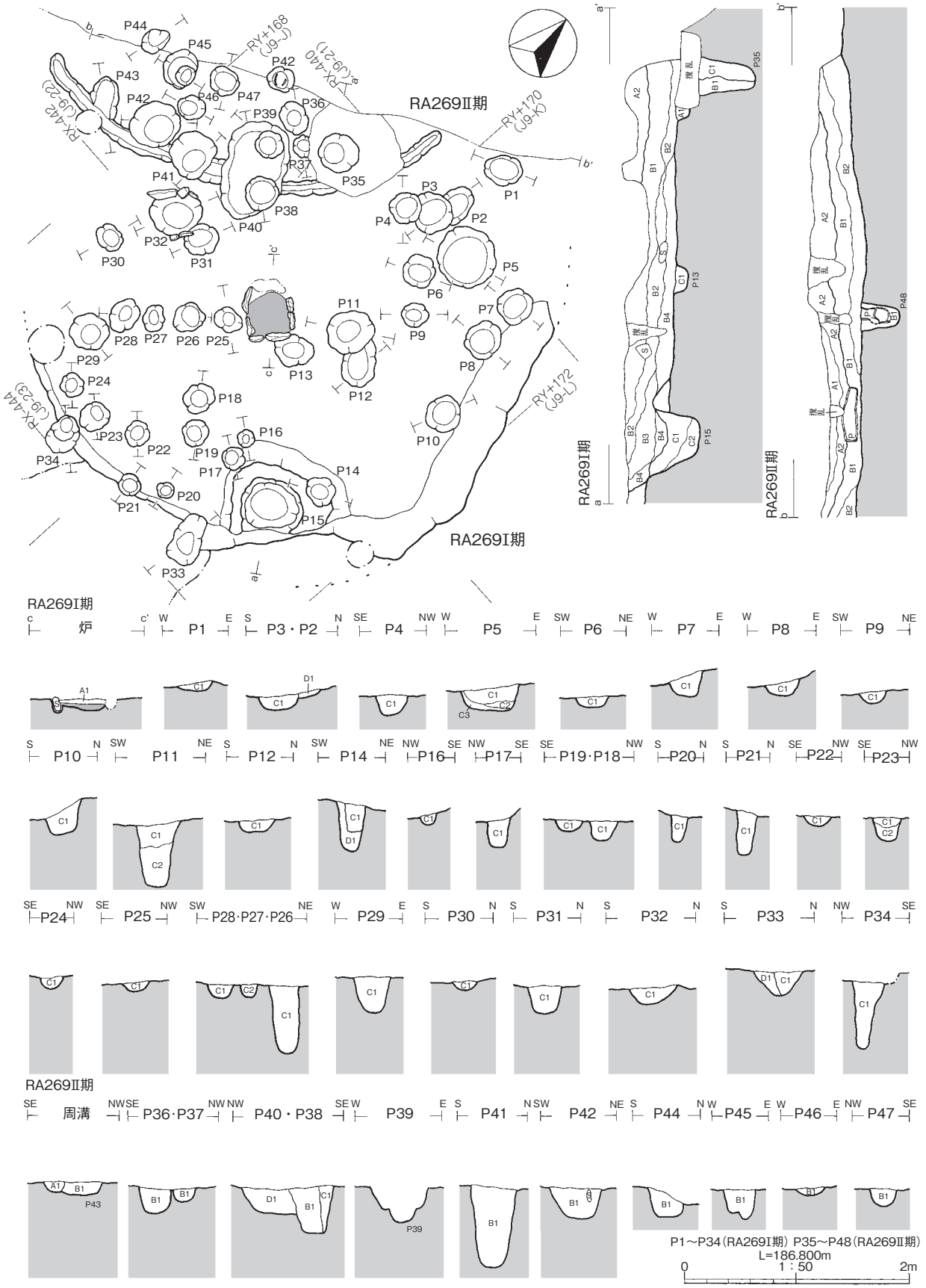
第 29 図　RA261・264 竪穴住居跡



第 30 図　RA262・268 竪穴住居跡

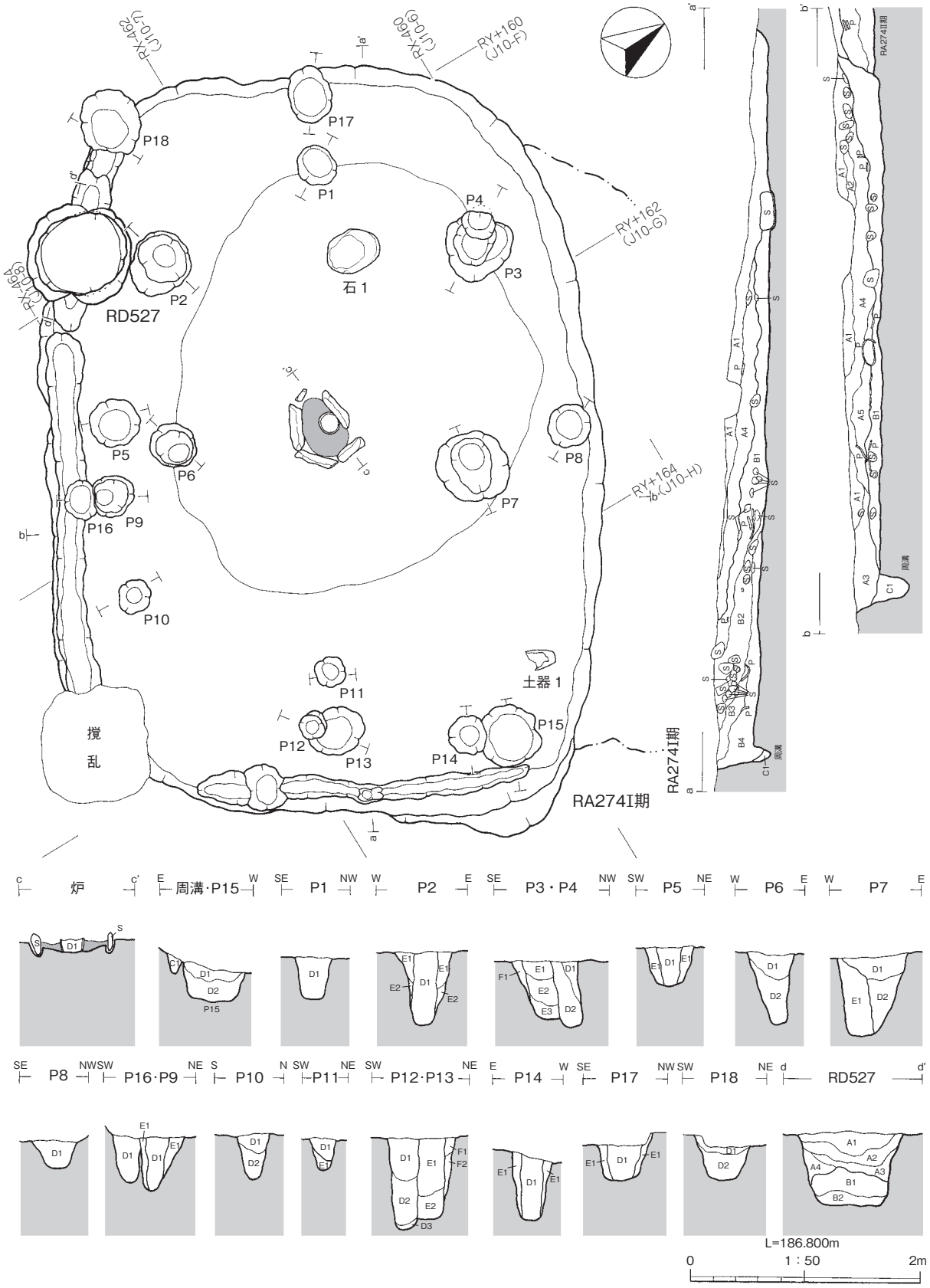


第 31 図　RA265・270・271 竪穴住居跡



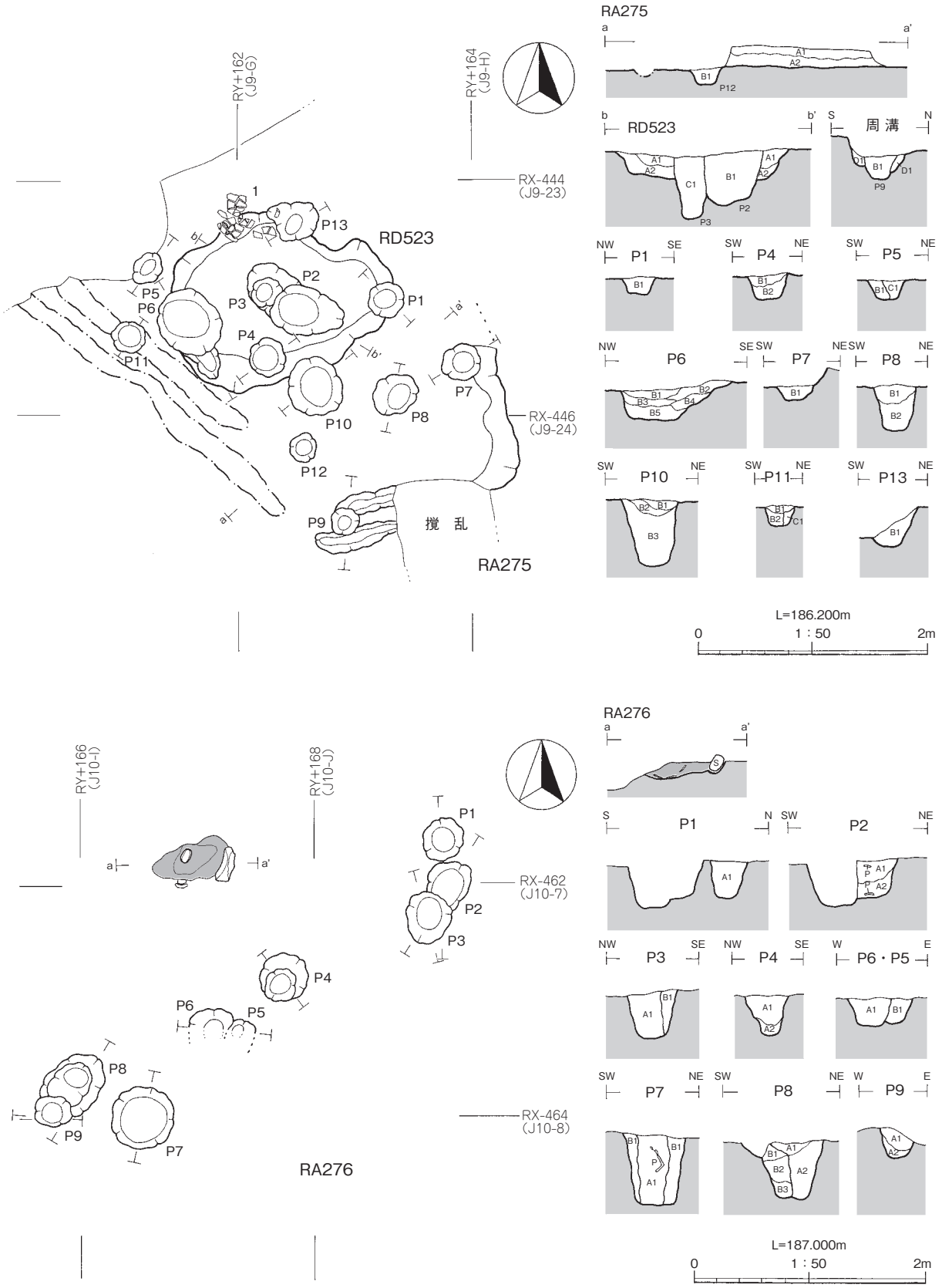
第 32 図　RA269 Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡

第 33 図　RA273・279・288 竪穴住居跡

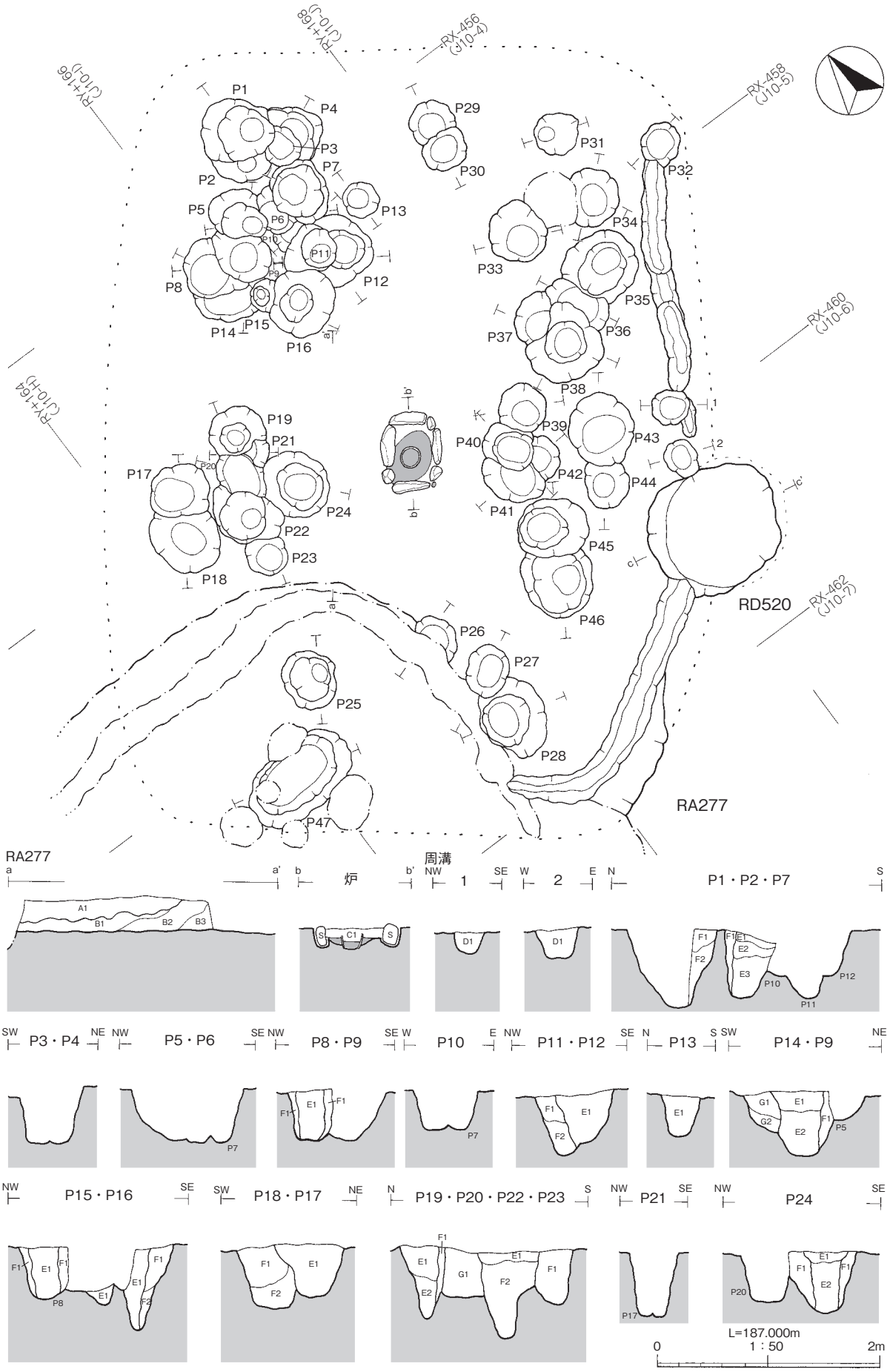


第 34 図　RA274 Ⅰ期竪穴住居跡、RD527 土坑

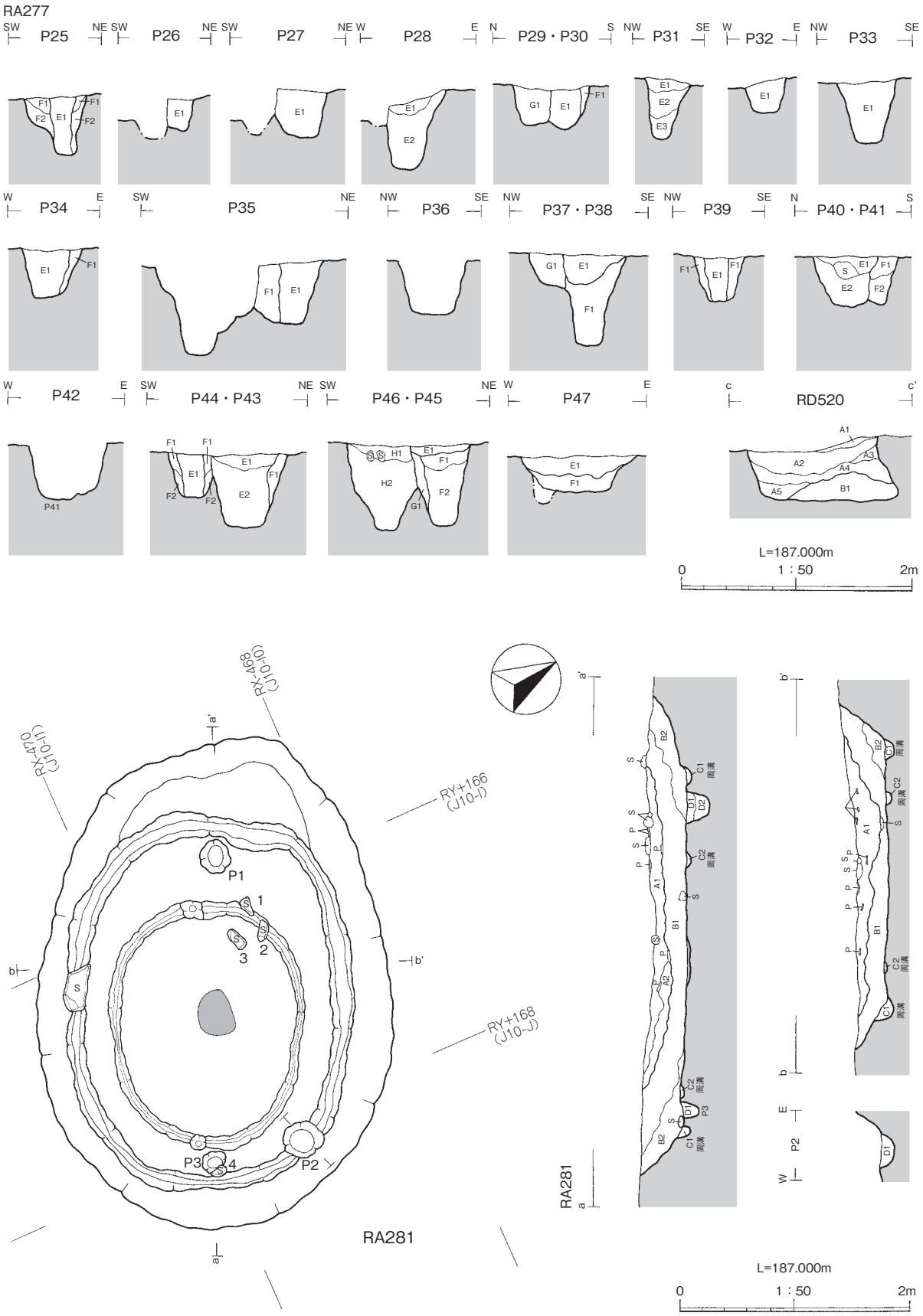
第 35 図　RA274 Ⅱ期竪穴住居跡



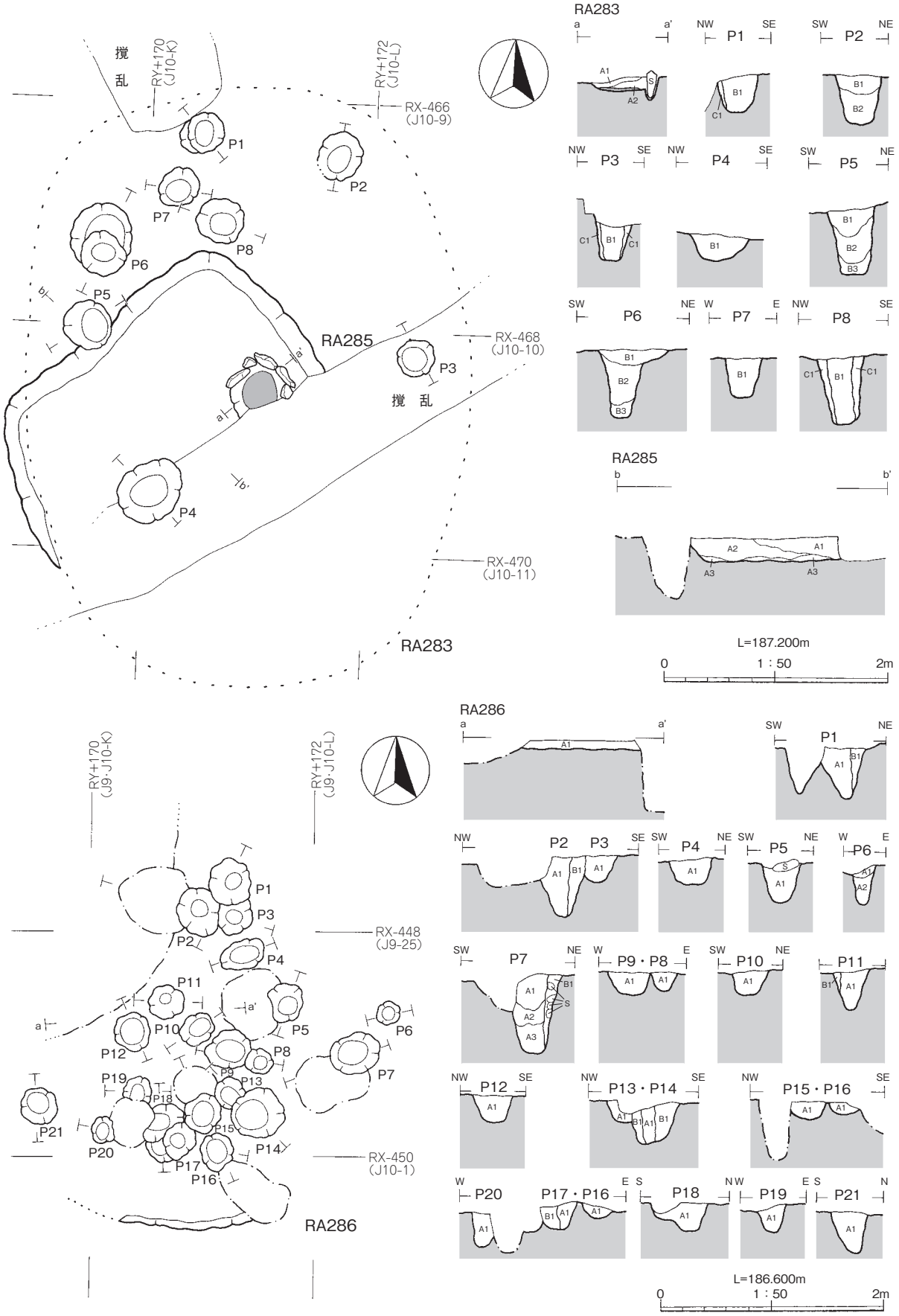
第 36 図　RA275・276 竪穴住居跡、RD523 土坑



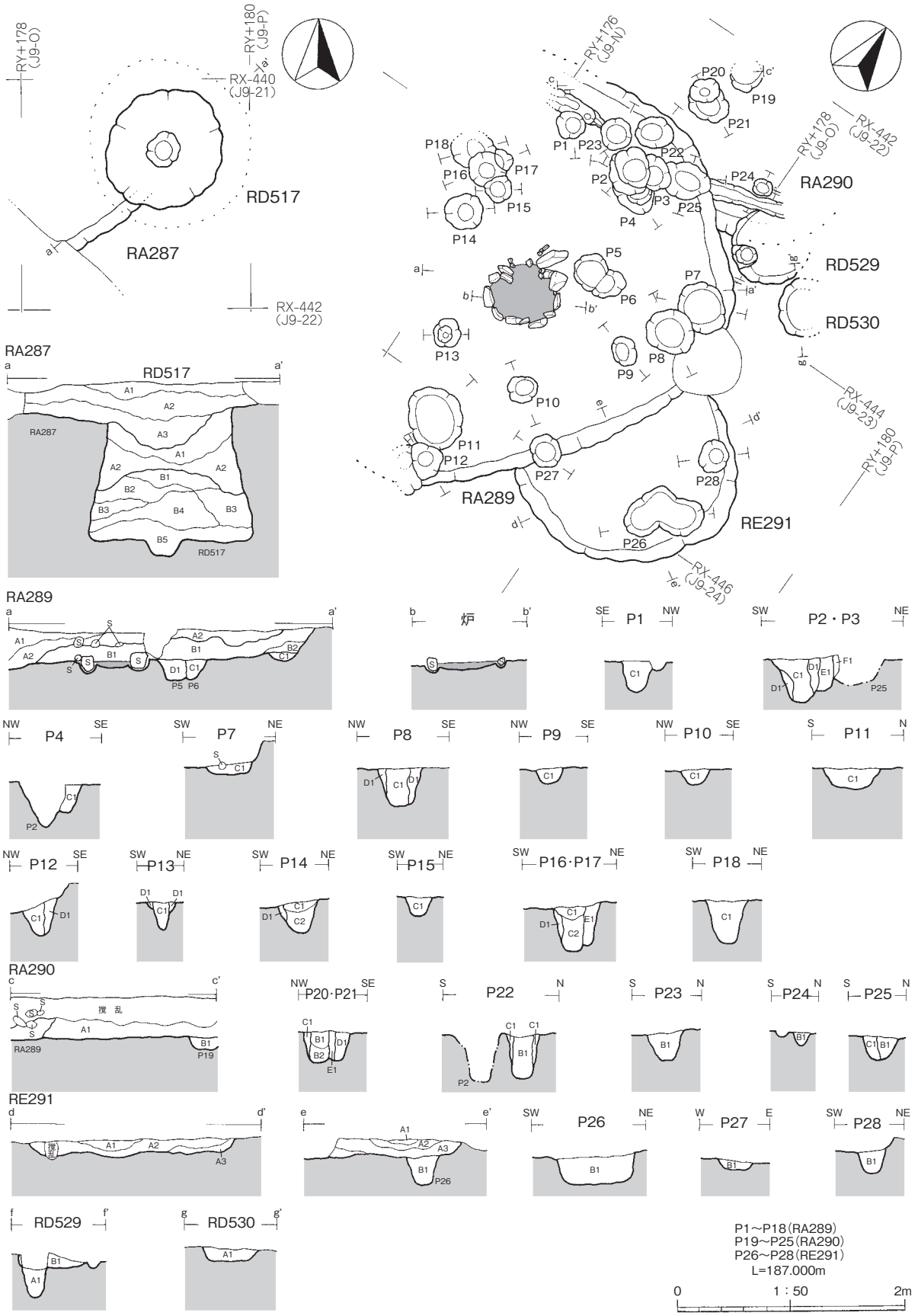
第 37 図　RA277 竪穴住居跡、RD520 土坑（1）



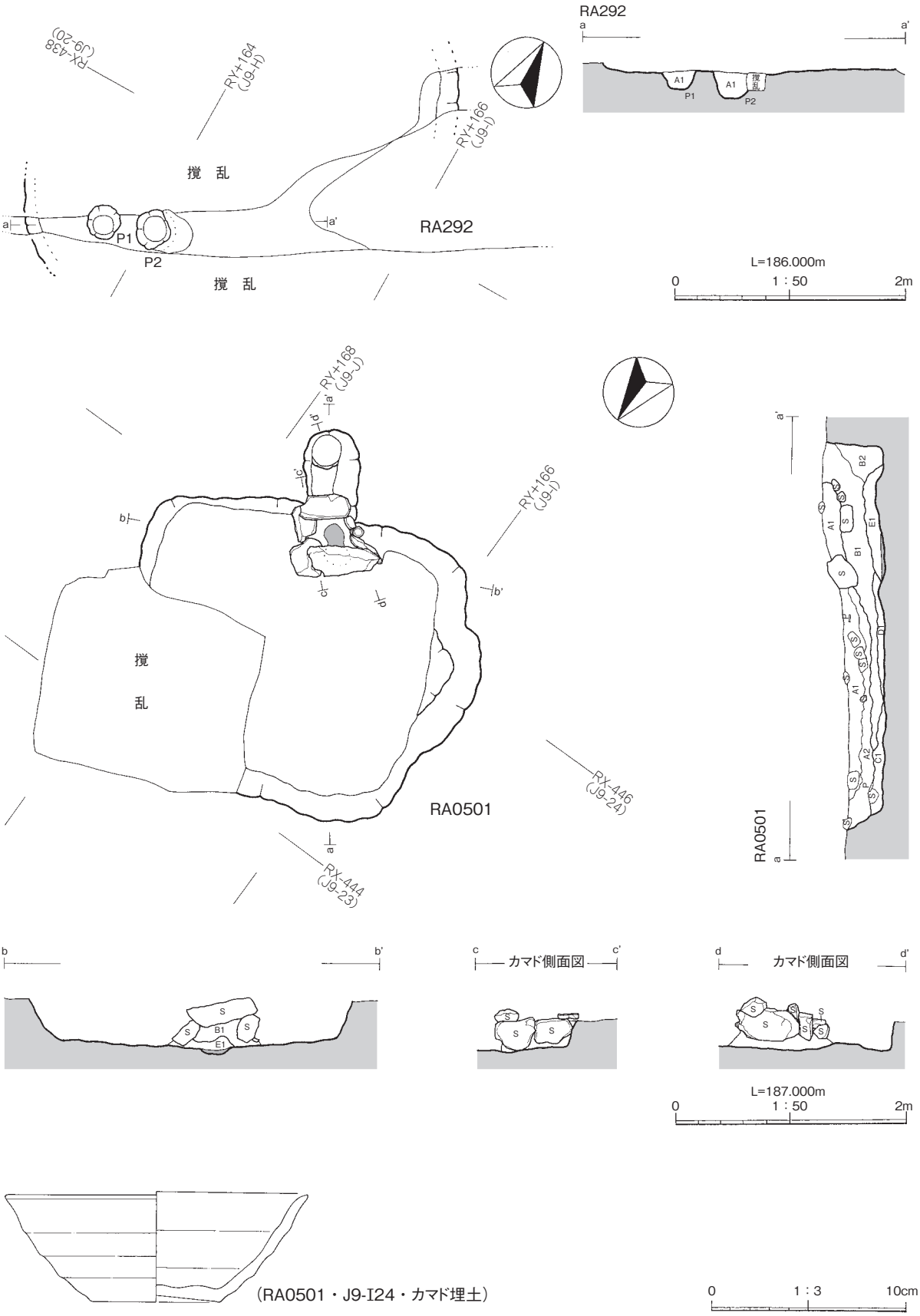
第 38 図　RA277（2）・281 竪穴住居跡、RD520 土坑（2）



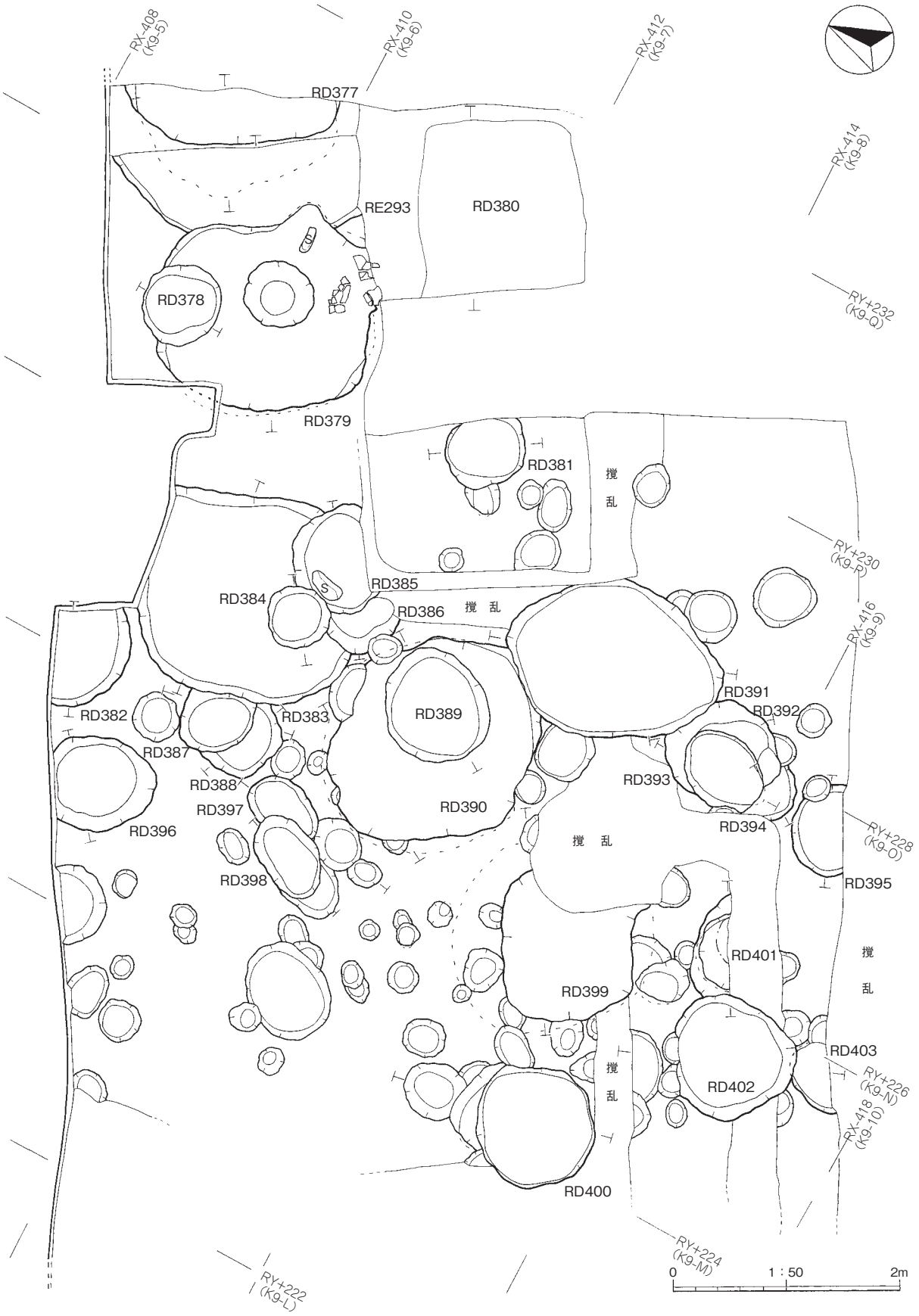
第 39 図　RA283・285・286 竪穴住居跡



第 40 図　RA287・289・290 竪穴住居跡、RE291 竪穴跡、RD517・529・530 土坑

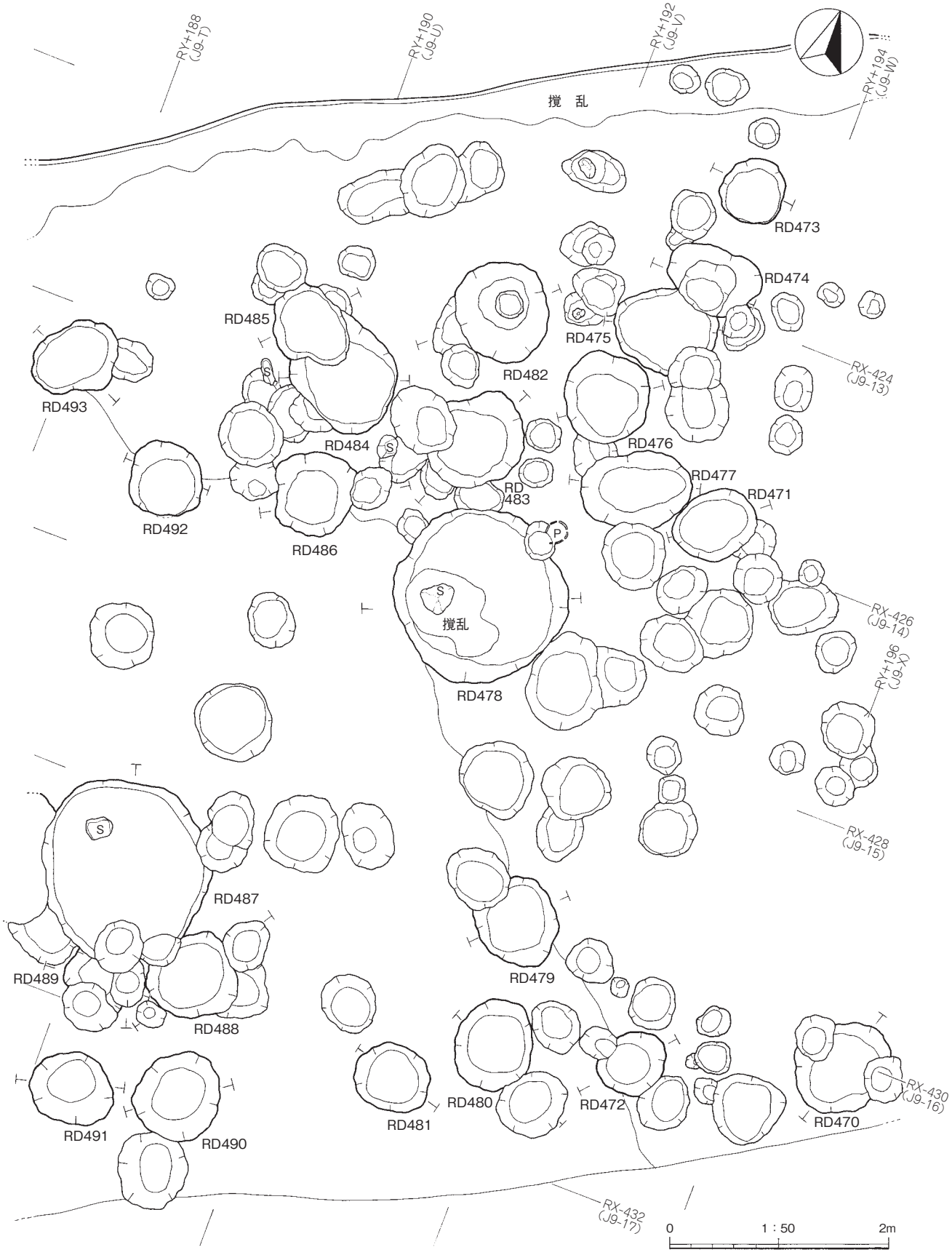


第 41 図　RA292・0501 竪穴住居跡、RA0501 竪穴住居跡出土遺物

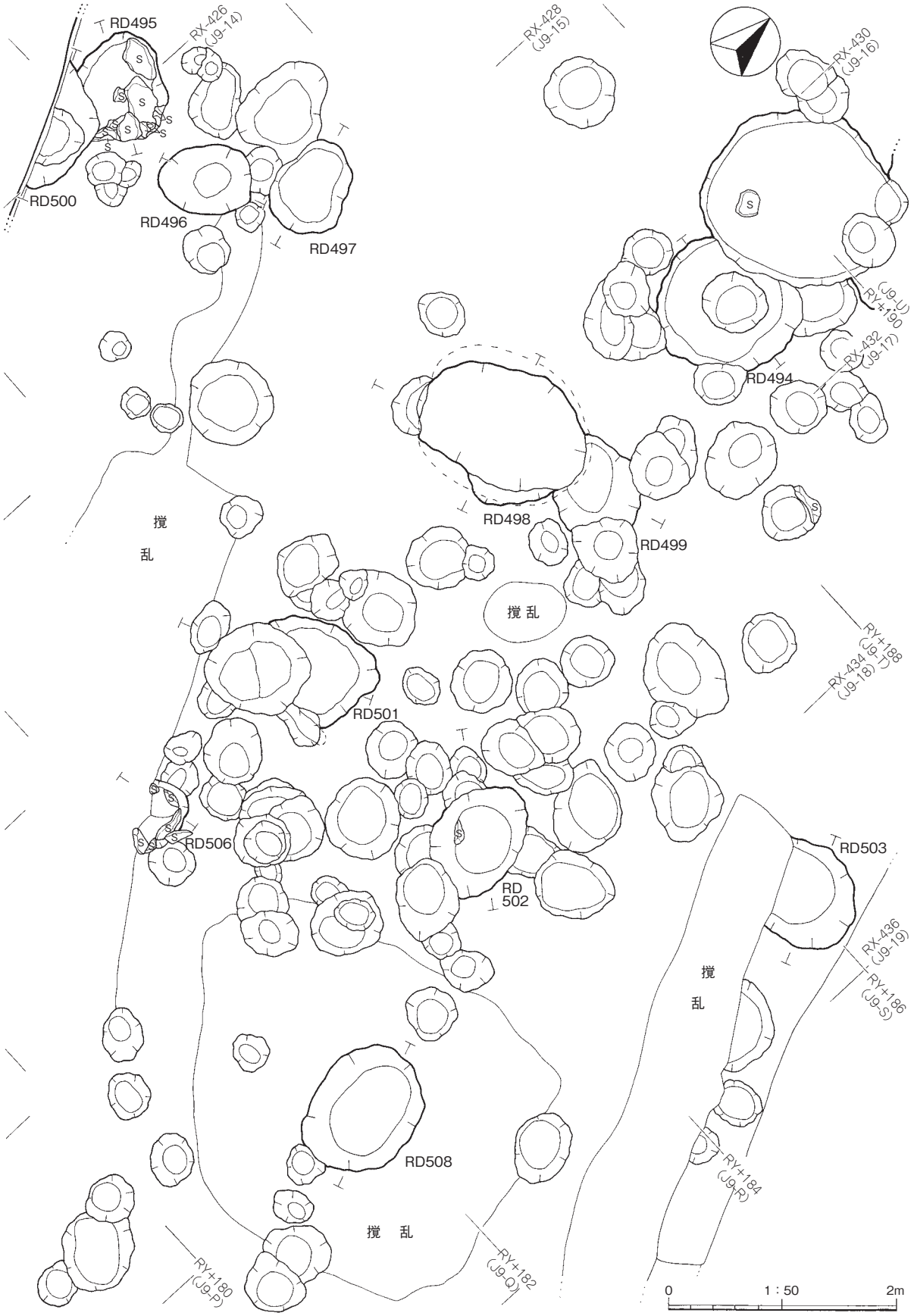


第 42 図　RE293 竪穴跡、RD377 ～ 403 土坑

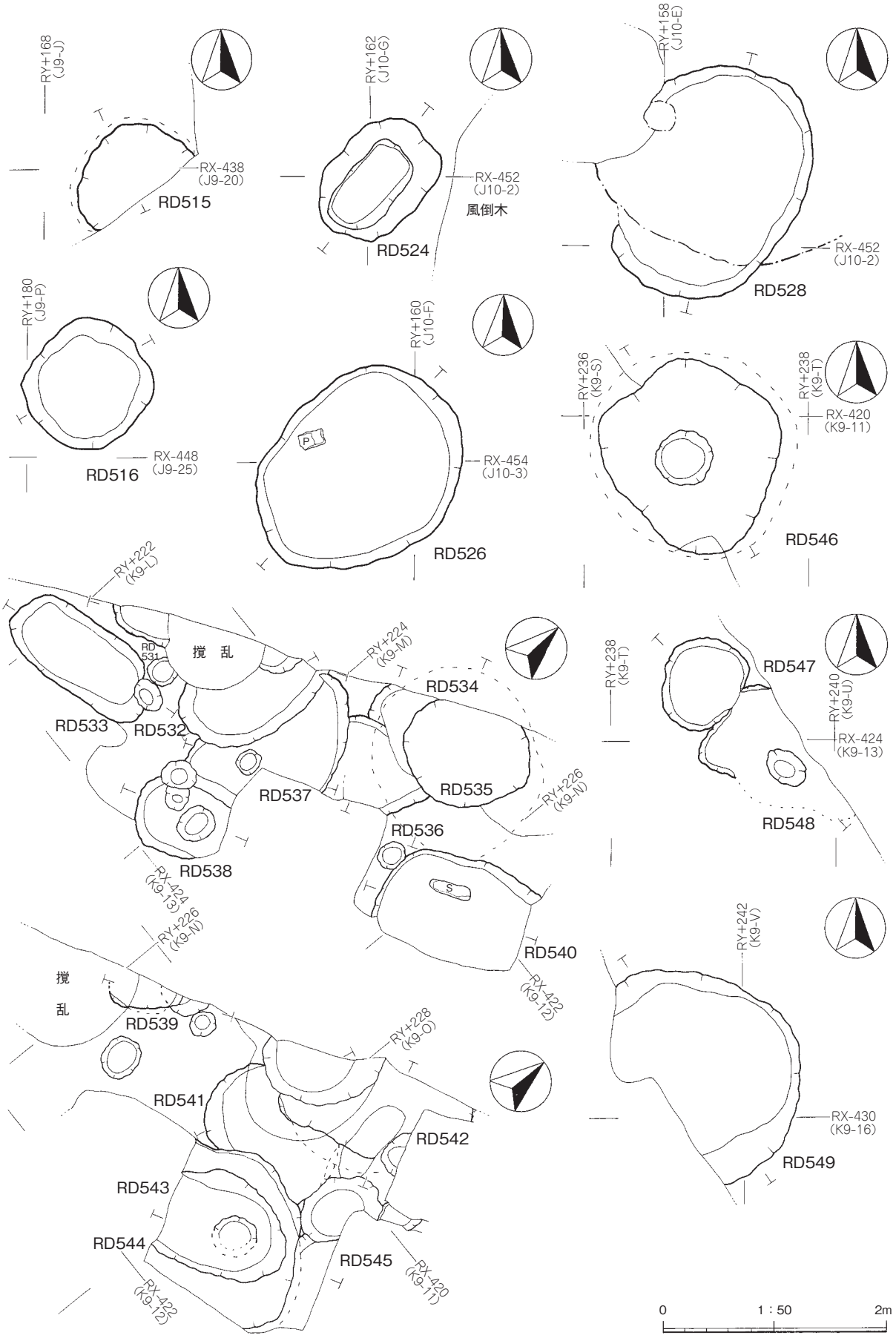
第 43 図　RD404 ～ 464 土坑



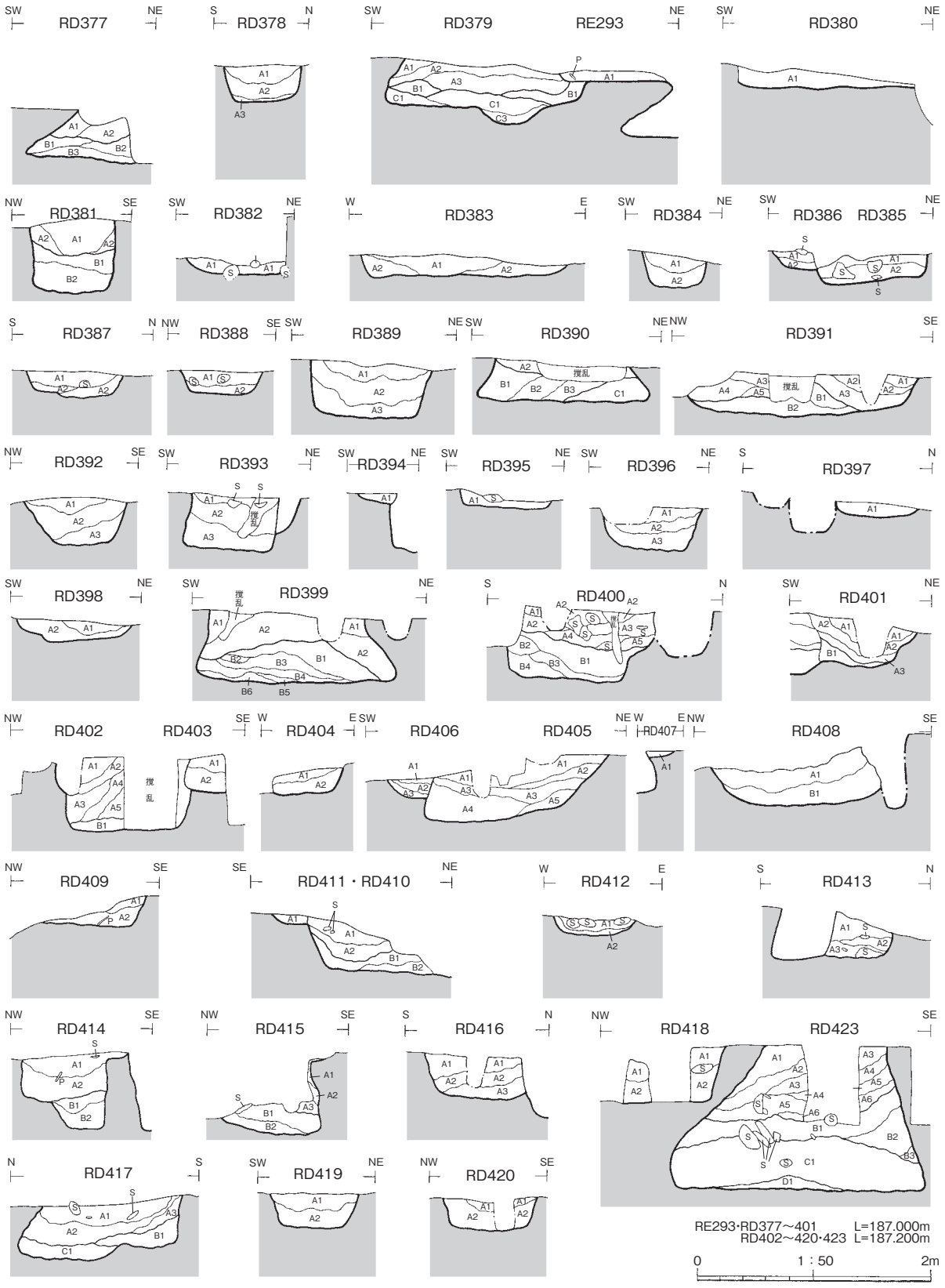
第 44 図　RD470 ～ 493 土坑



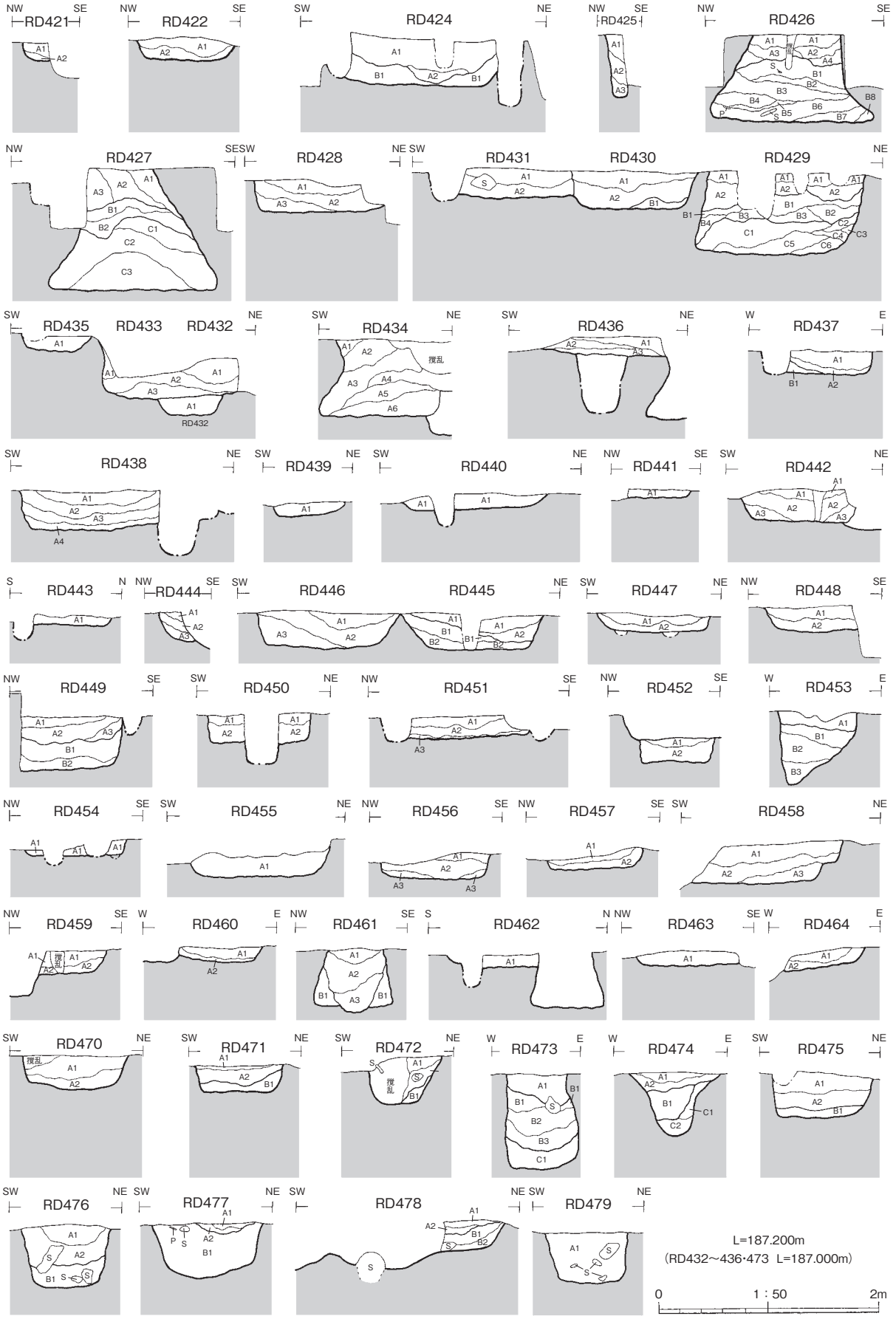
第 45 図　RD494 ～ 503・506・508 土坑



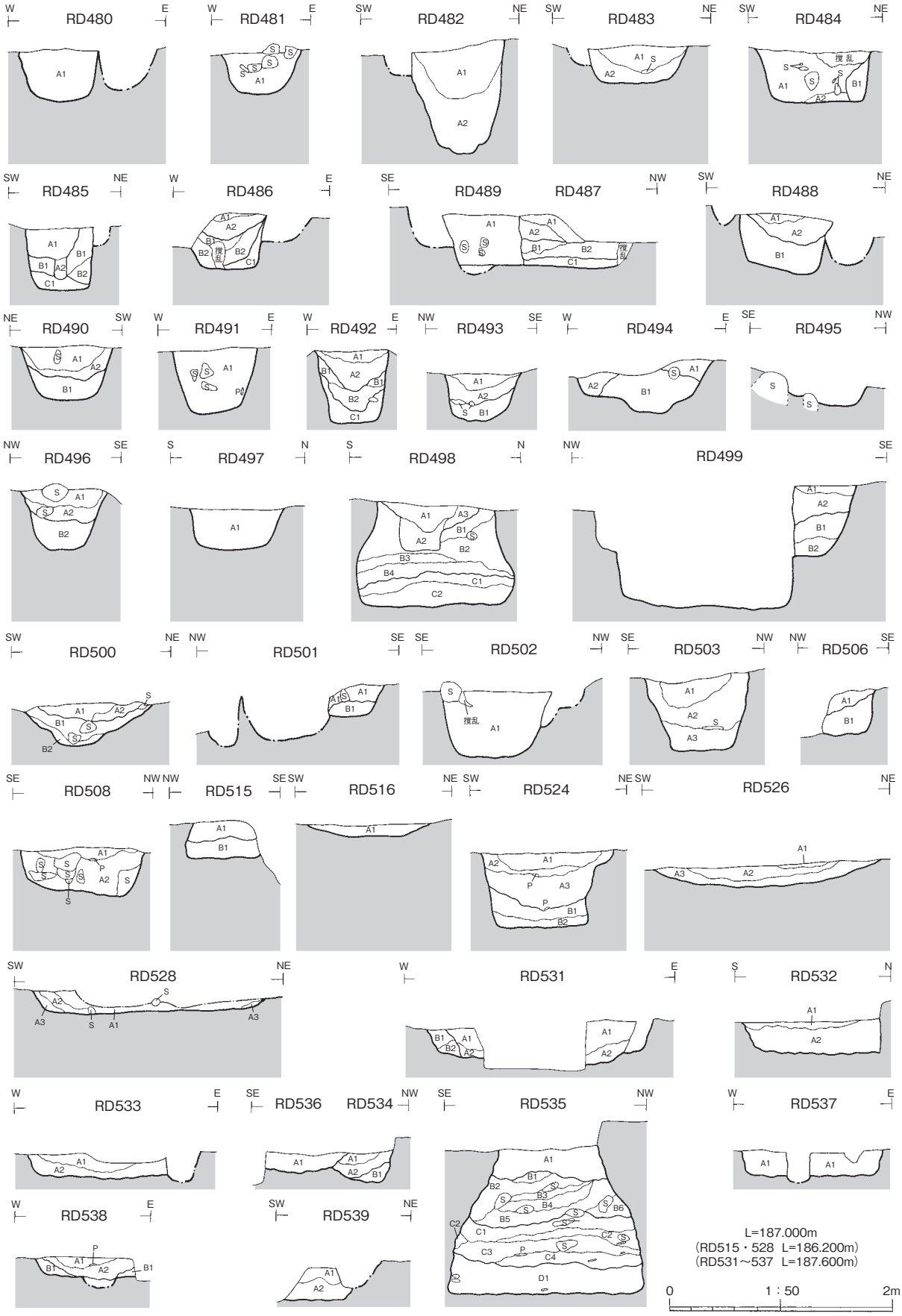
第 46 図　RD515・516・524・526・528・531 ～ 549 土坑



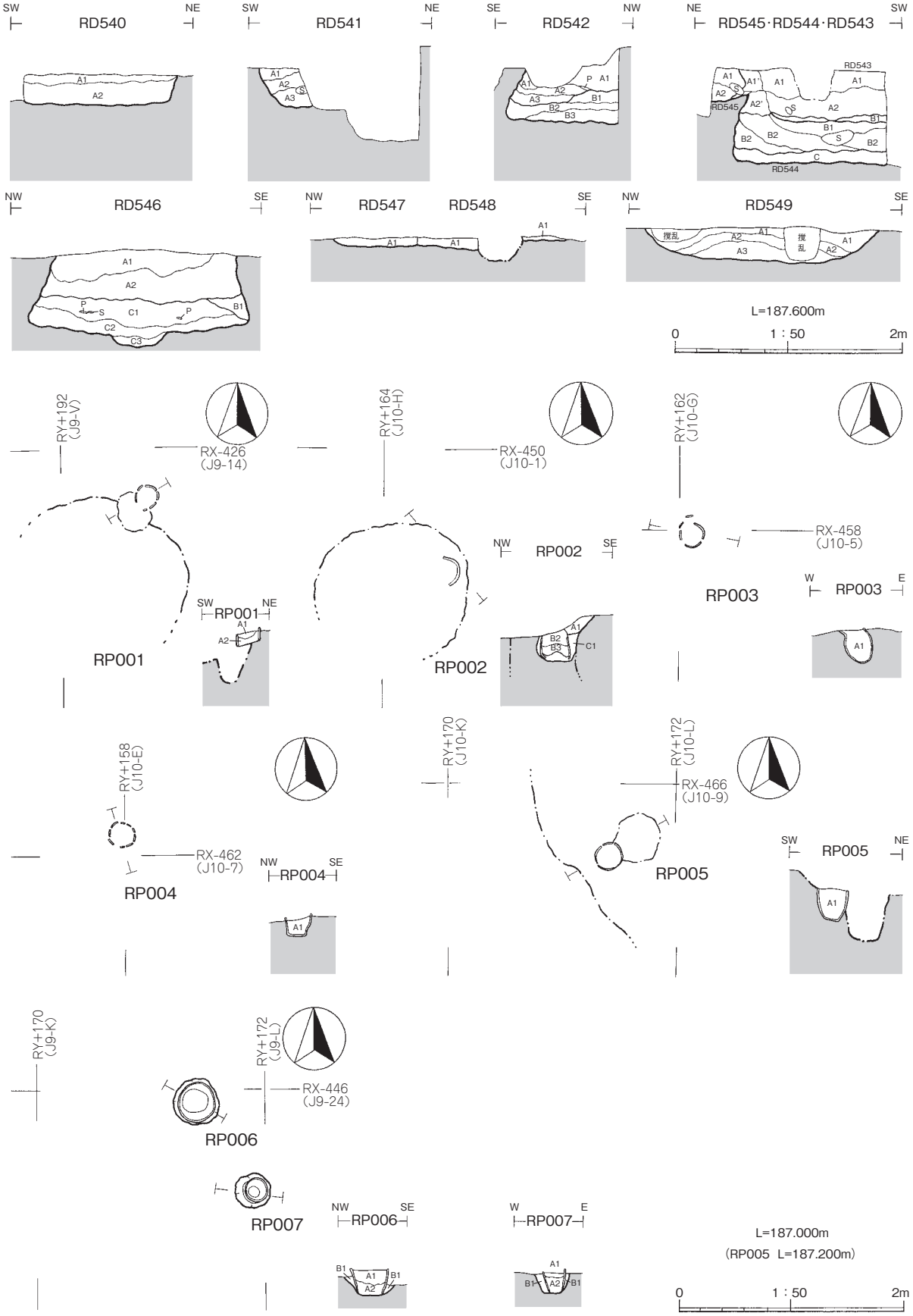
第 47 図　RE293 竪穴跡、RD377 ～ 420・423 土坑断面



第 48 図　RD421・422・424 ～ 464・470 ～ 479 土坑断面

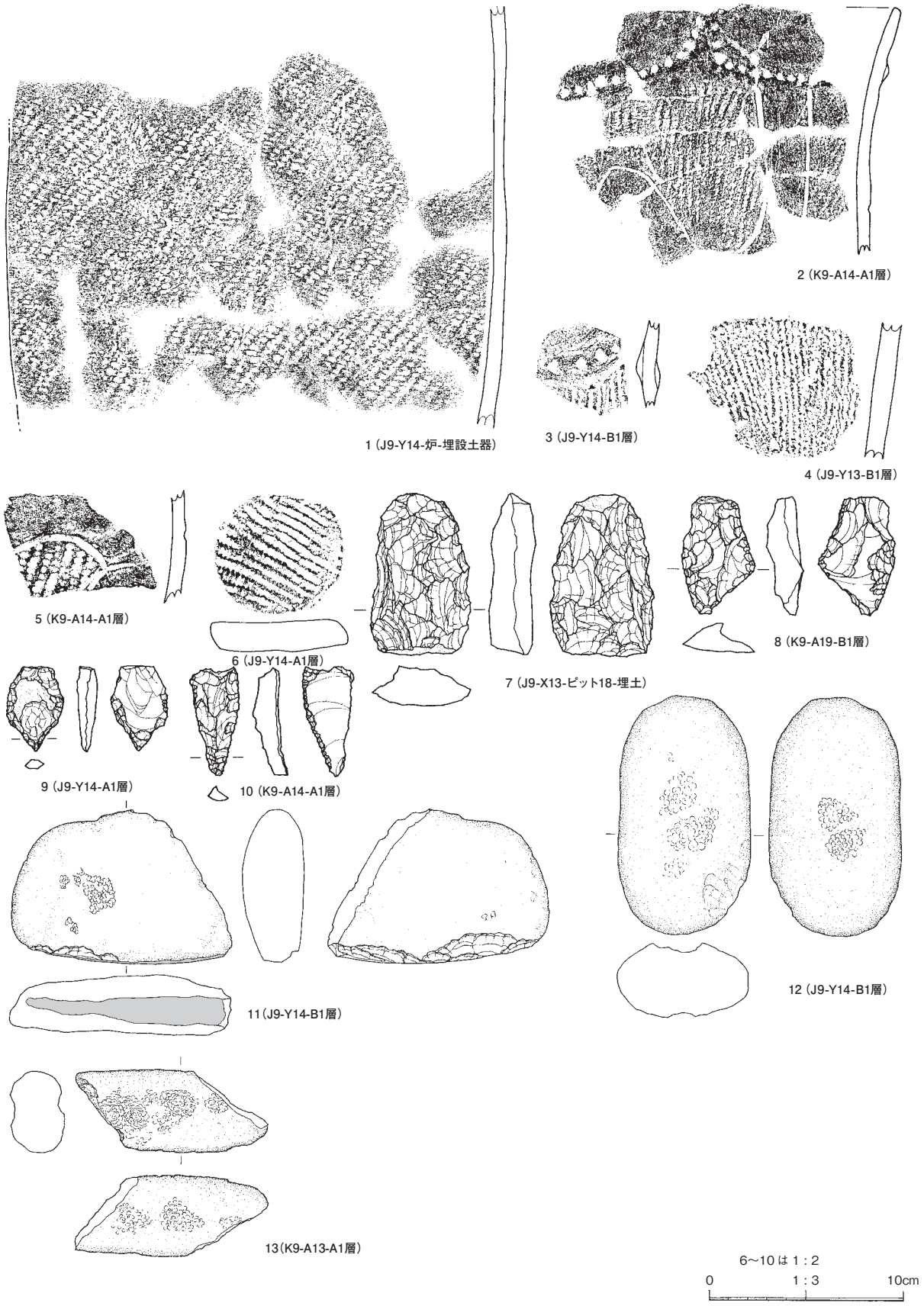


第 49 図　RD480 ～ 503・506・508・515・516・524・526・528・531 ～ 539 土坑断面

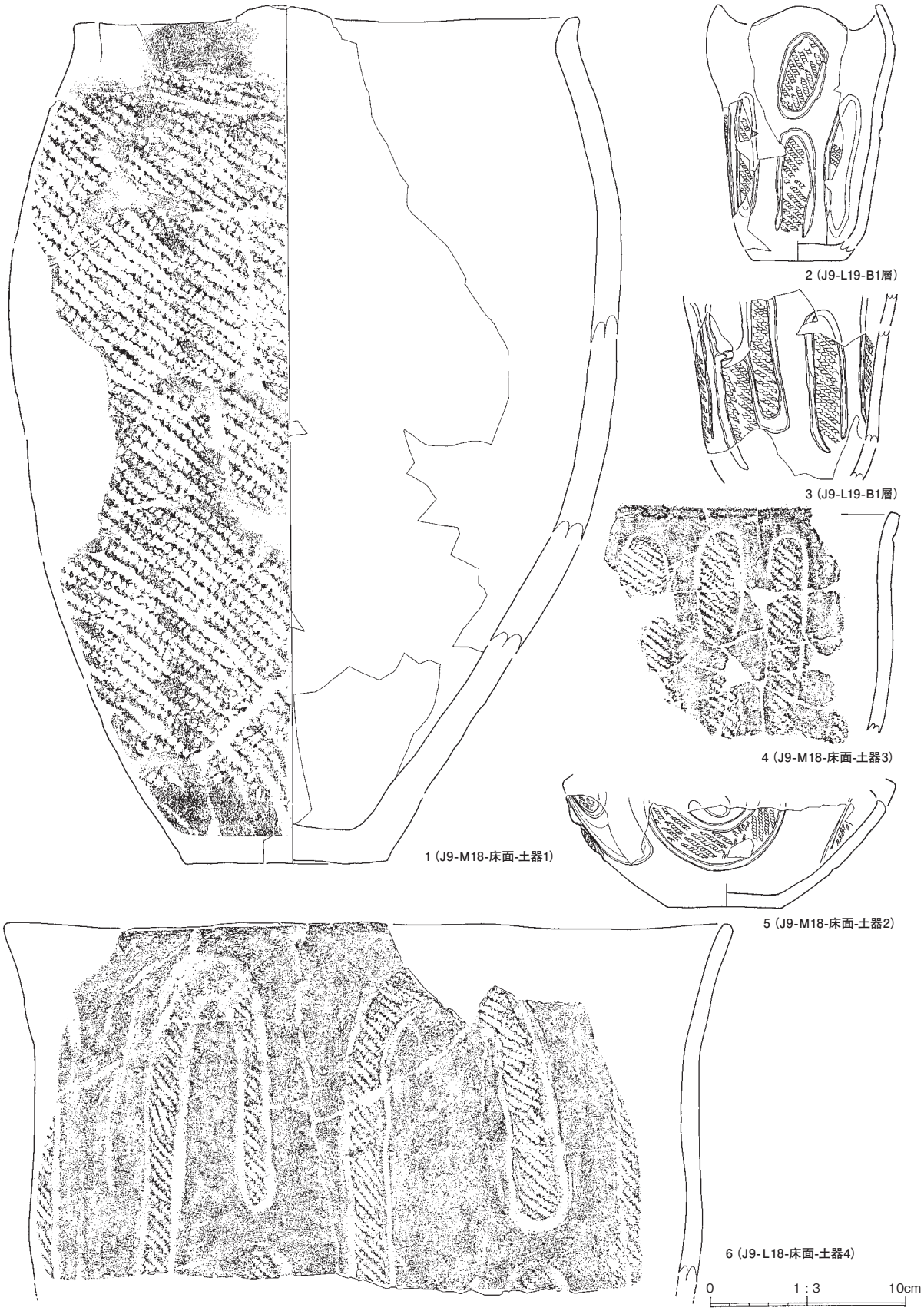


第 50 図　RD540 ～ 549 土坑断面、RP001 ～ 007 埋設土器

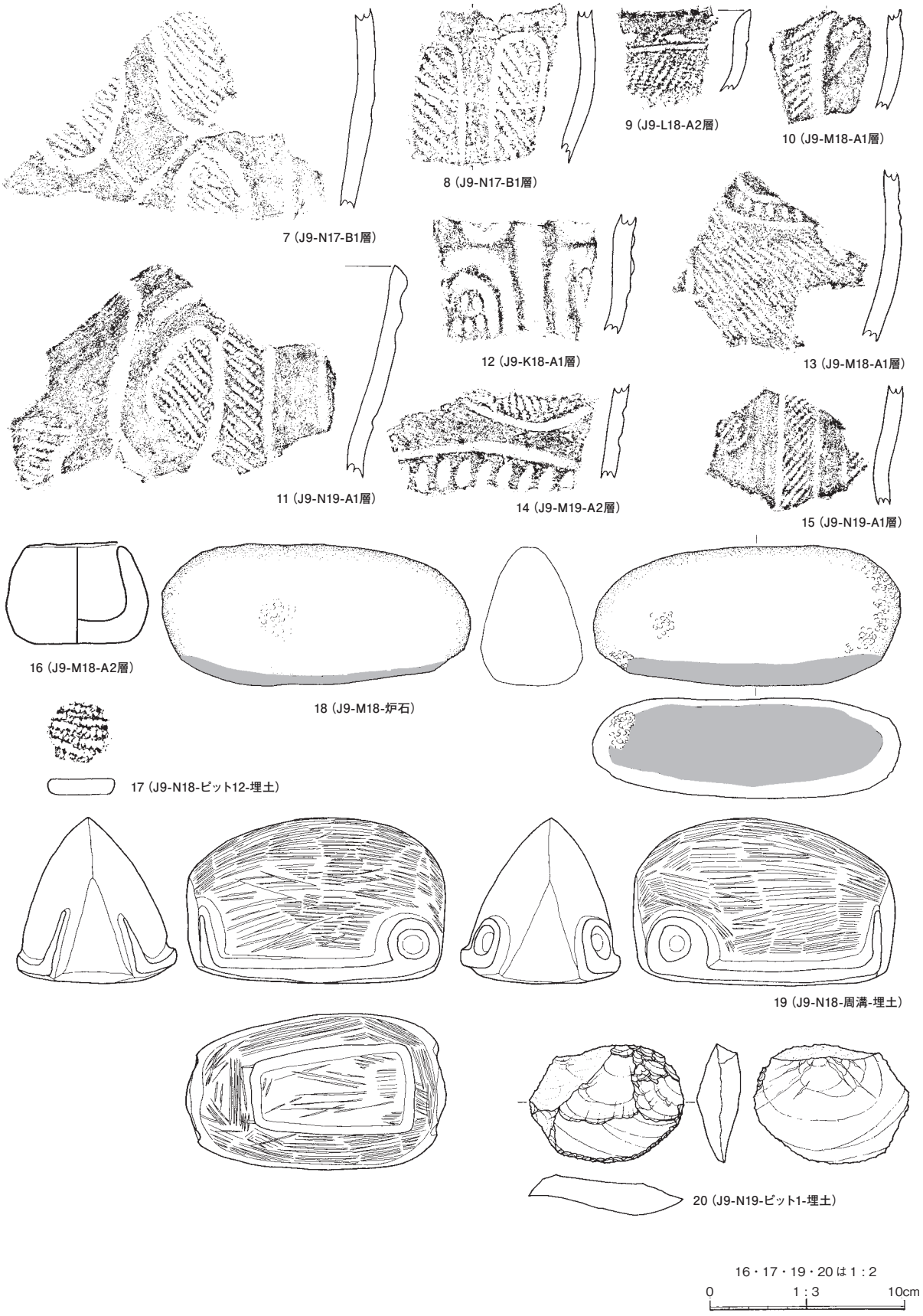
遺　物　図　版



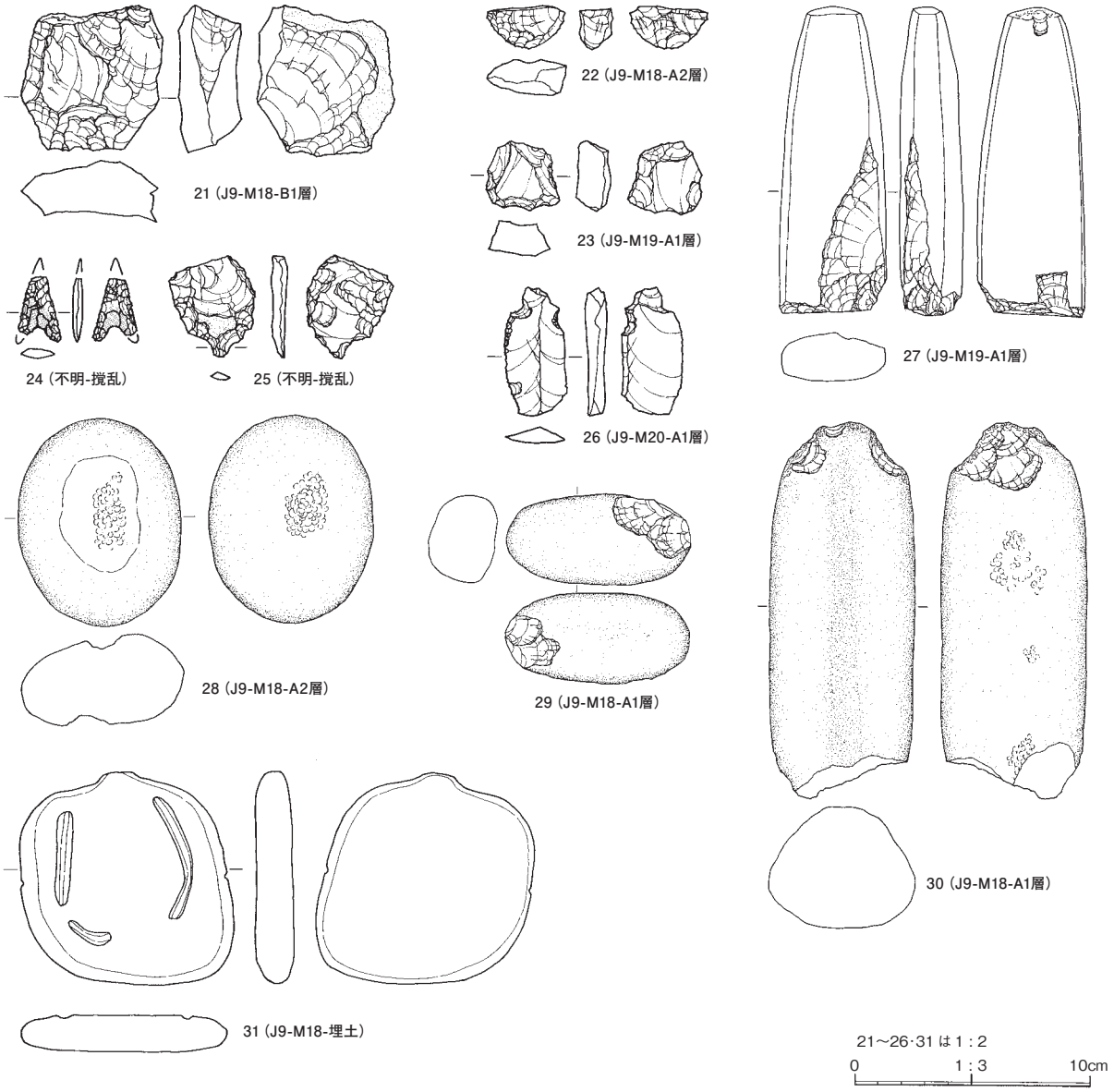
第51図　RA221竪穴住居跡出土遺物



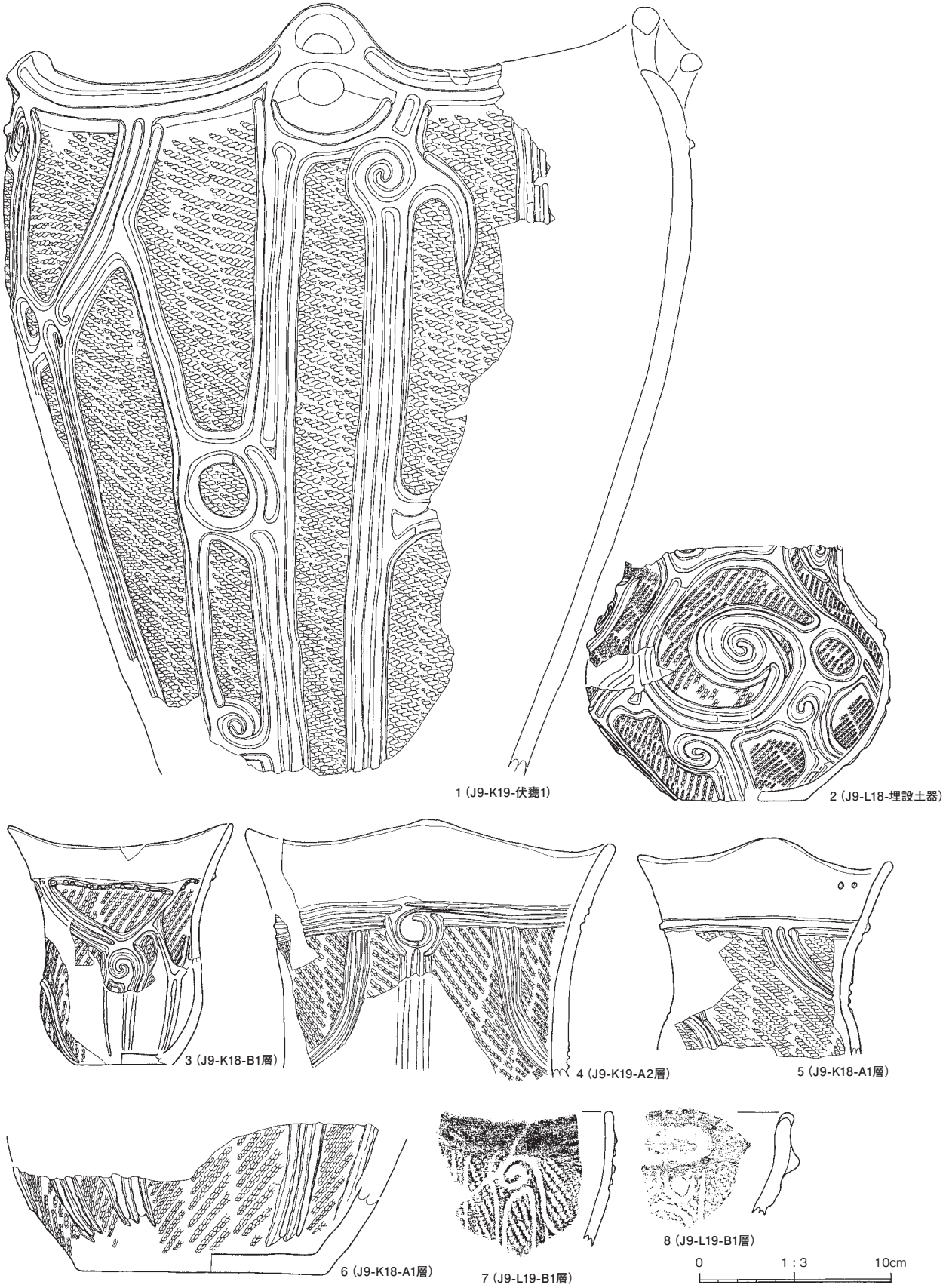
第 52 図　RA222 竪穴住居跡出土遺物（1）



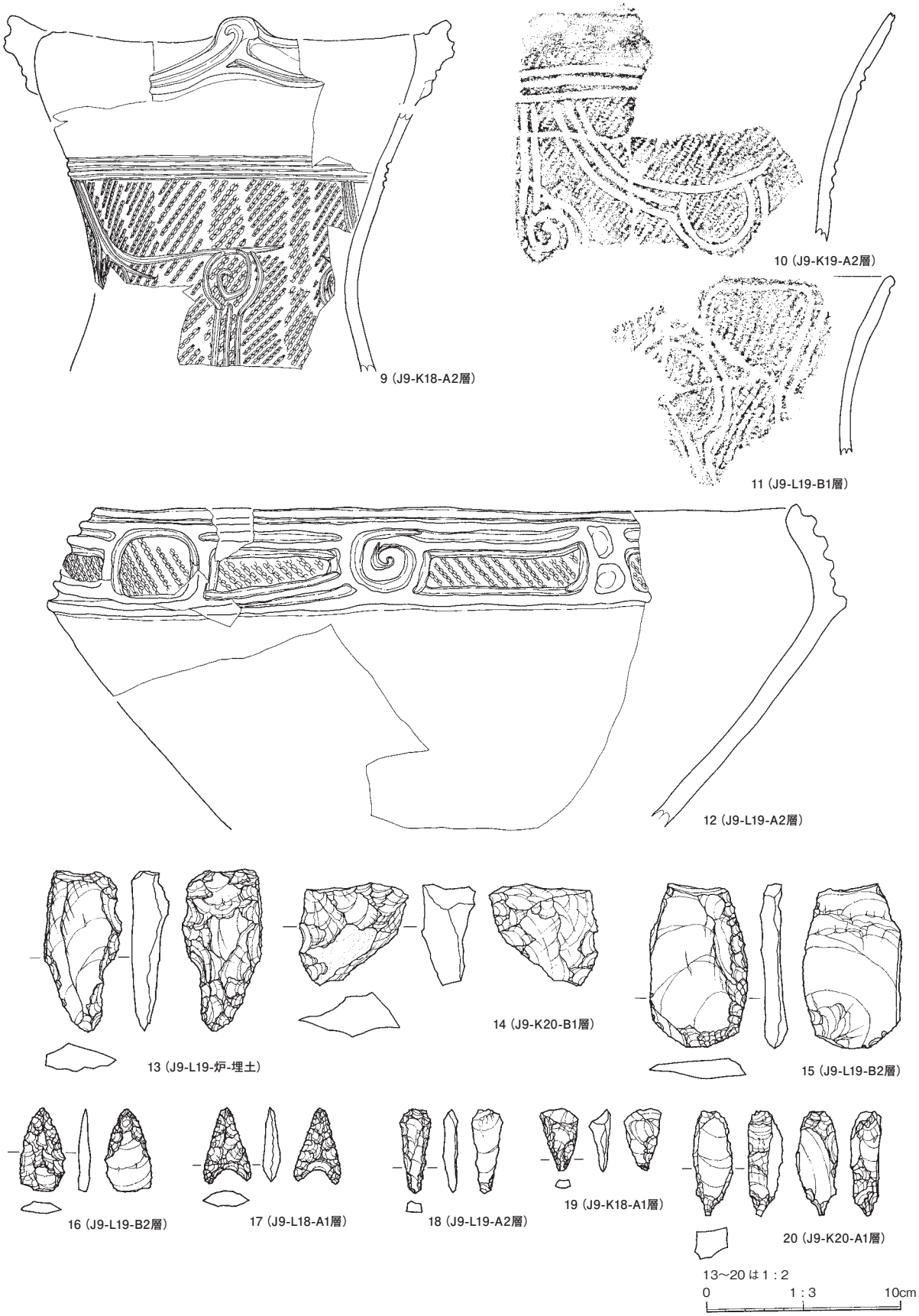
第53図　RA222竪穴住居跡出土遺物（2）



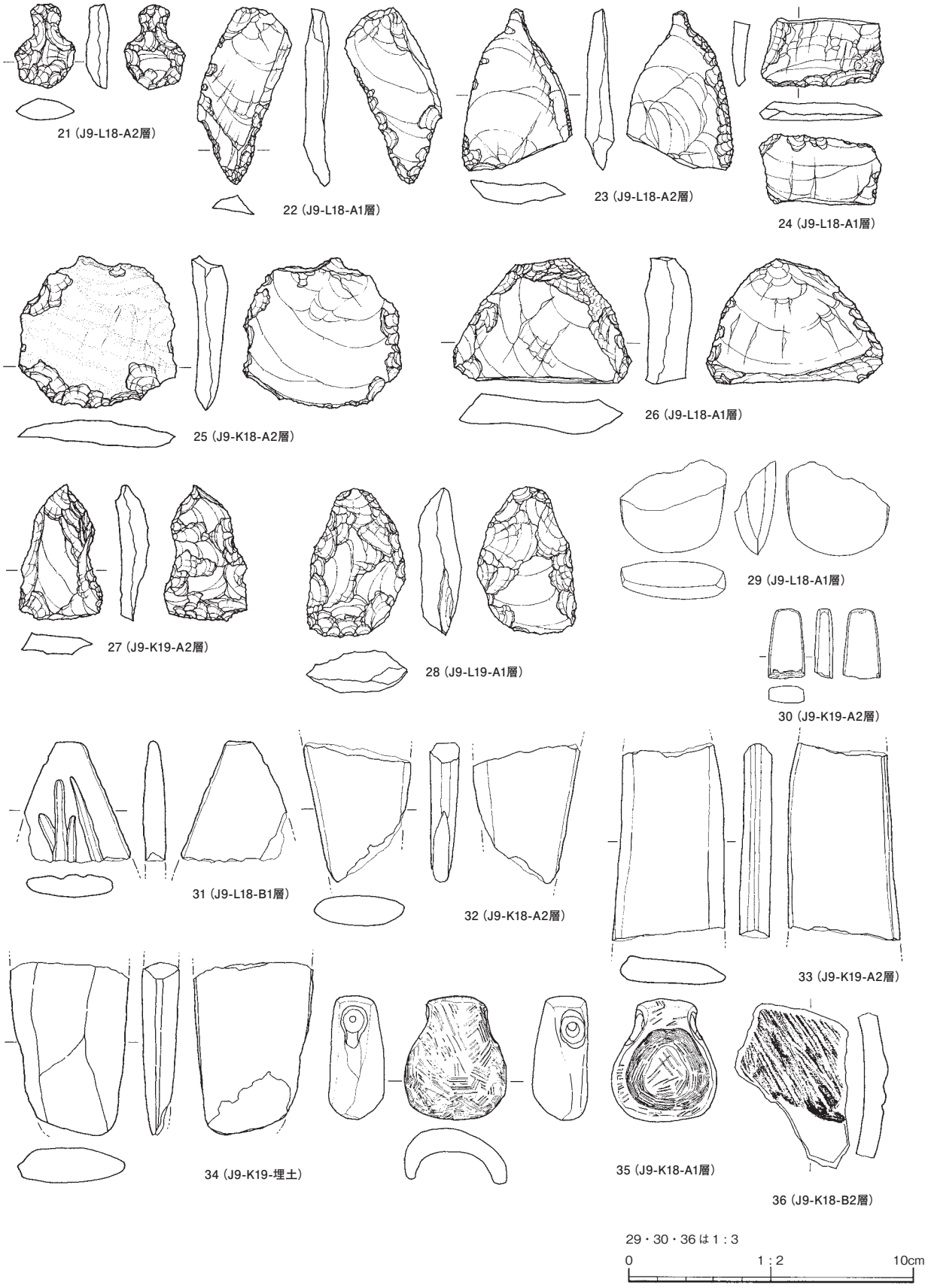
第54図　RA222竪穴住居跡出土遺物（3）



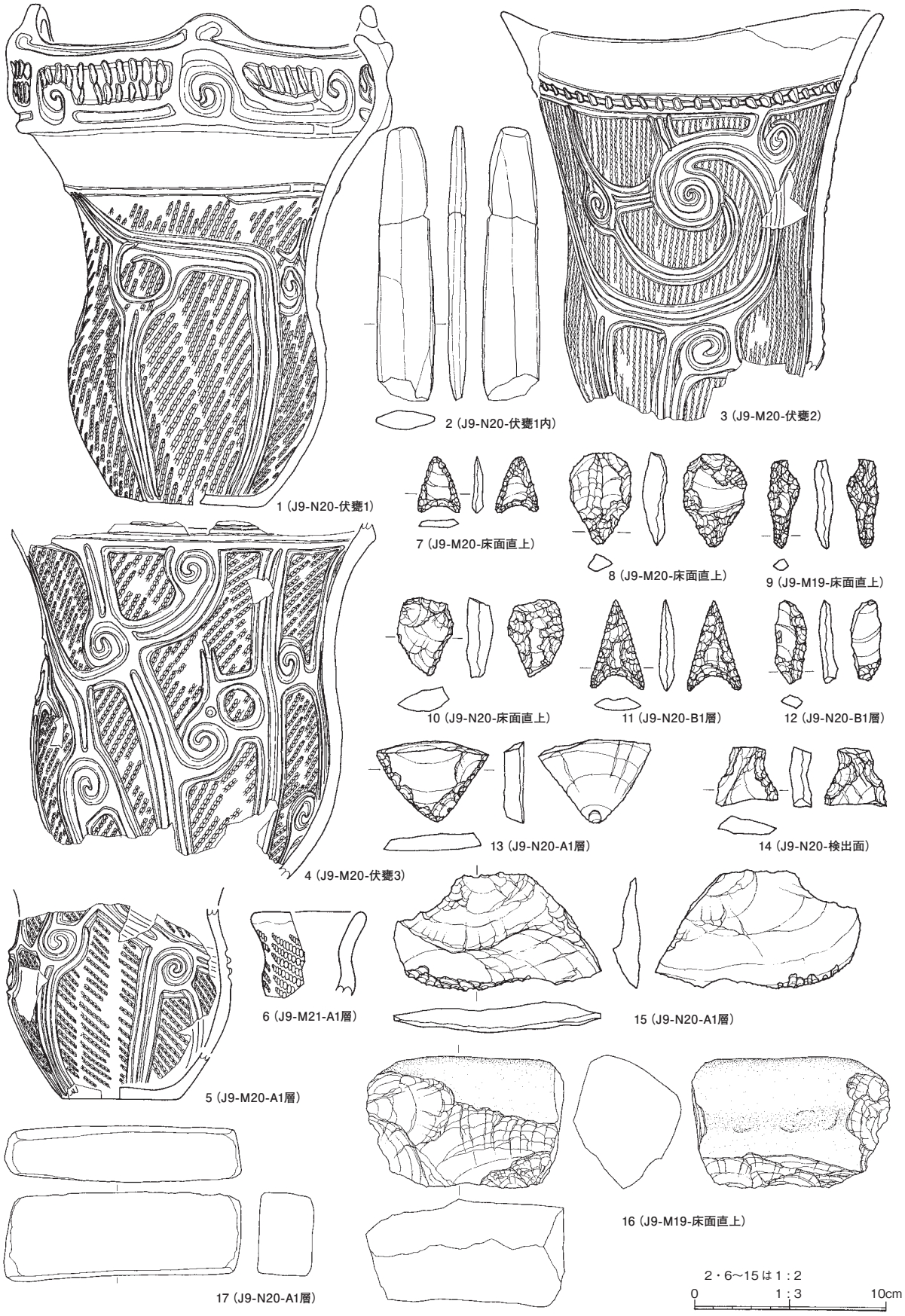
第 55 図　RA223 竪穴住居跡出土遺物（1）



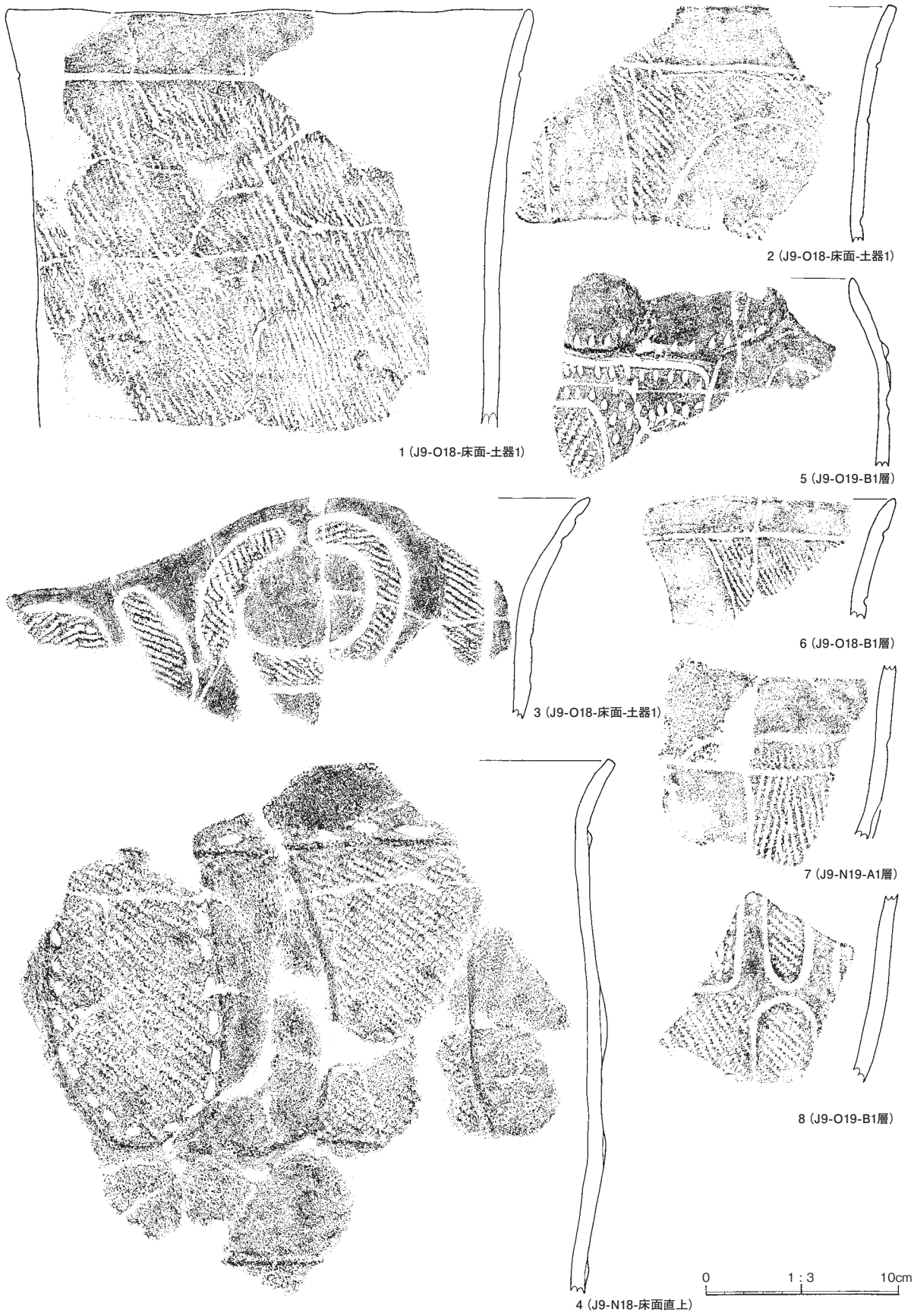
第56図　RA223竪穴住居跡出土遺物（2）



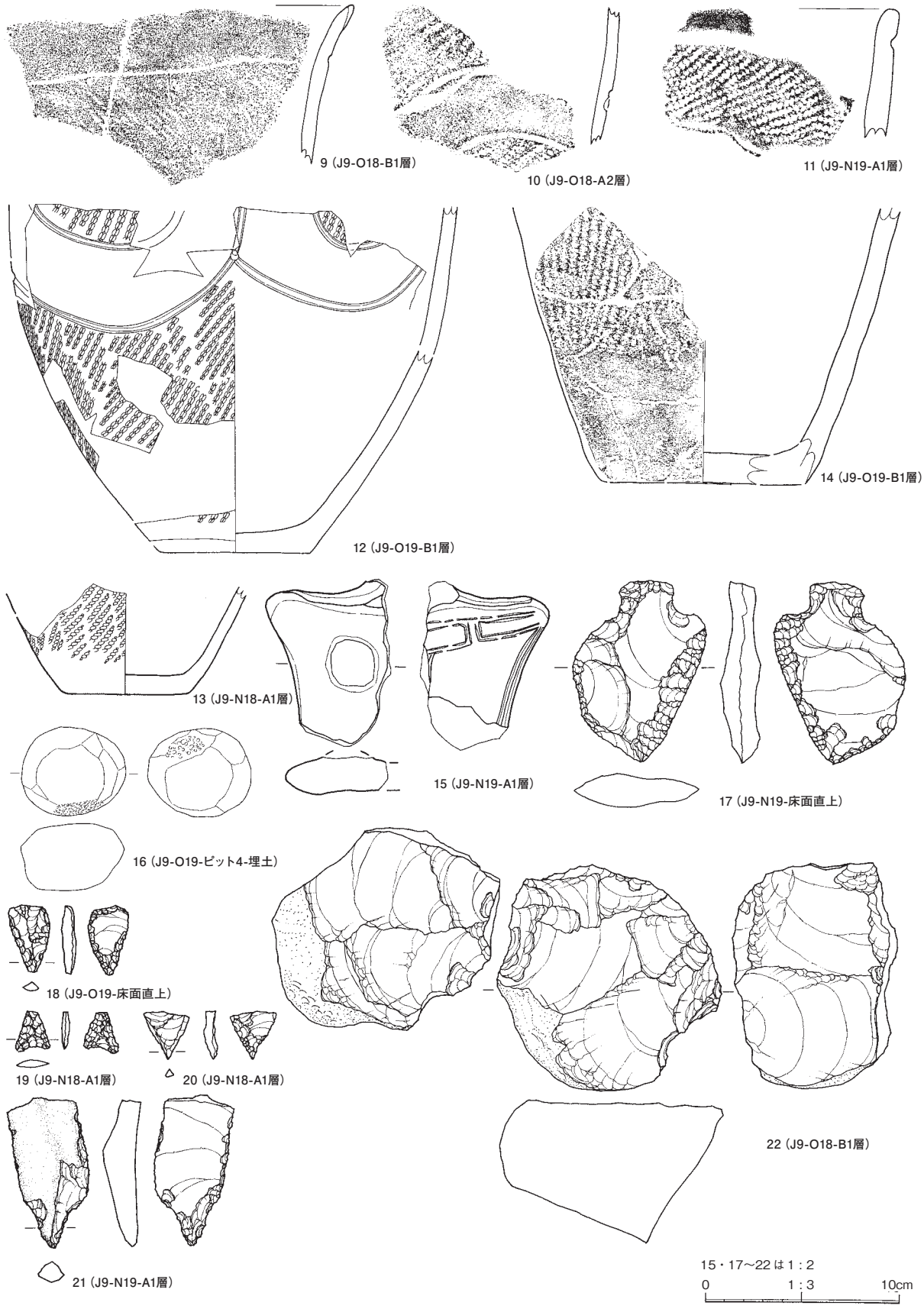
第 57 図　RA223 竪穴住居跡出土遺物（3）



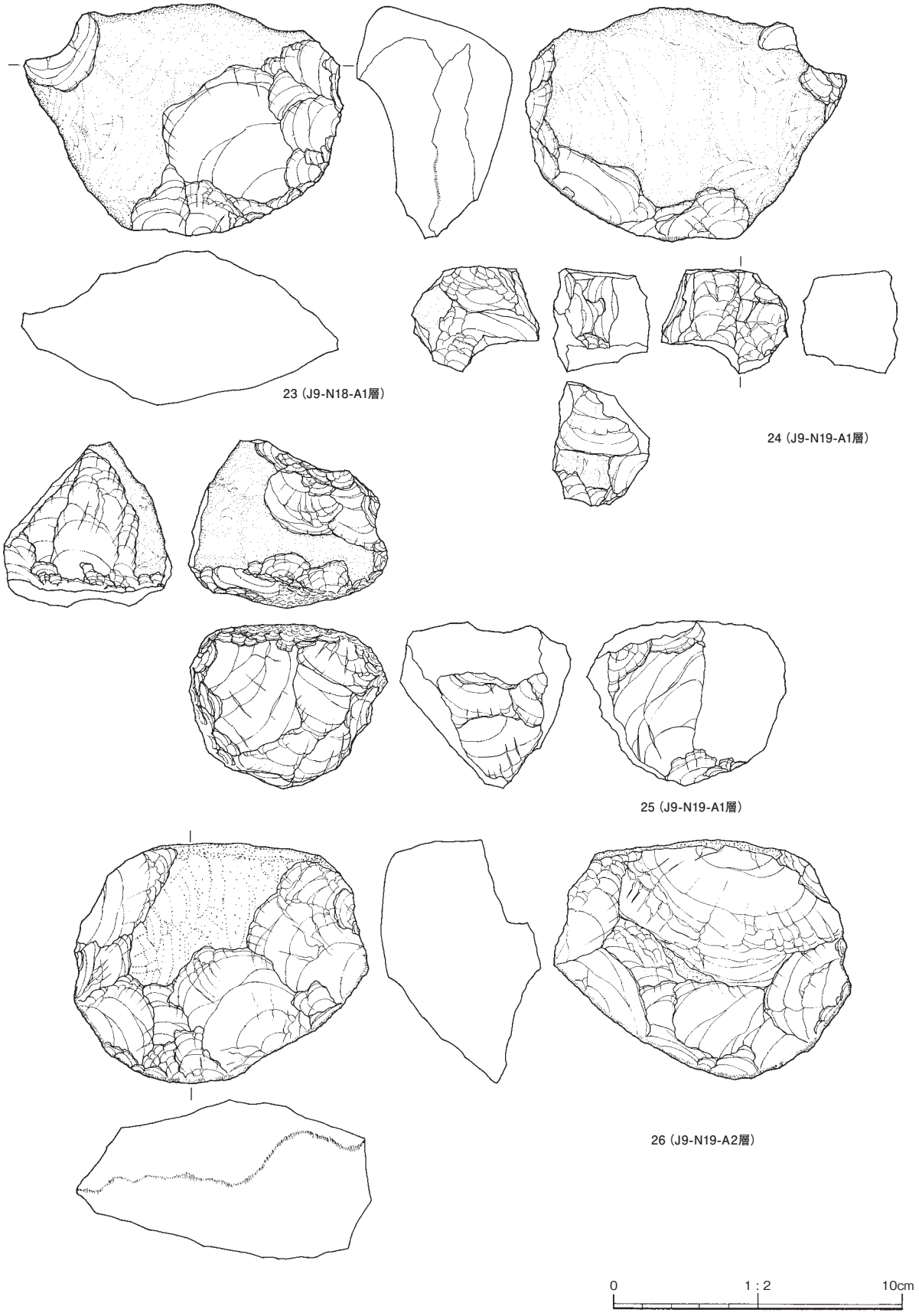
第 58 図　RA224 竪穴住居跡出土遺物



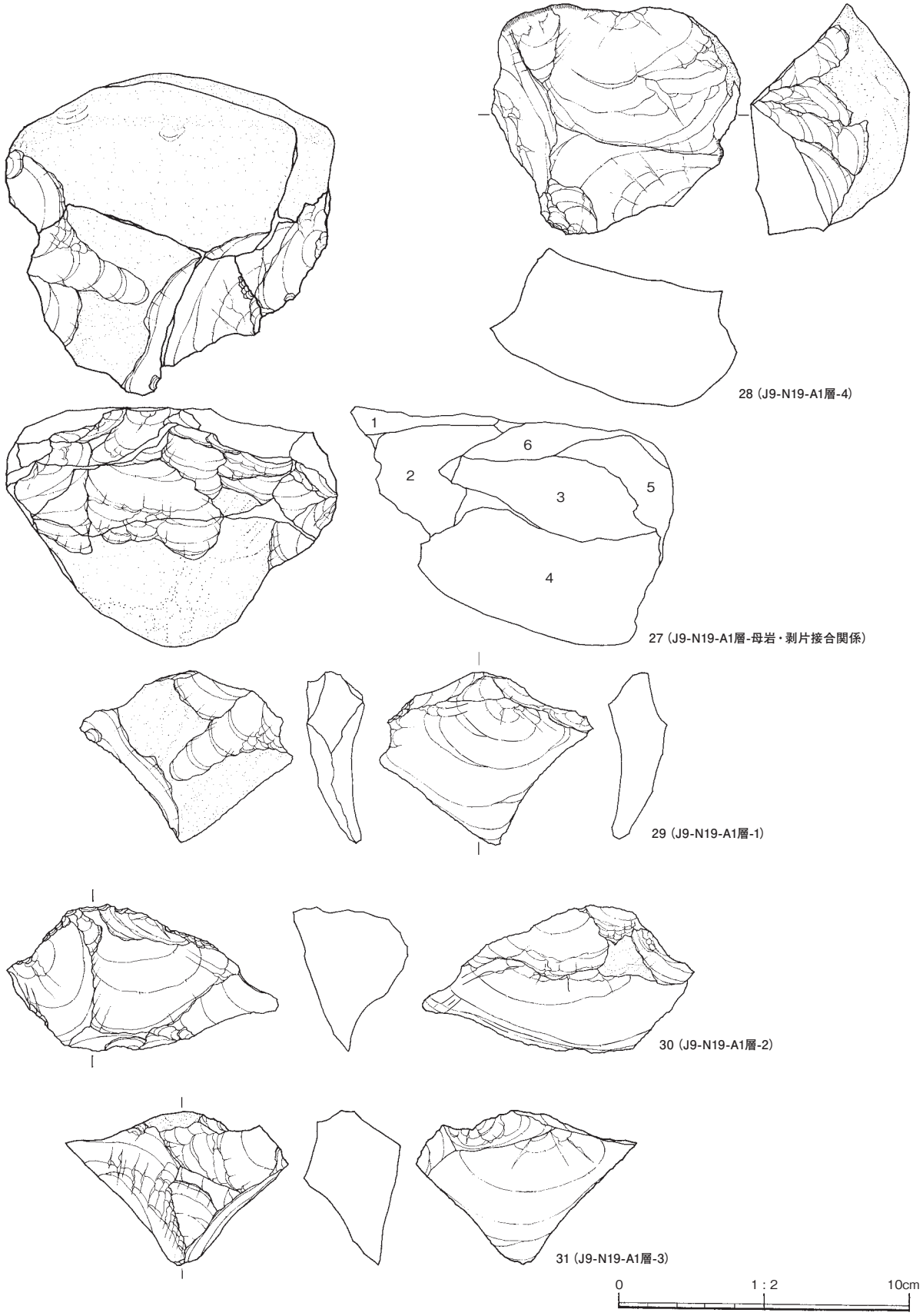
第 59 図　RA225 竪穴住居跡出土遺物（1）



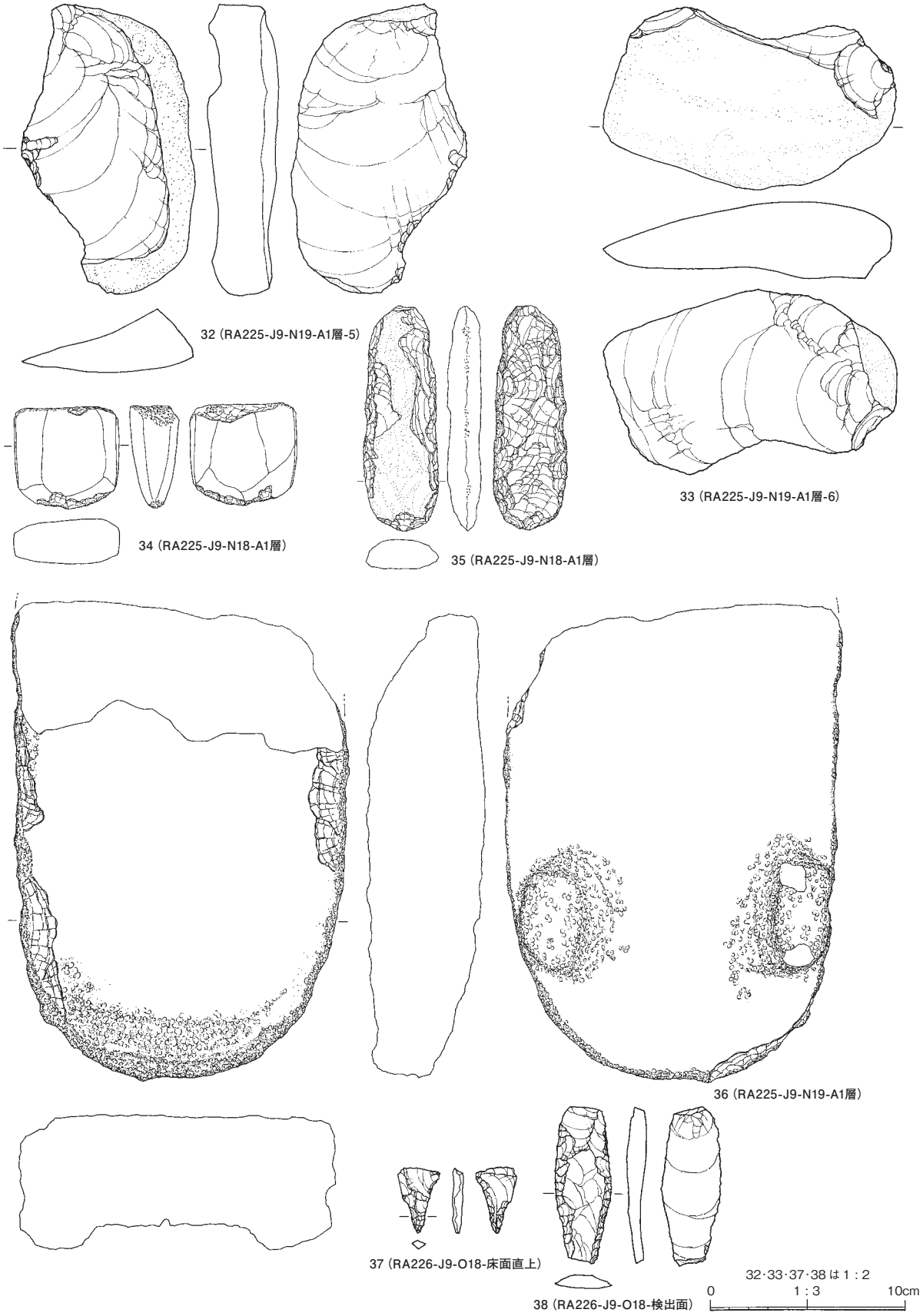
第60図　RA225竪穴住居跡出土遺物（2）



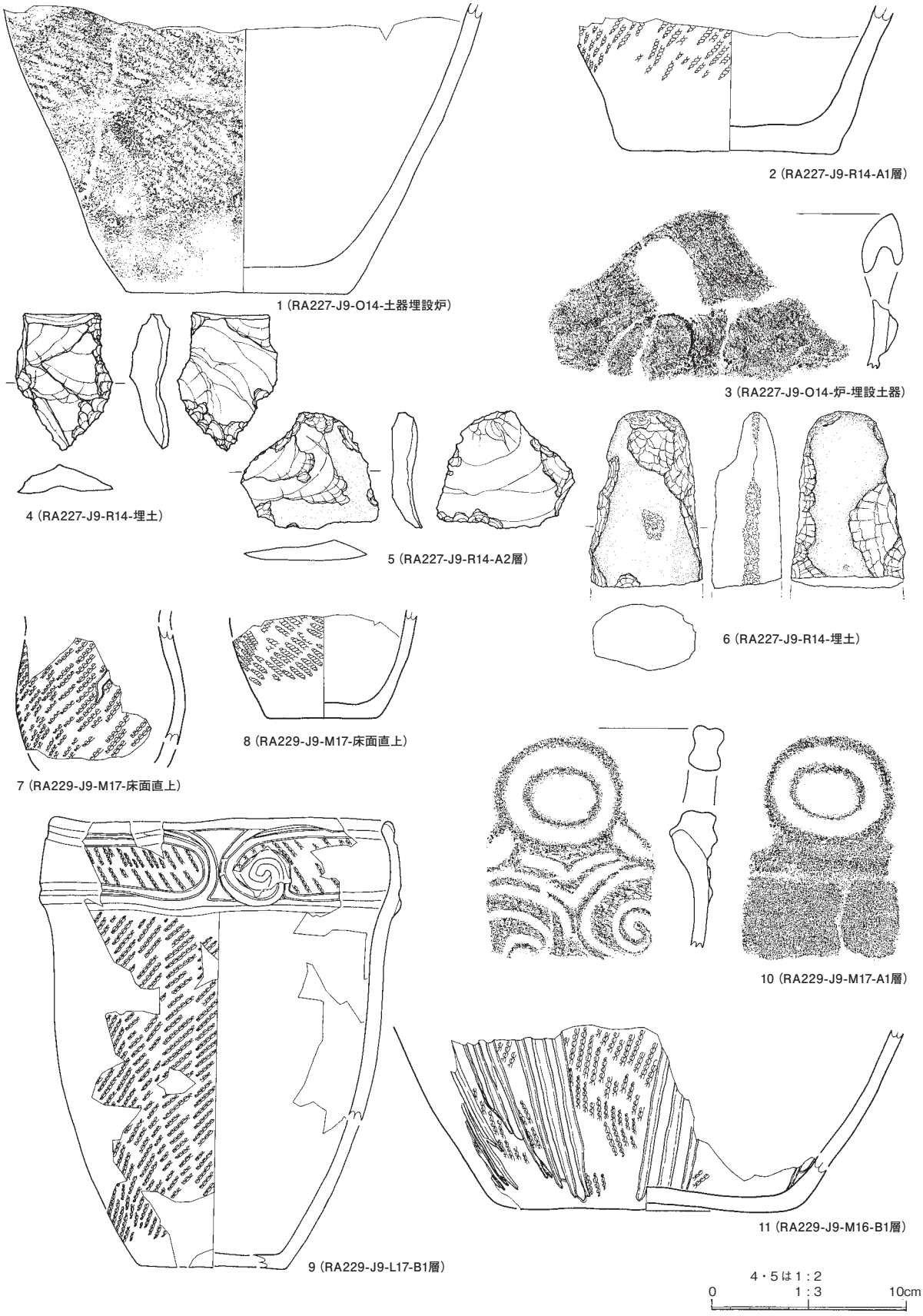
第 61 図　RA225 竪穴住居跡出土遺物（3）



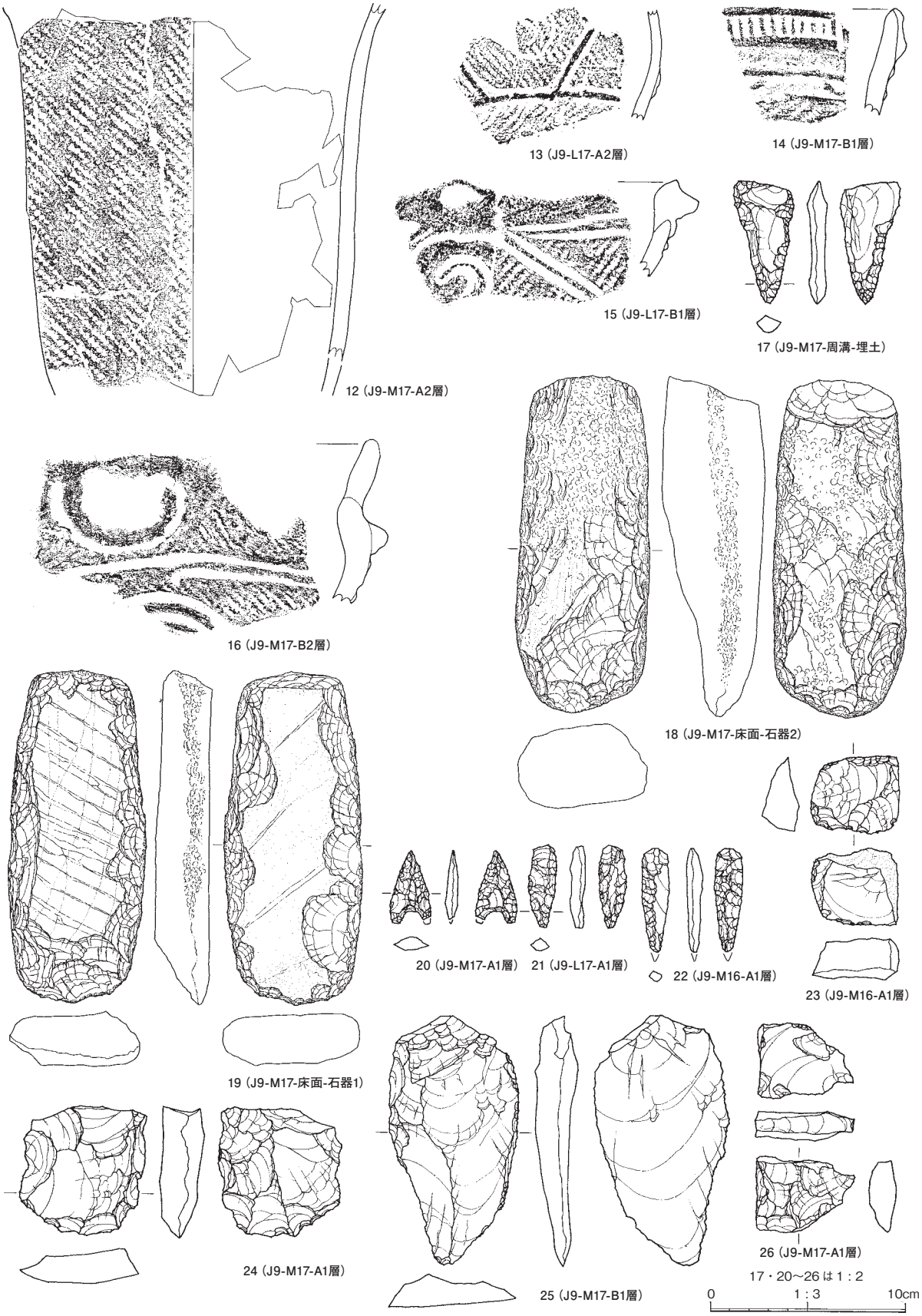
第 62 図　RA225 竪穴住居跡出土遺物（4）



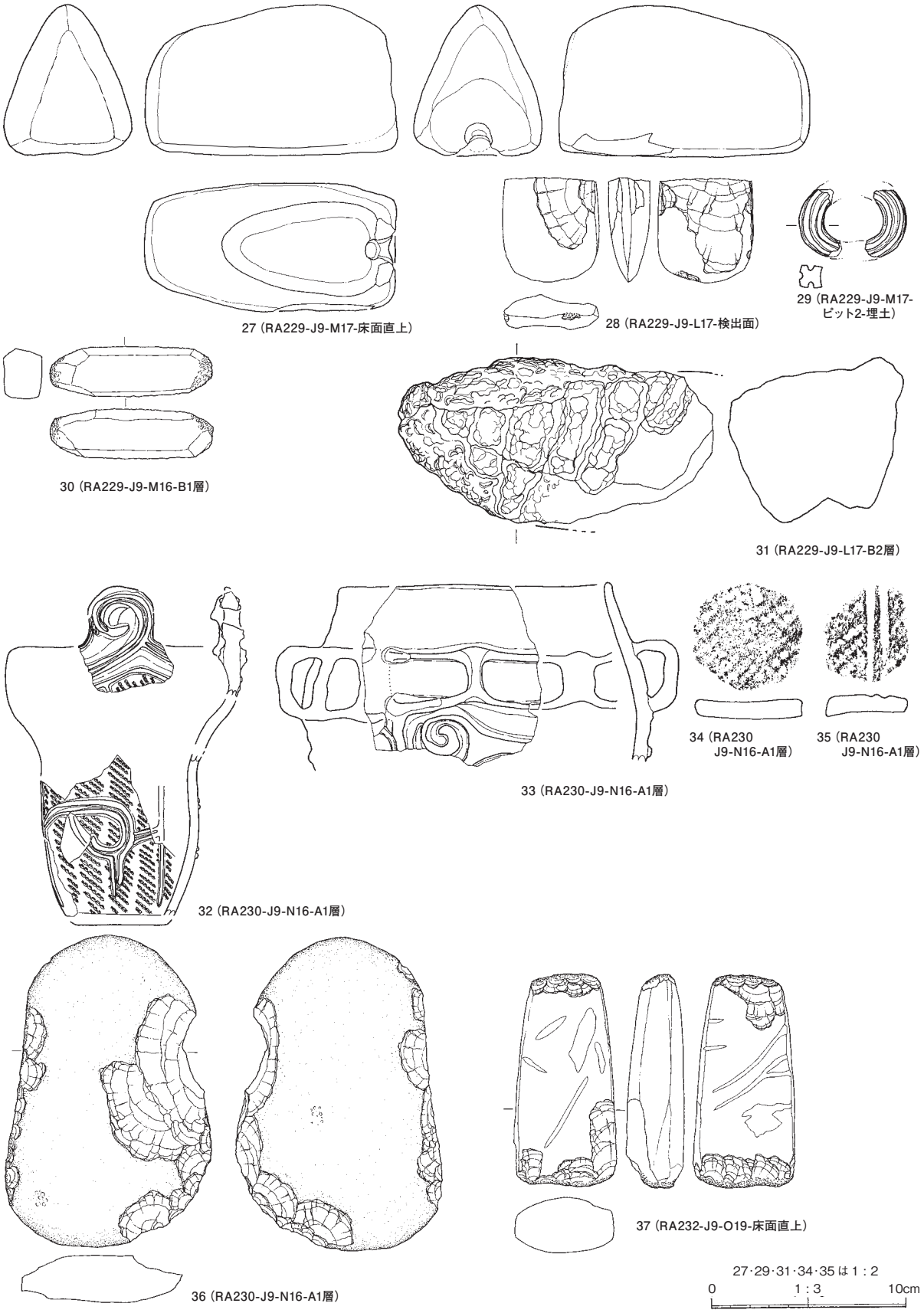
第63図　RA225（5）・226竪穴住居跡出土遺物



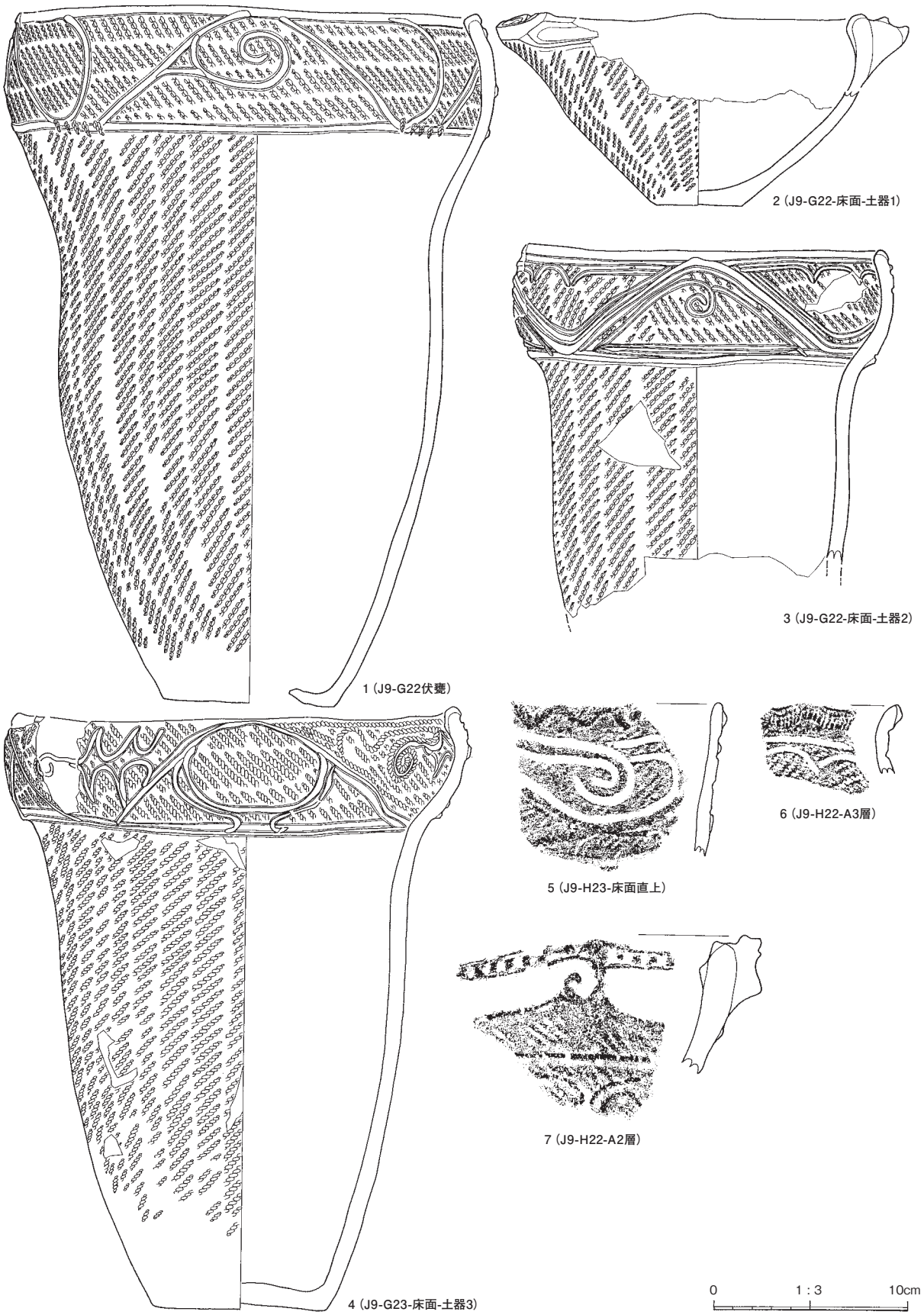
第 64 図　RA227・229（1）竪穴住居跡出土遺物



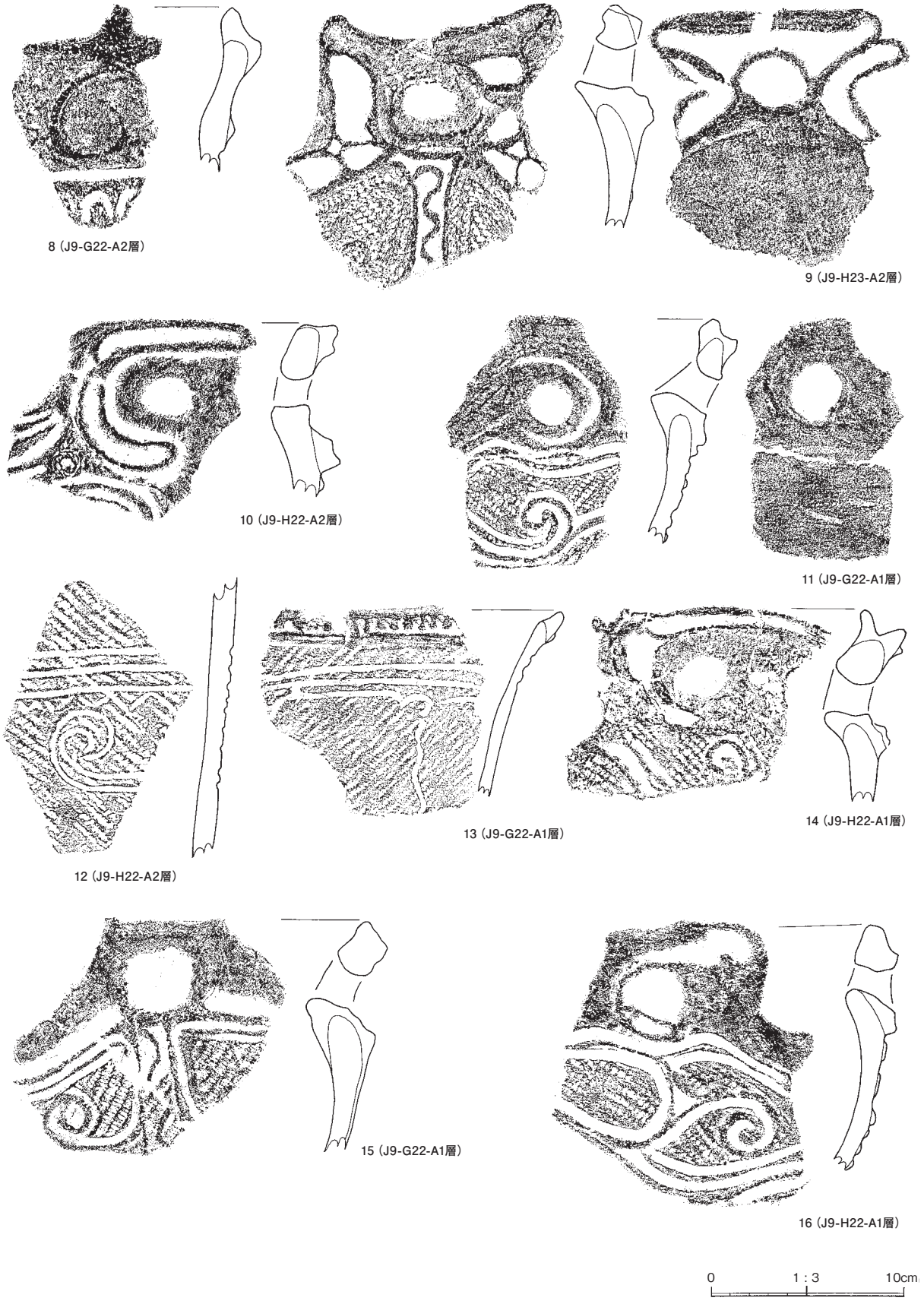
第65図　RA229竪穴住居跡出土遺物（2）



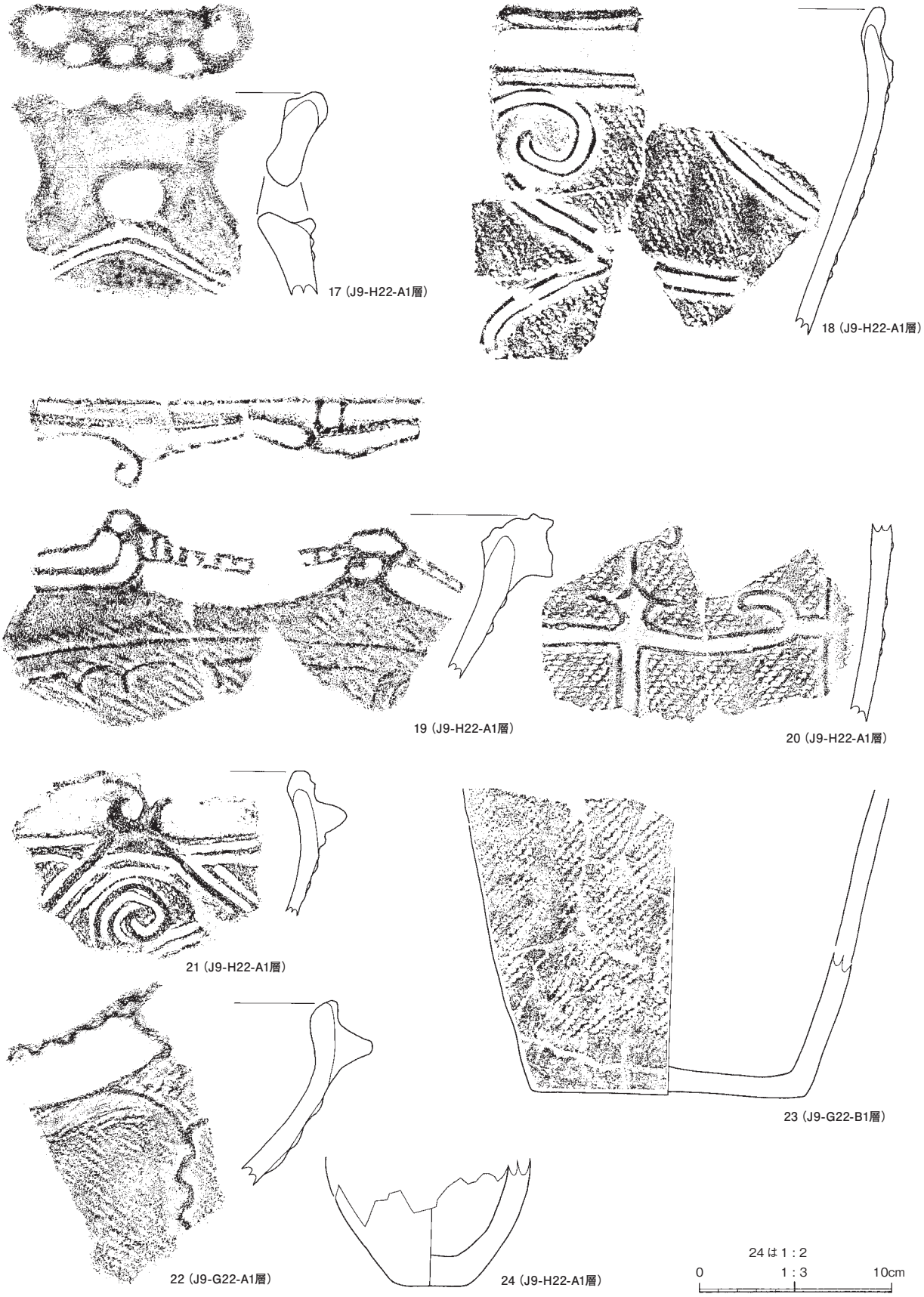
第66図　RA229（3）・230・232竪穴住居跡出土遺物



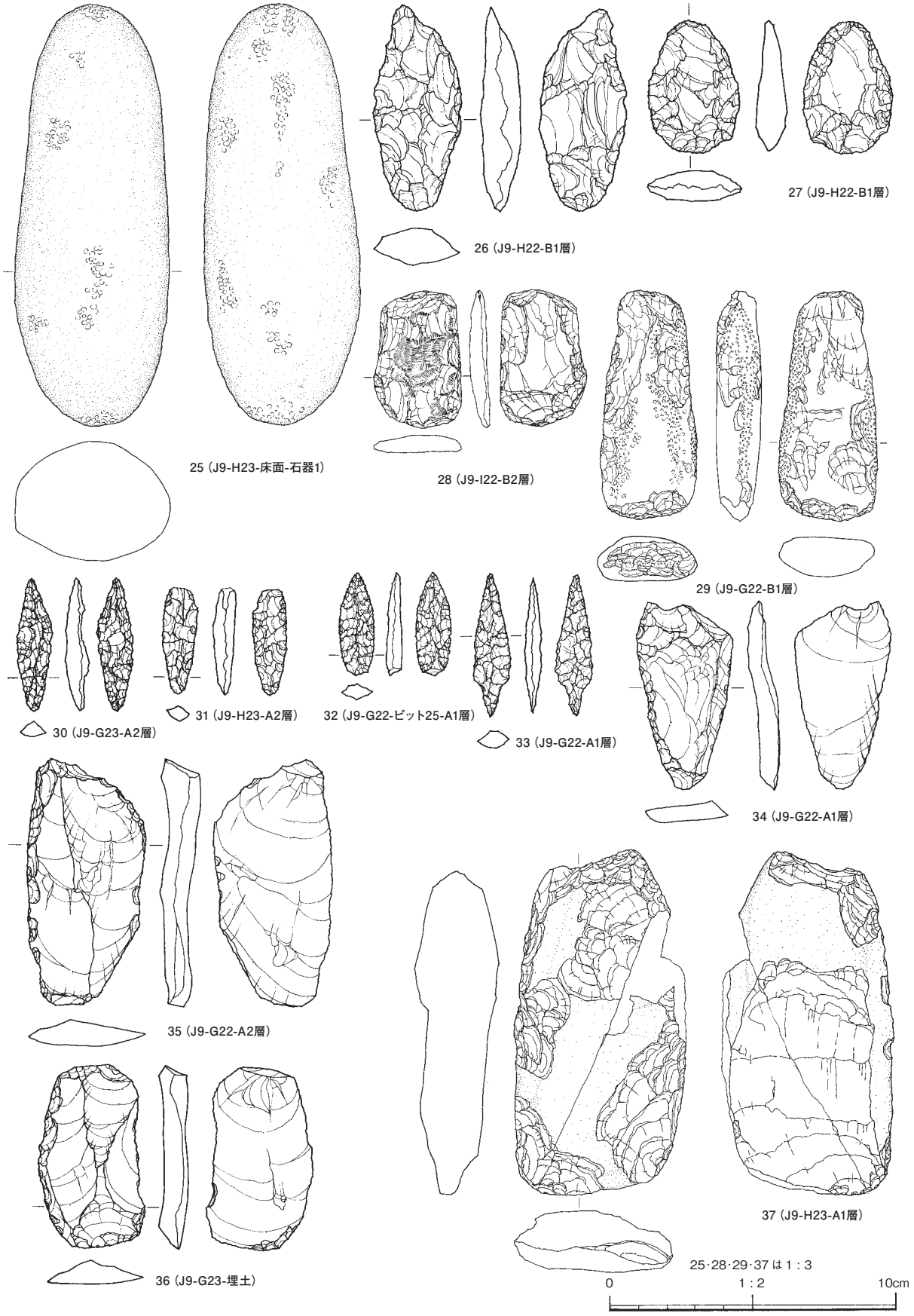
第67図　RA233 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物（1）



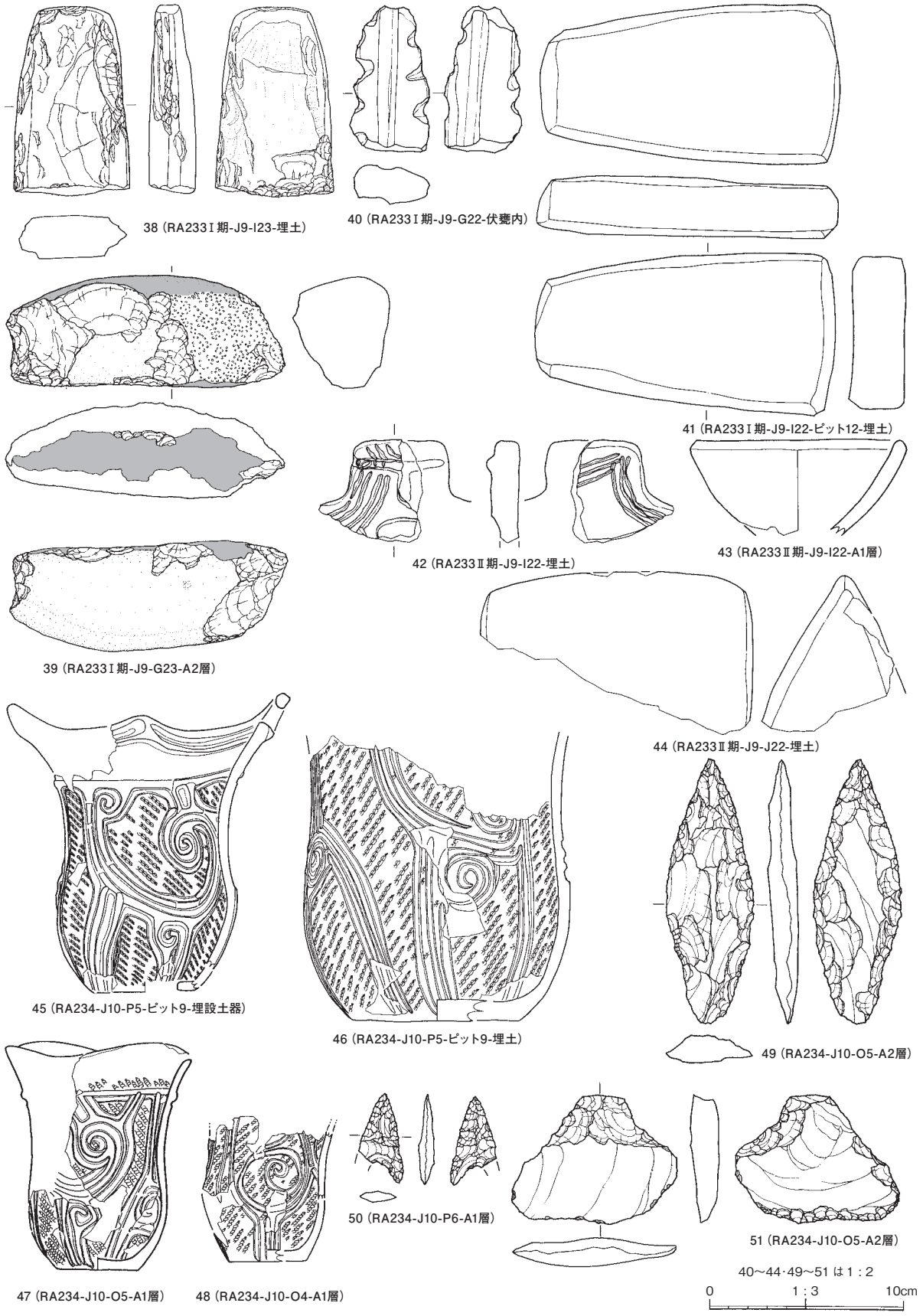
第68図　RA233 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物（2）



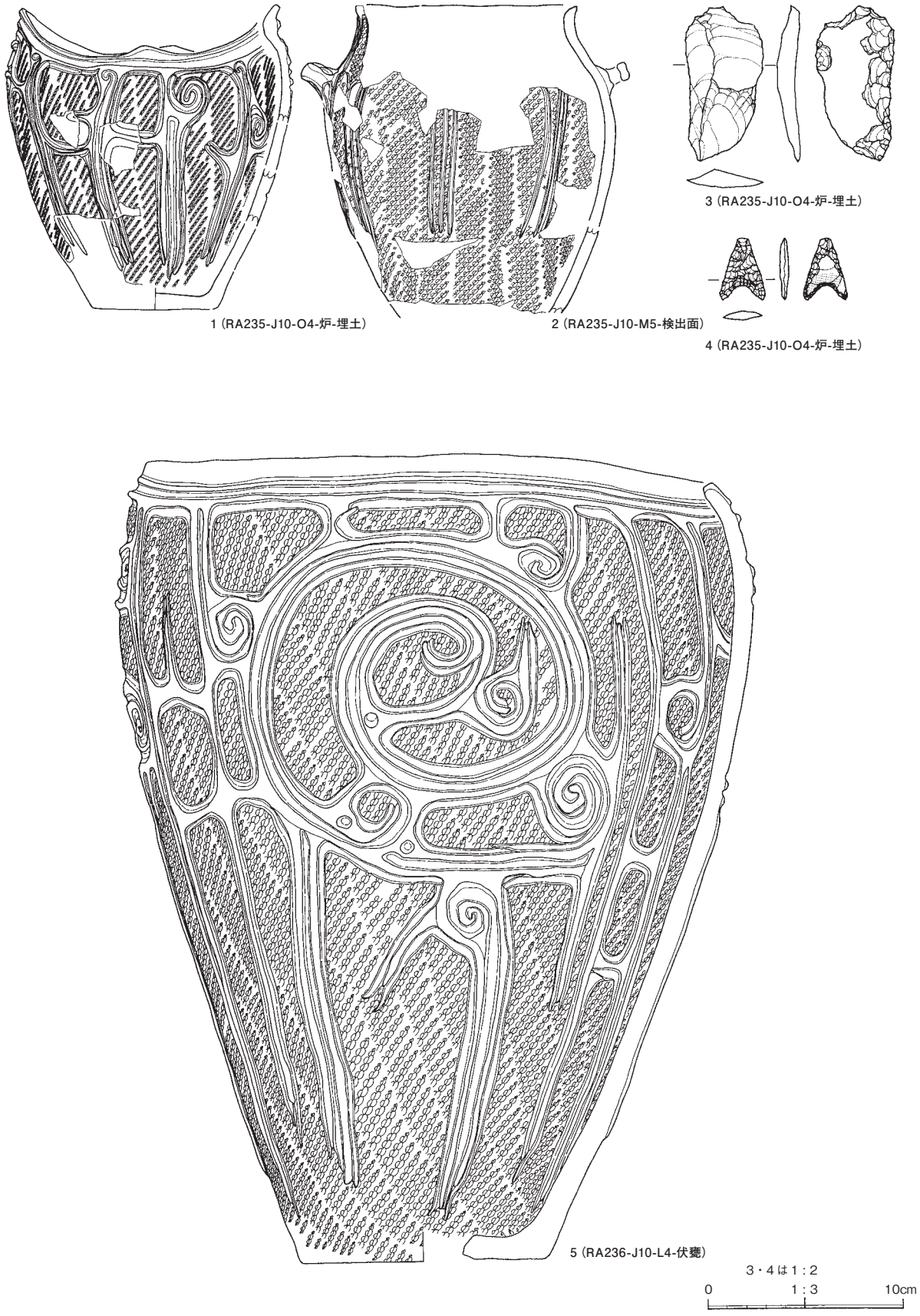
第69図　RA233 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物（3）



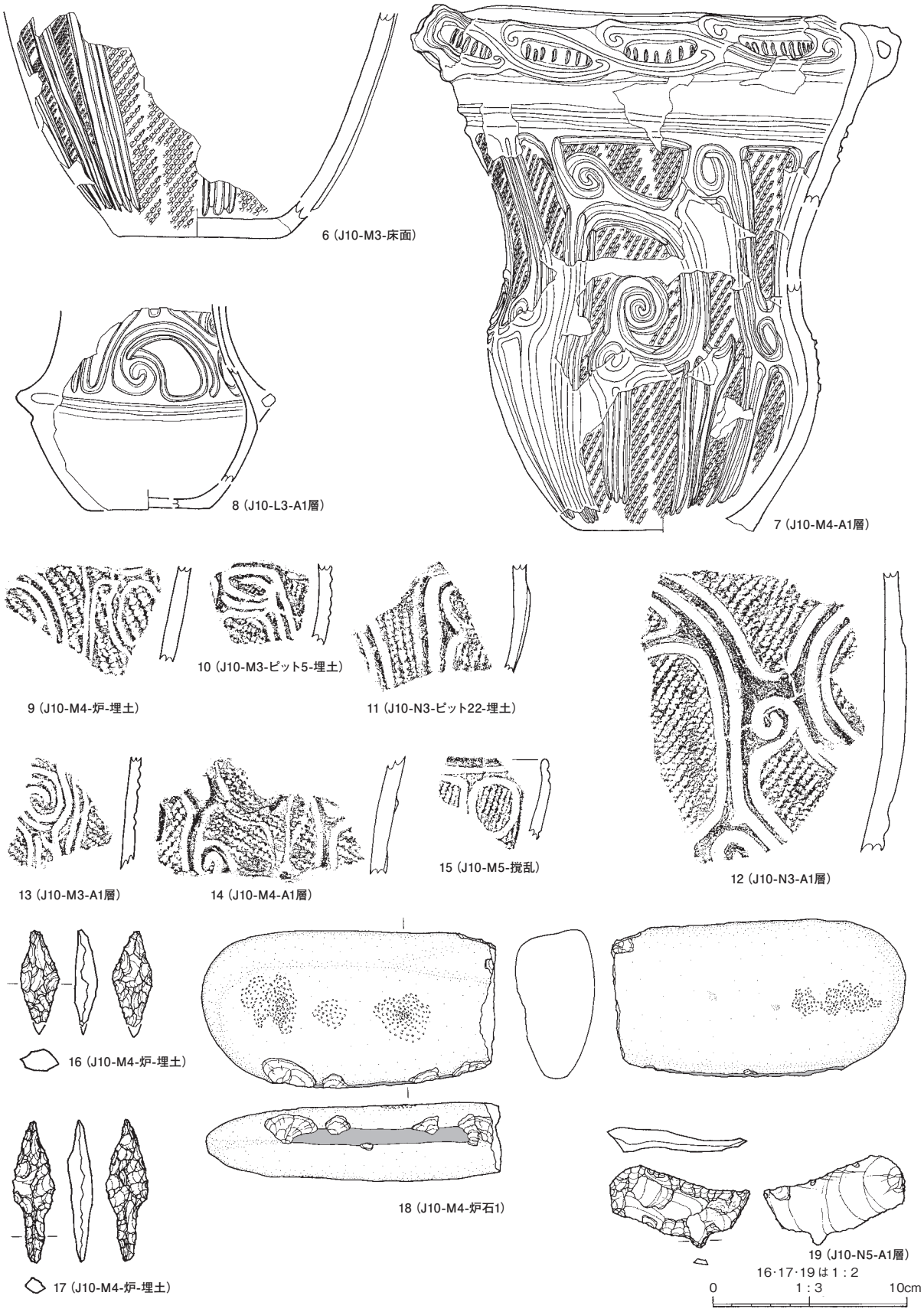
第70図　RA233 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物（4）



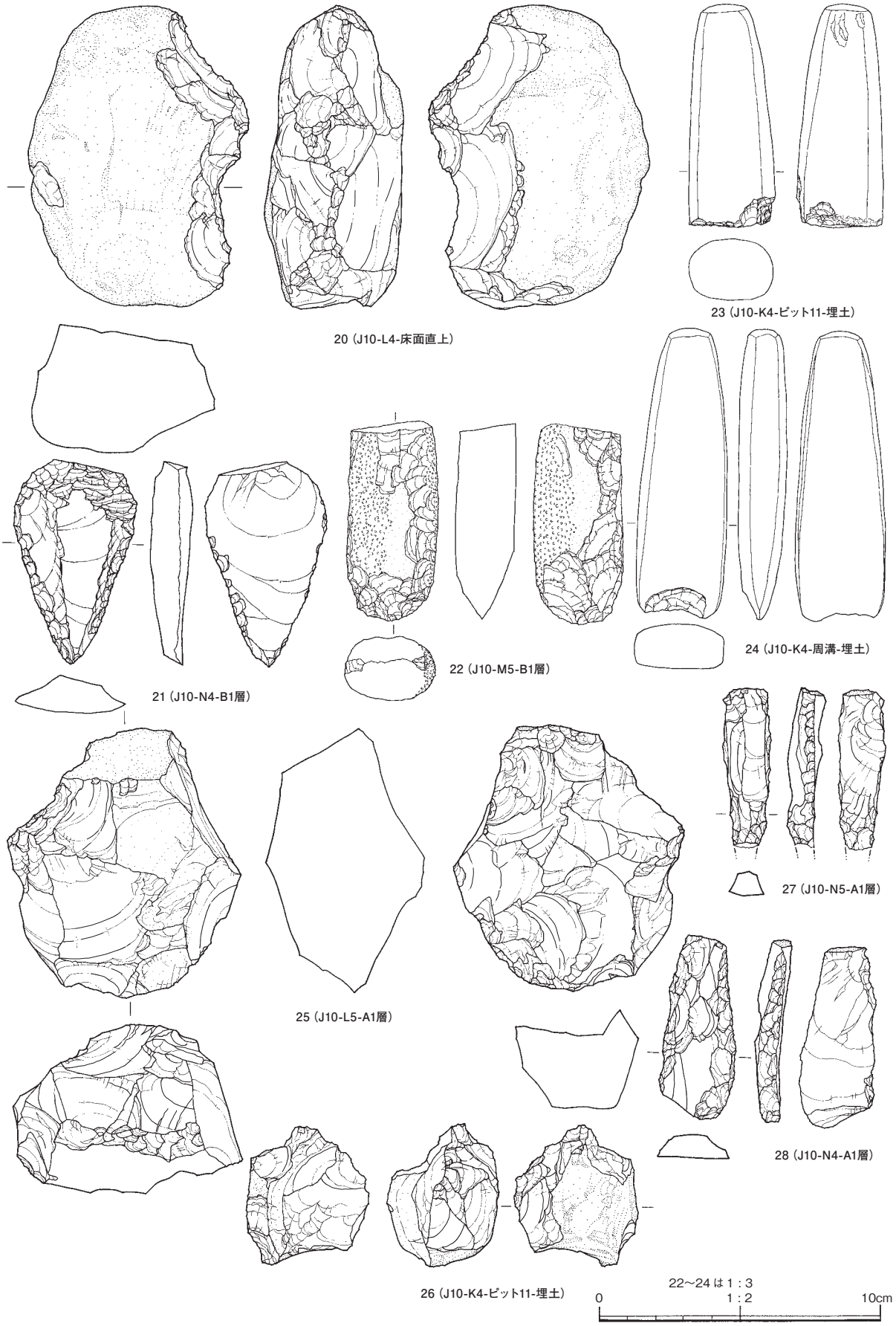
第71図　RA233Ⅰ期（5）・233Ⅱ期・234竪穴住居跡出土遺物



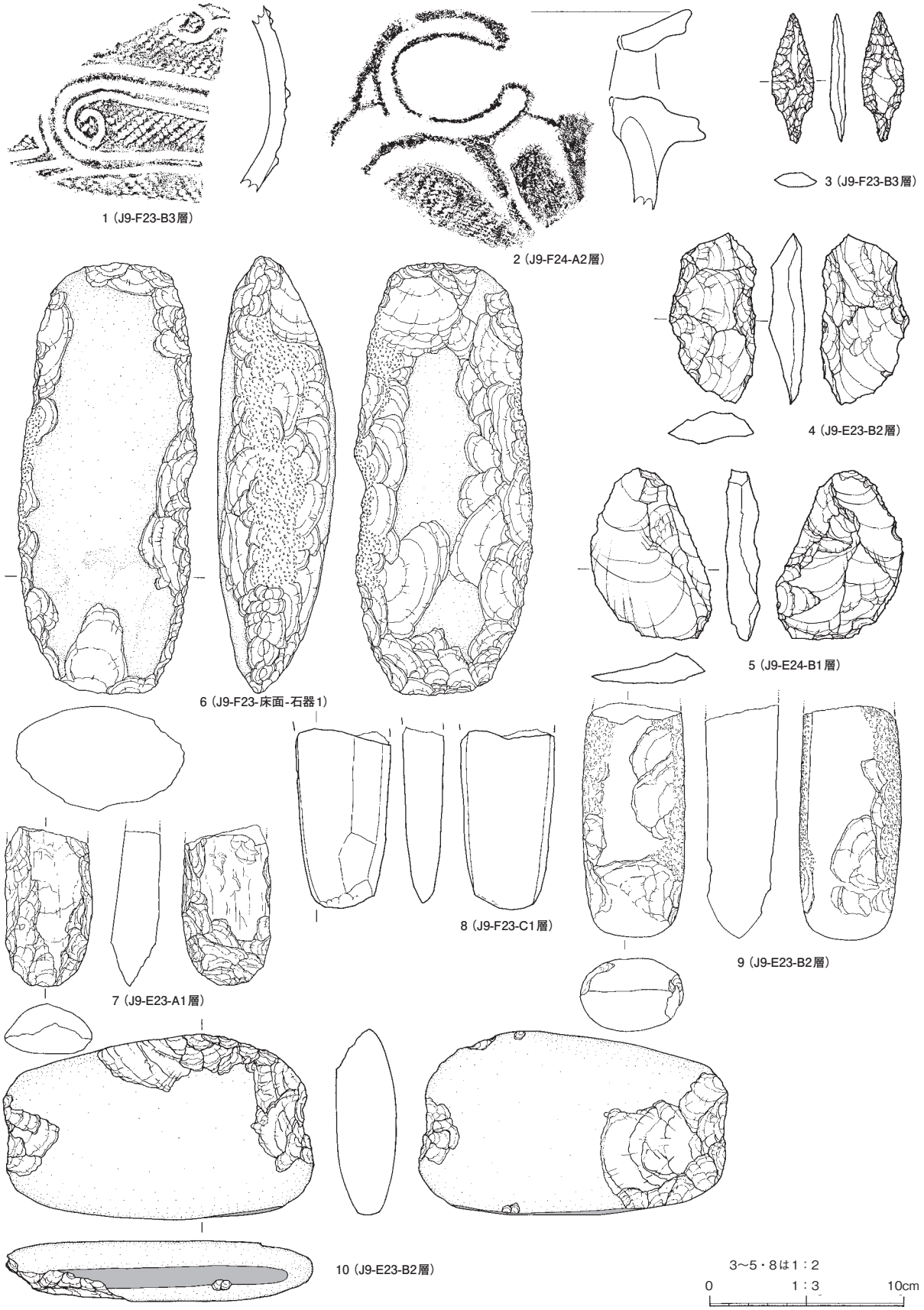
第72図　RA235・236（1）竪穴住居跡出土遺物



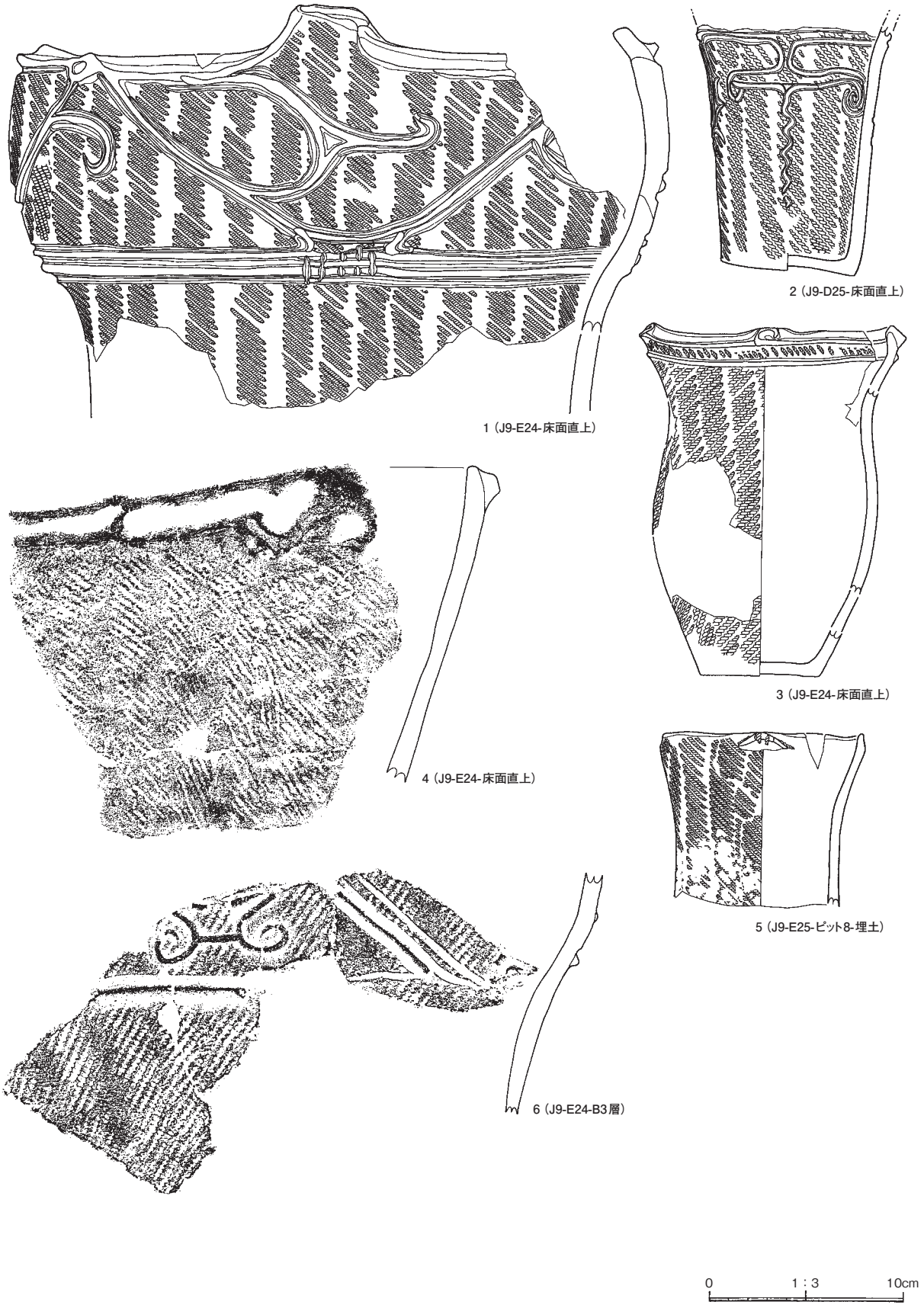
第73図　RA236竪穴住居跡出土遺物（2）



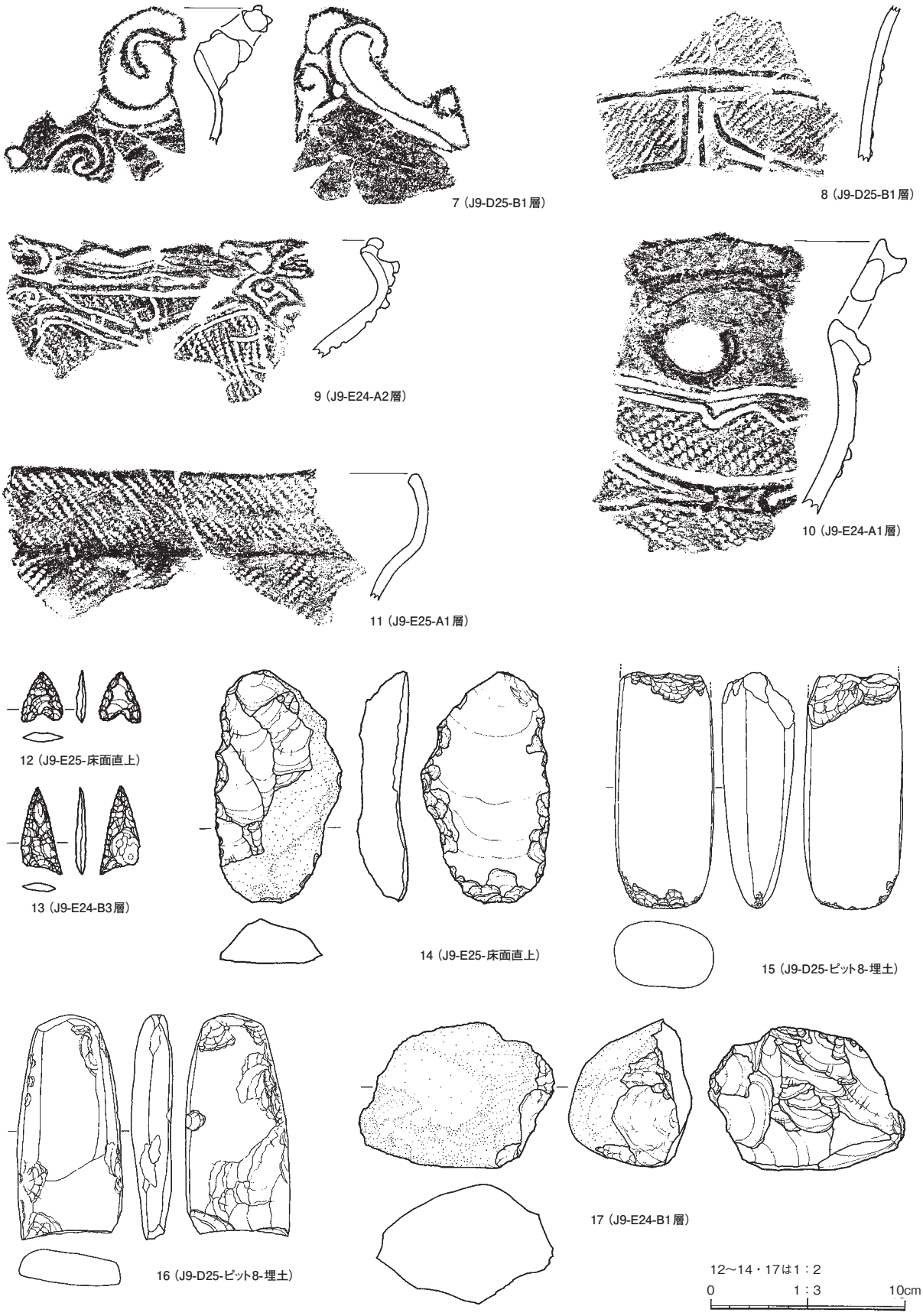
第74図　RA236竪穴住居跡出土遺物（3）



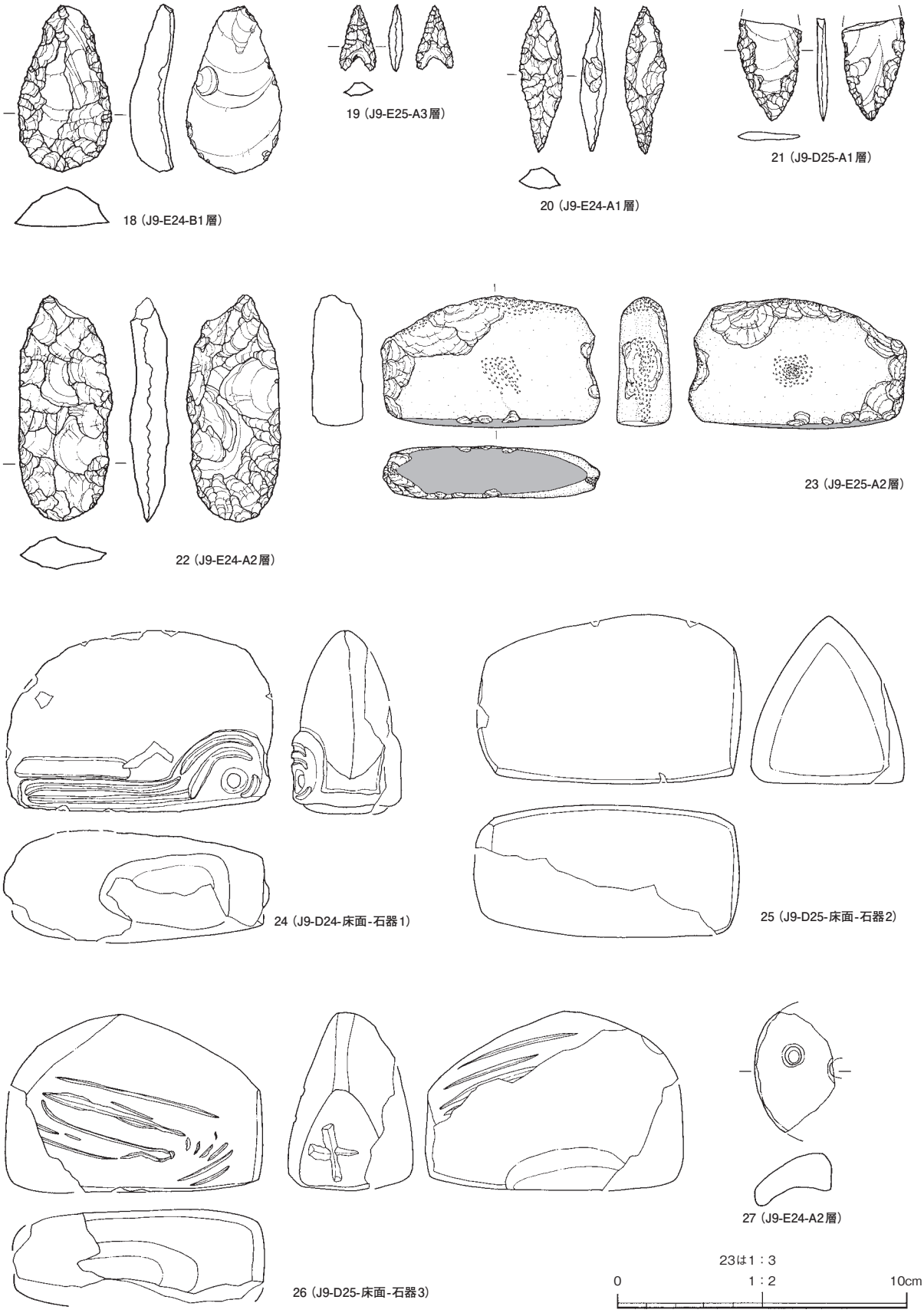
第 75 図　RA237 竪穴住居跡出土遺物



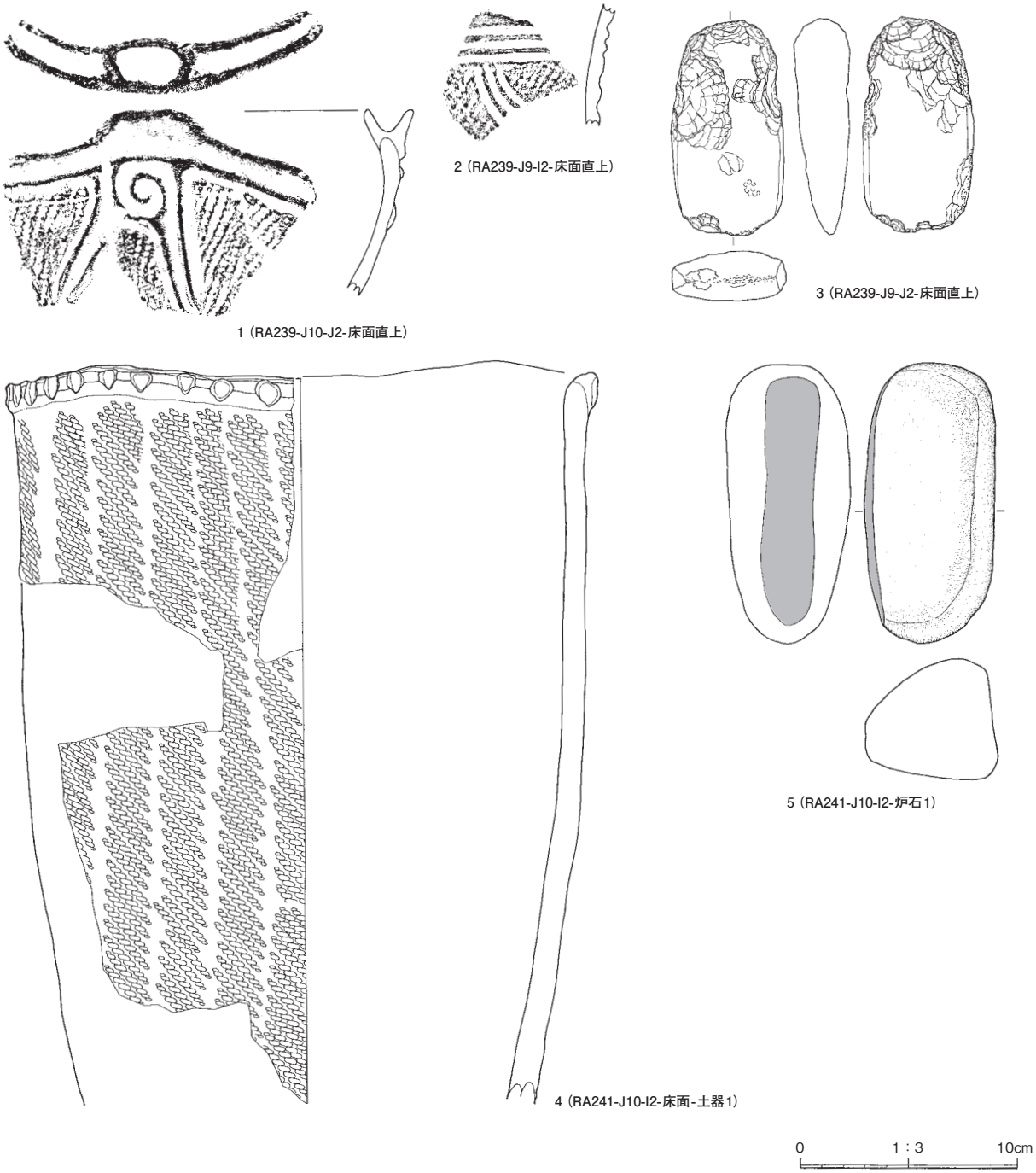
第 76 図　RA238 竪穴住居跡出土遺物（1）



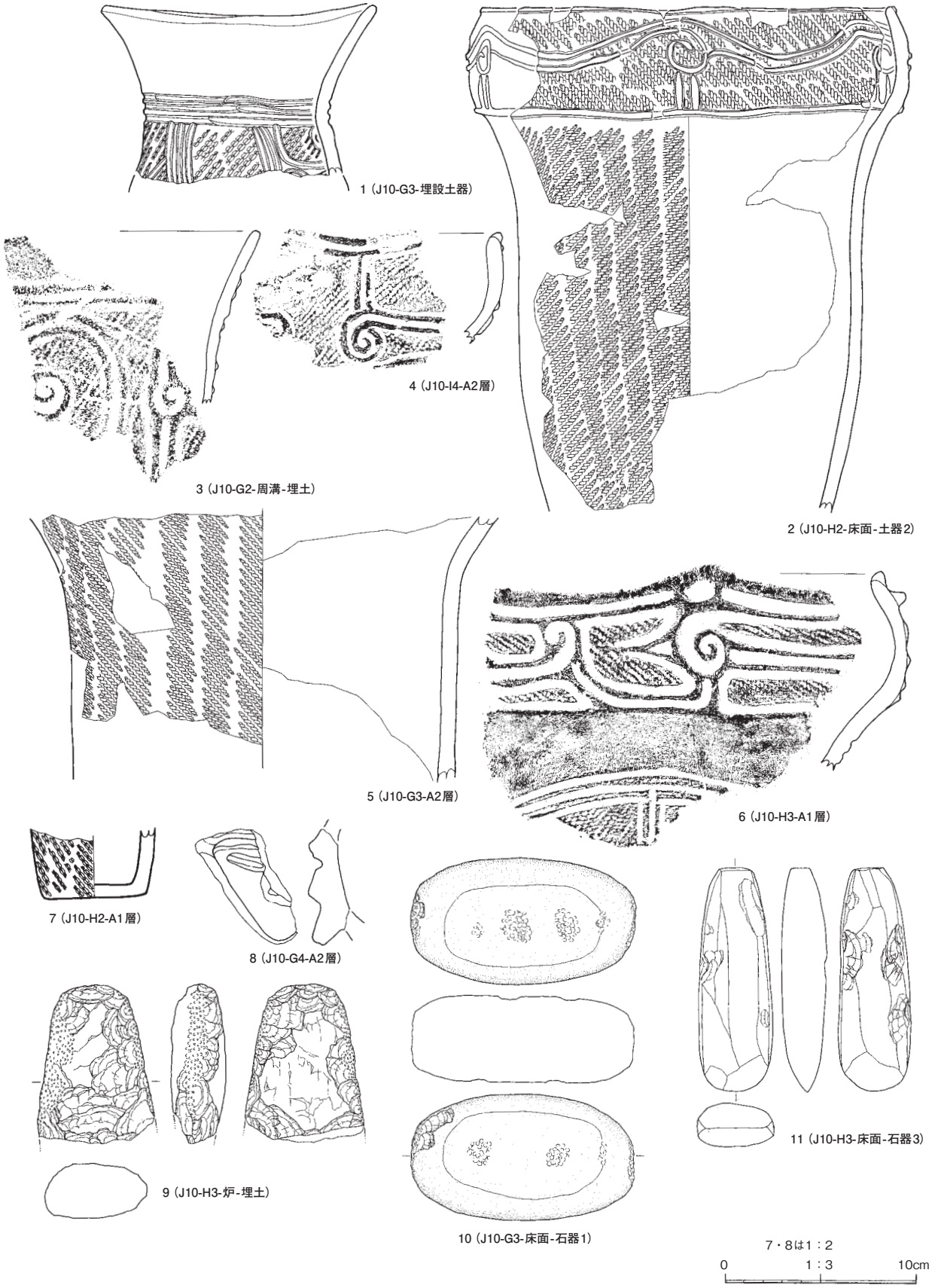
第 77 図　RA238 竪穴住居跡出土遺物（2）



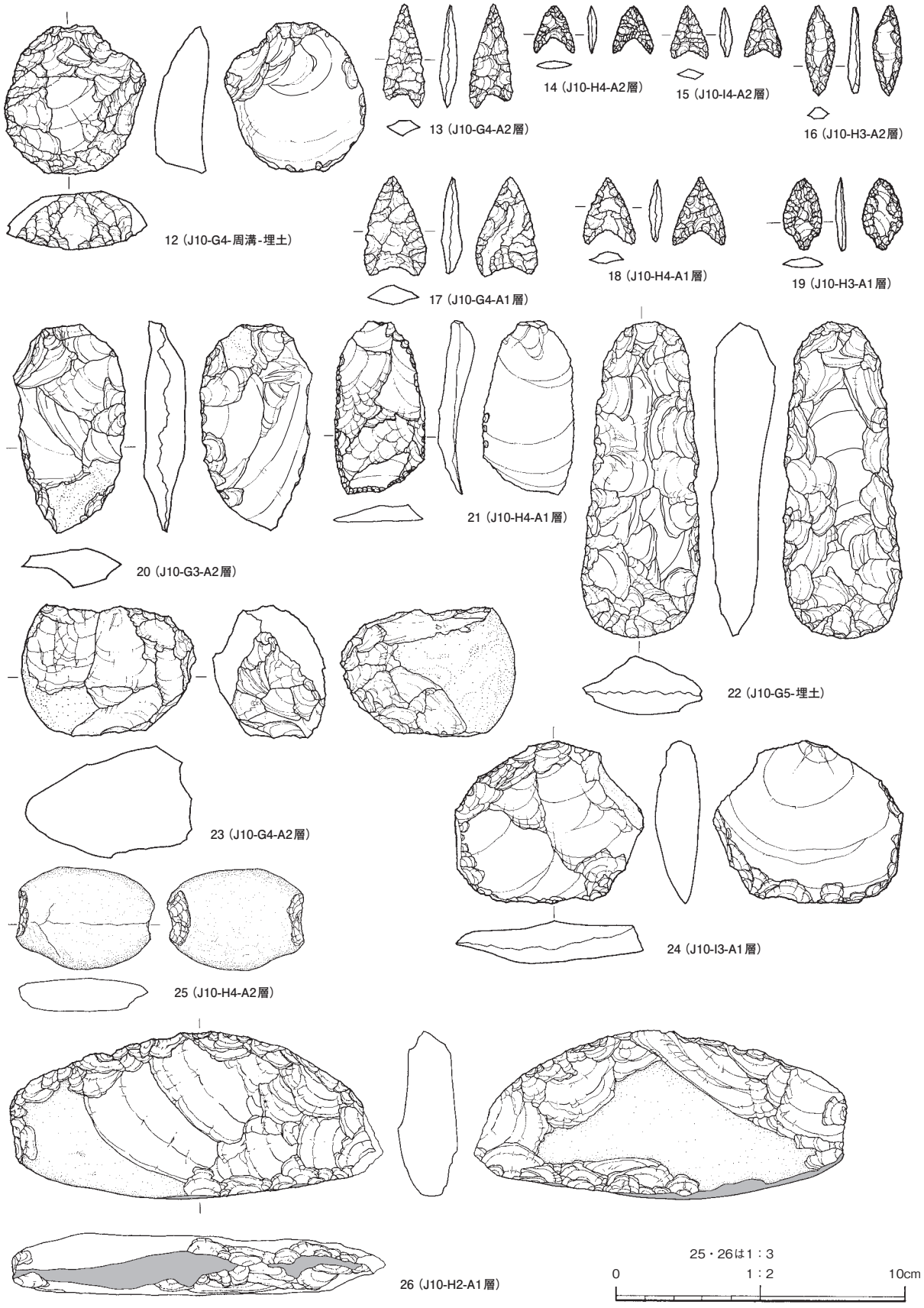
第 78 図　RA238 竪穴住居跡出土遺物（3）



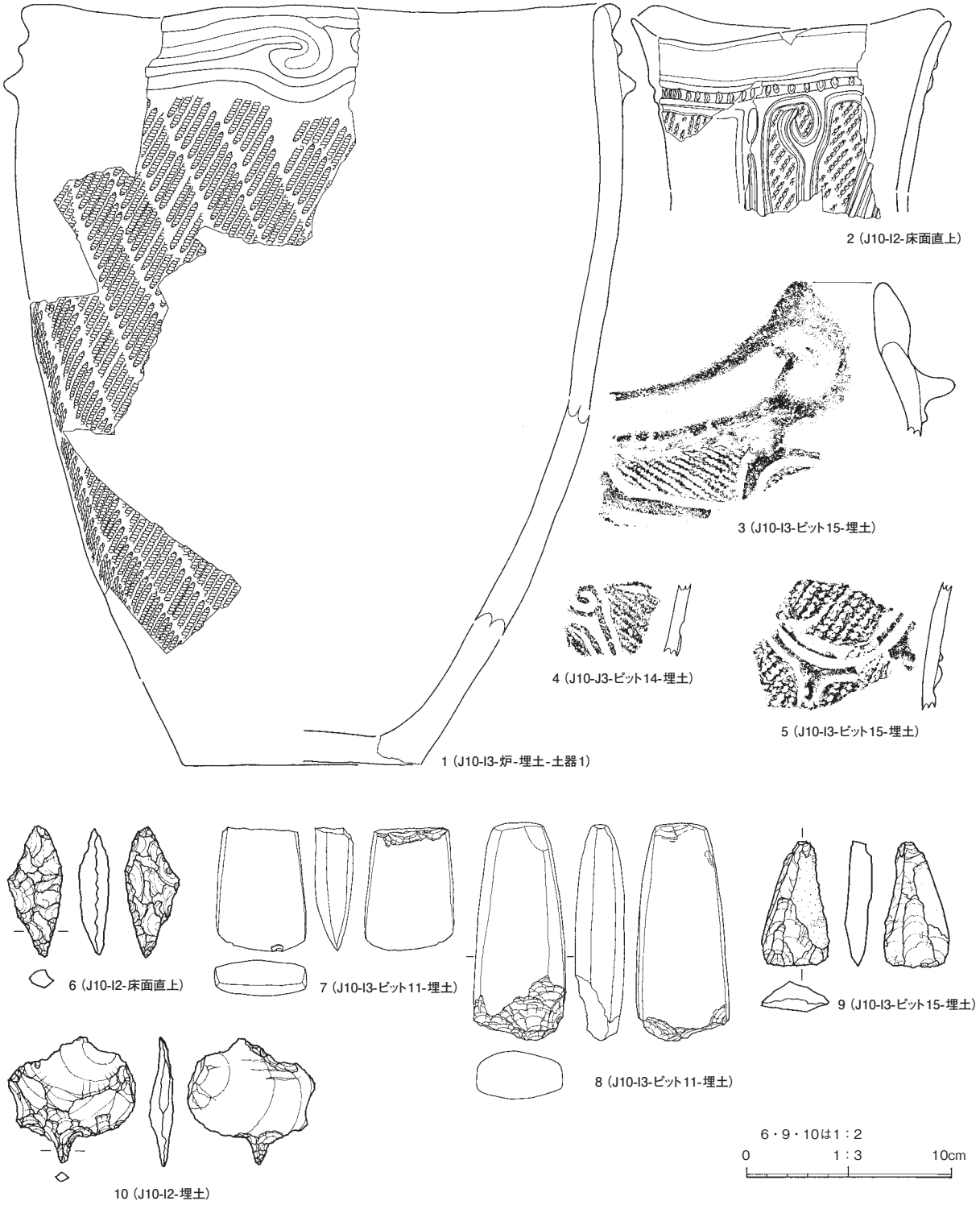
第 79 図　RA239・241 竪穴住居跡出土遺物



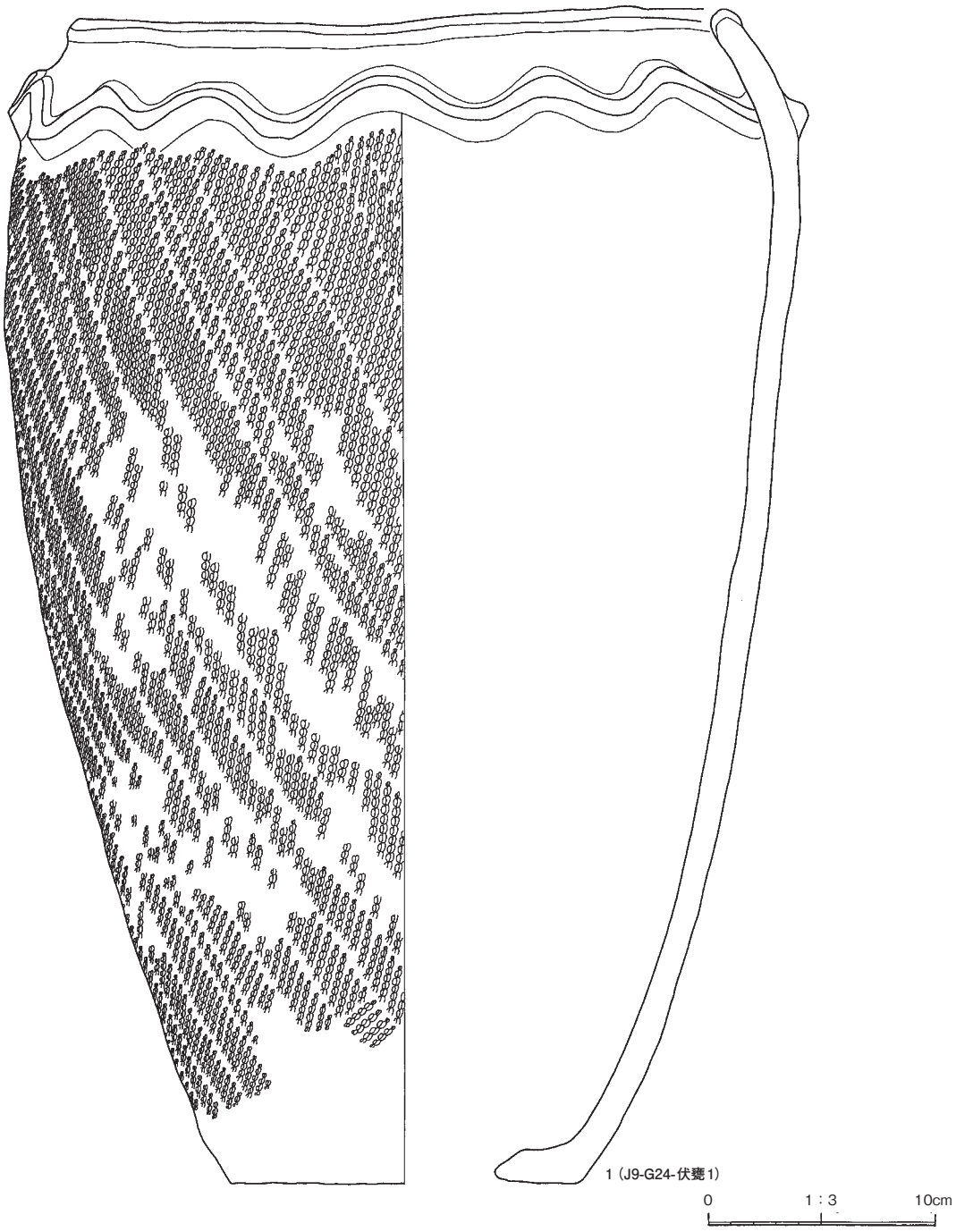
第 80 図　RA242 竪穴住居跡出土遺物（1）



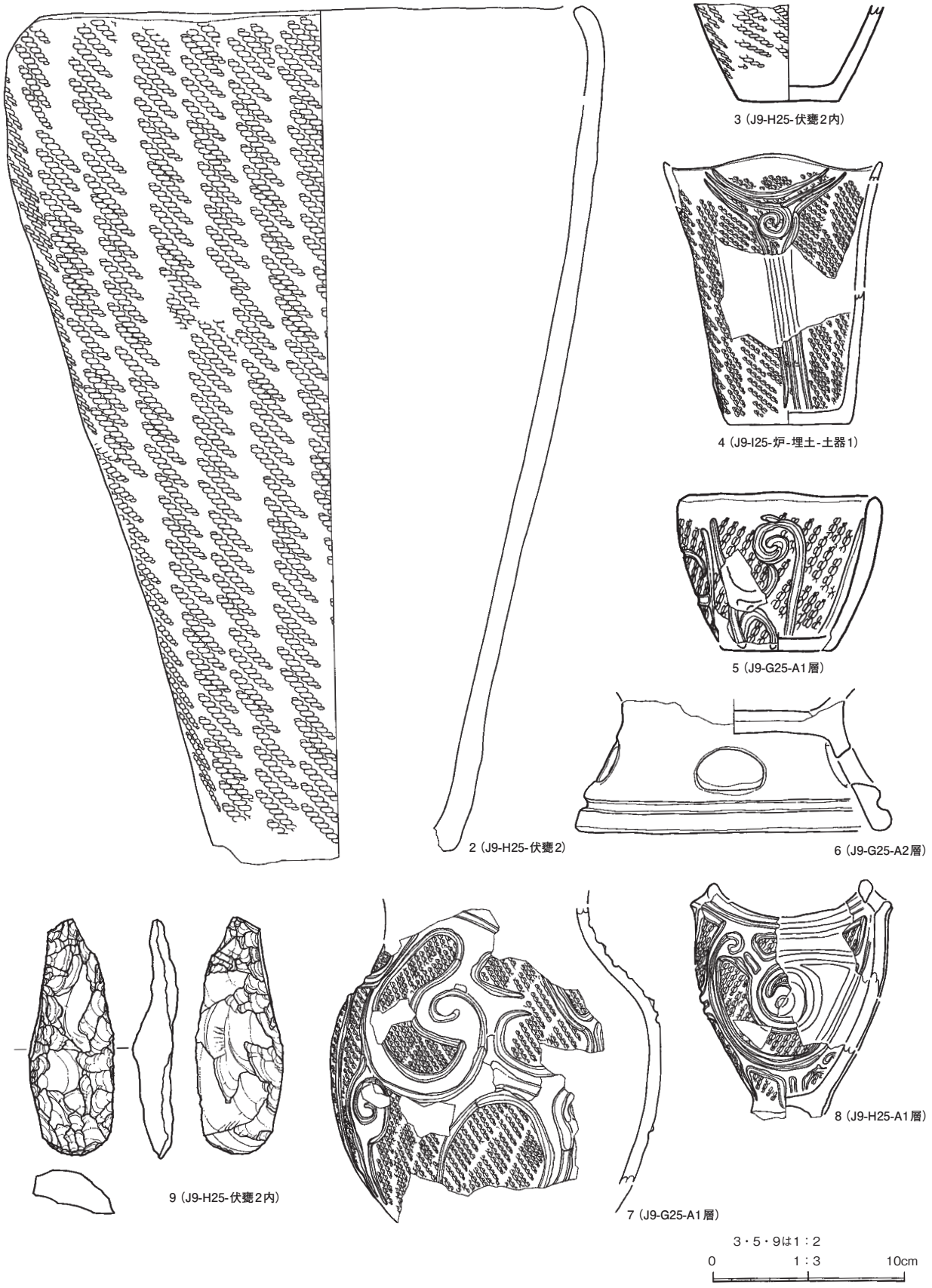
第 81 図　RA242 竪穴住居跡出土遺物（2）



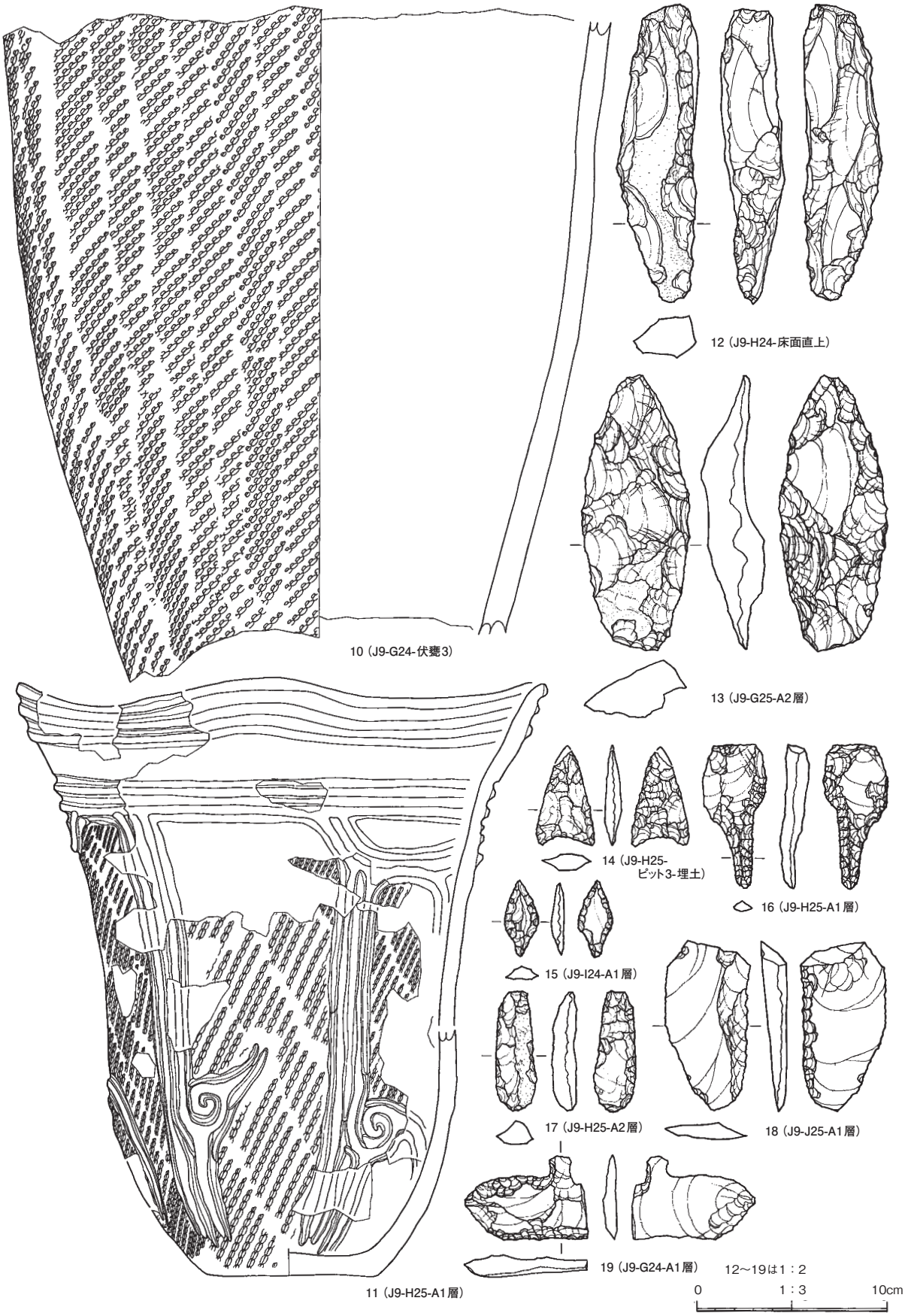
第 82 図　RA243 竪穴住居跡出土遺物



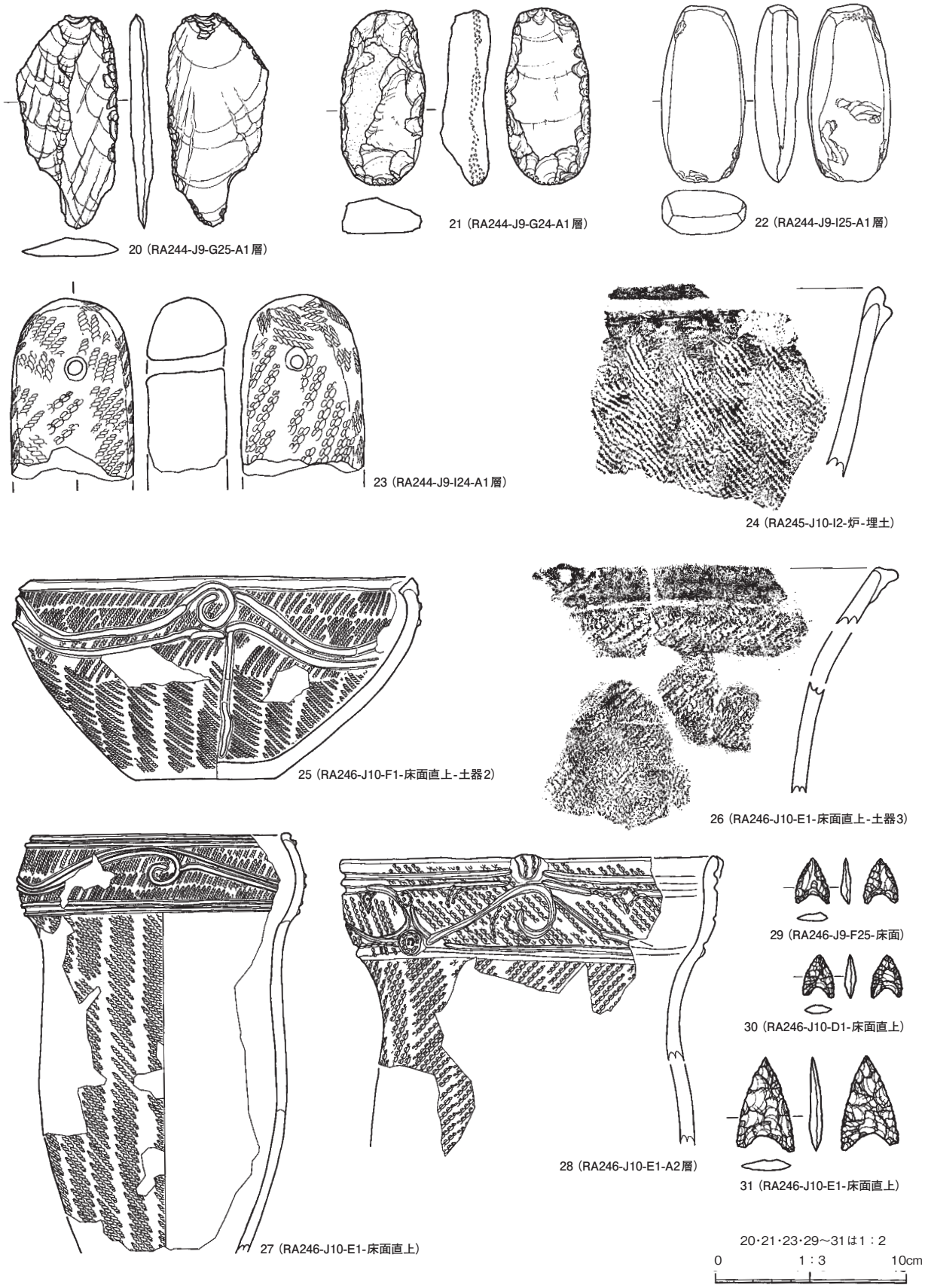
第 83 図　RA244 竪穴住居跡出土遺物（1）



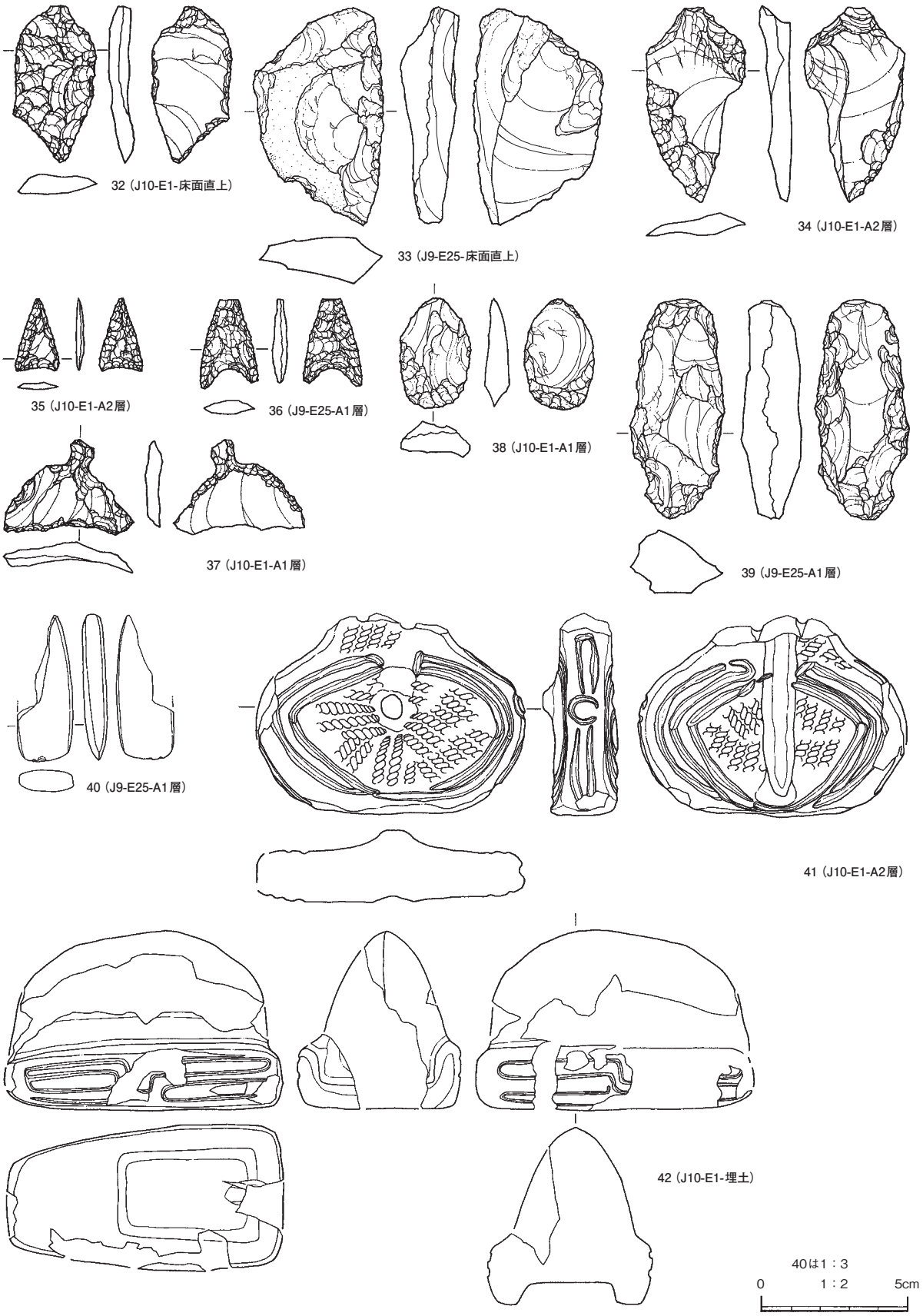
第 84 図　RA244 竪穴住居跡出土遺物（2）



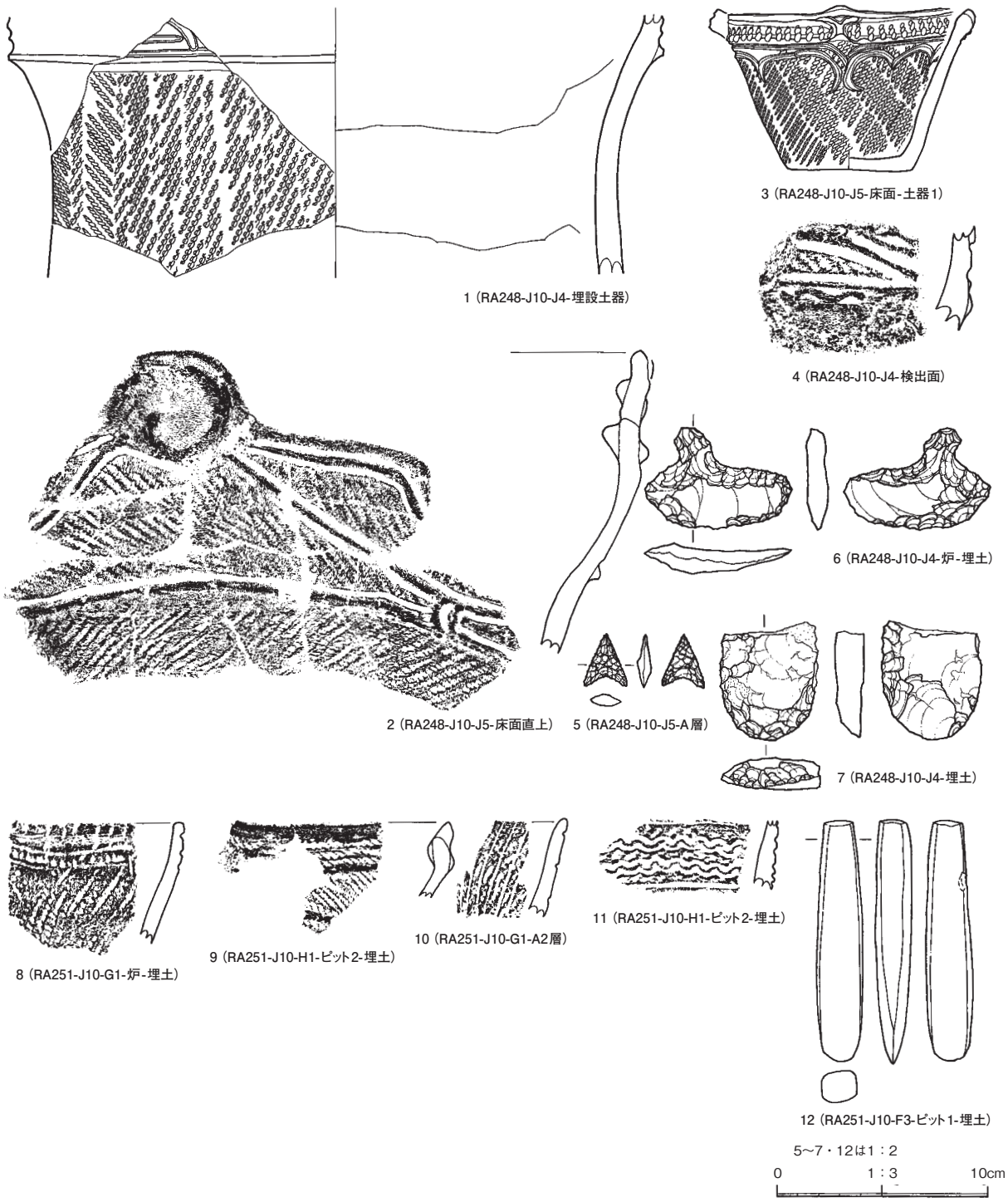
第 85 図　RA244 竪穴住居跡出土遺物（3）



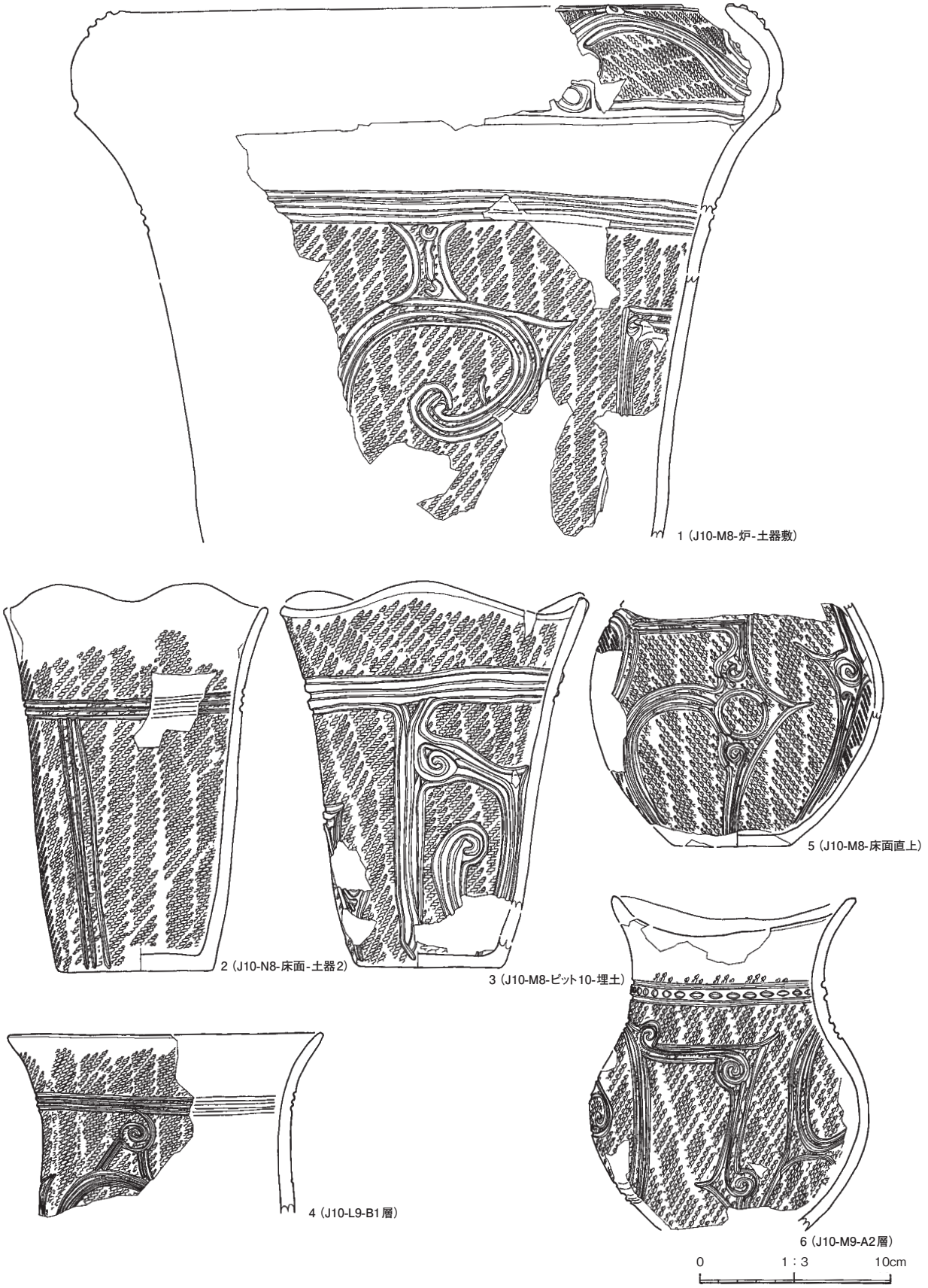
第86図　RA244（4）・245・246（1）竪穴住居跡出土遺物



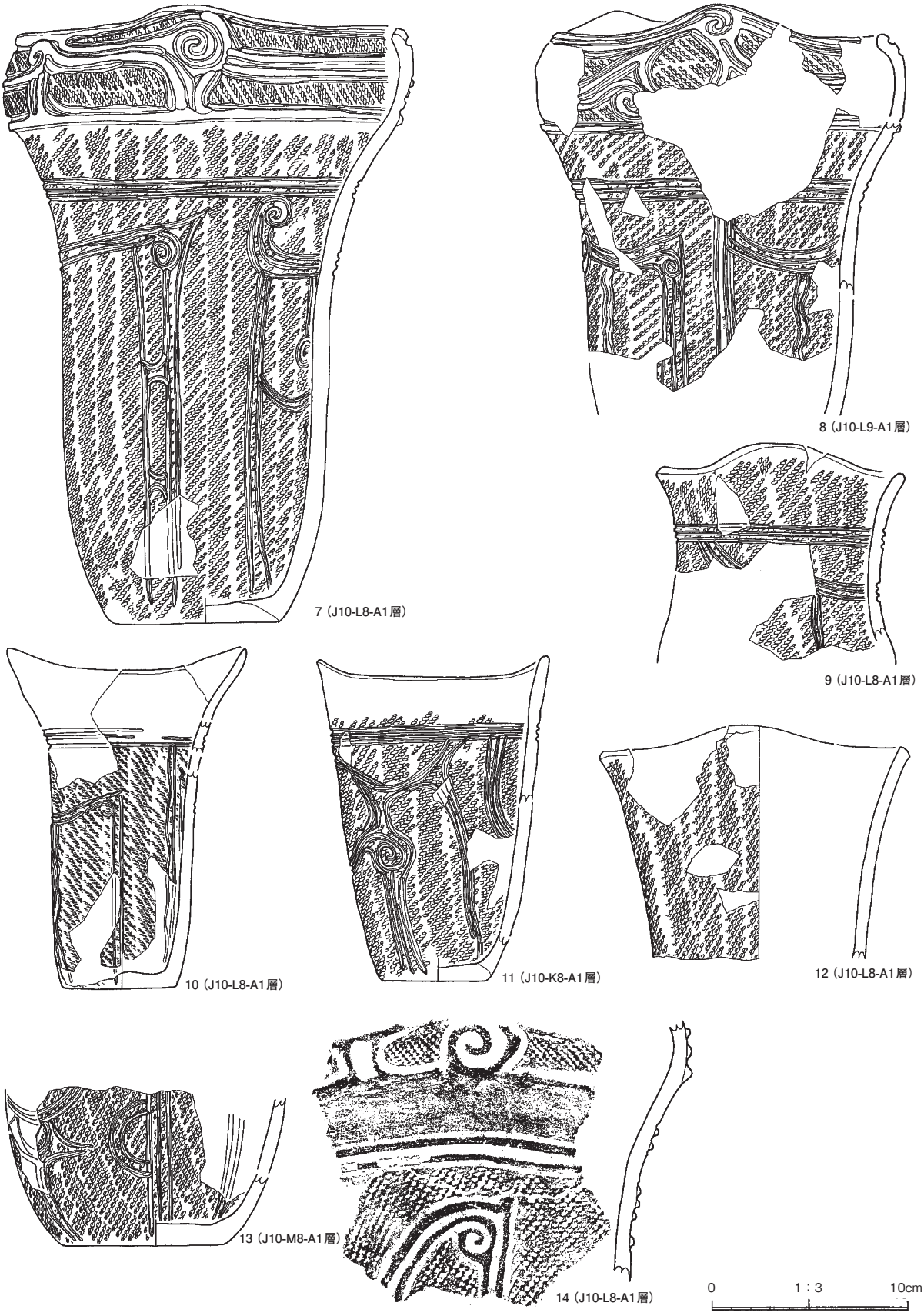
第 87 図　RA246 竪穴住居跡出土遺物（2）



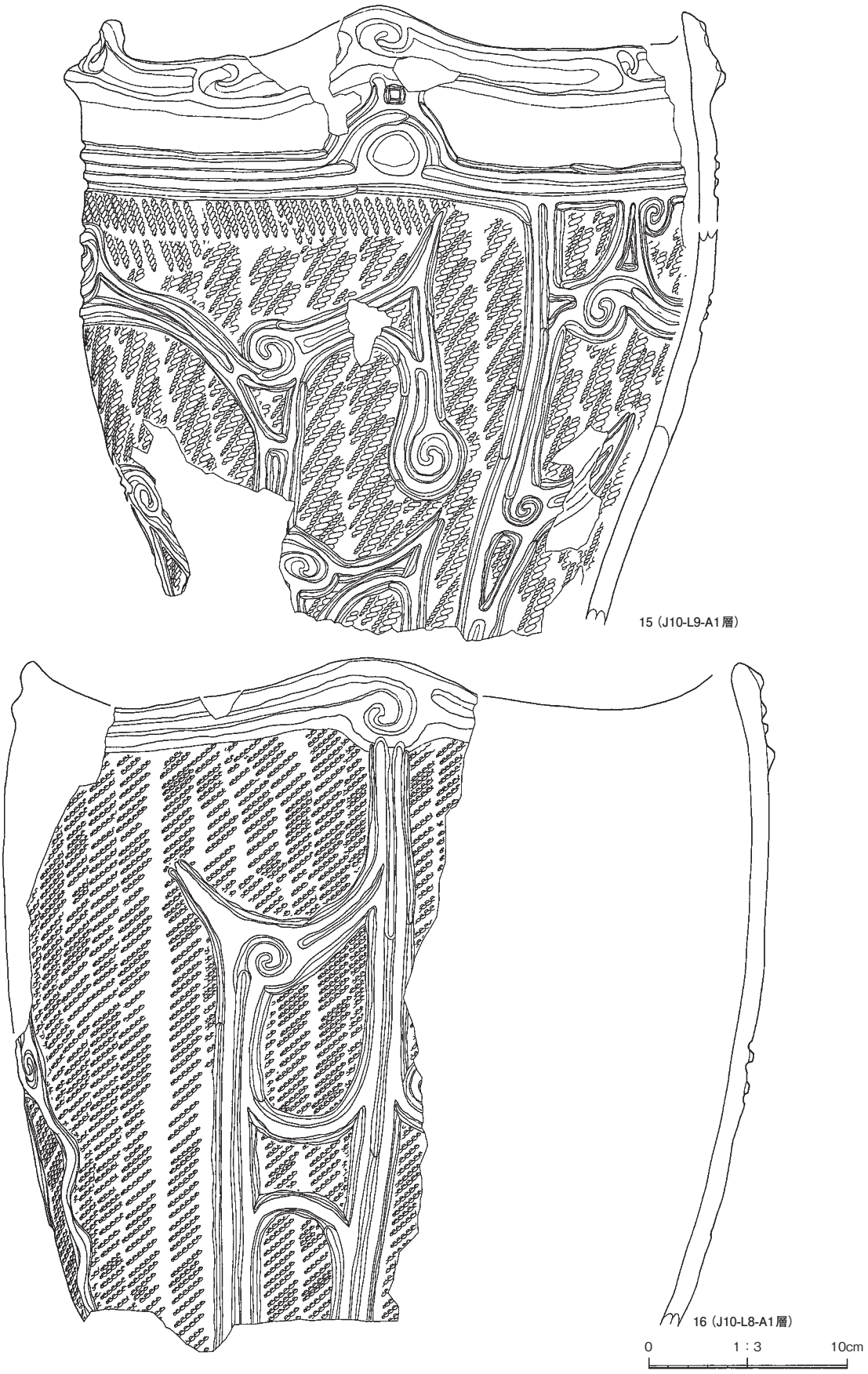
第 88 図　RA248・251 竪穴住居跡出土遺物



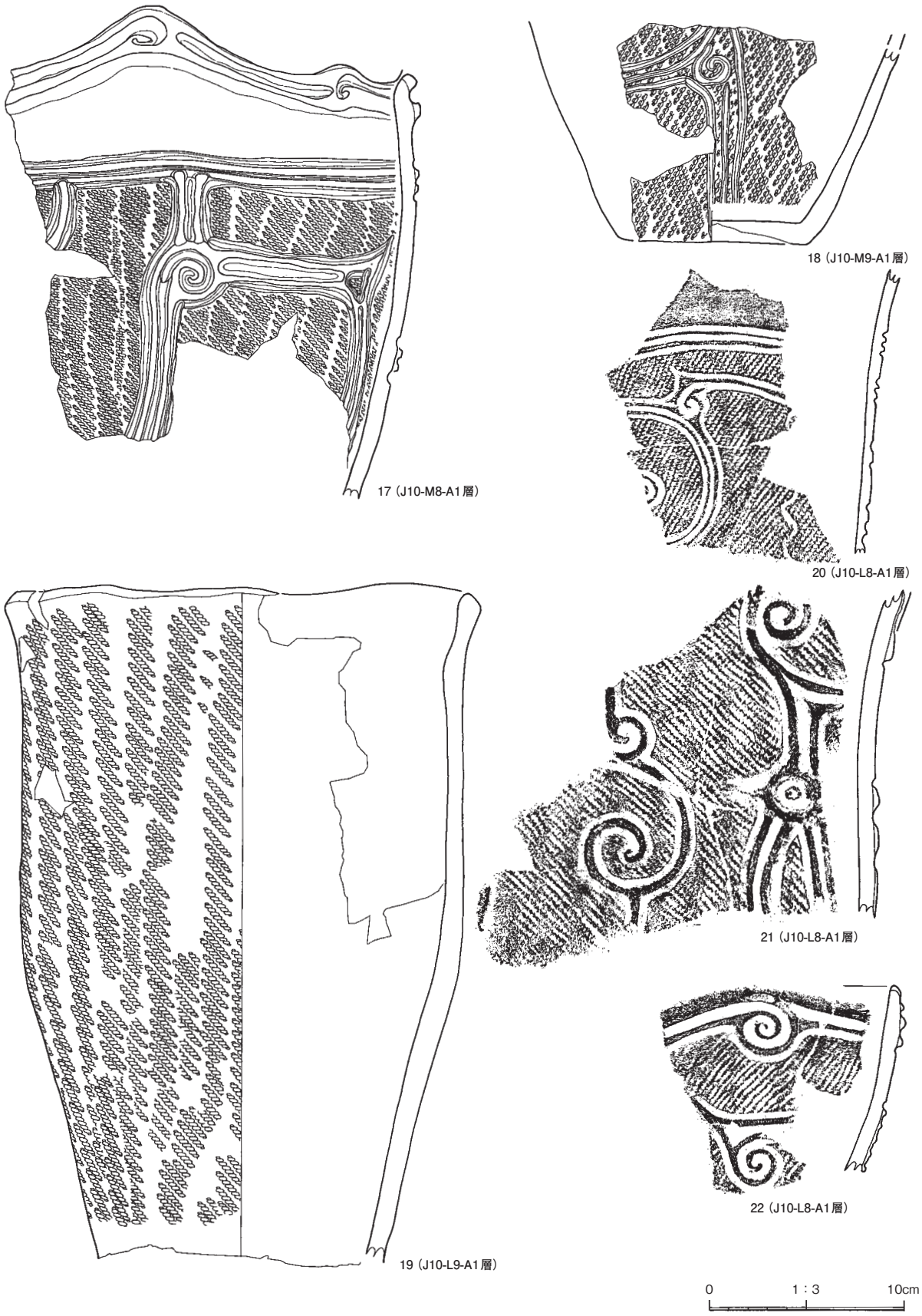
第 89 図　RA252 竪穴住居跡出土遺物（1）



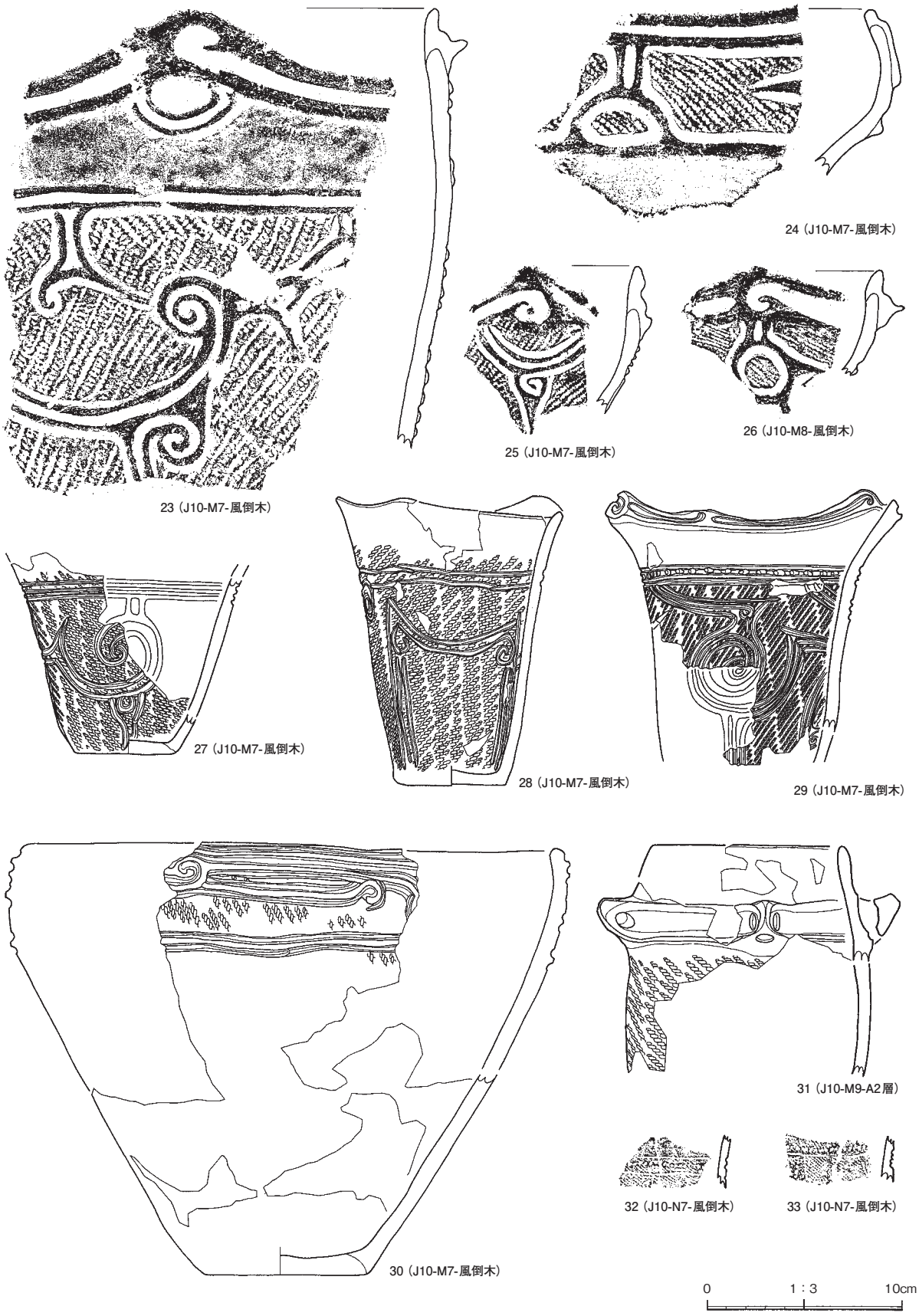
第 90 図　RA252 竪穴住居跡出土遺物（2）



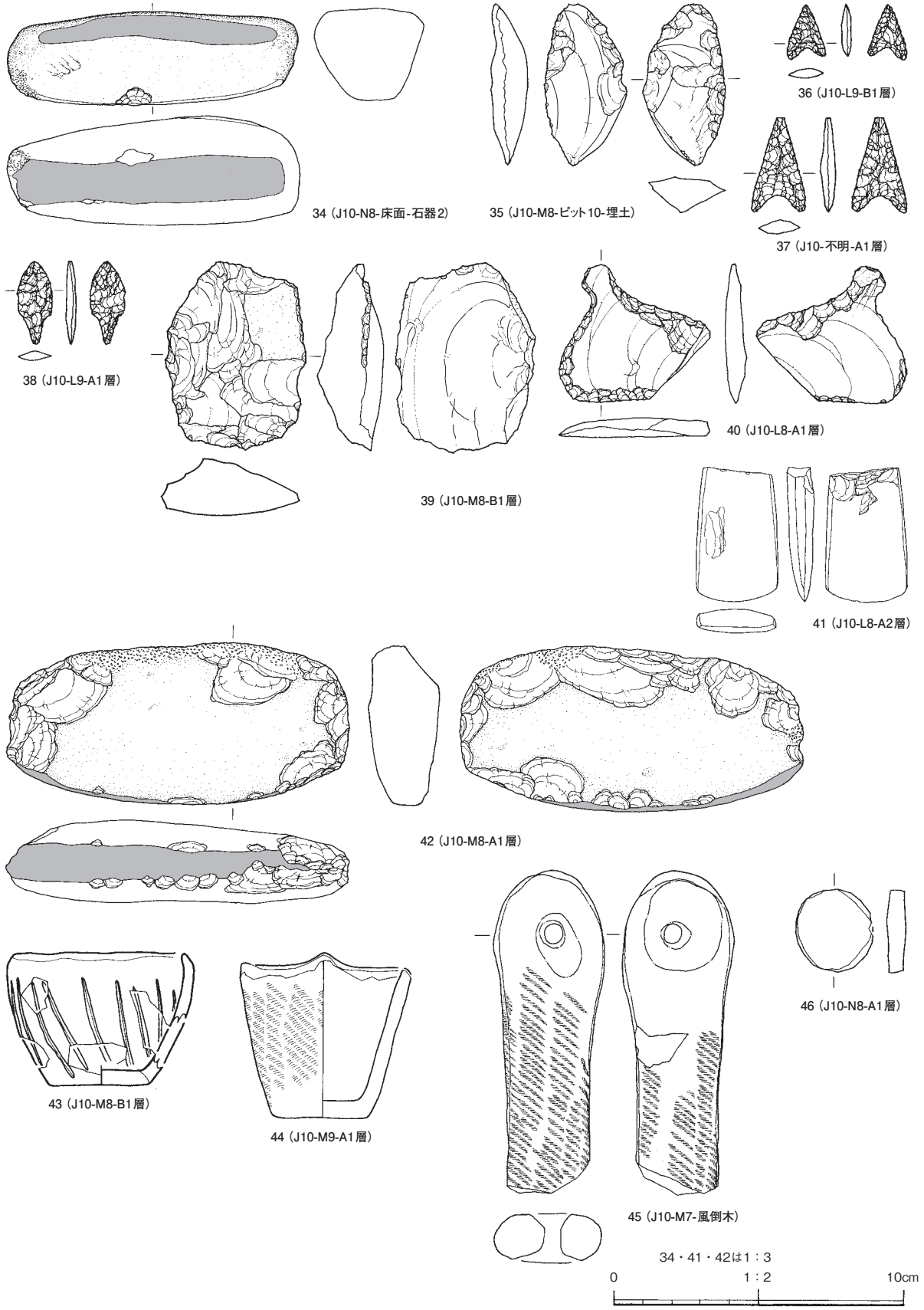
第 91 図　RA252 竪穴住居跡出土遺物（3）



第 92 図　RA252 竪穴住居跡出土遺物（4）

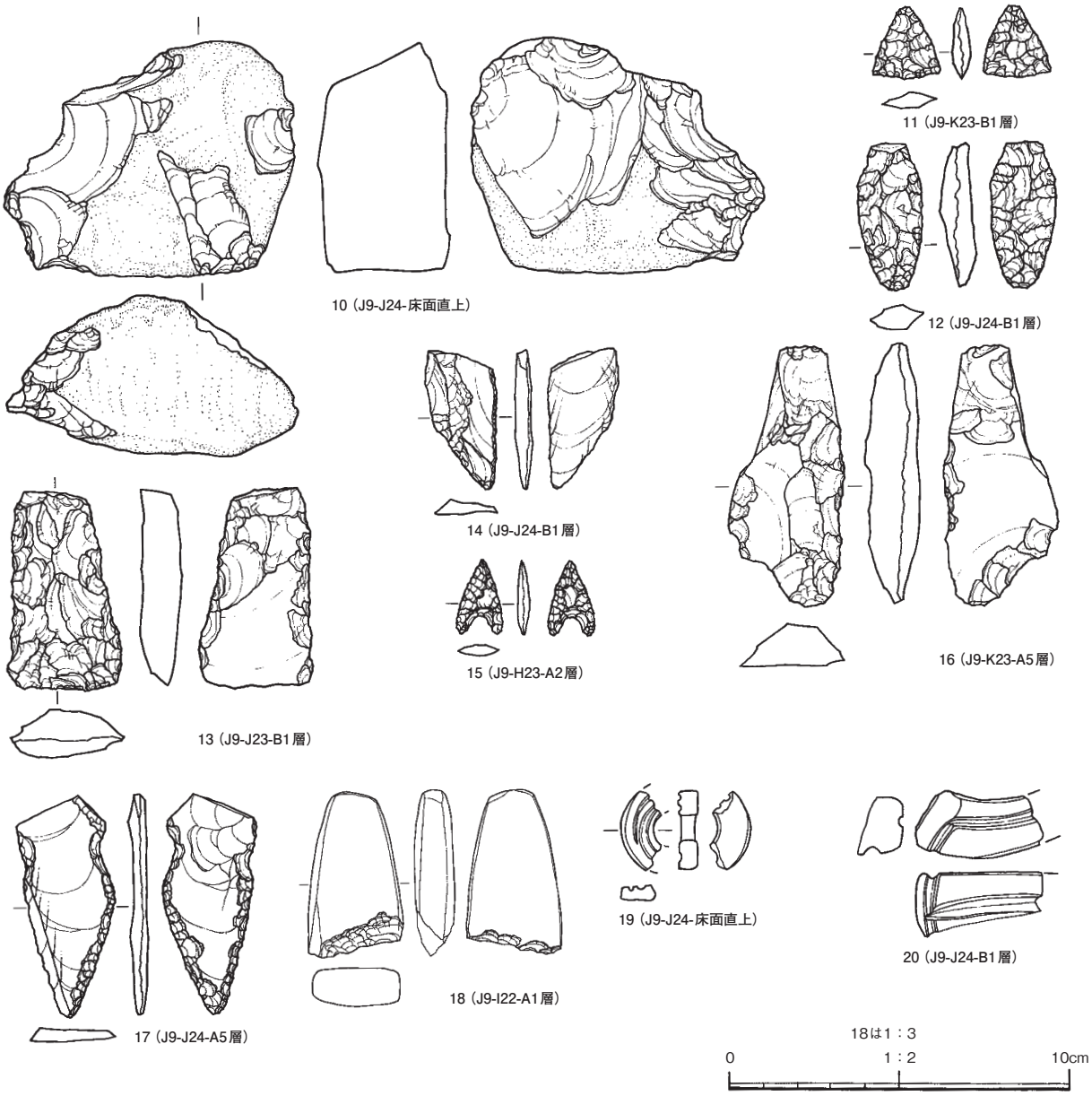


第 93 図　RA252 竪穴住居跡出土遺物（5）

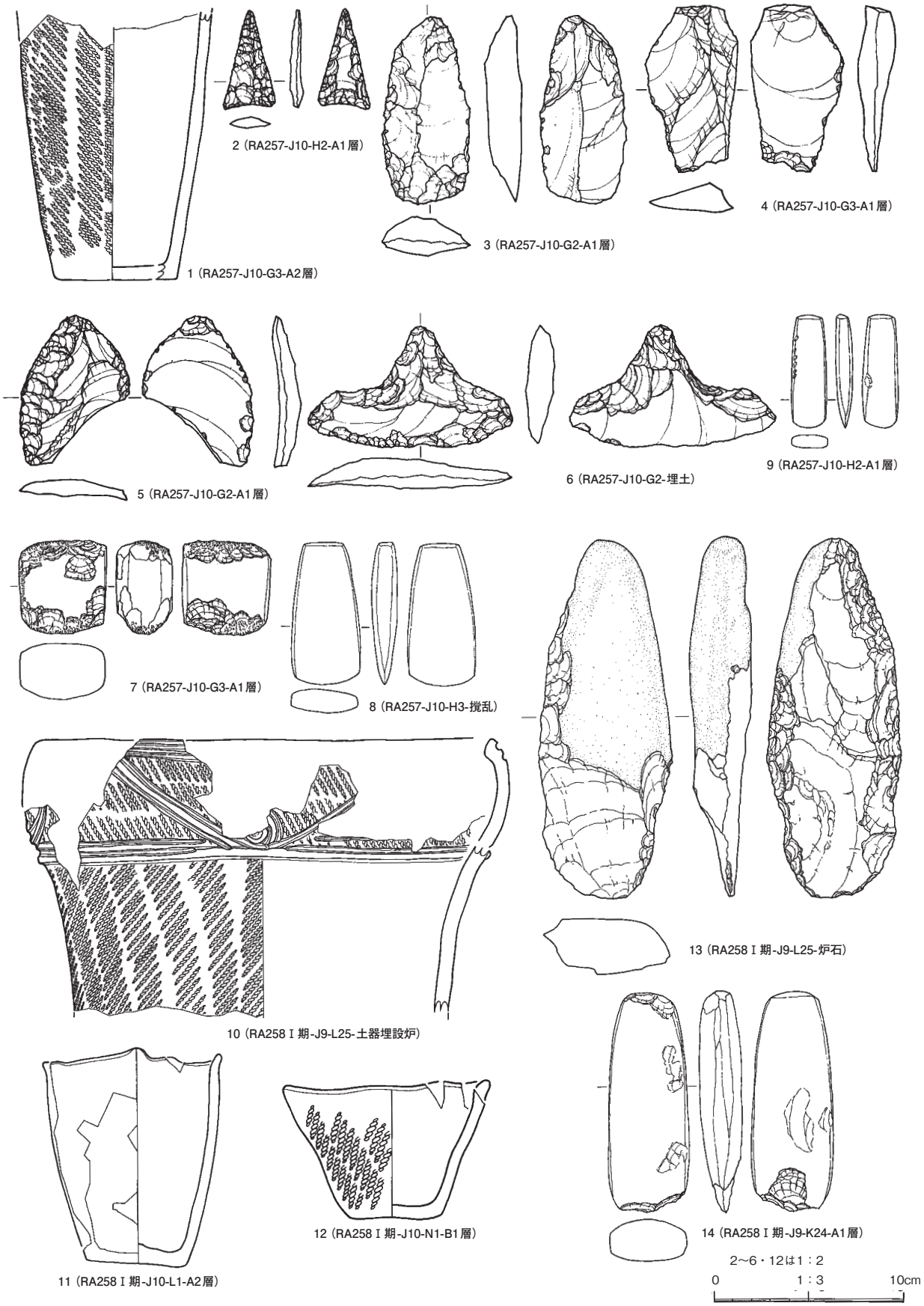


第 94 図　RA252 竪穴住居跡出土遺物（6）

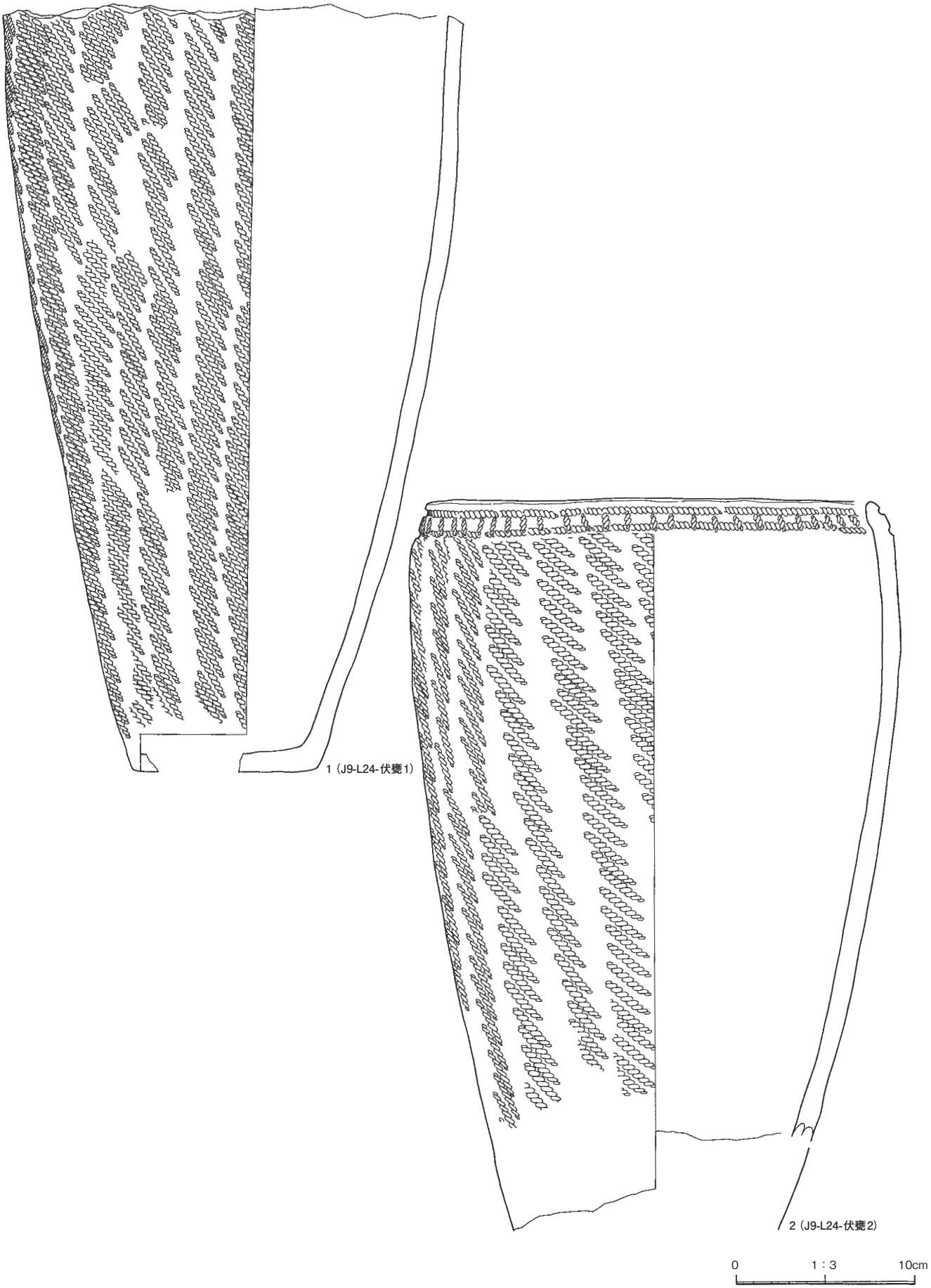
第 95 図　RA253 竪穴住居跡出土遺物（1）



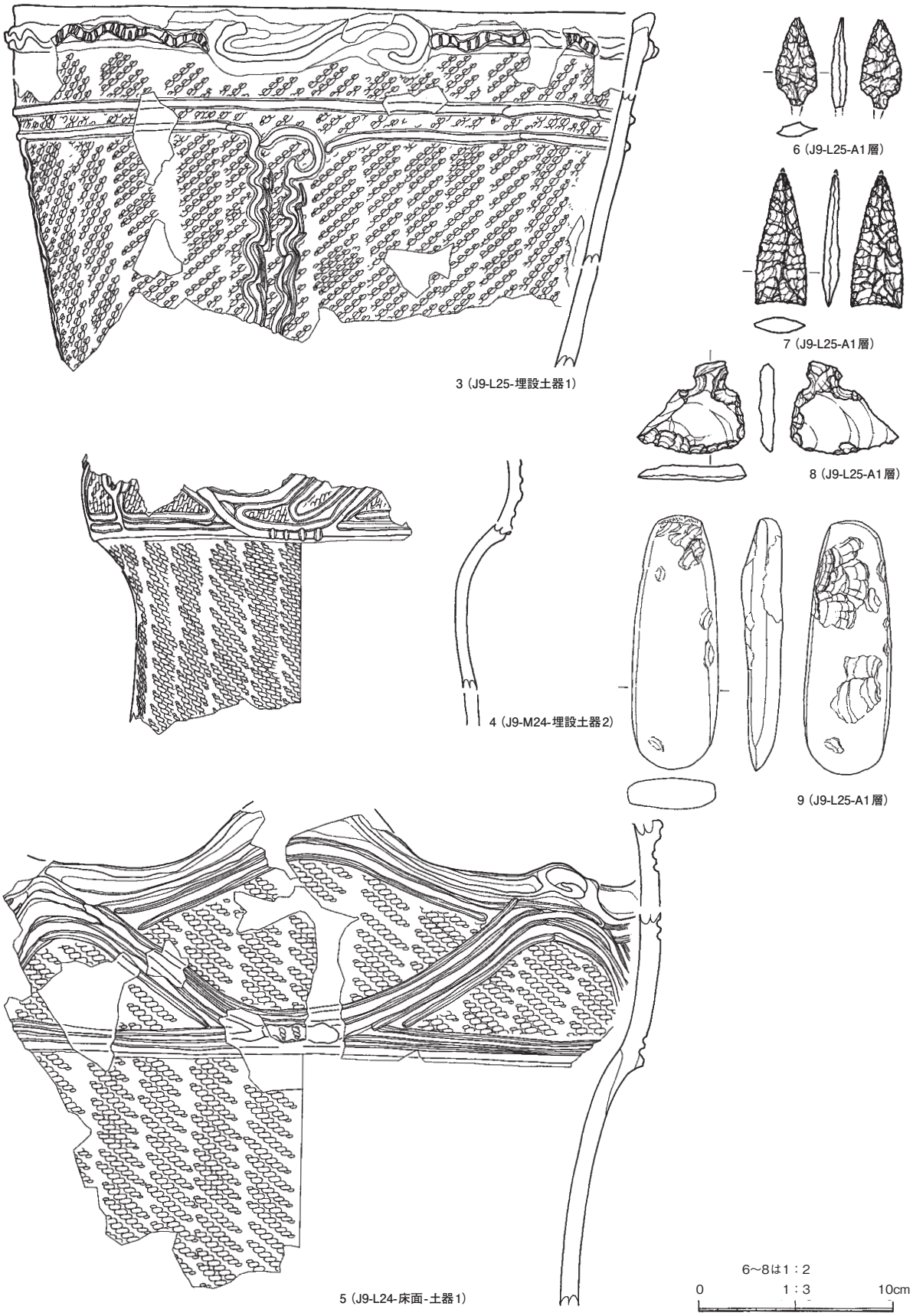
第 96 図　RA253 竪穴住居跡出土遺物（2）



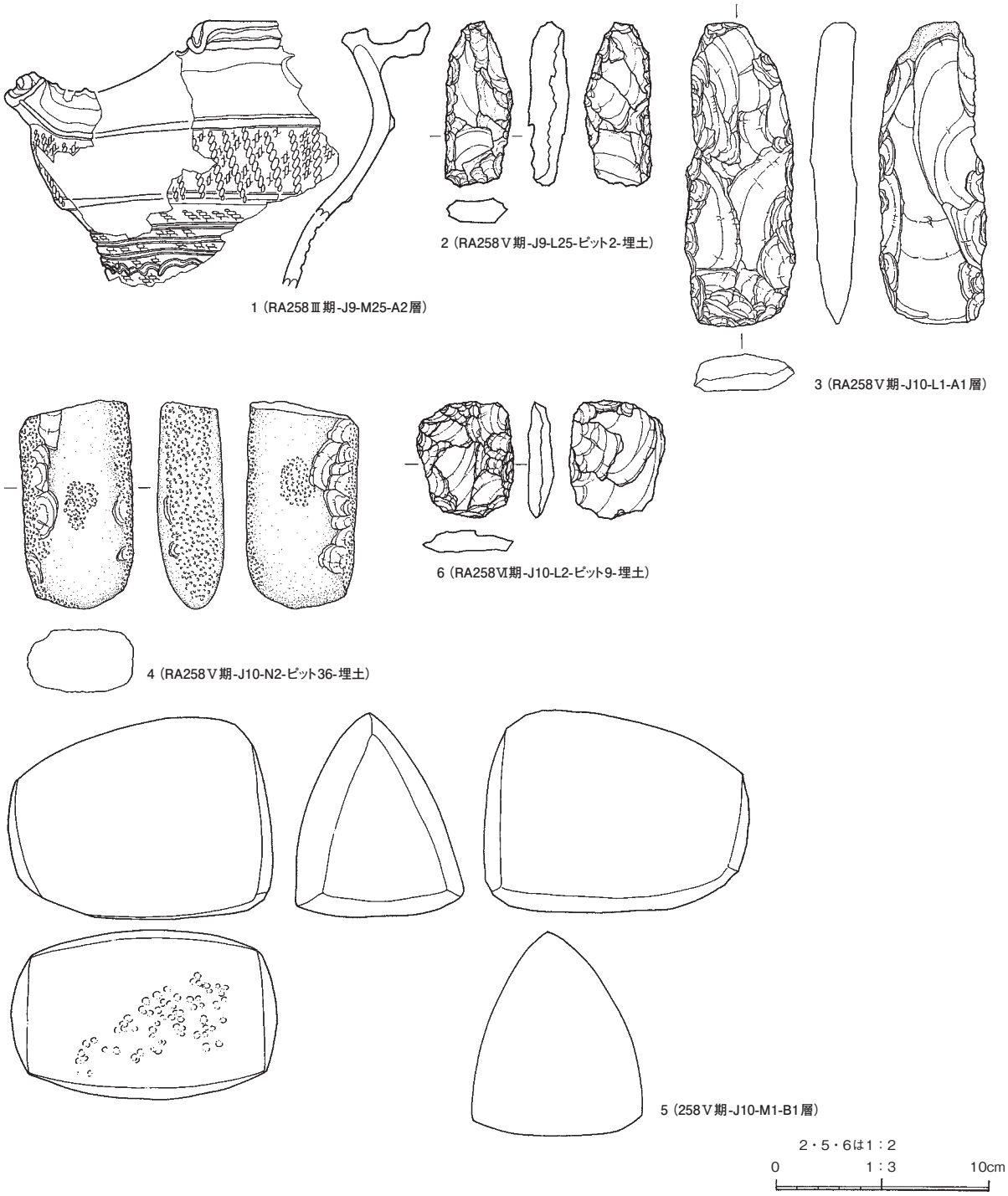
第97図　RA257・258 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物



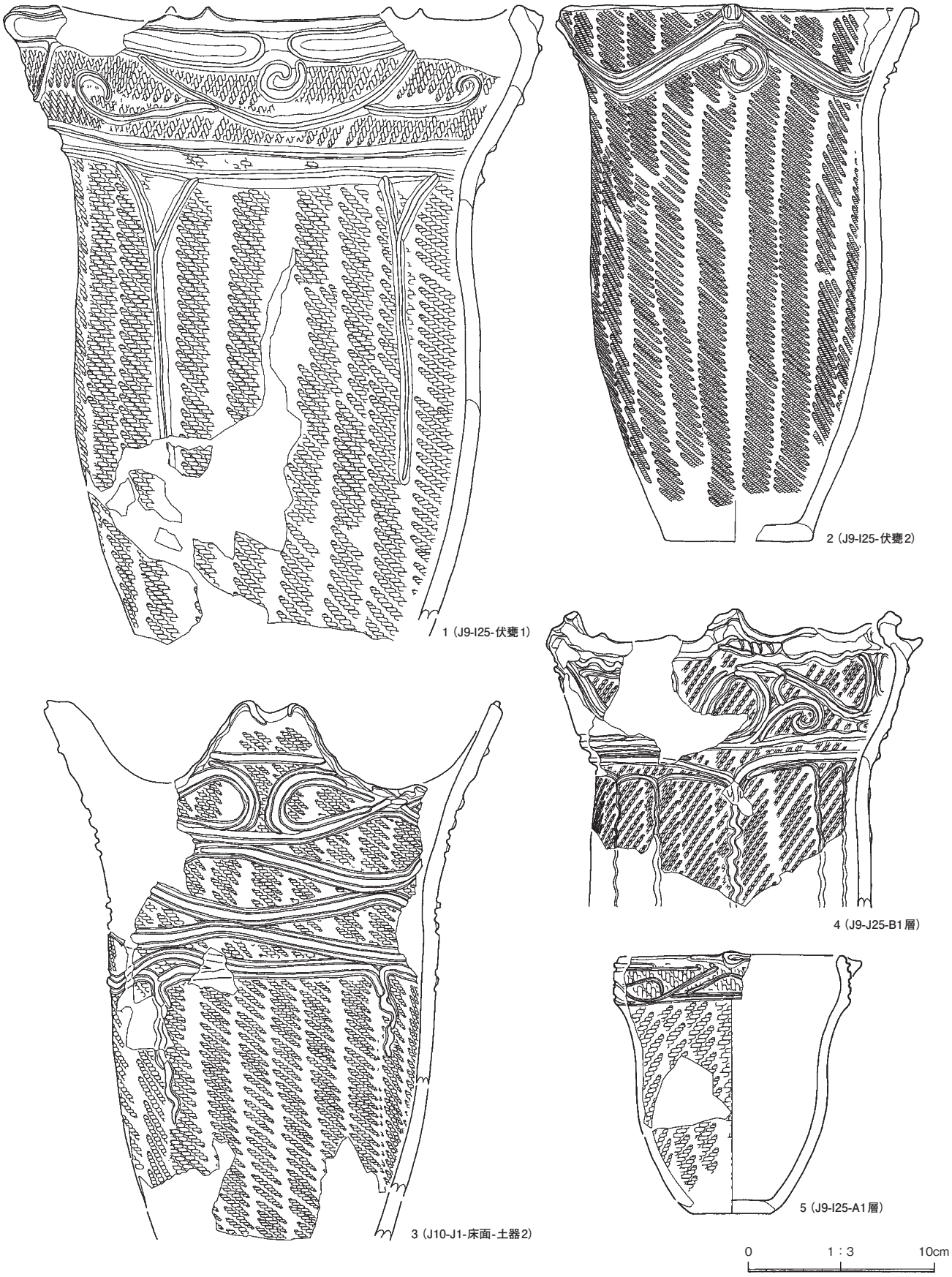
第 98 図　RA258 Ⅱ期竪穴住居跡出土遺物（1）



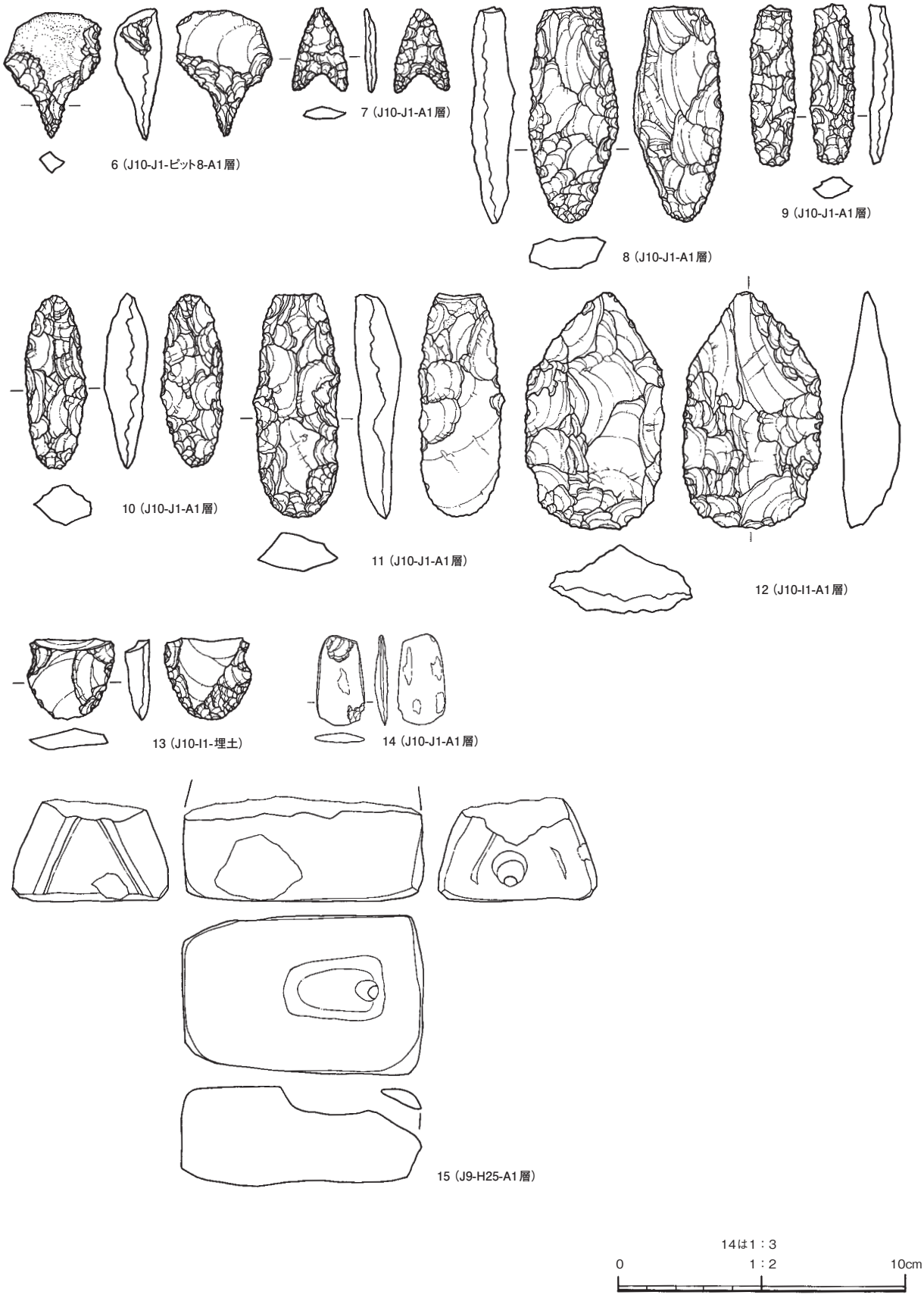
第99図　RA258 Ⅱ期竪穴住居跡出土遺物（2）



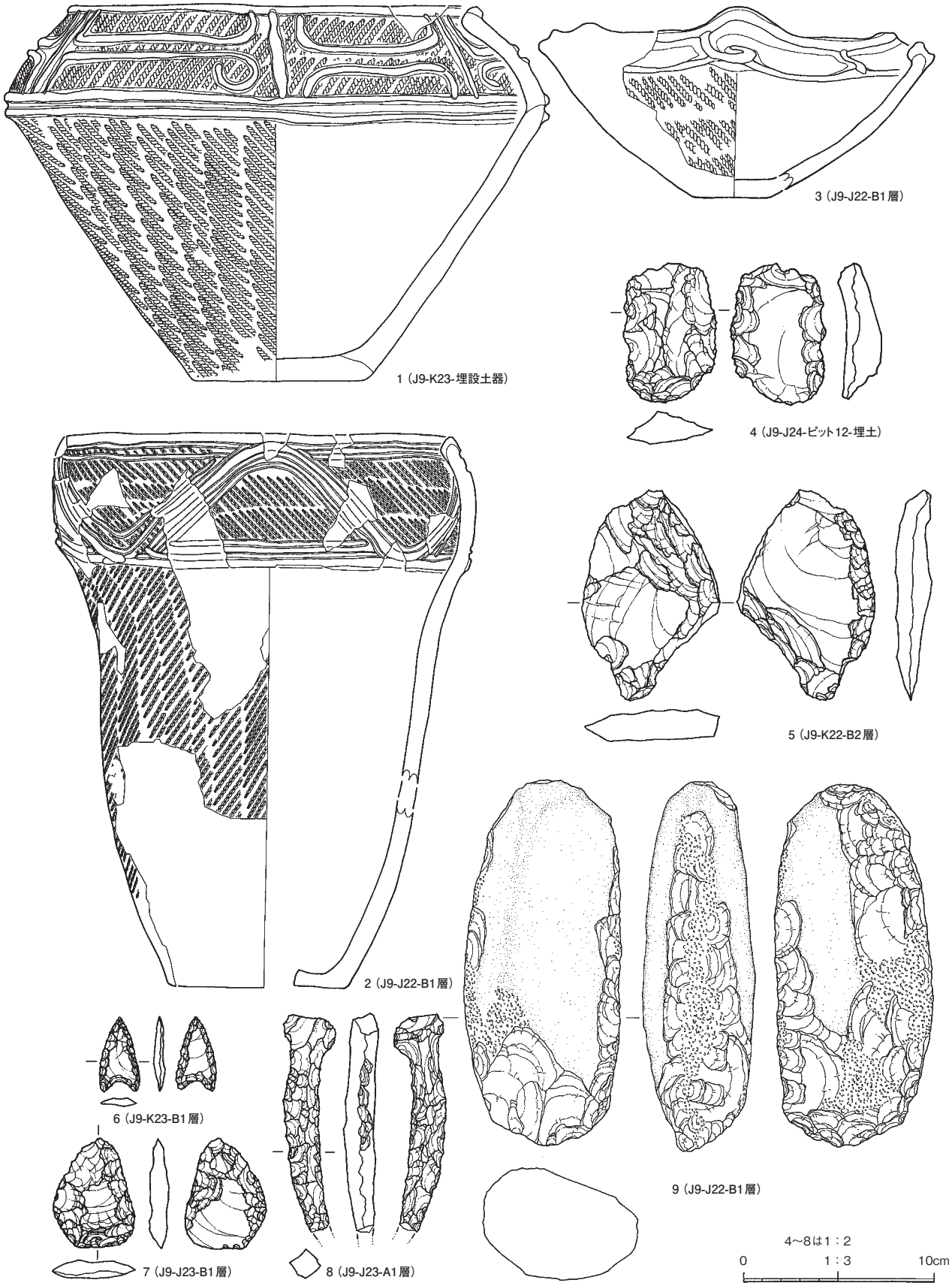
第 100 図　RA258 Ⅲ期・Ⅴ期・Ⅵ期竪穴住居跡出土遺物



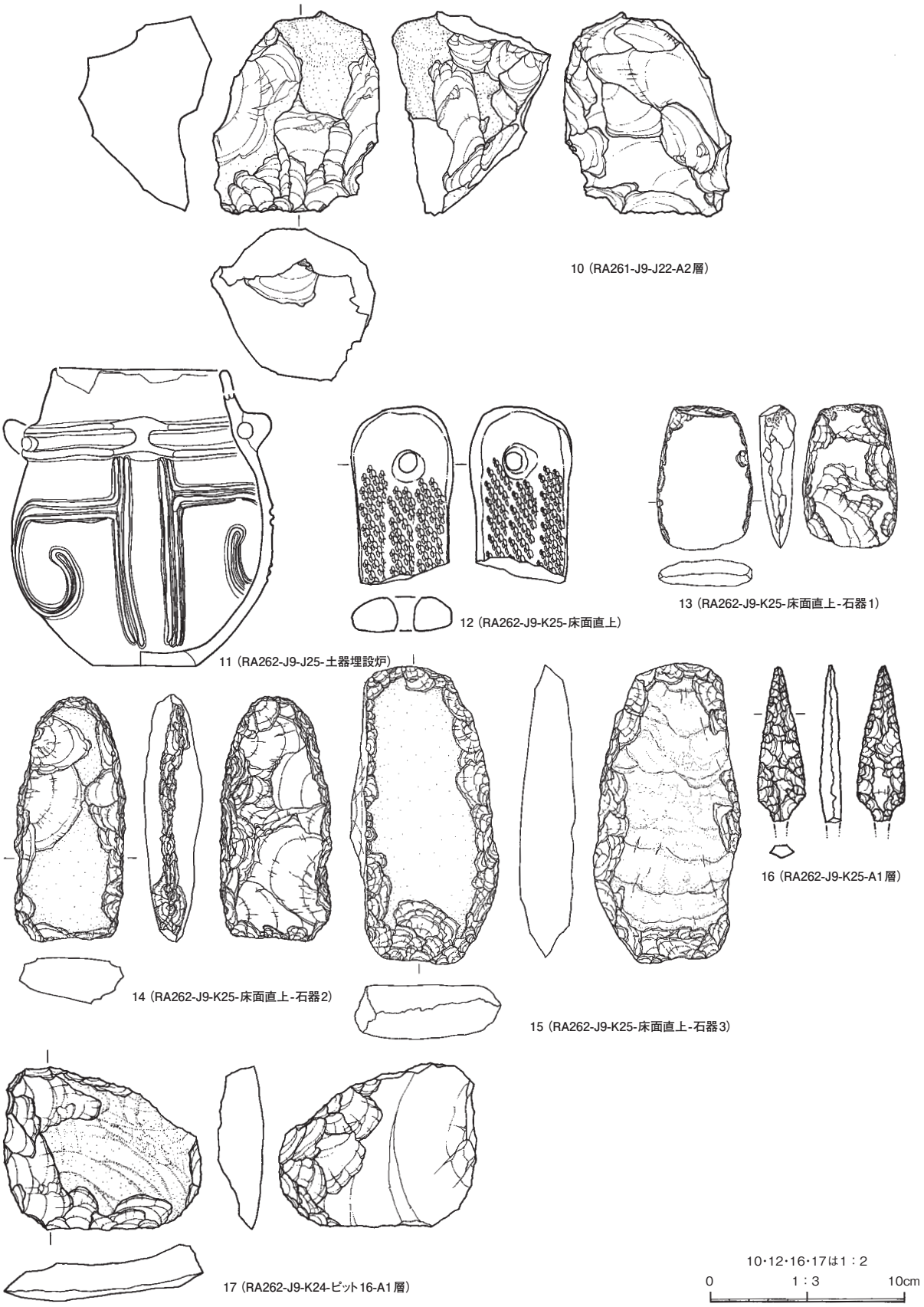
第 101 図　RA259 竪穴住居跡出土遺物（1）



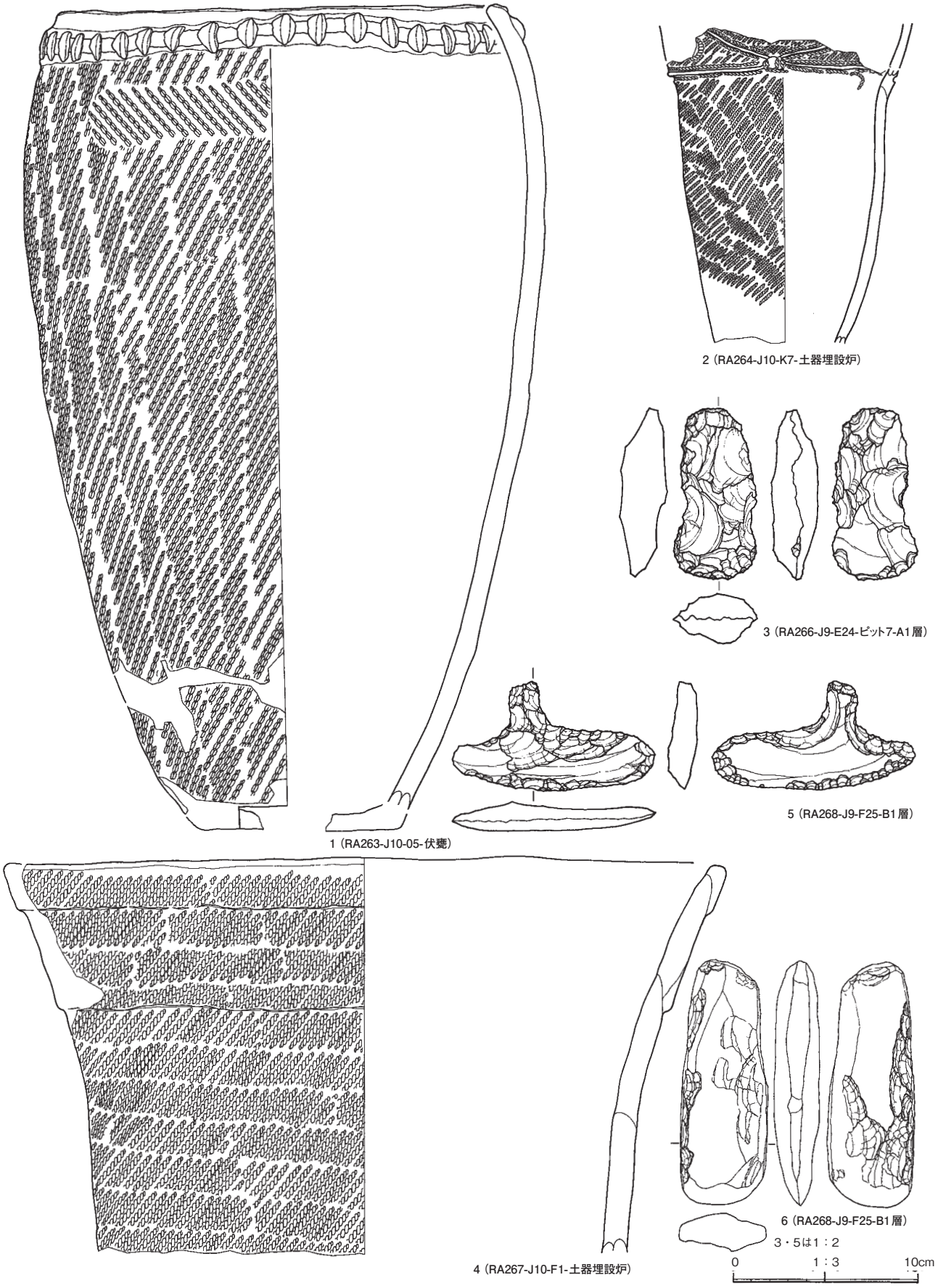
第 102 図　RA259 竪穴住居跡出土遺物（2）



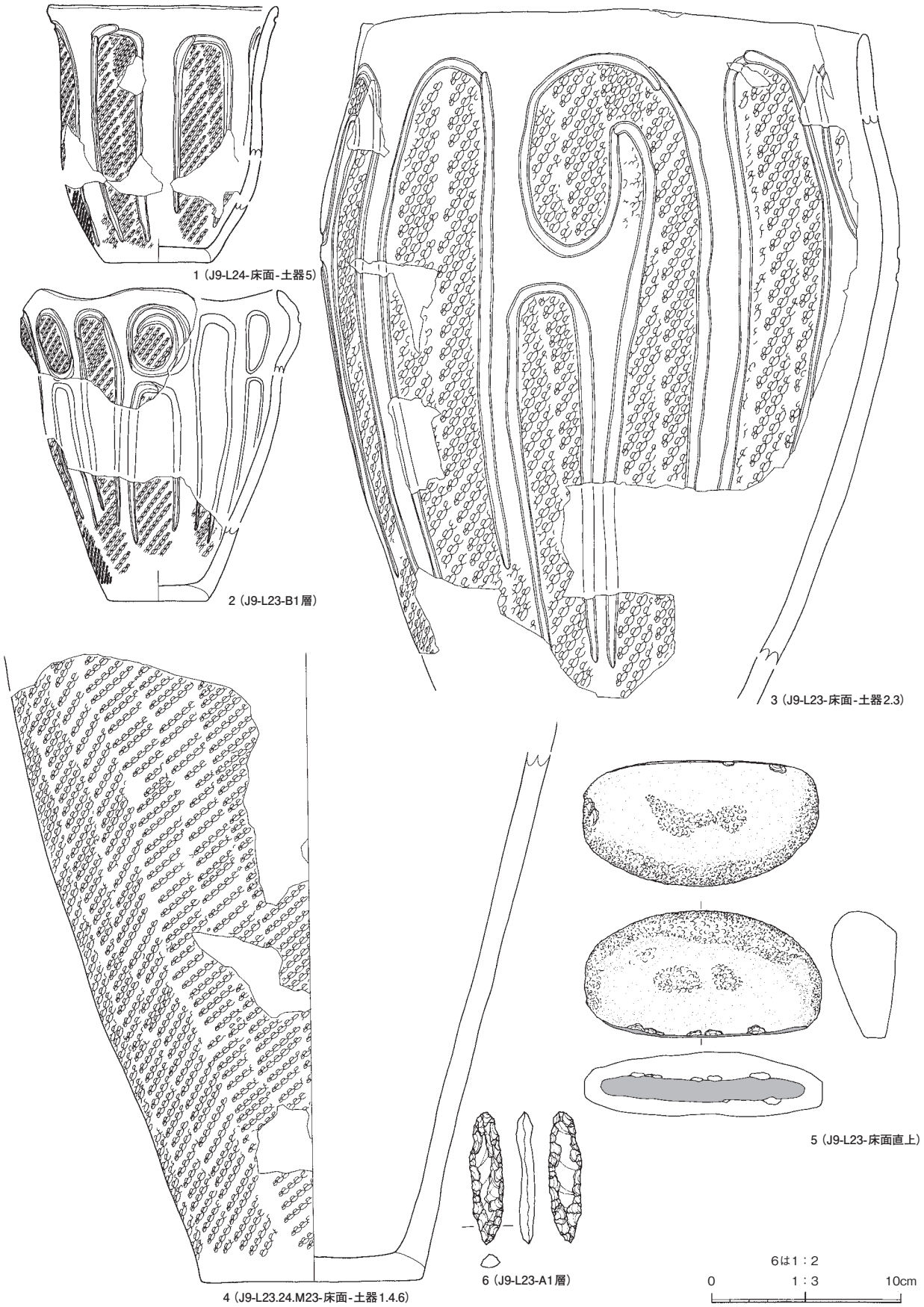
第 103 図　RA261 竪穴住居跡出土遺物（1）



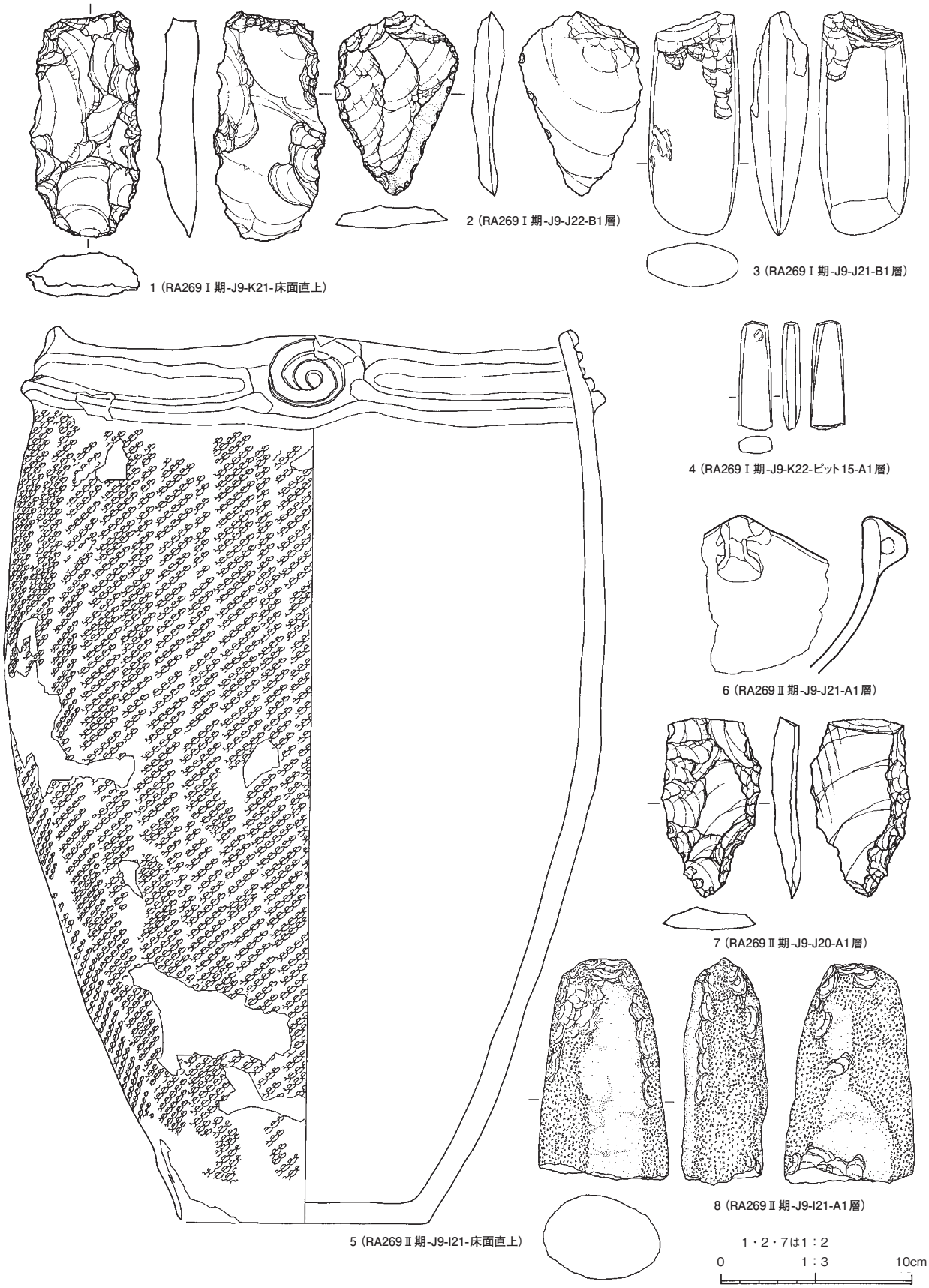
第104図　RA261（2）・262竪穴住居跡出土遺物



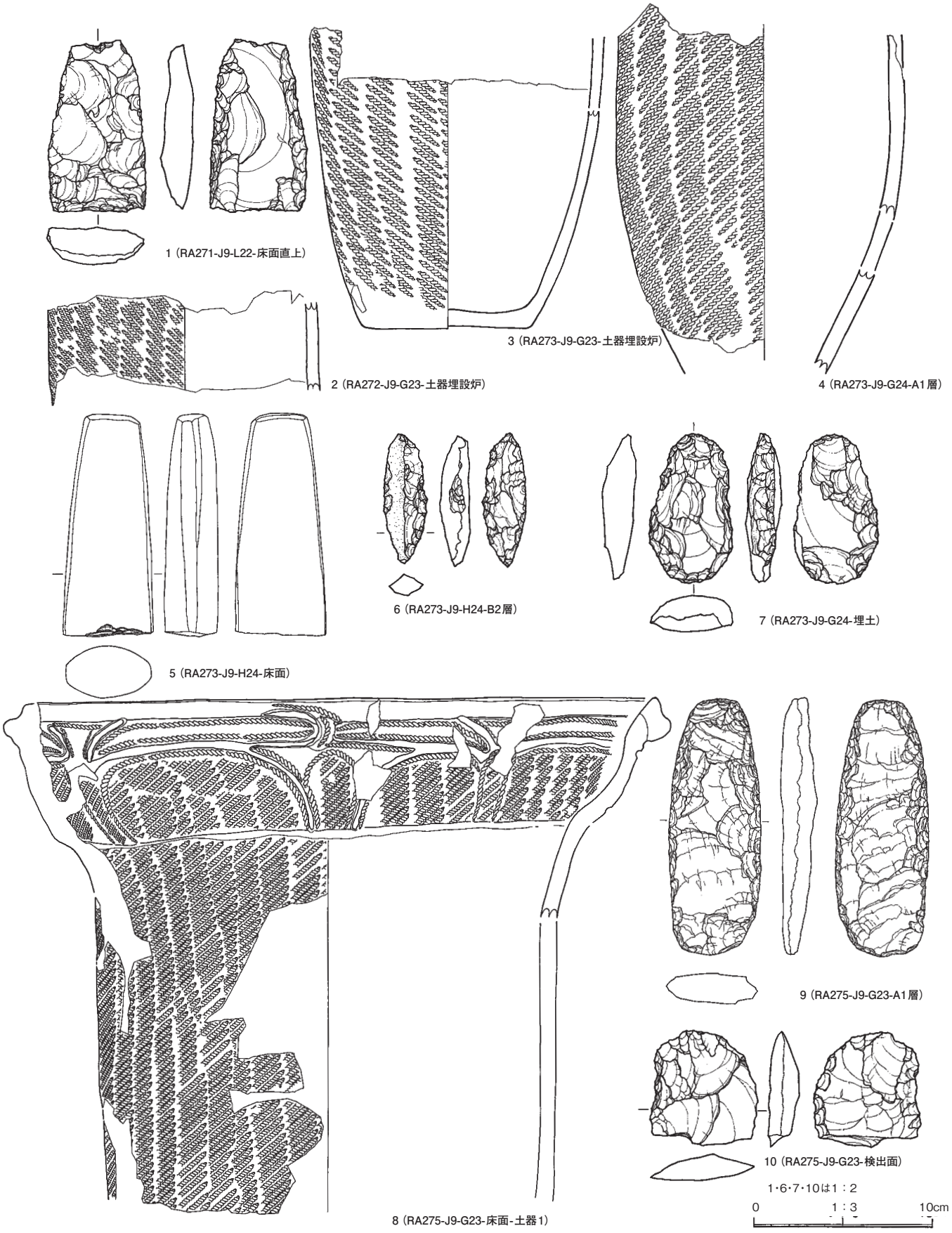
第105図　RA263・264・266～268竪穴住居跡出土遺物



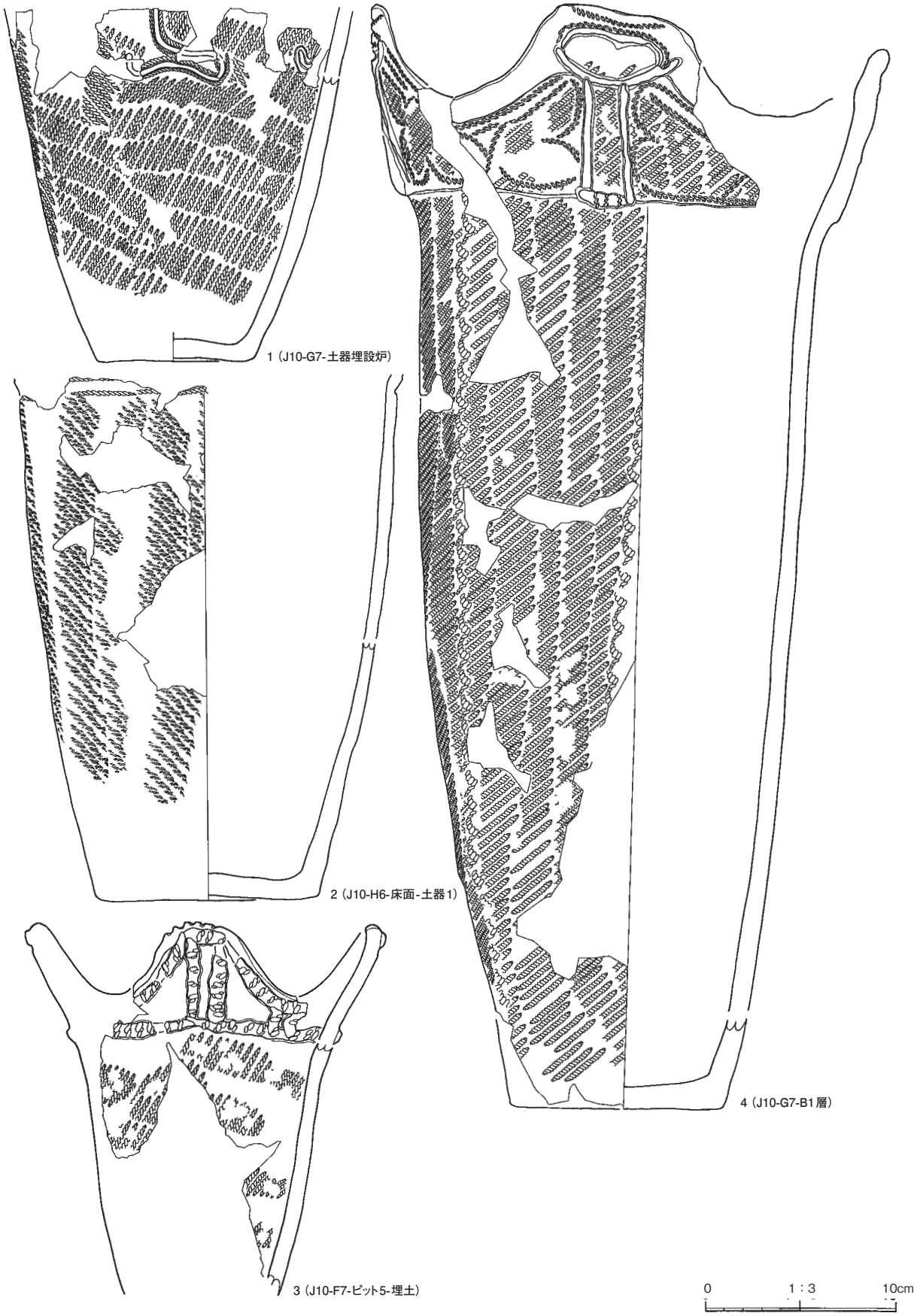
第 106 図　RA265 竪穴住居跡出土遺物



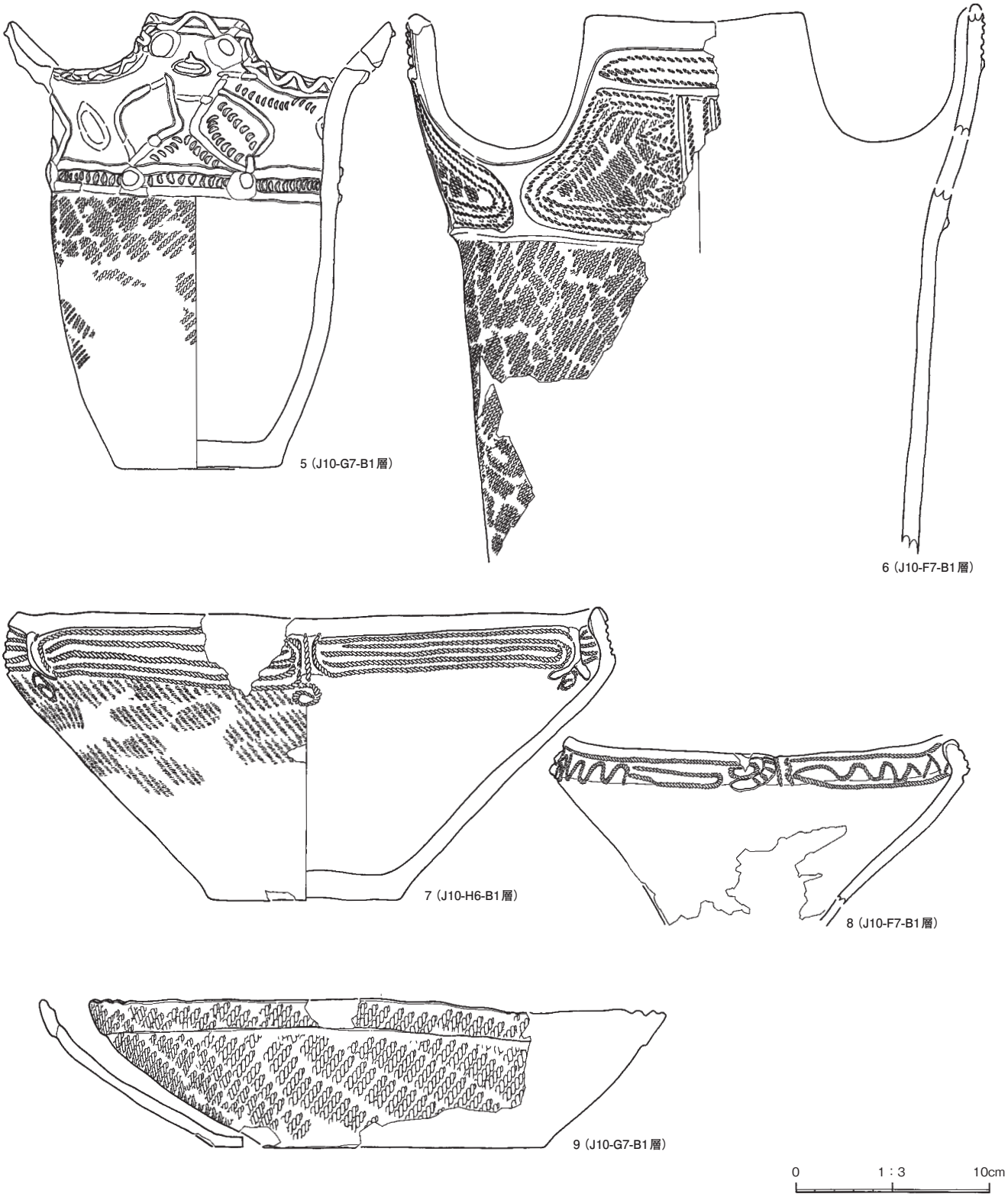
第107図　RA269 Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡出土遺物



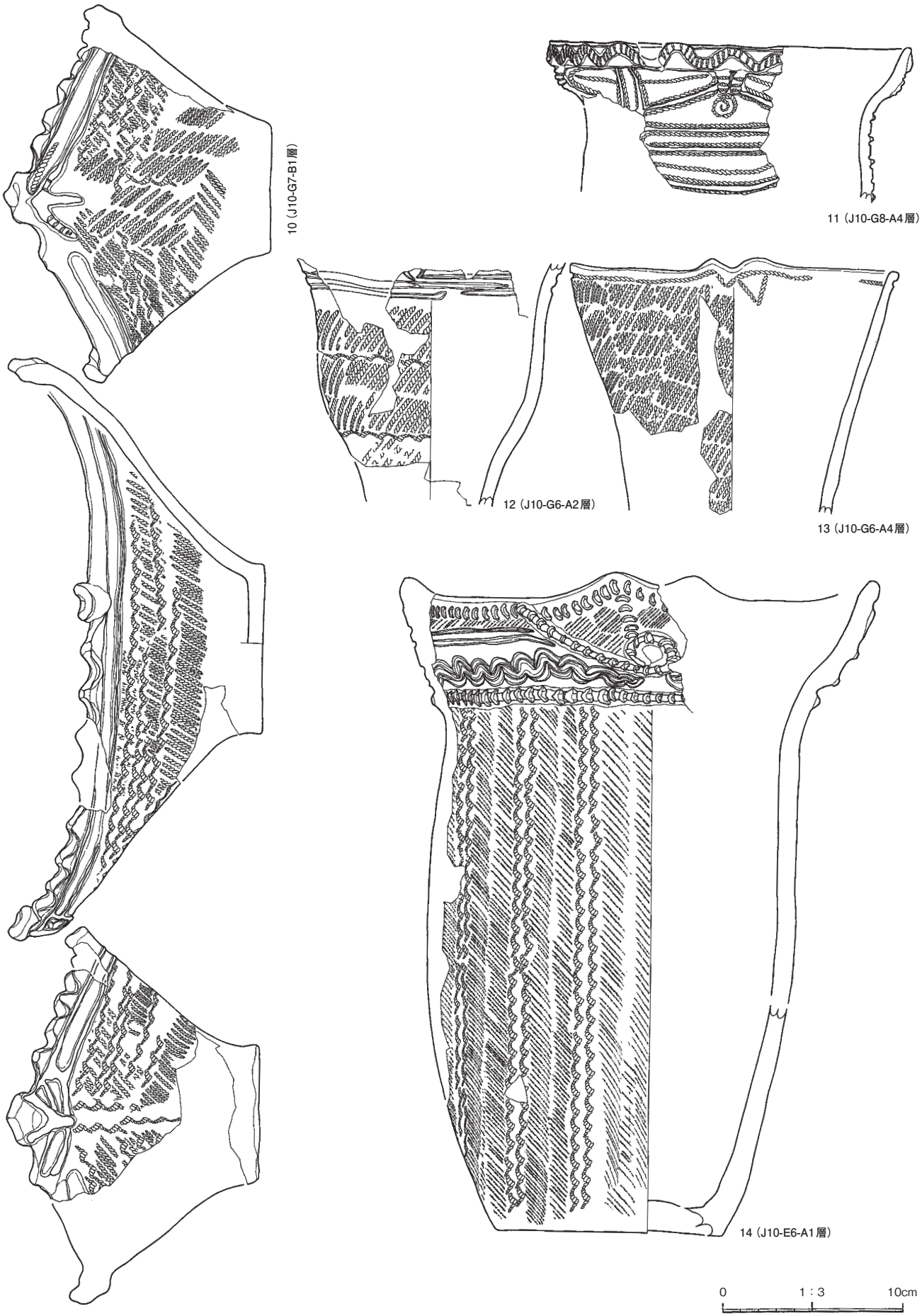
第 108 図　RA271 ～ 273・275 竪穴住居跡出土遺物



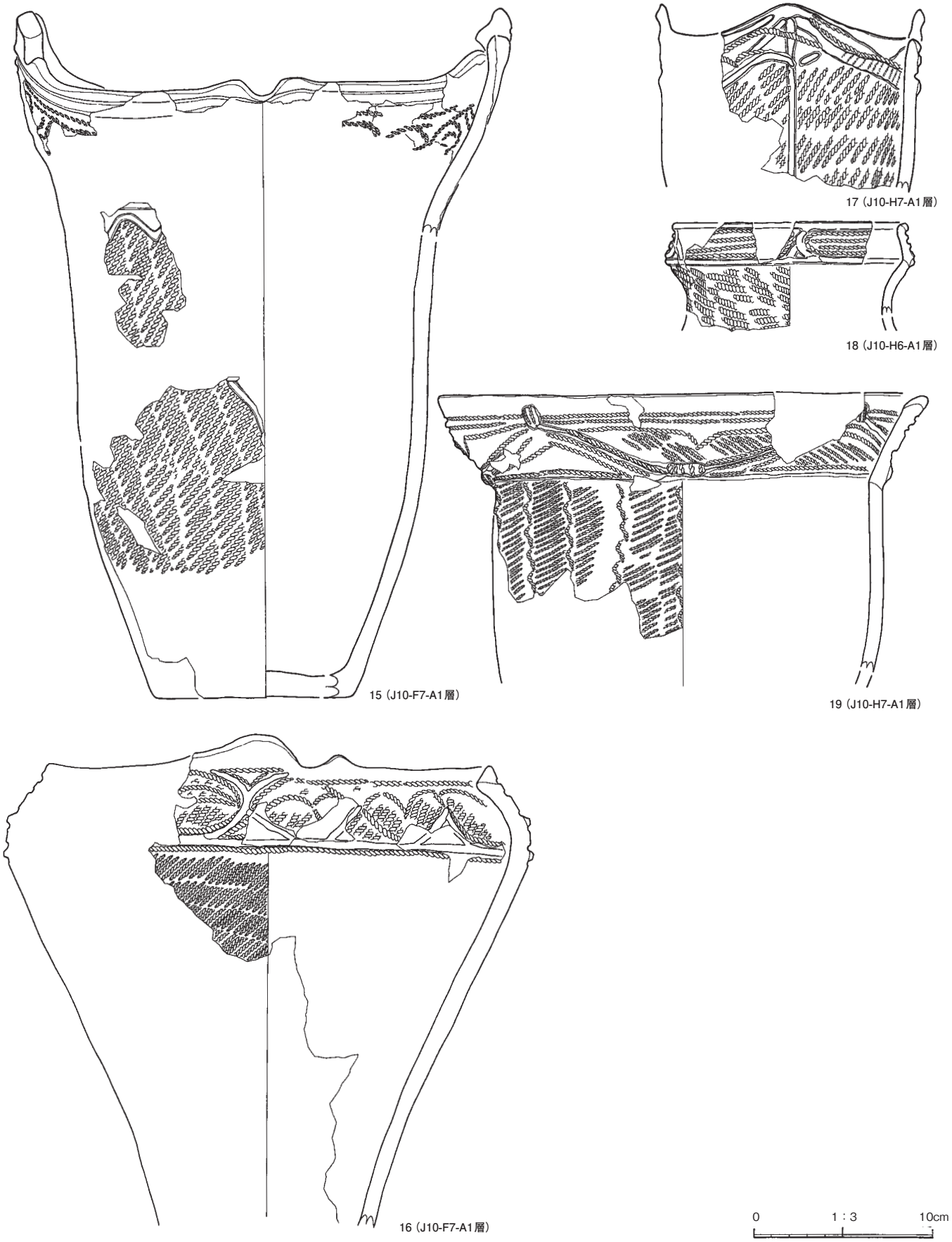
第 109 図　RA274 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物（1）



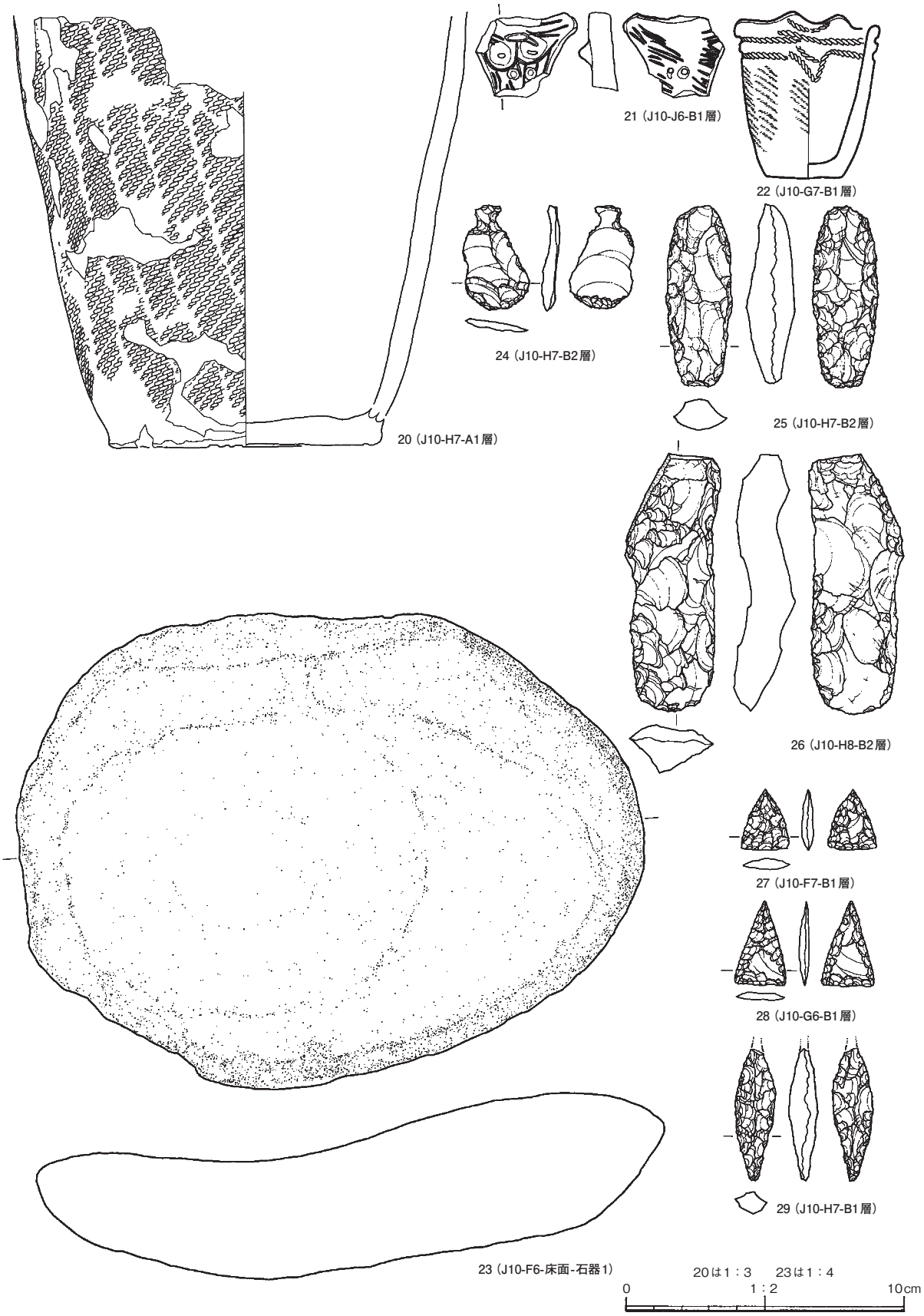
第 110 図　RA274 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物（2）



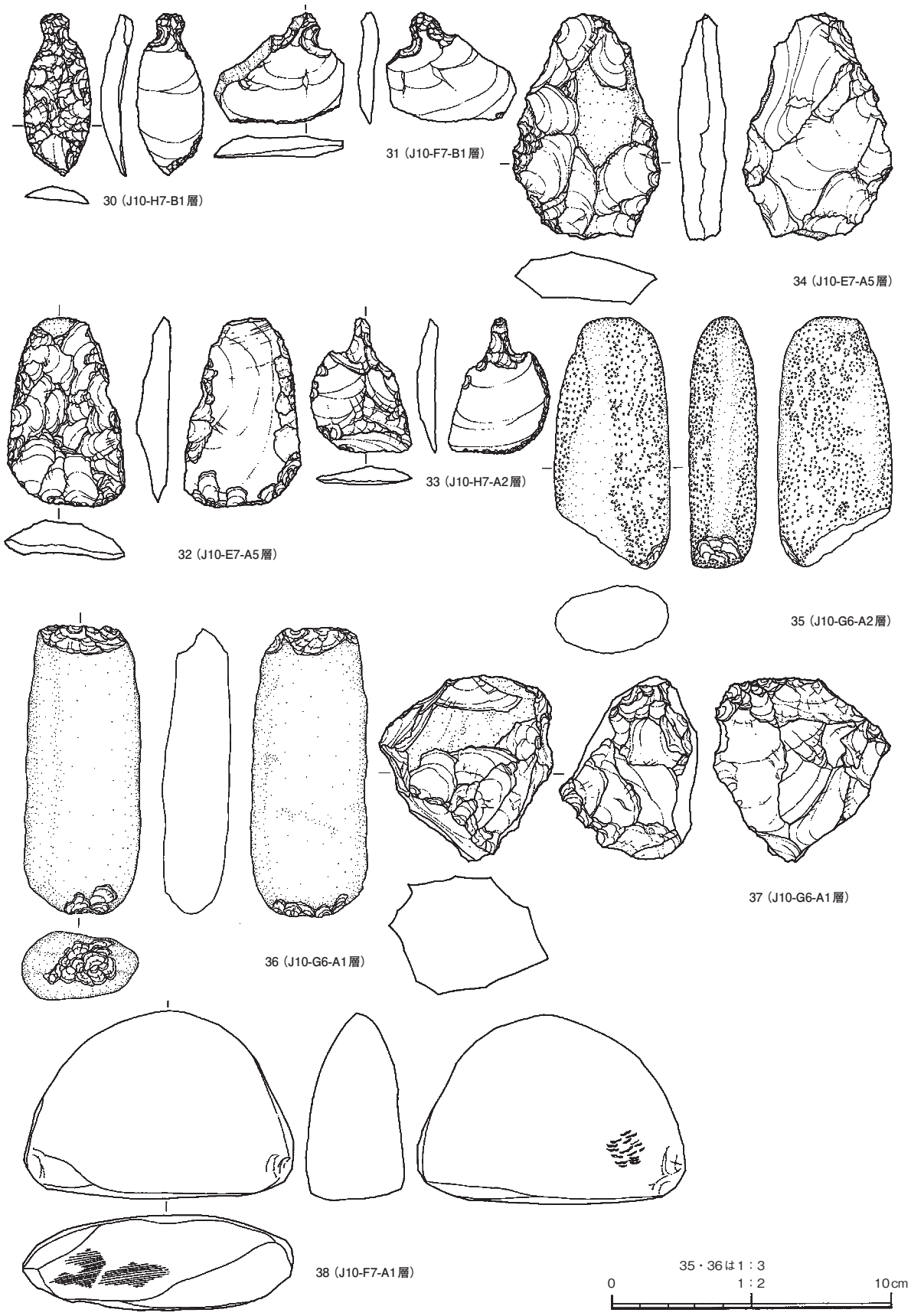
第 111 図　RA274 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物（3）



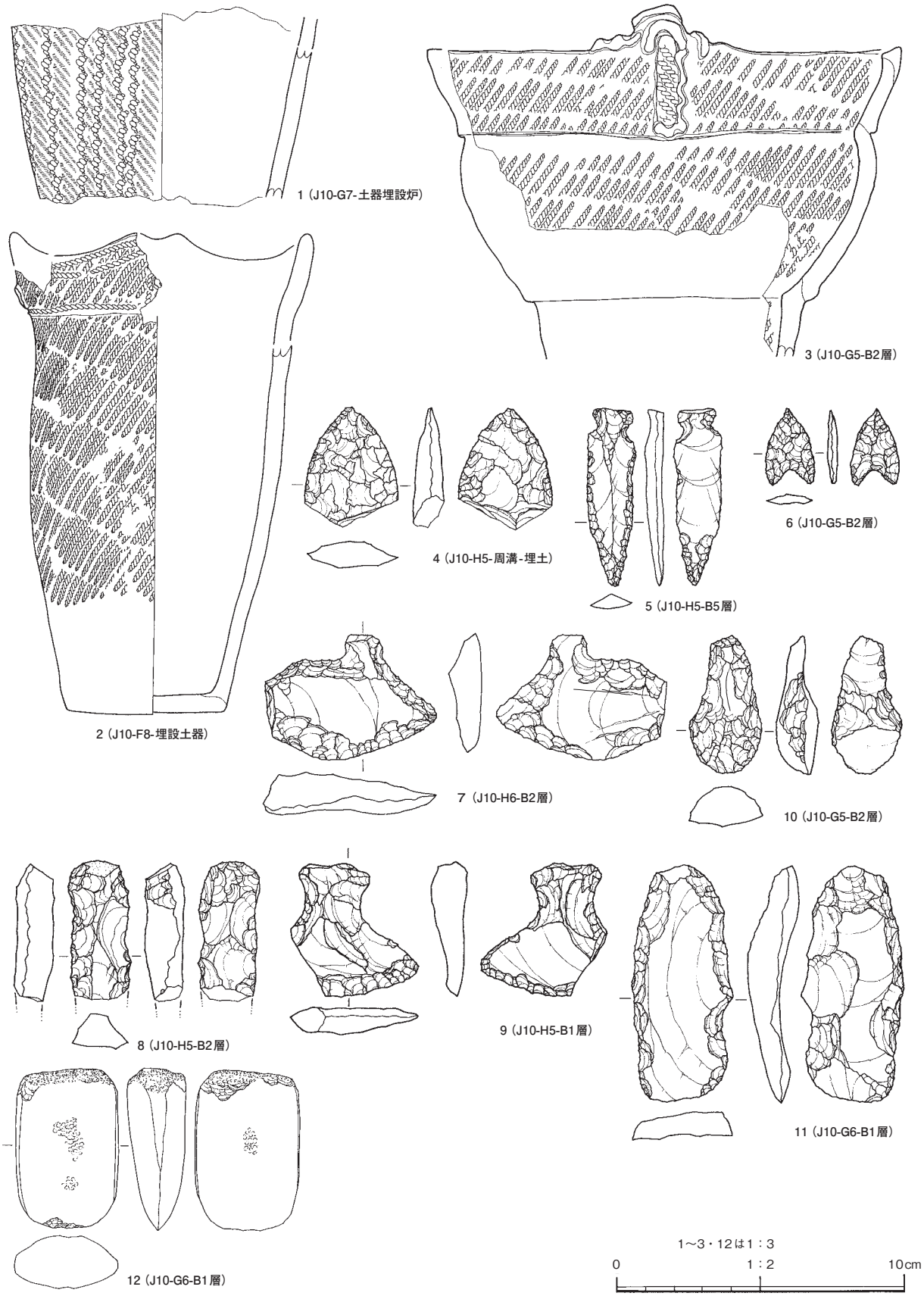
第 112 図　RA274 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物（4）



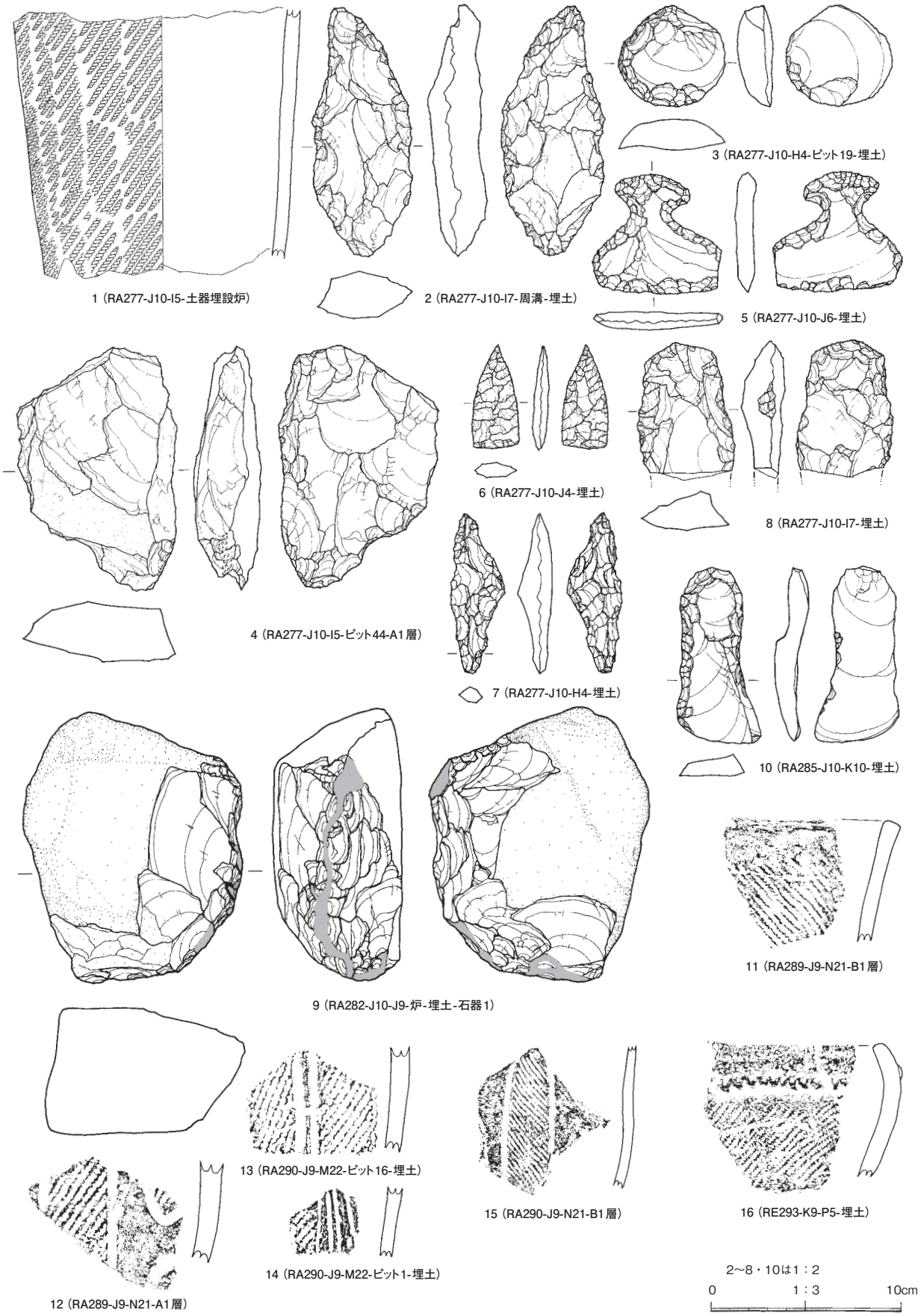
第113図　RA274 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物（5）



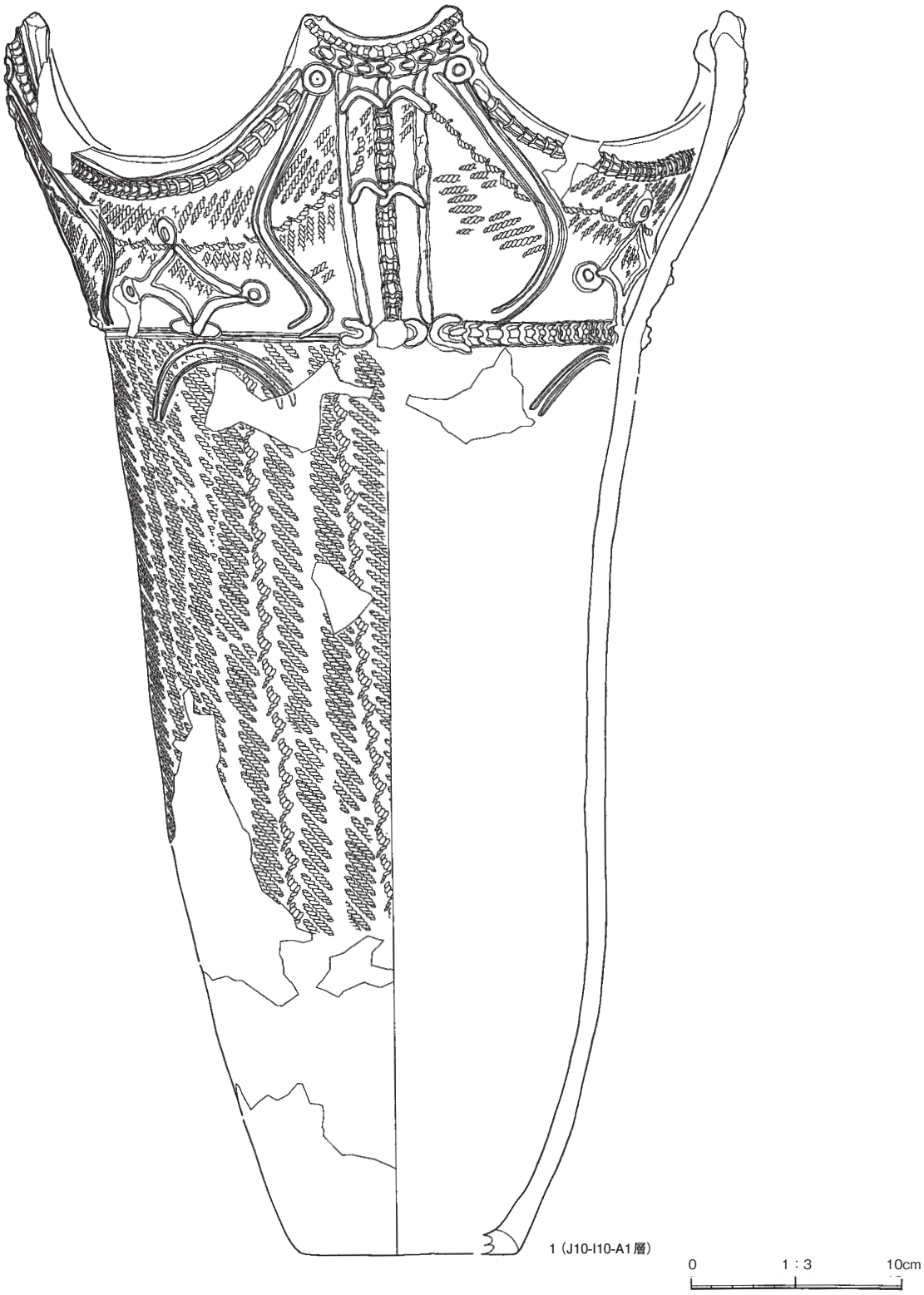
第114図　RA274 Ⅰ期竪穴住居跡出土遺物（6）



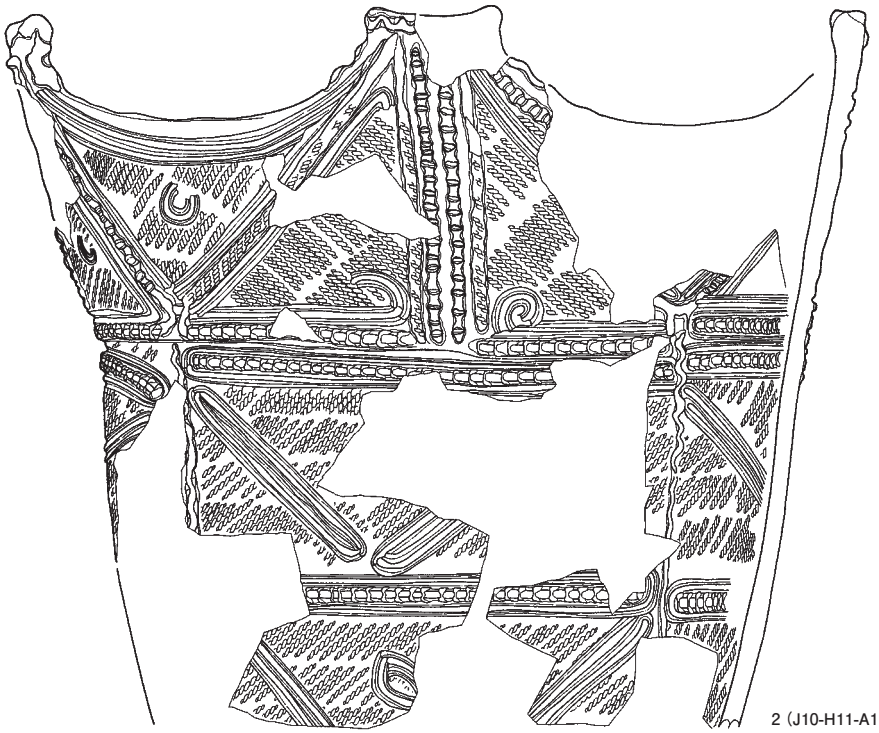
第 115 図　RA274 Ⅱ期竪穴住居跡出土遺物

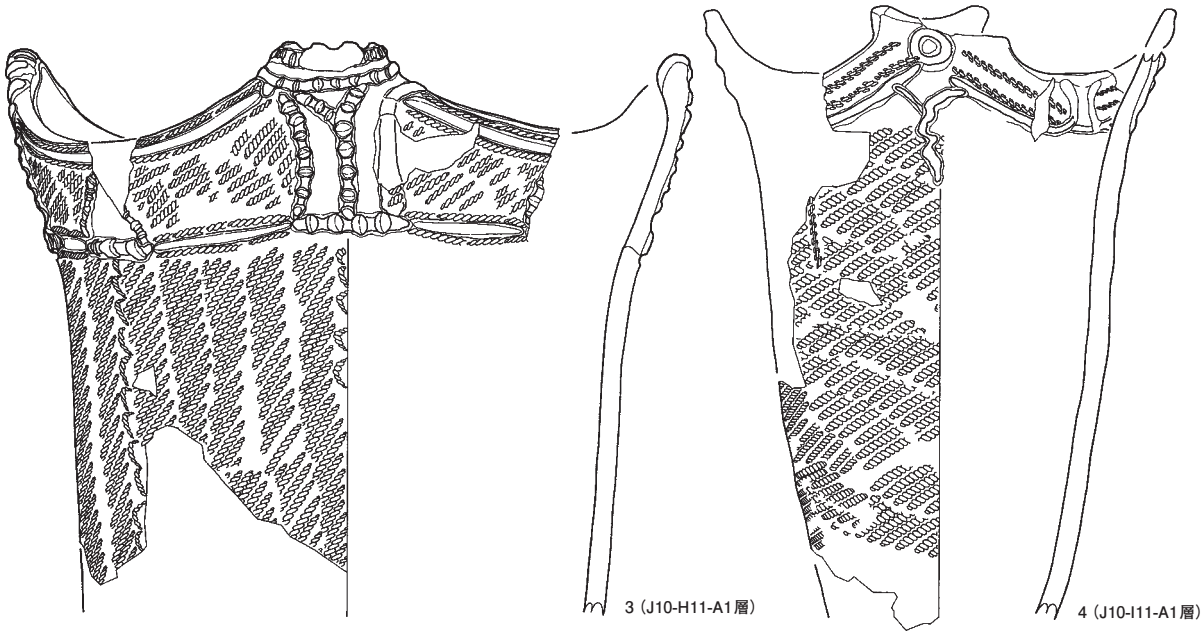


第116図　RA277・282・285・289・290 竪穴住居跡、RE293 竪穴跡出土遺物



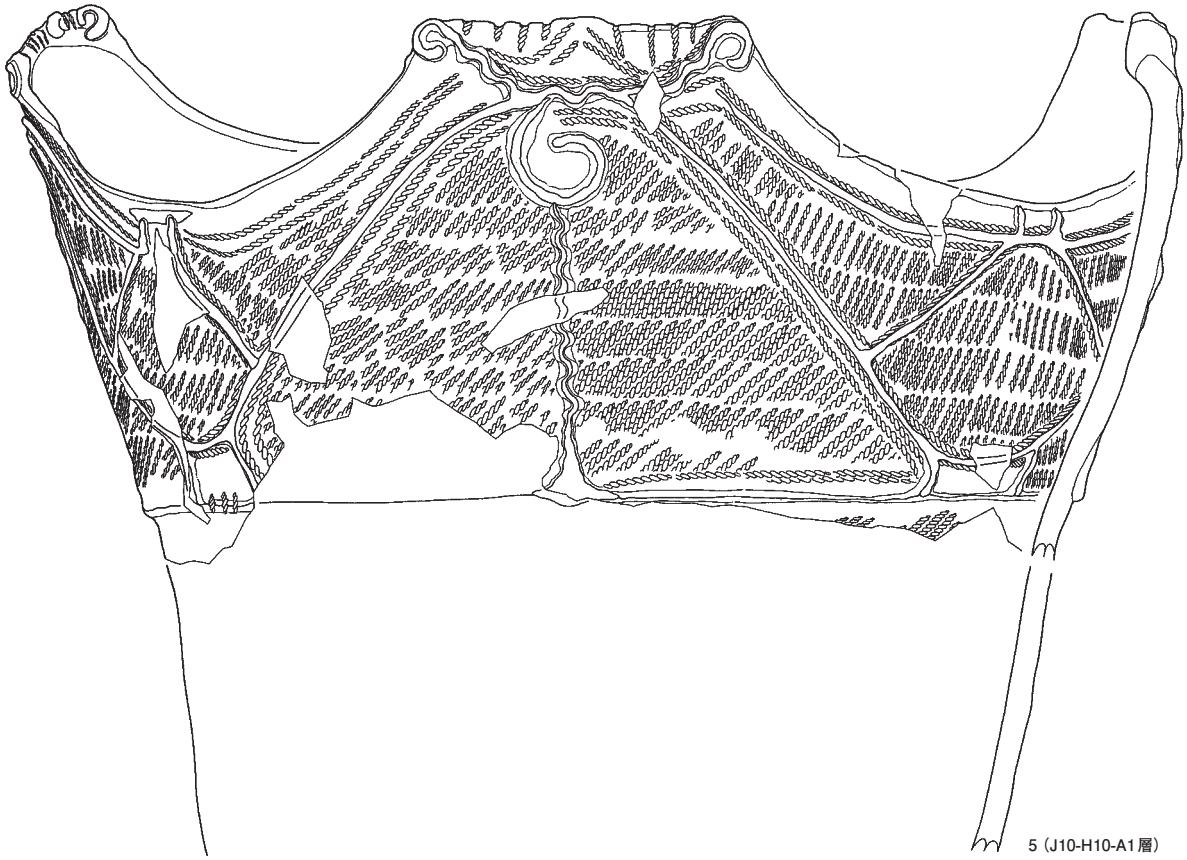
第 117 図　RA281 竪穴住居跡出土遺物（1）

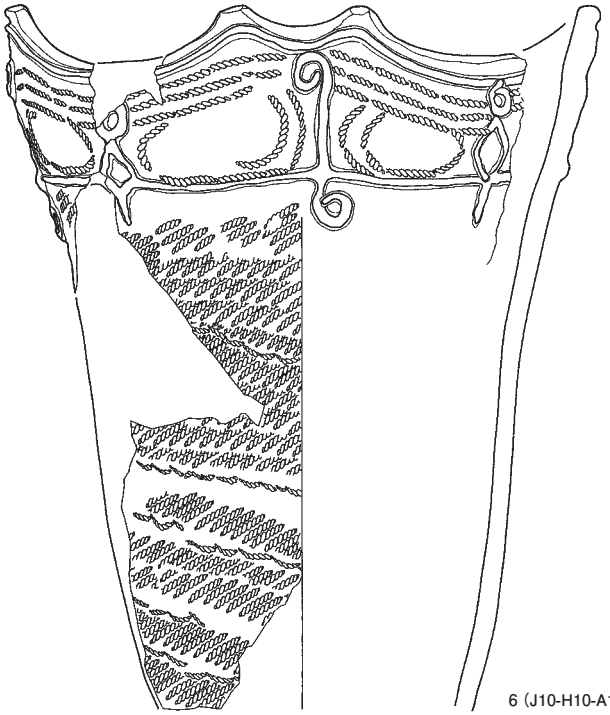


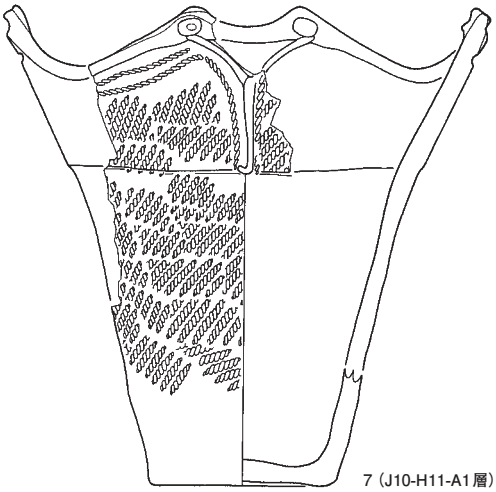


0　1：3　10cm

第 118 図　RA281 竪穴住居跡出土遺物（2）

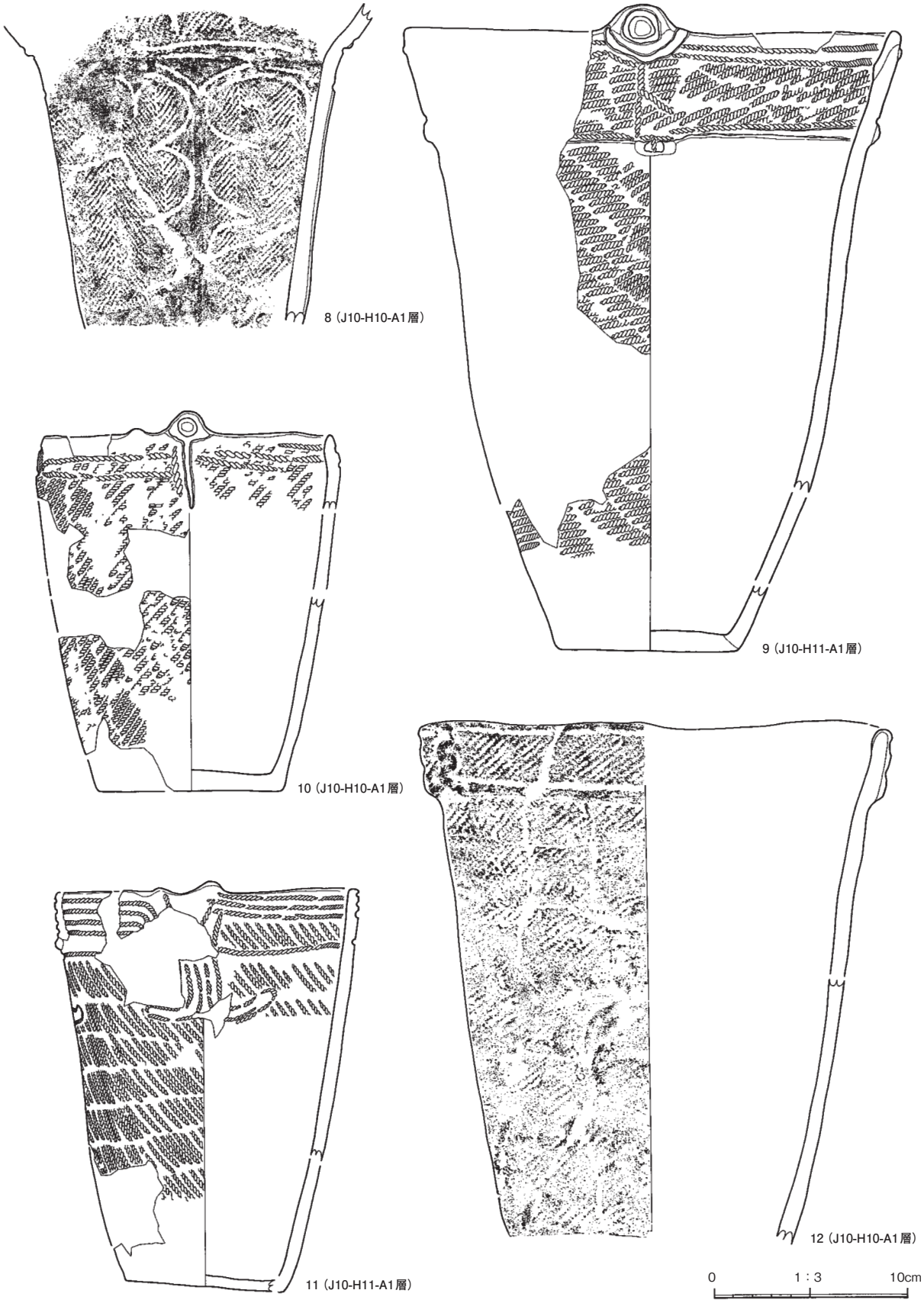




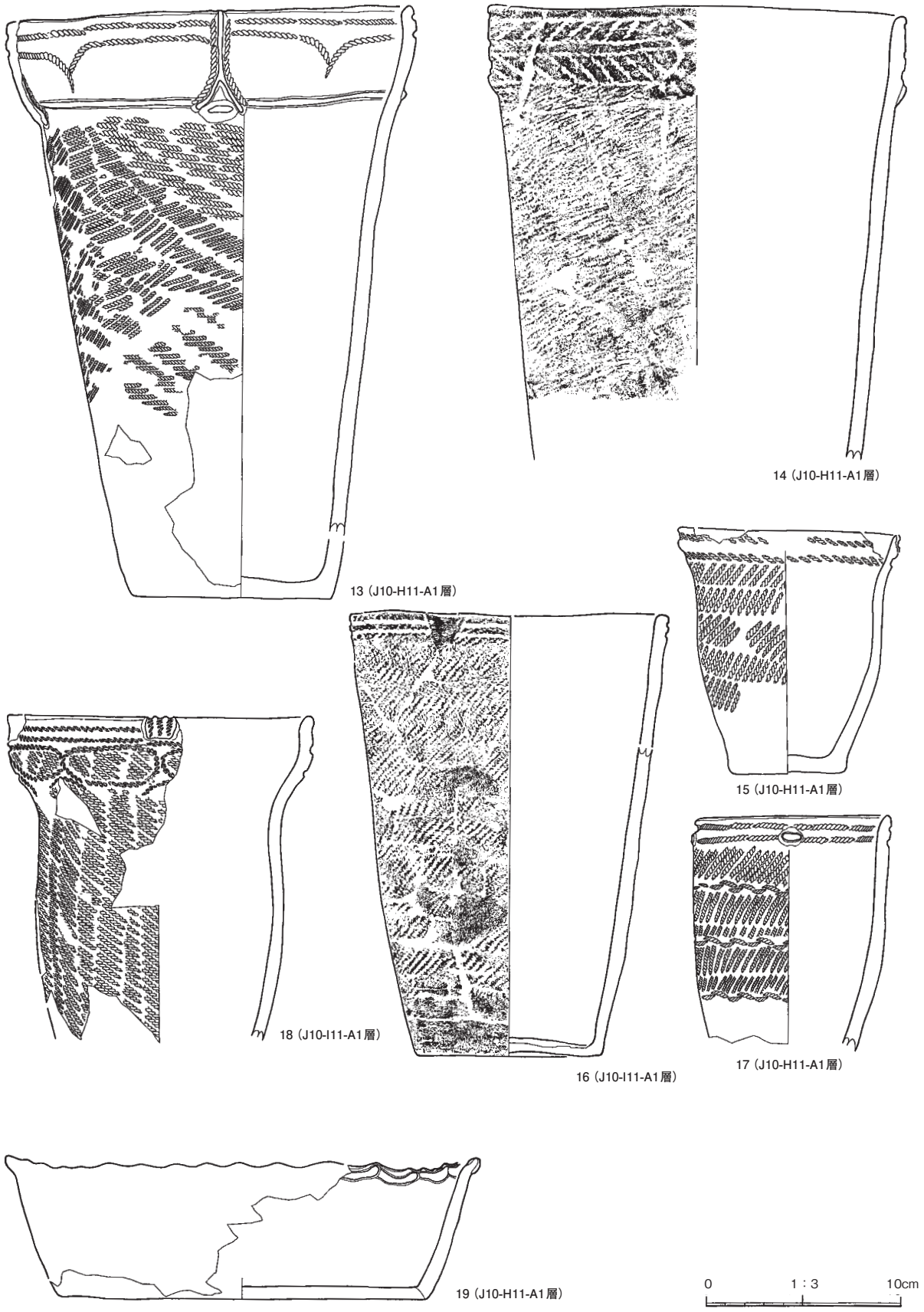


0　1：3　10cm

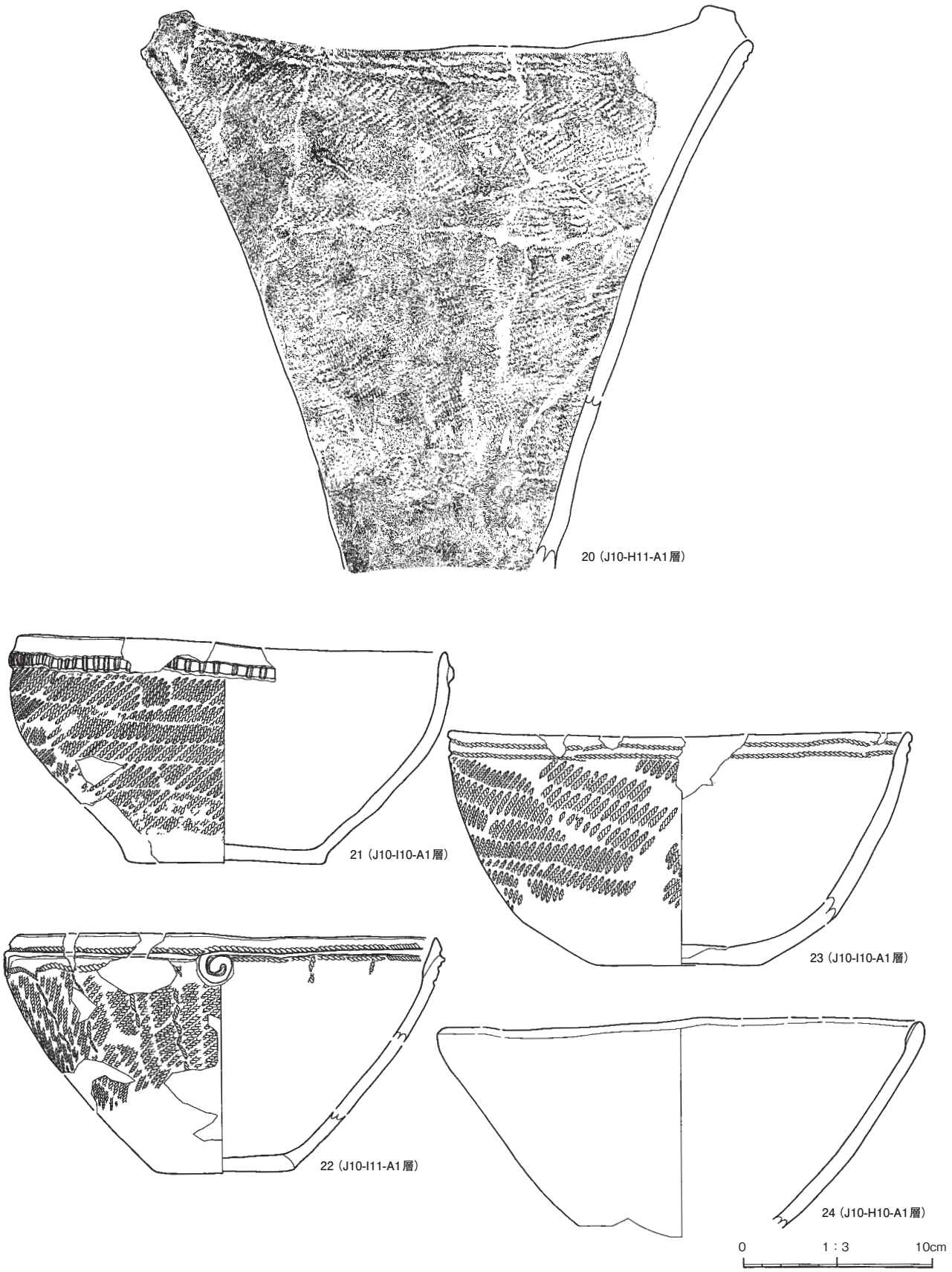
第 119 図　RA281 竪穴住居跡出土遺物（3）



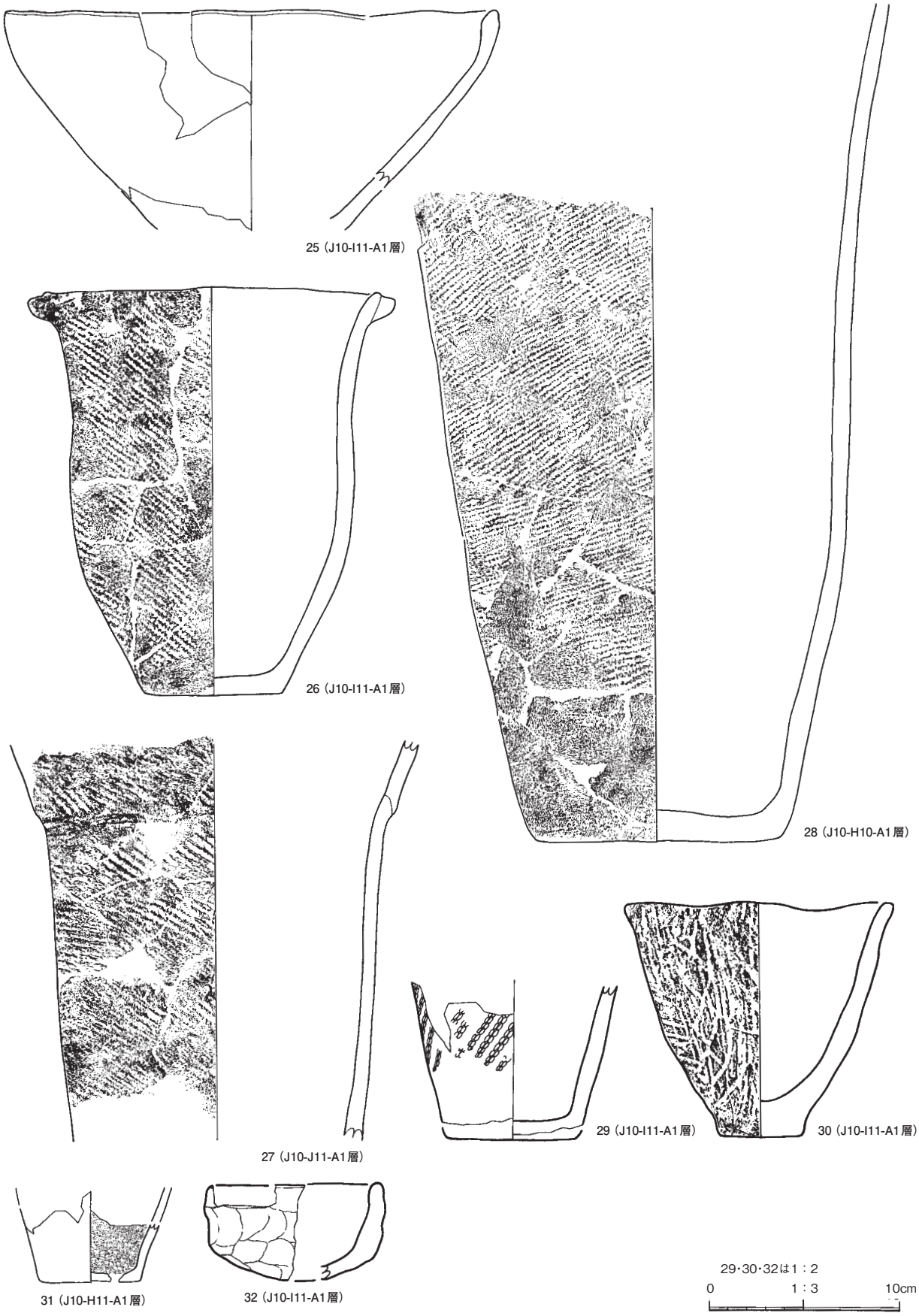
第 120 図　RA281 竪穴住居跡出土遺物（4）



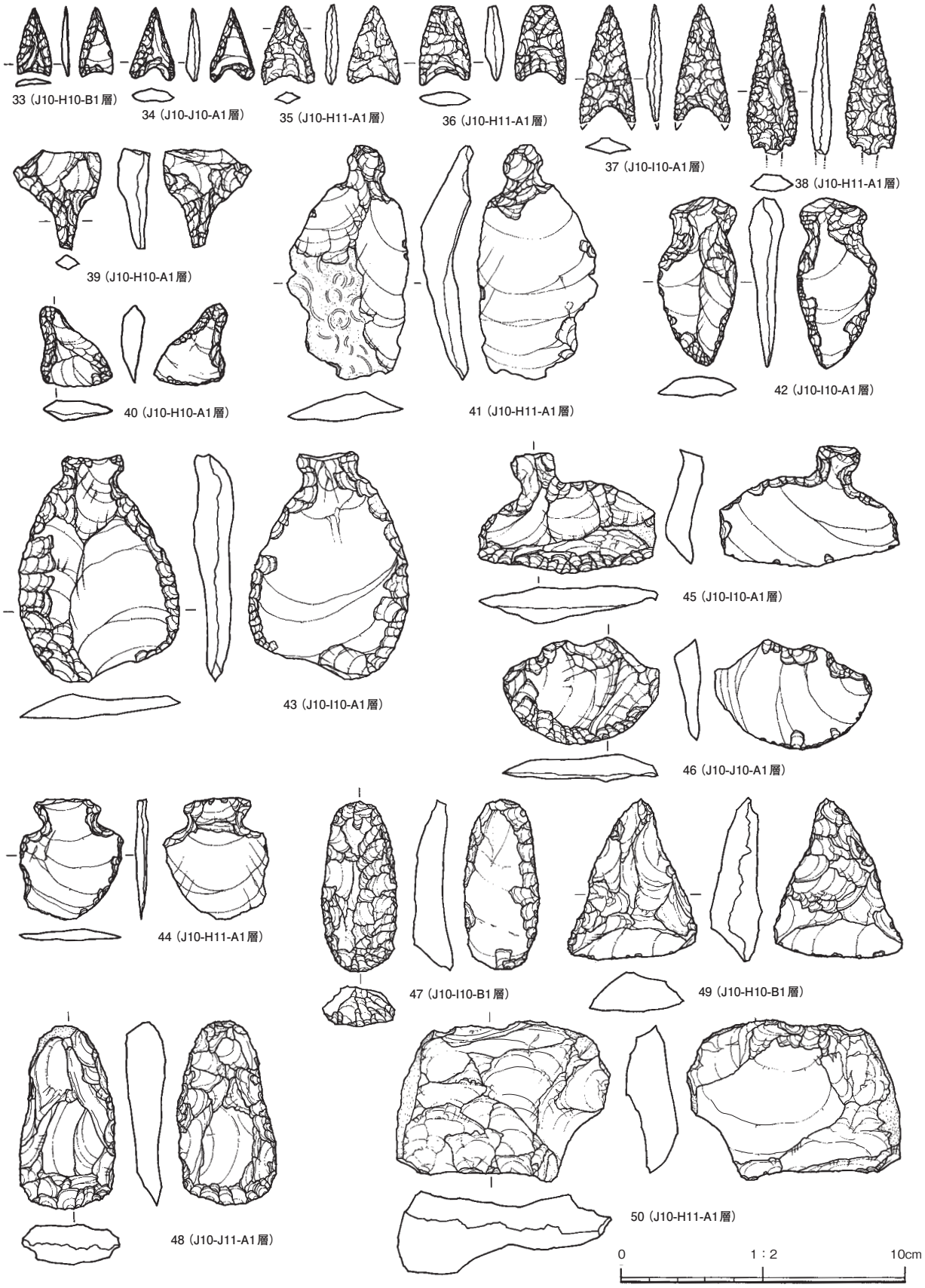
第 121 図　RA281 竪穴住居跡出土遺物（5）



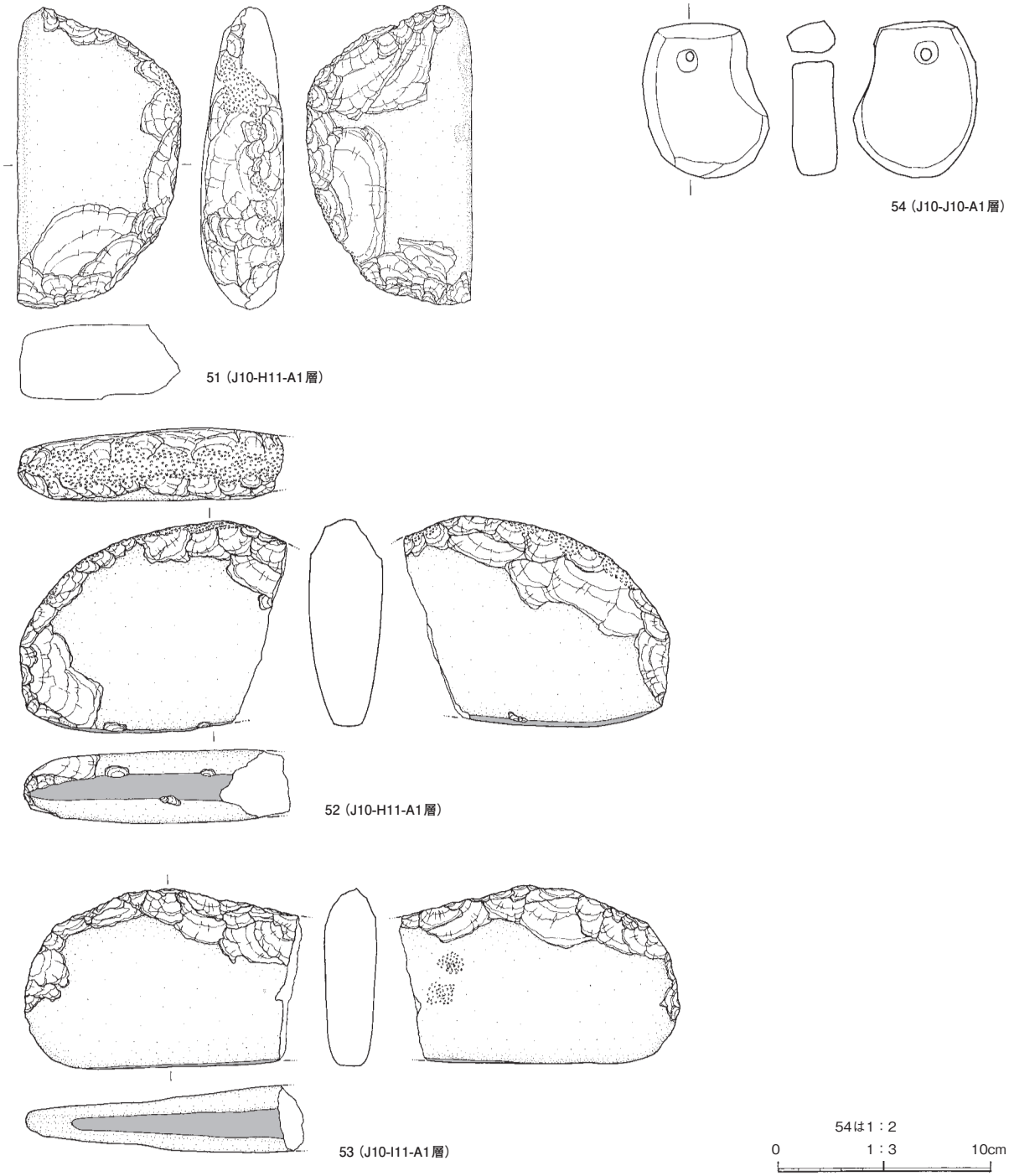
第 122 図　RA281 竪穴住居跡出土遺物（6）



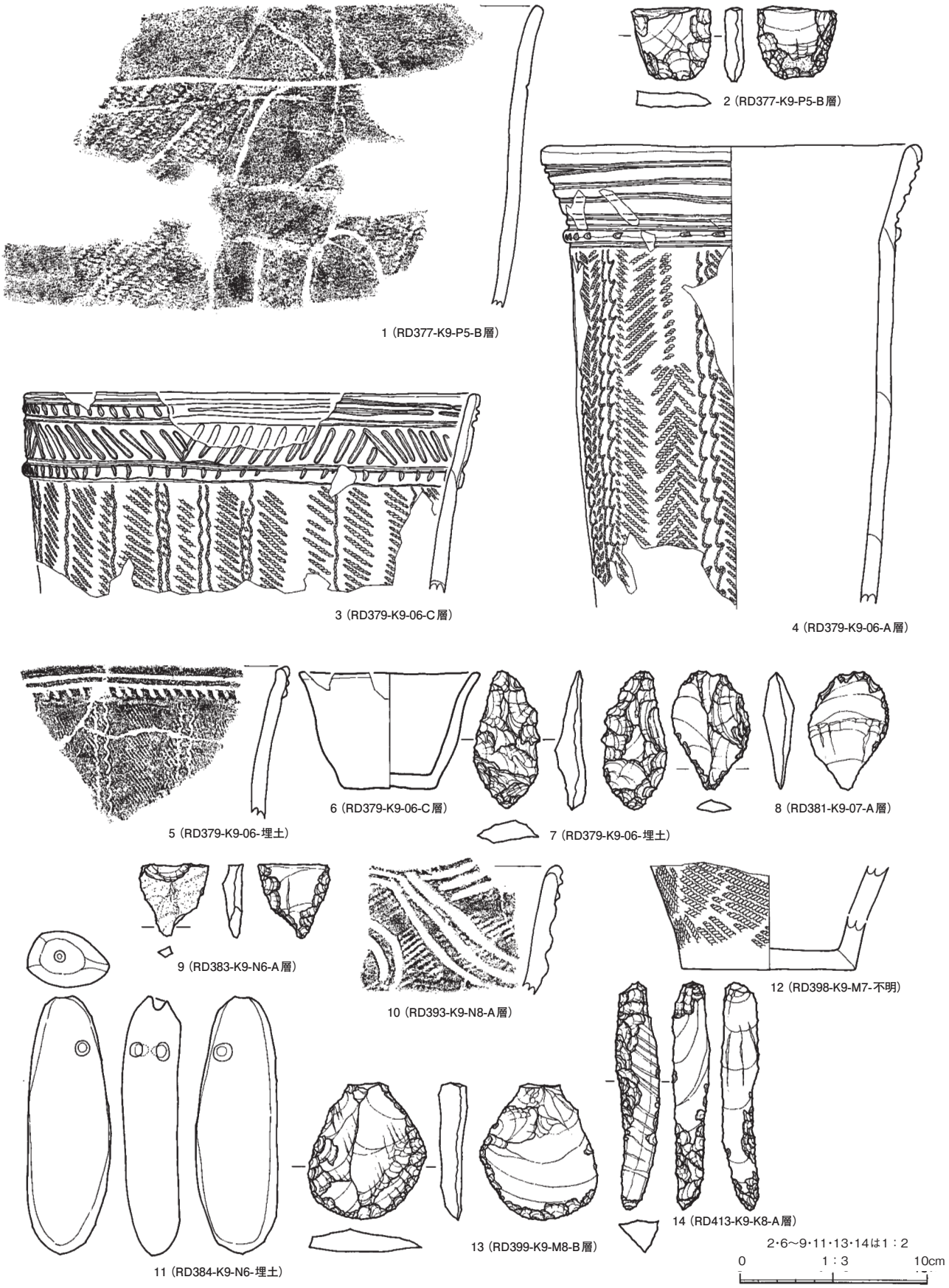
第 123 図　RA281 竪穴住居跡出土遺物（7）



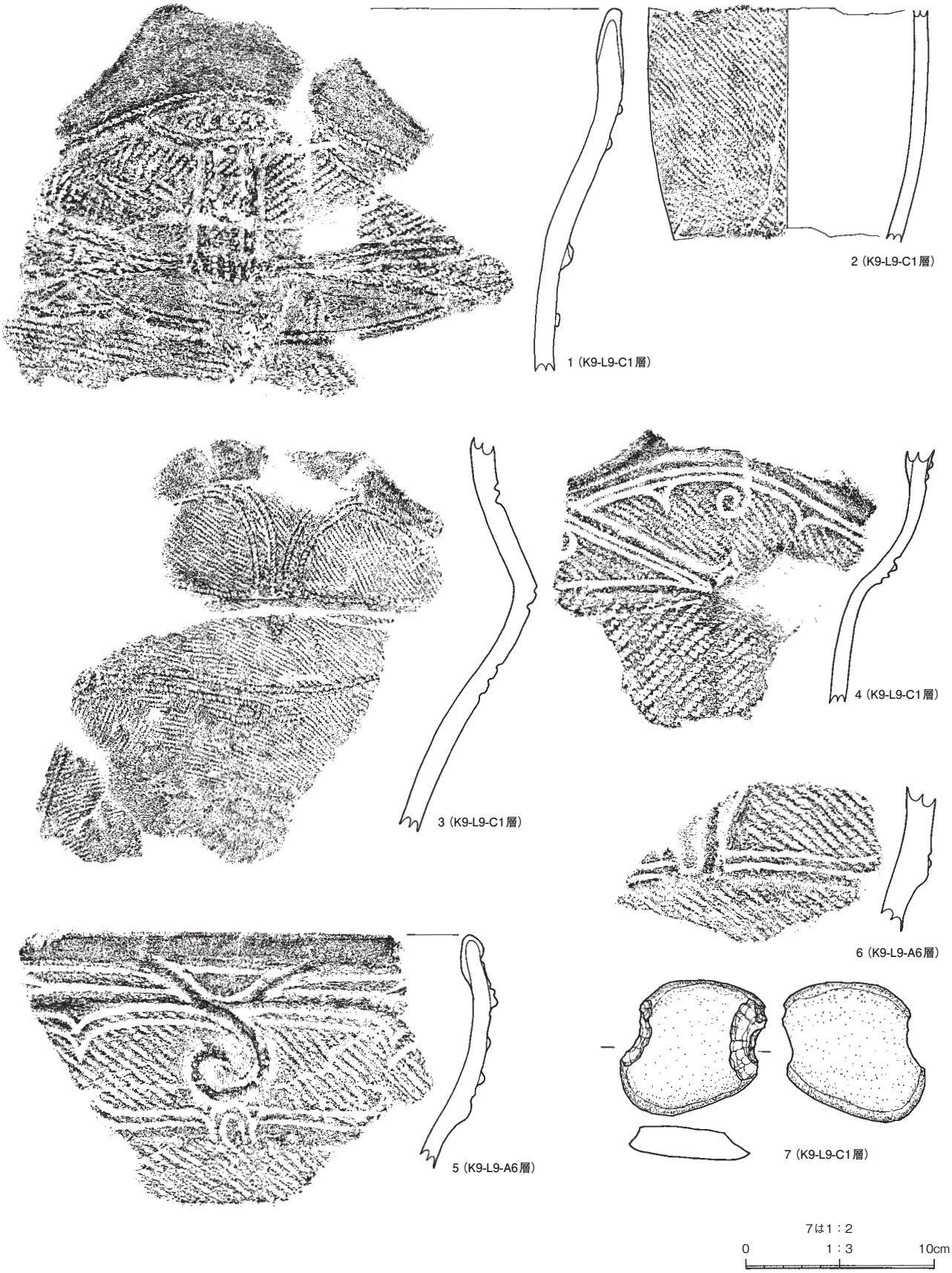
第 124 図　RA281 竪穴住居跡出土遺物（8）



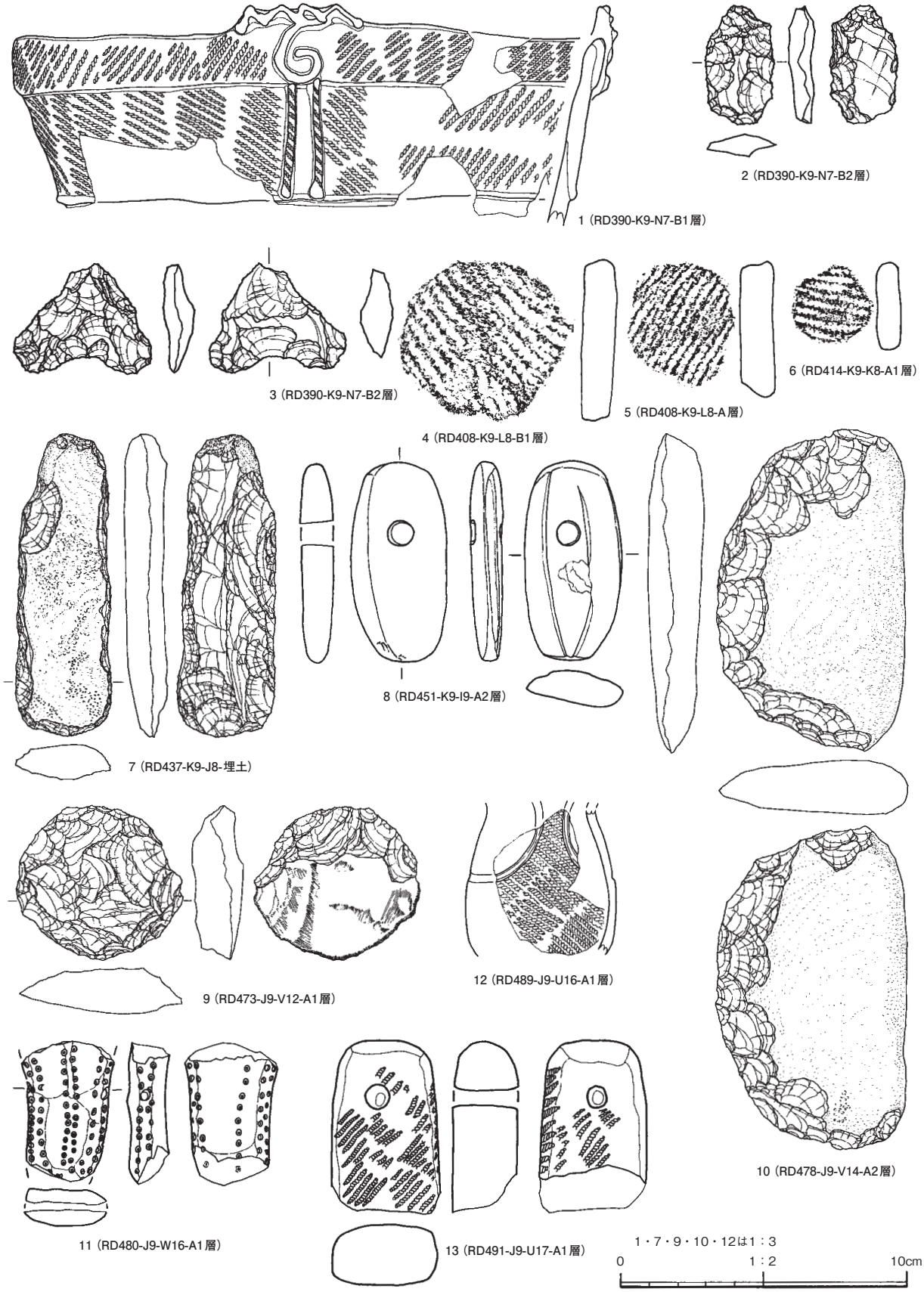
第 125 図　RA281 竪穴住居跡出土遺物（9）



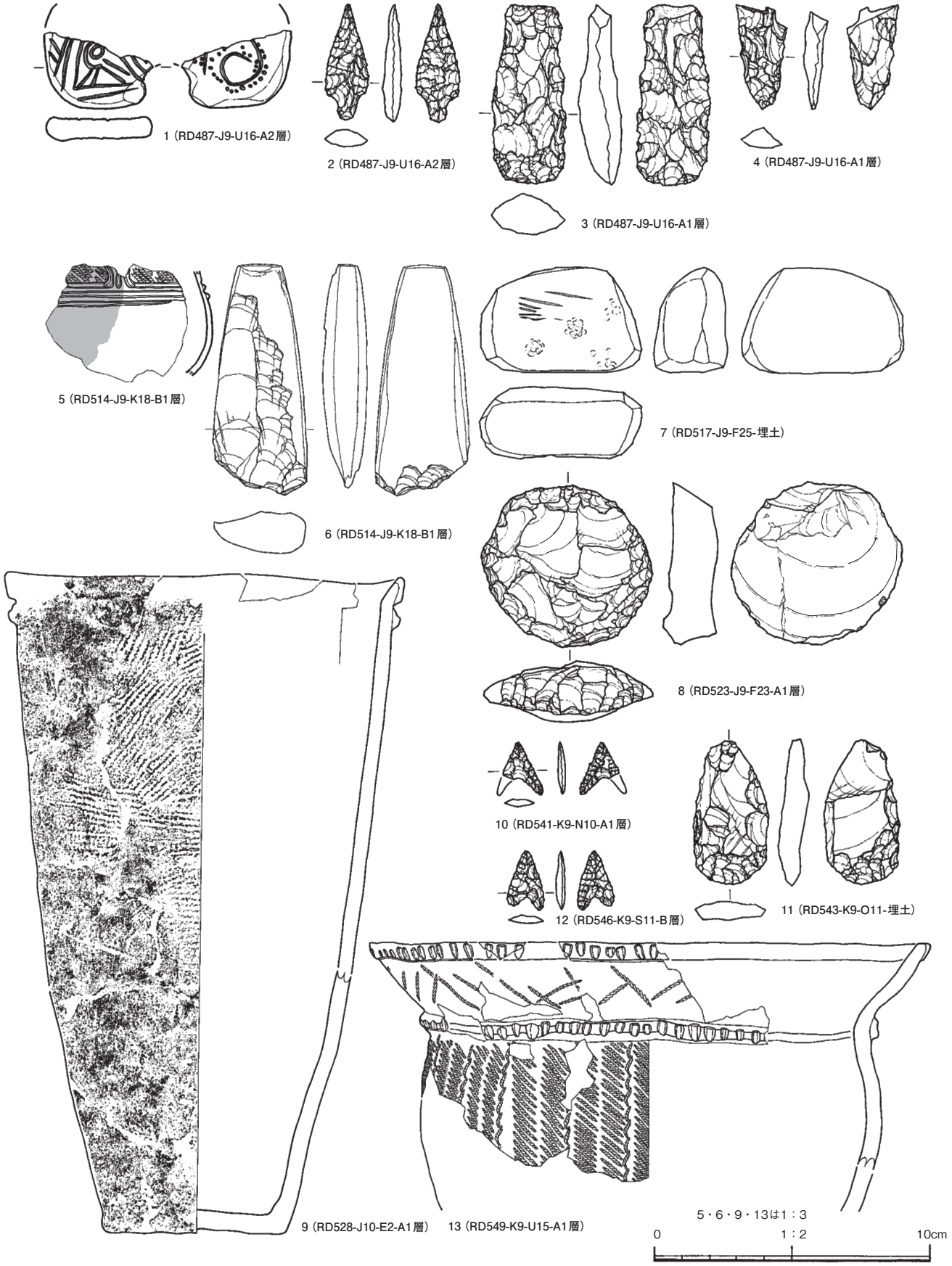
第 126 図　RD377・379・381・383・384・393・398・399・413 土坑出土遺物



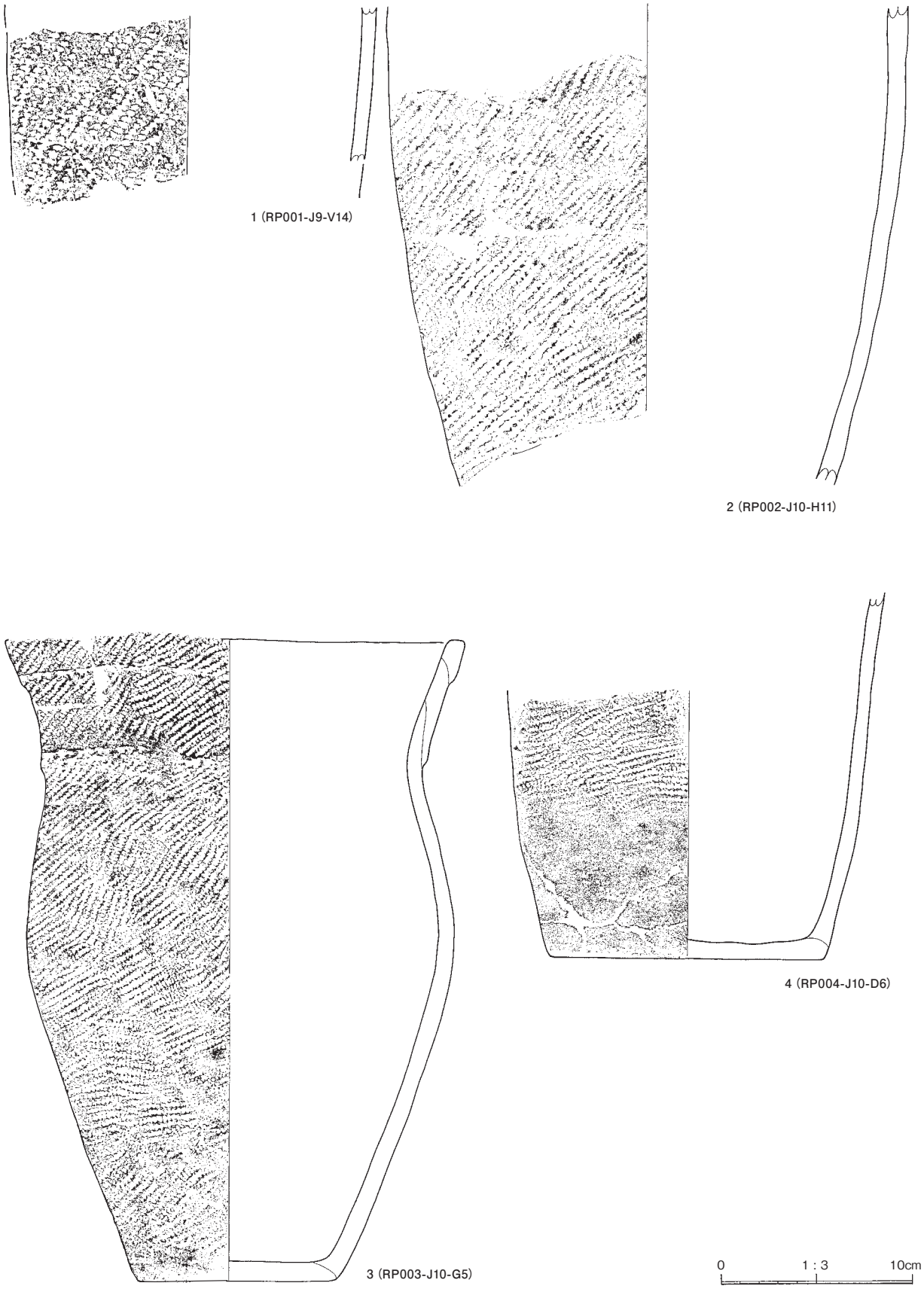
第 127 図　RD423 土坑出土遺物



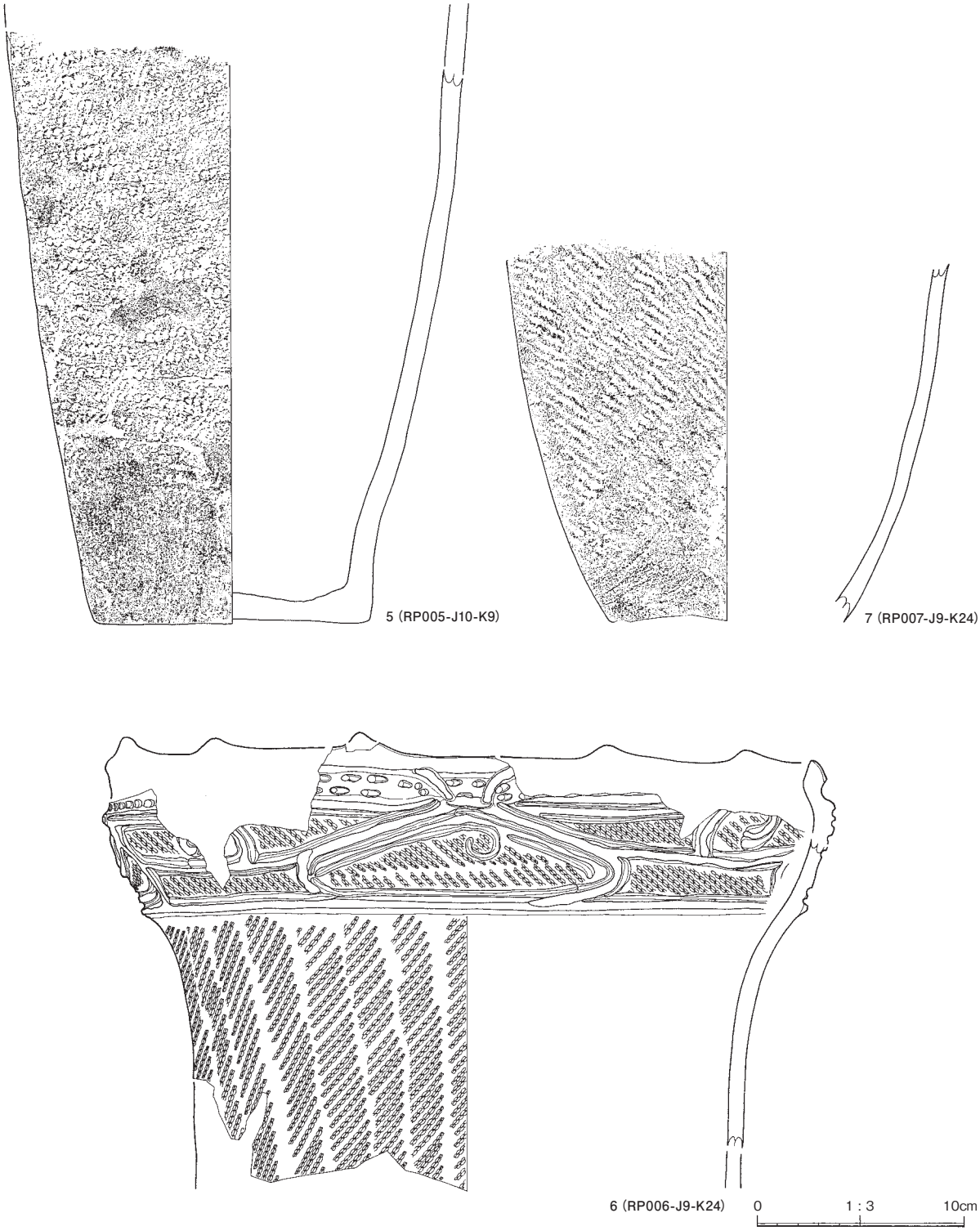
第128図　RD390・408・414・437・451・473・478・480・489・491土坑出土遺物



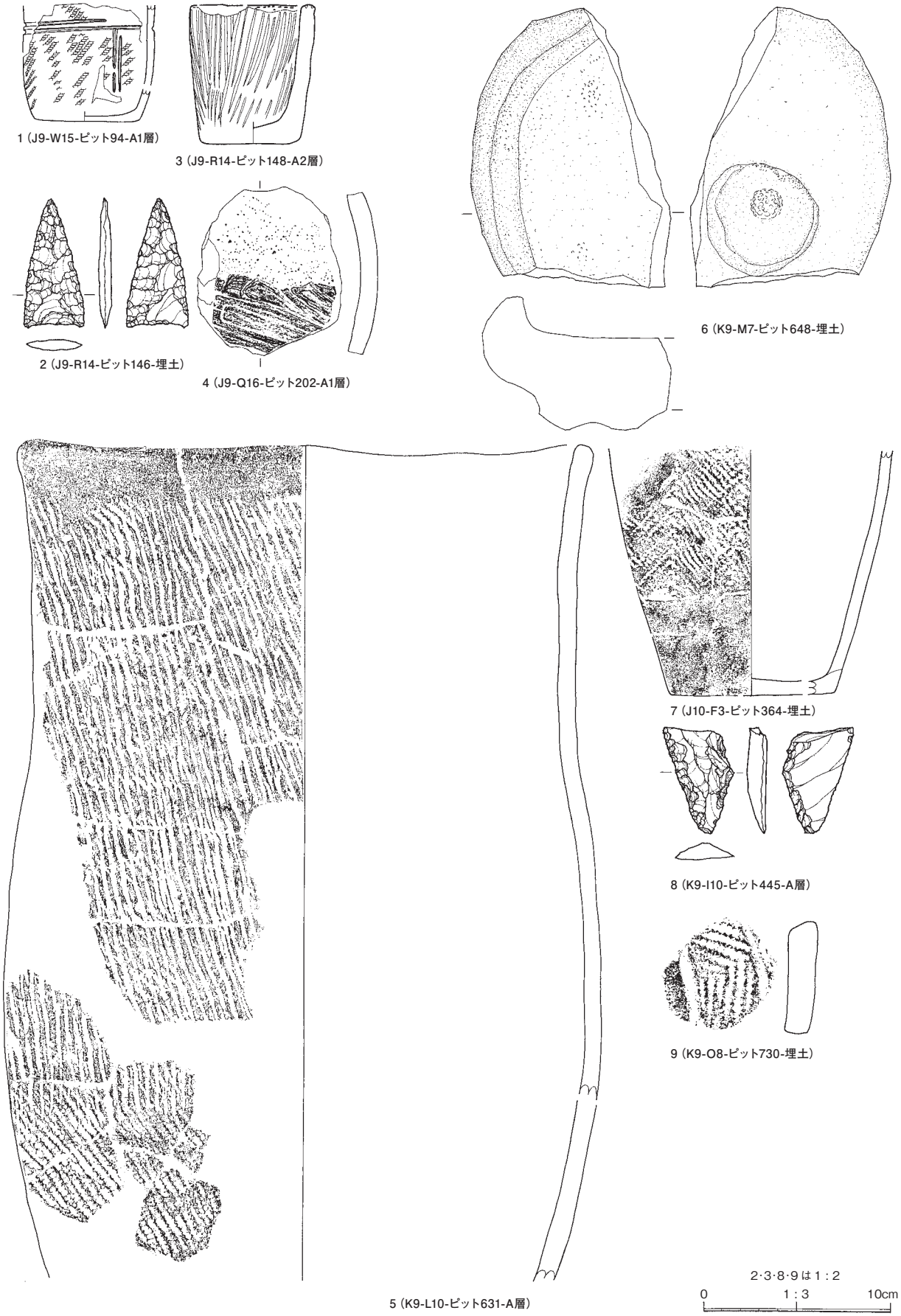
第 129 図　RD487・514・517・523・528・541・543・546・549 土坑出土遺物



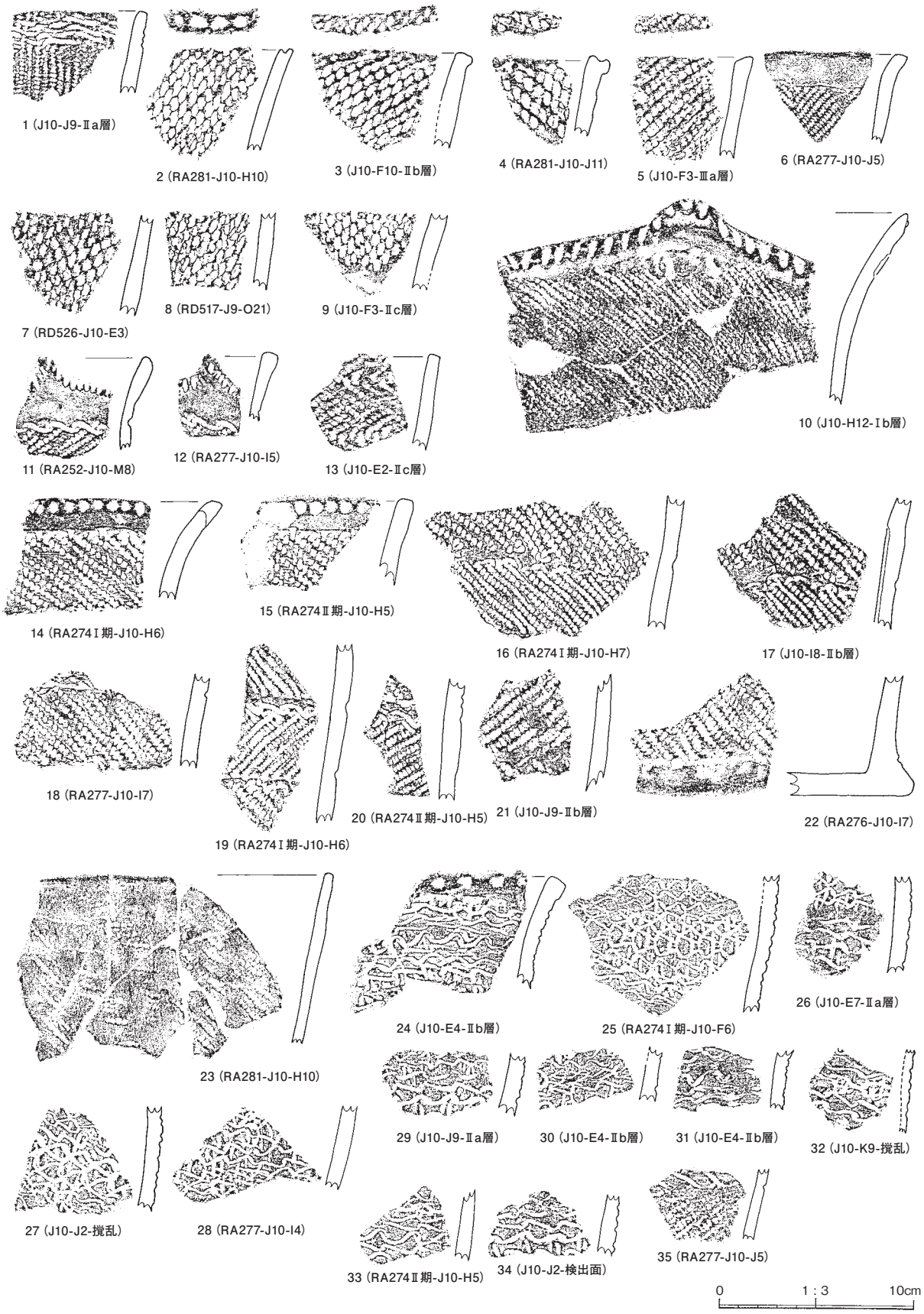
第 130 図　RP001 ～ 004 埋設土器



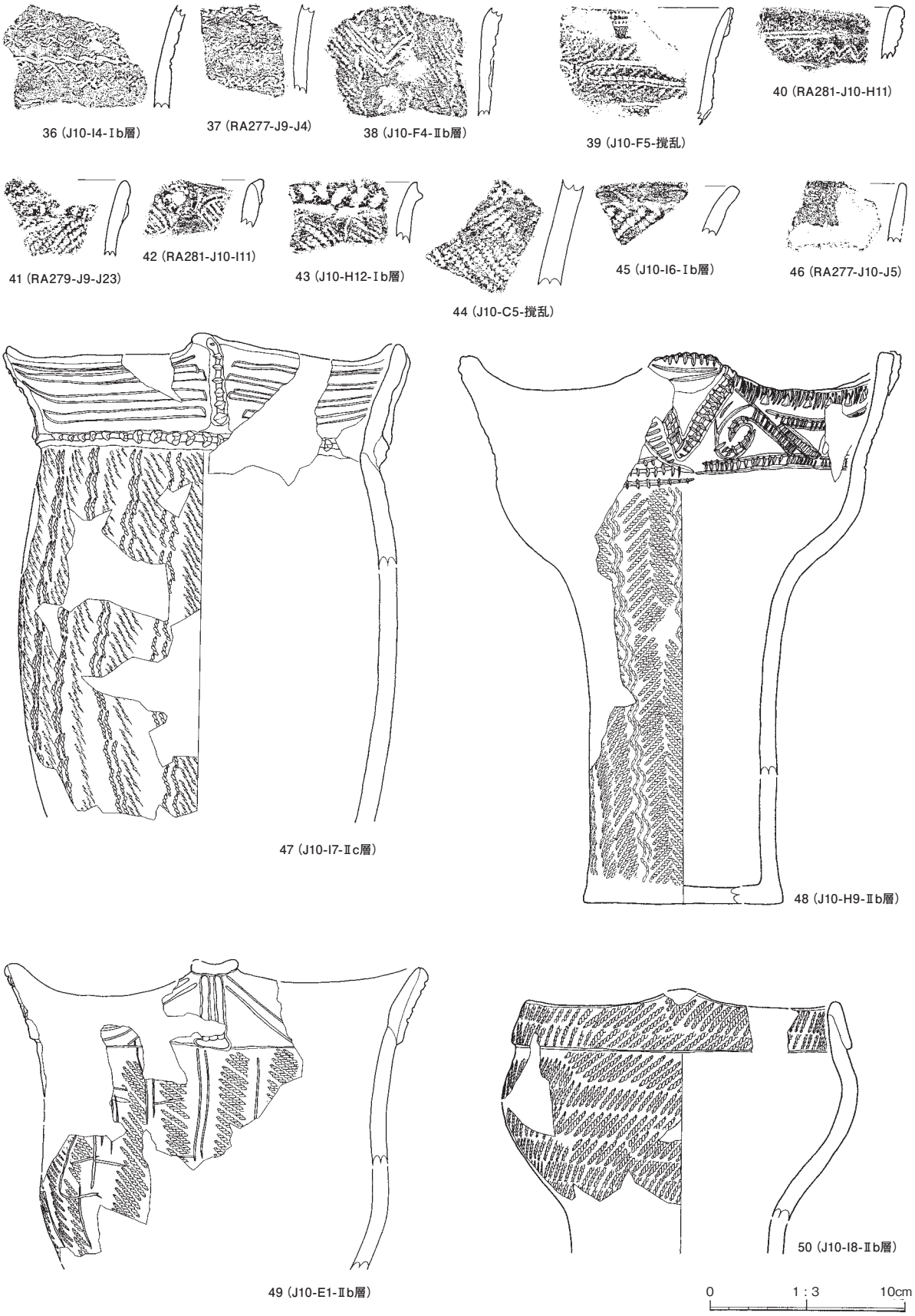
第 131 図　RP005 ～ 007 埋設土器



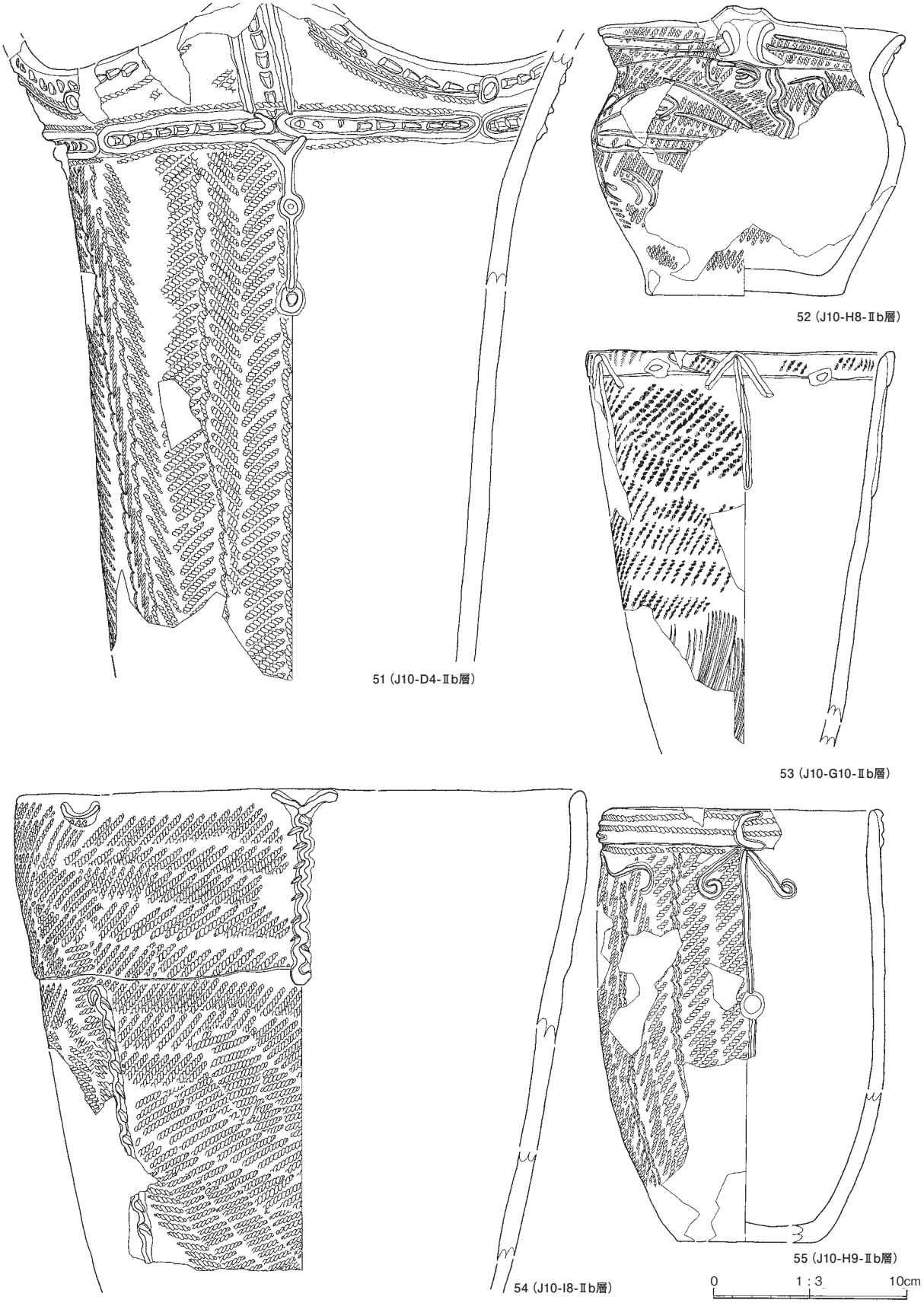
第132図　ピット出土遺物



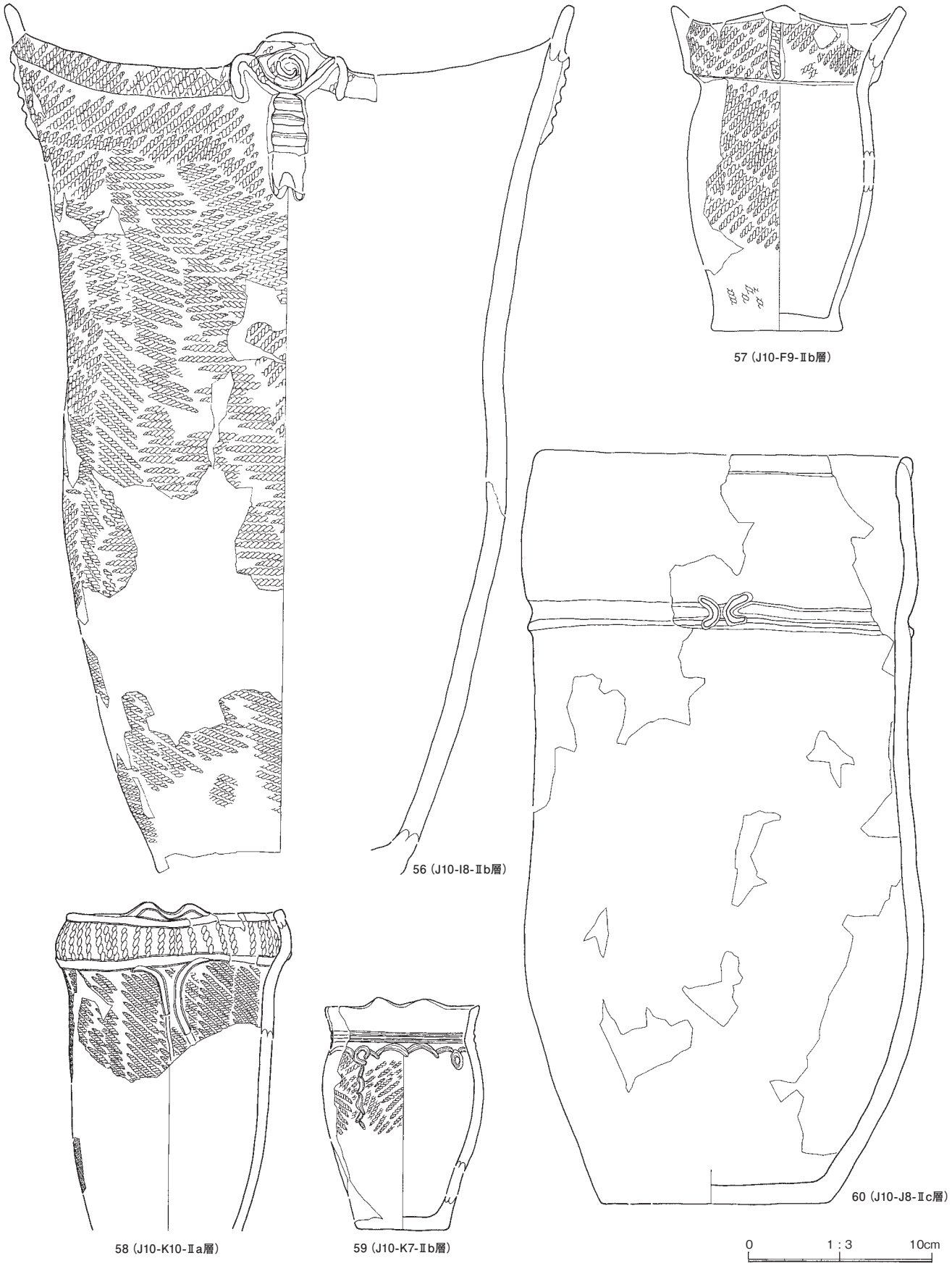
第 133 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（1）



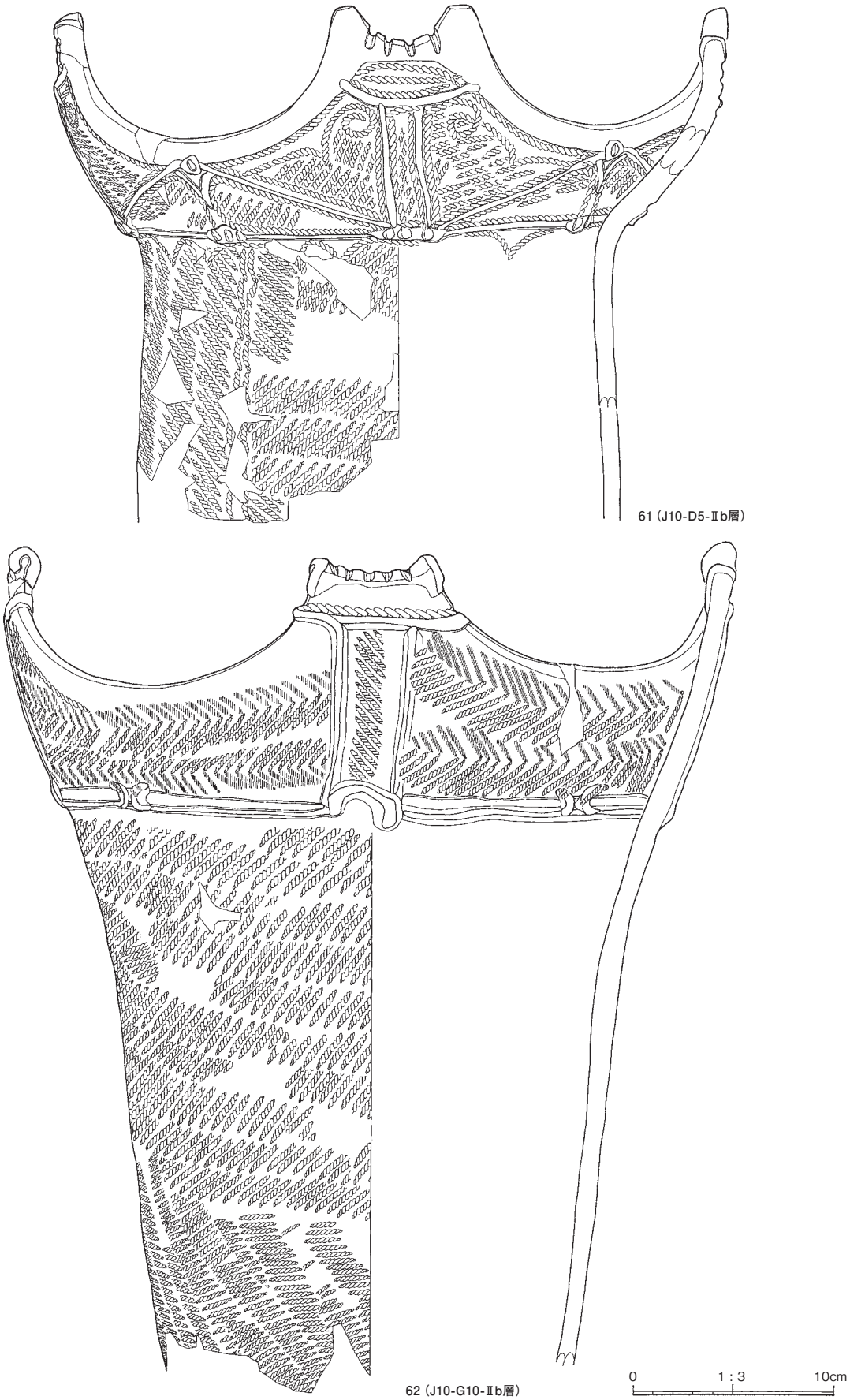
第 134 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（2）



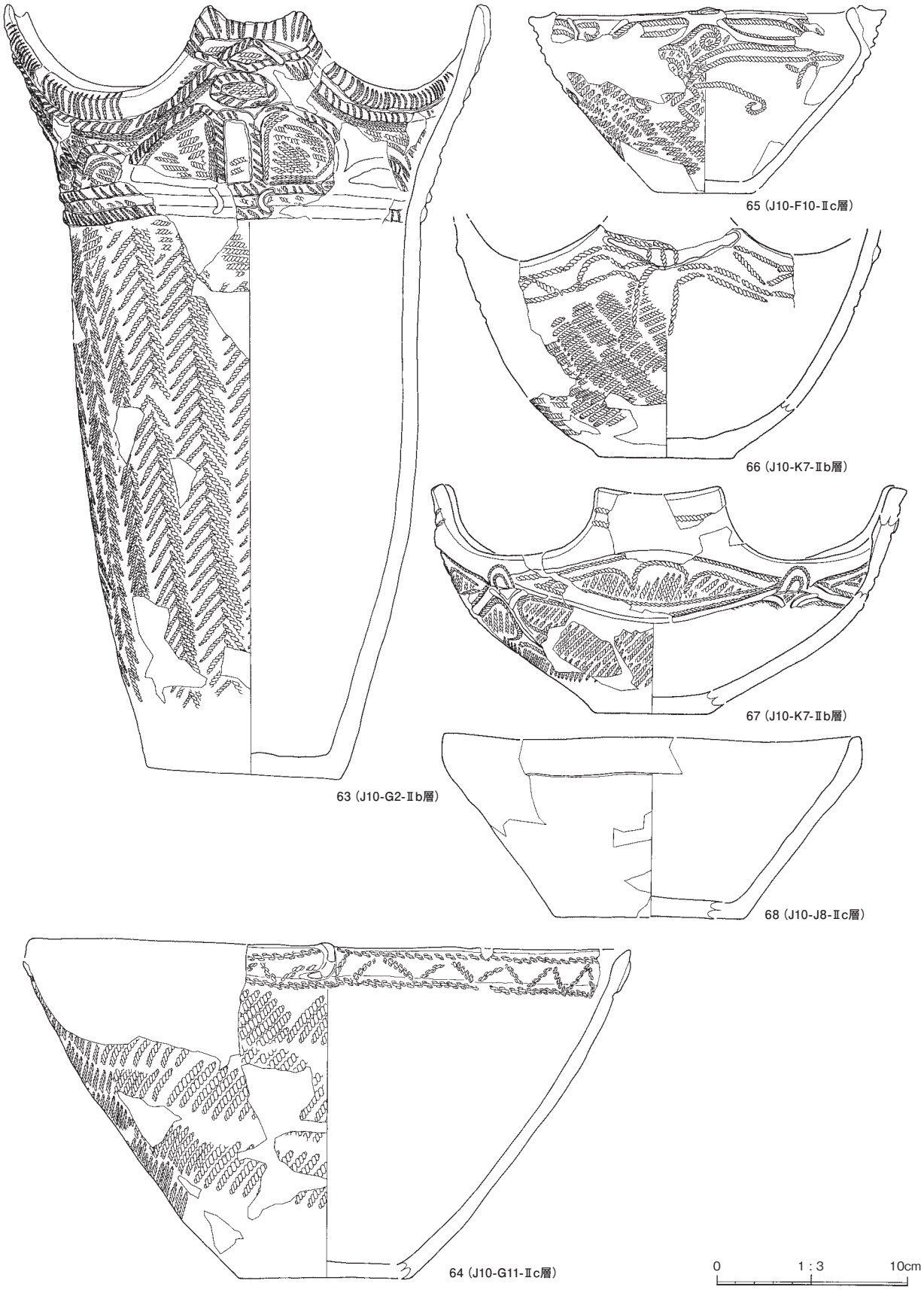
第 135 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（3）



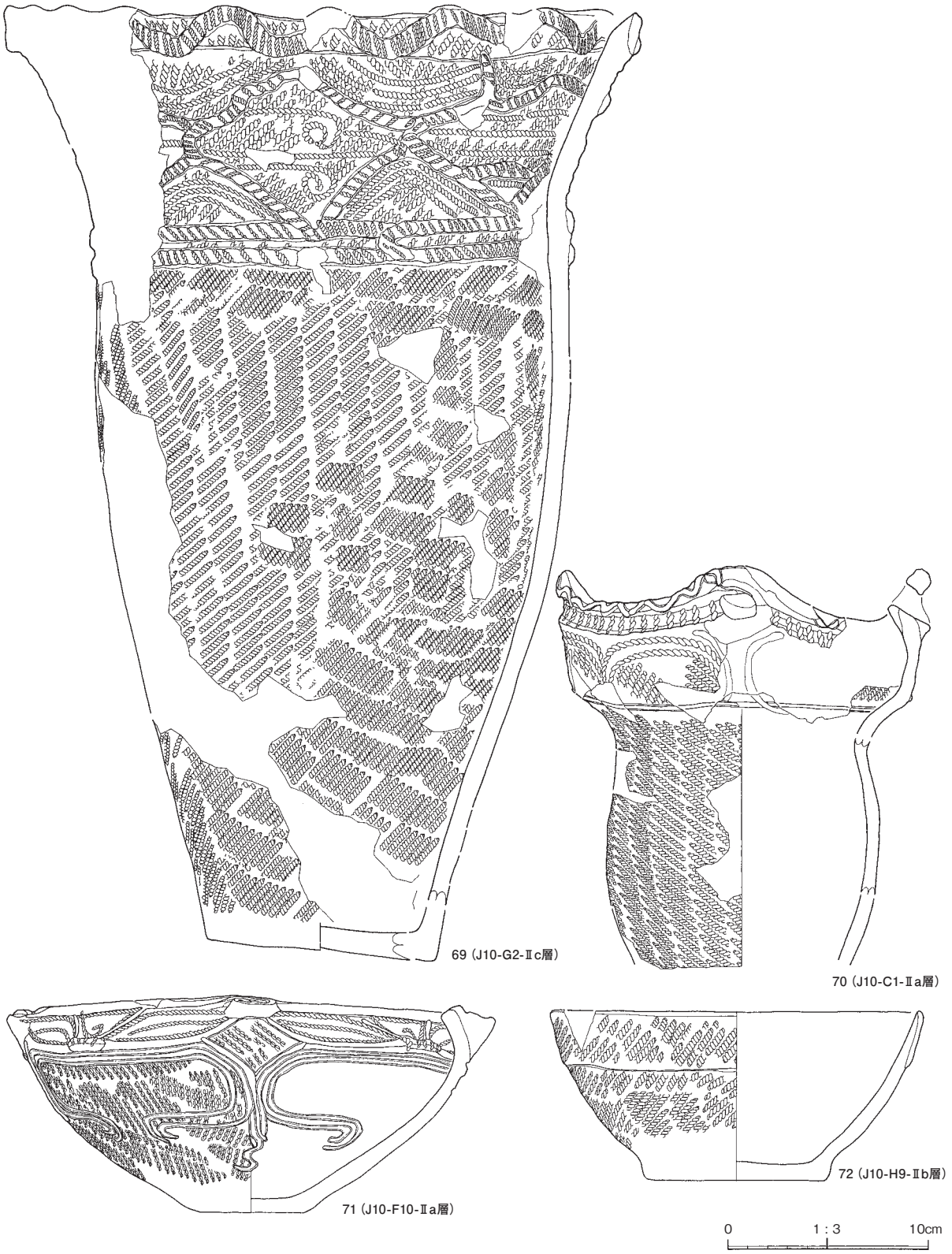
第 136 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（4）



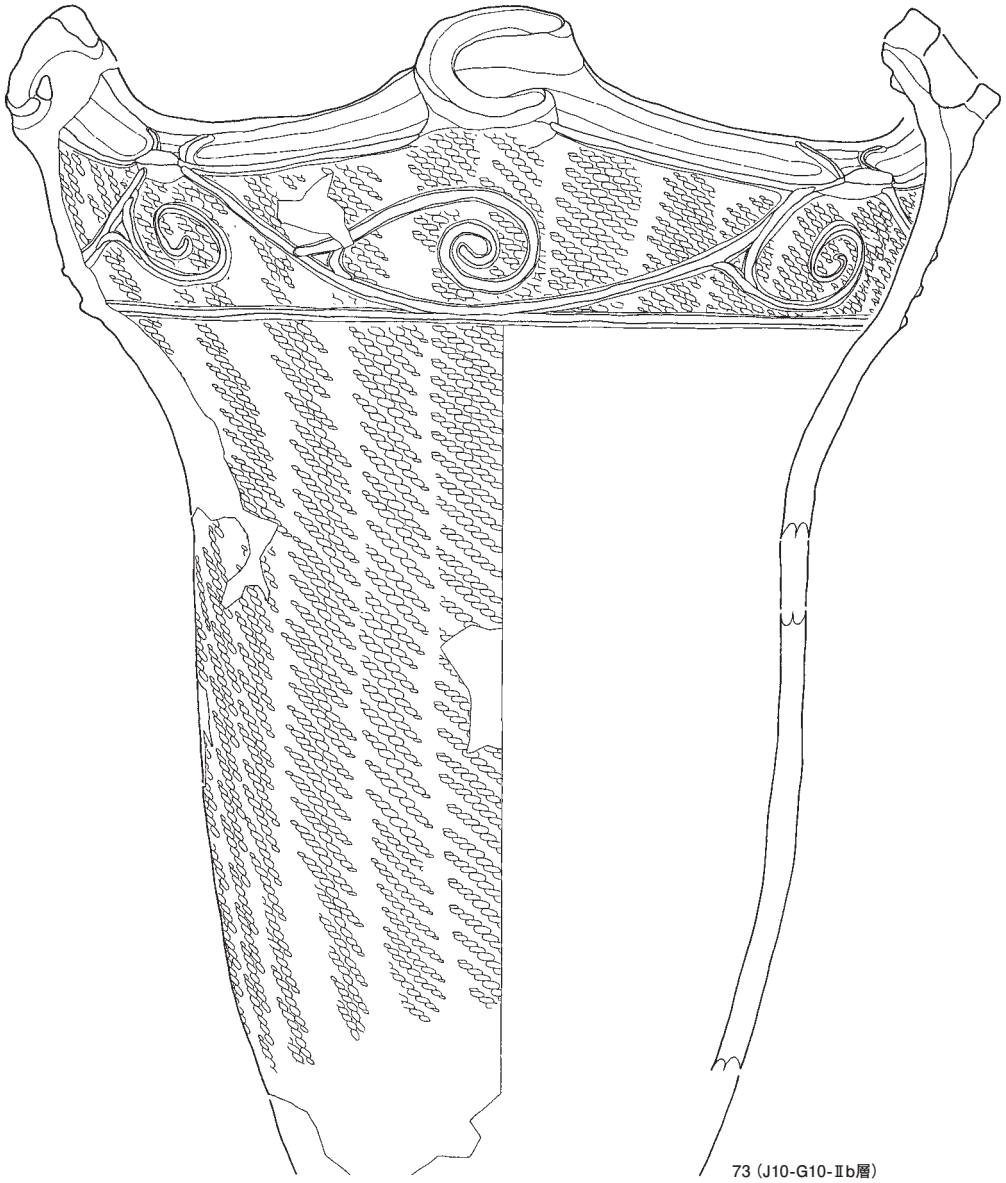
第 137 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（5）

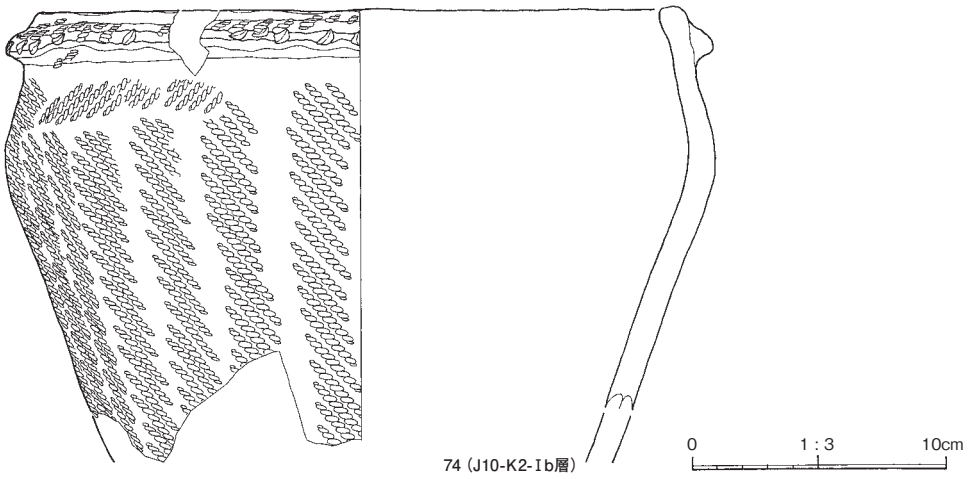


第 138 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（6）

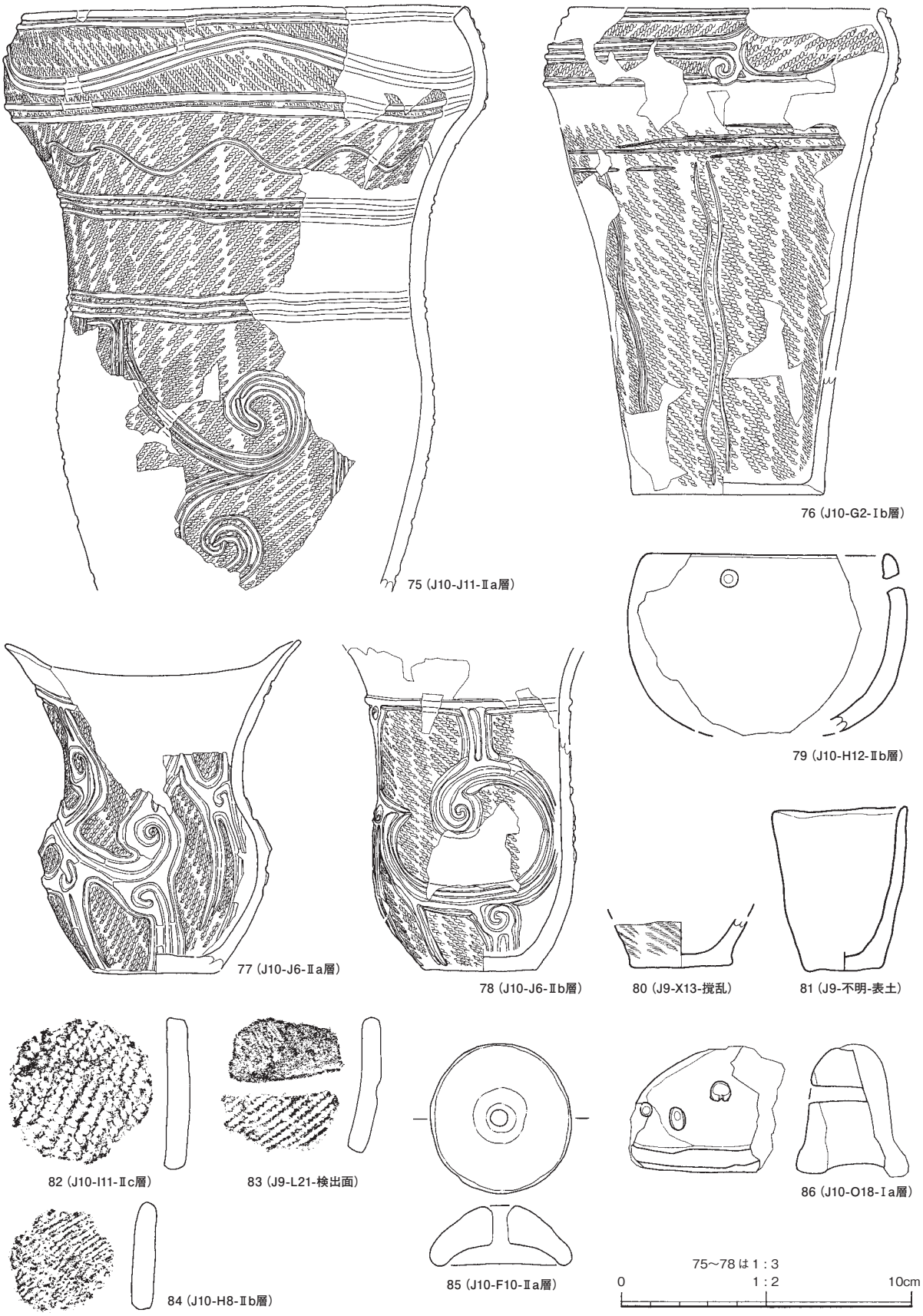


第 139 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（7）

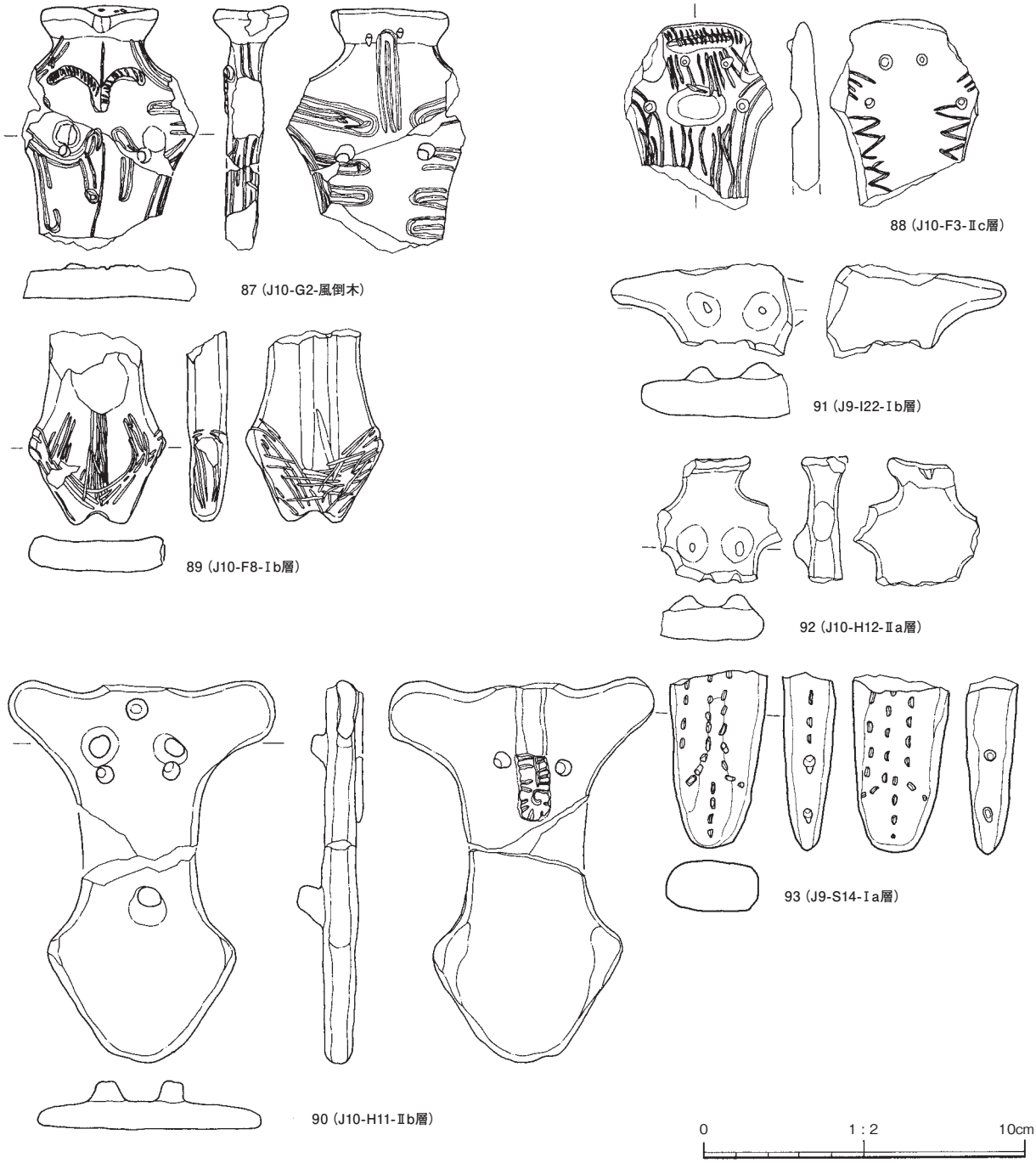




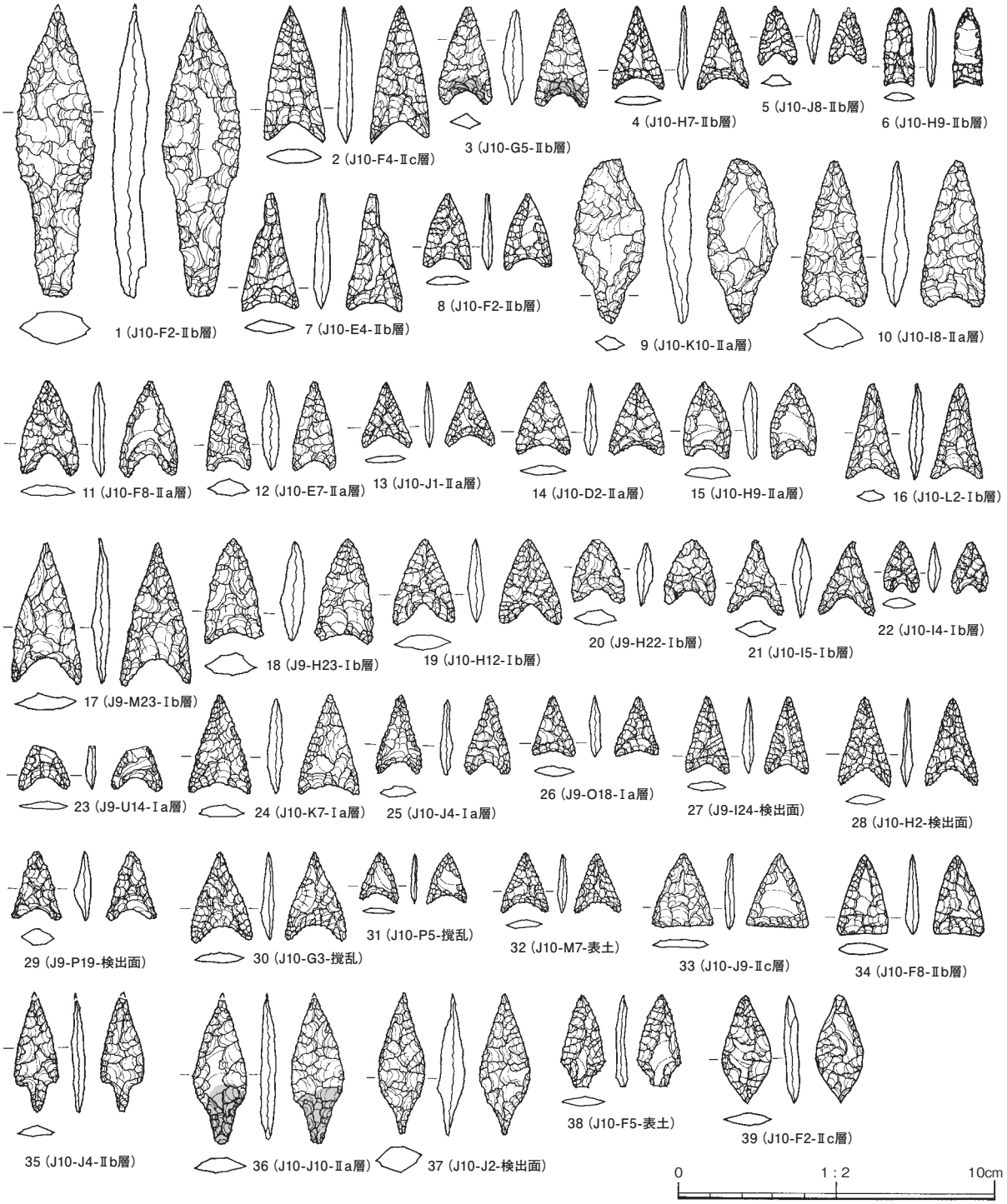
第 140 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（8）



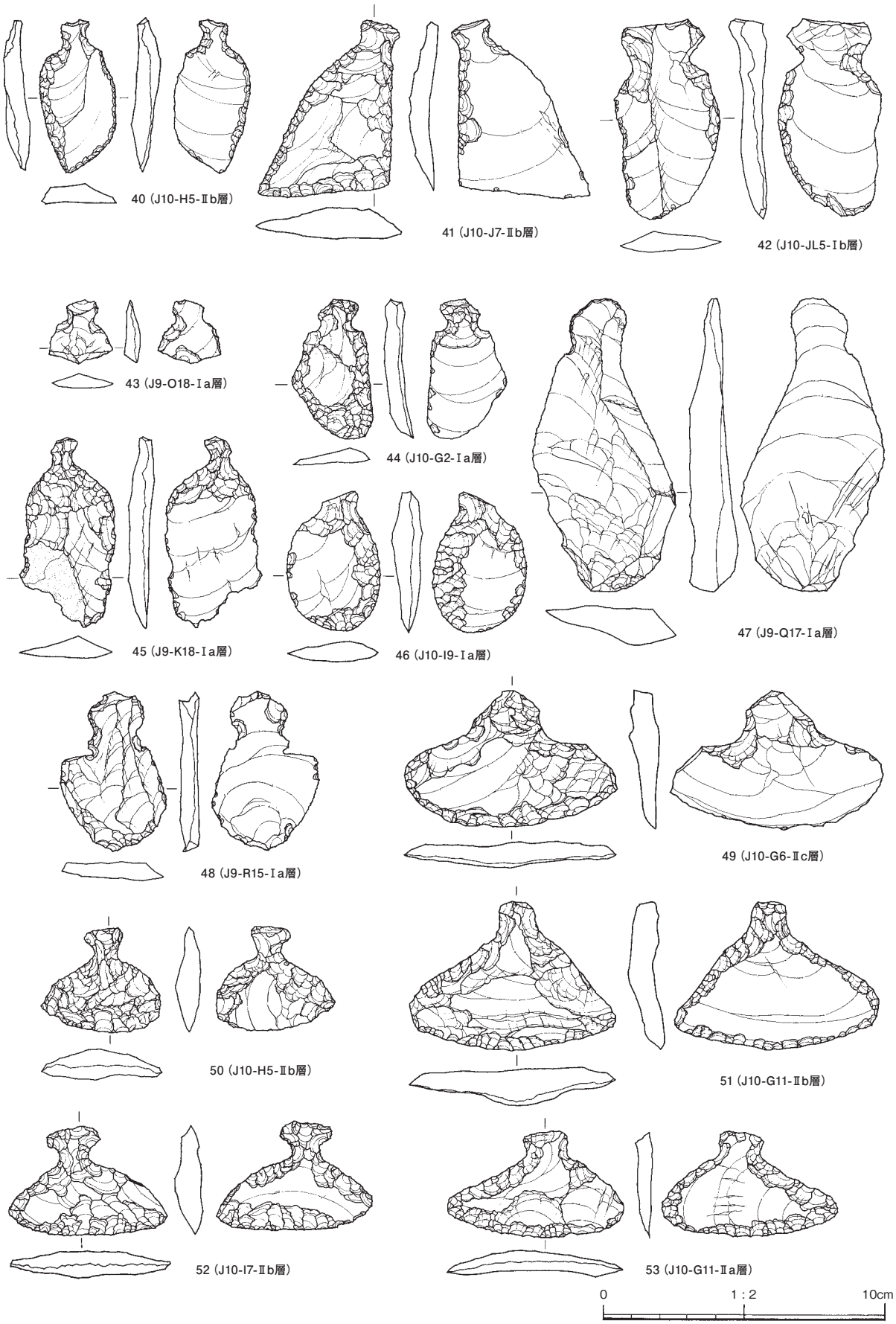
第141図　遺物包含層・遺構外出土遺物（9）



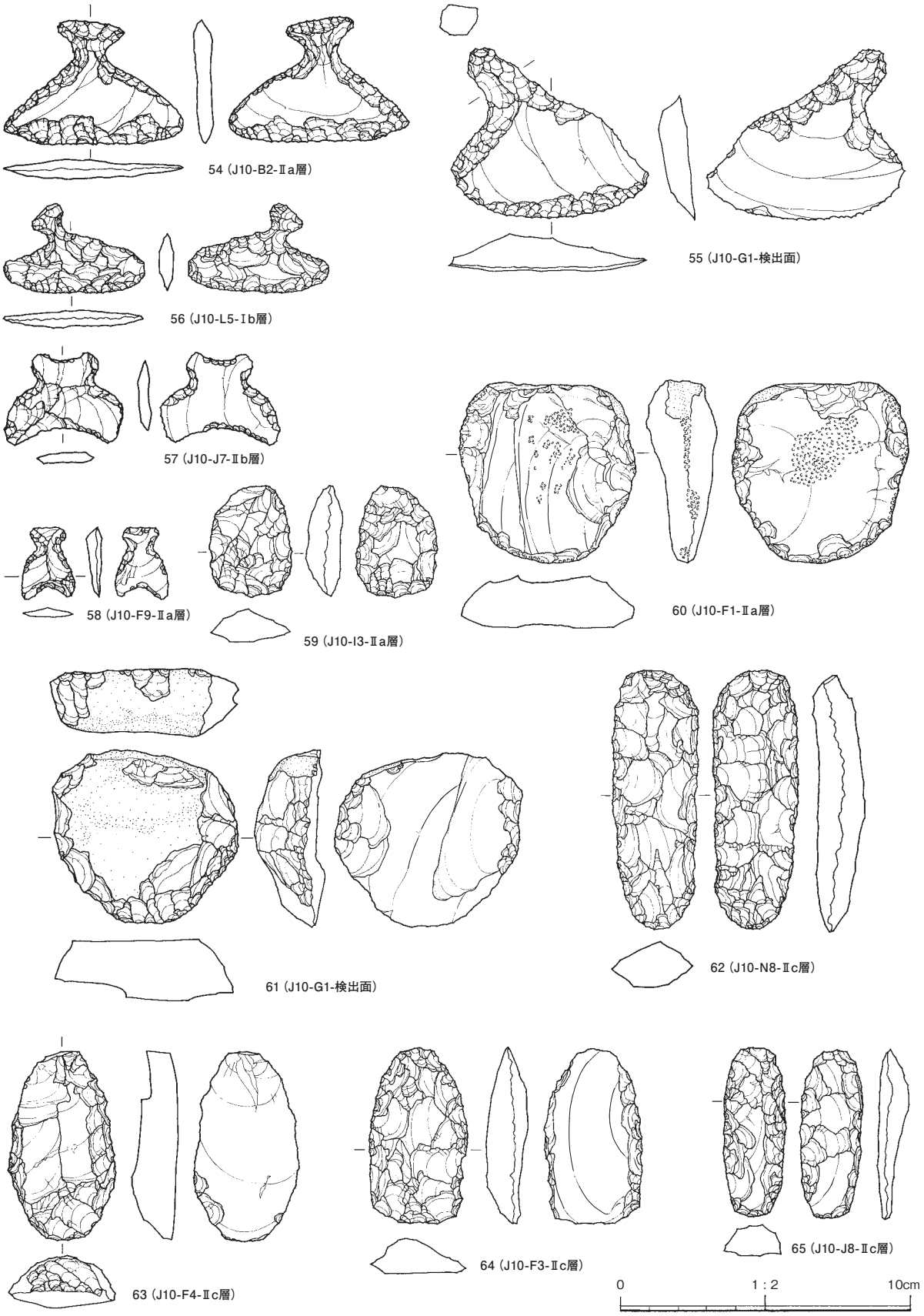
第 142 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（10）



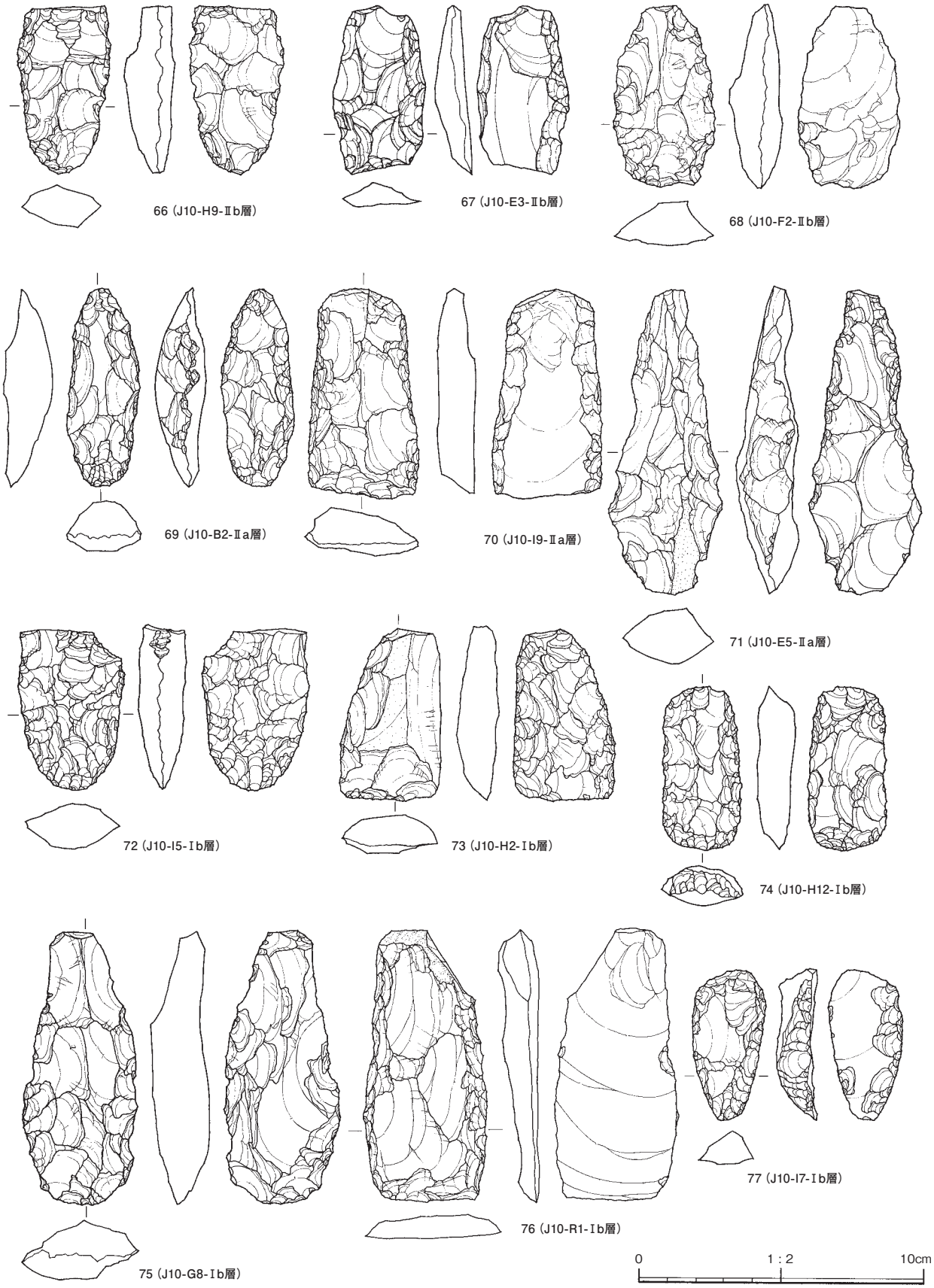
第 143 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（11）



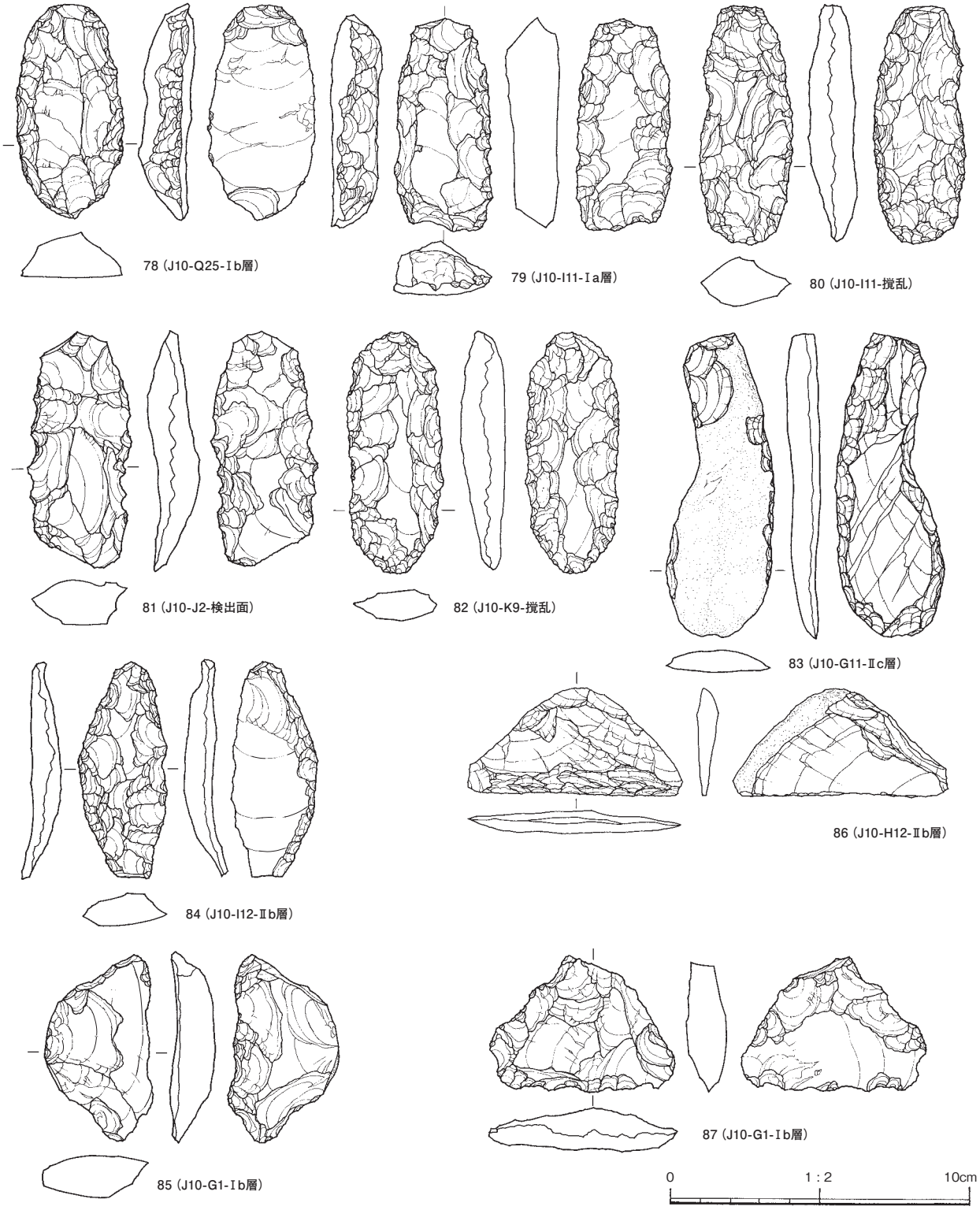
第 144 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（12）



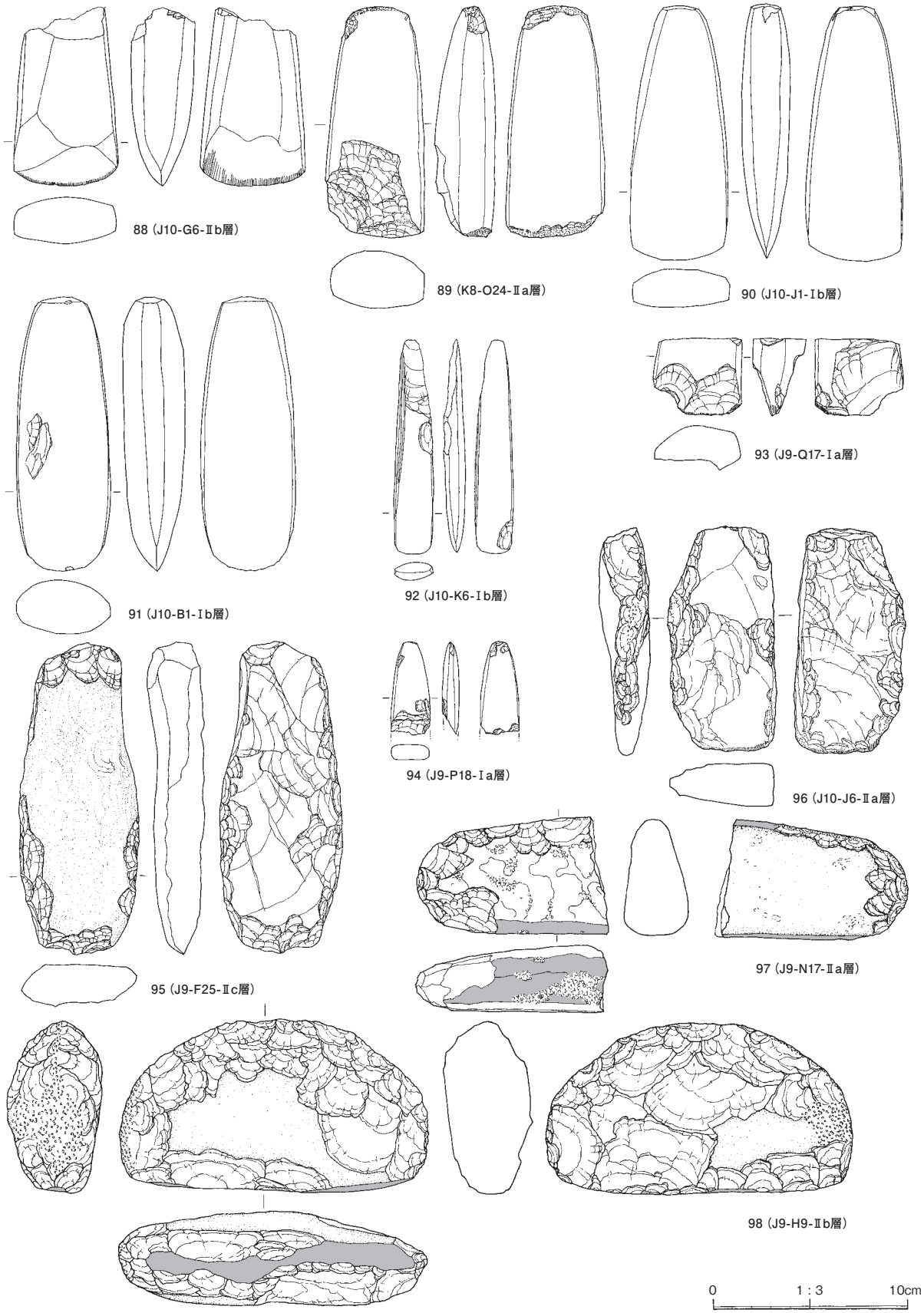
第 145 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（13）



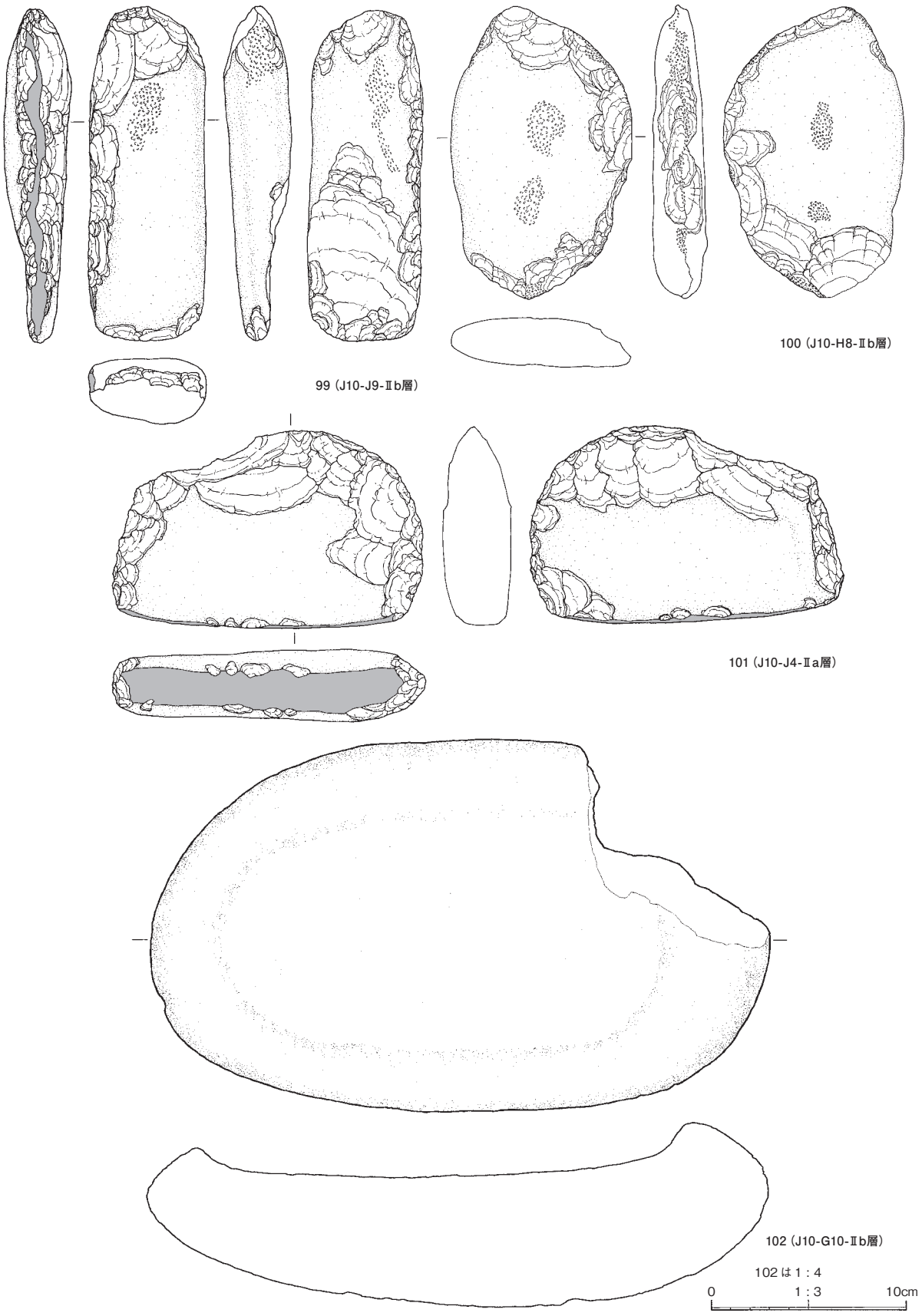
第146図　遺物包含層・遺構外出土遺物（14）



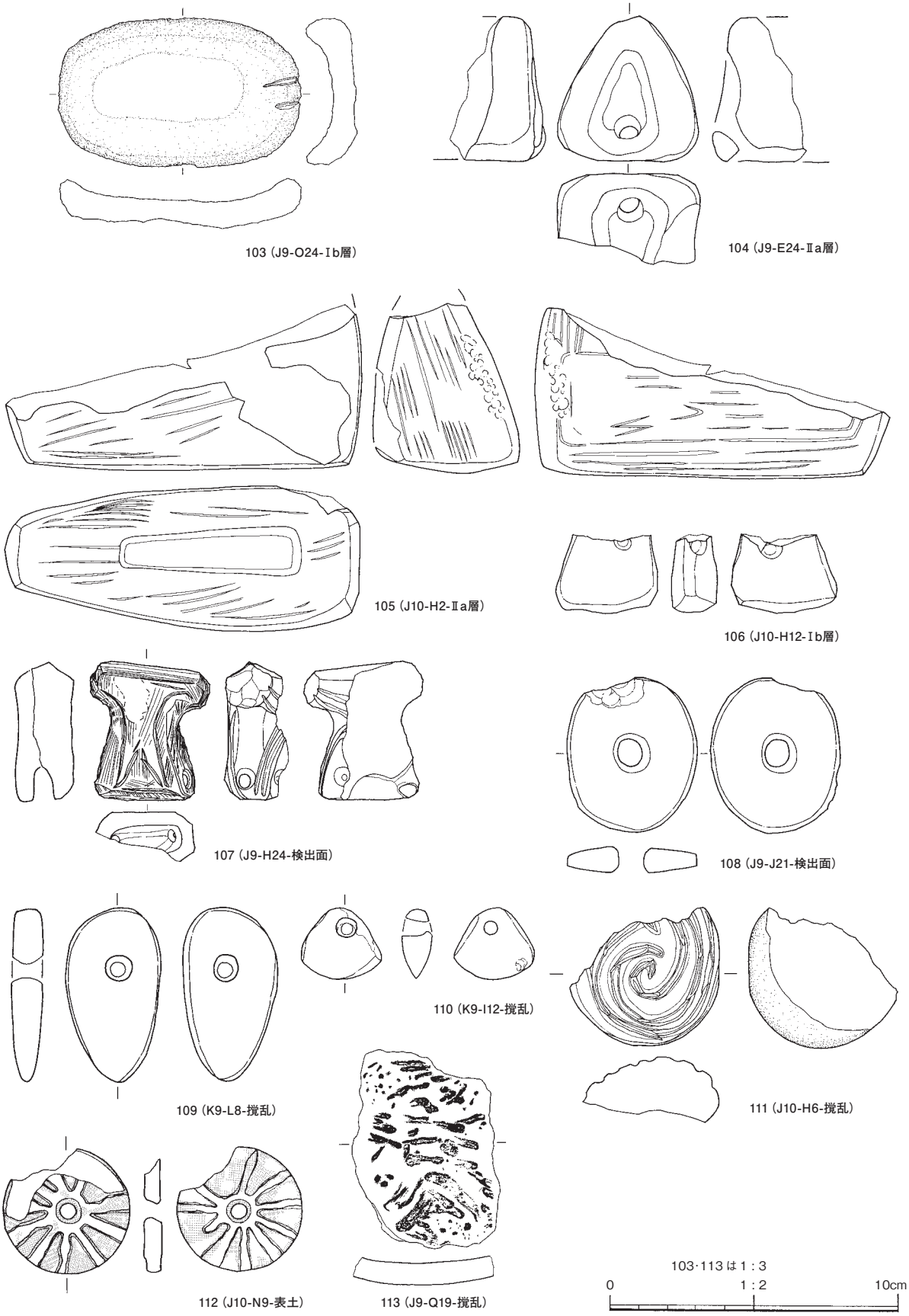
第 147 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（15）



第 148 図　遺物包含層・遺構外出土遺物（16）



第149図　遺物包含層・遺構外出土遺物（17）



第150図　遺物包含層・遺構外出土遺物（18）

写　真　図　版

繋Ⅴ遺跡遠景（北から）

盛岡市立繋小学校全景（西から）

第２図版

第 34 次発掘調査区全景（北東から）

第 36 次発掘調査区遠景（西から）

第 36 次発掘調査区全景（南西から）

第 36 次発掘調査区南東部土層堆積状況

第４図版

ＲＡ 222 竪穴住居跡全景
（東から）

ＲＡ 224 竪穴住居跡全景
（東から）

ＲＡ 224 竪穴住居跡
伏甕出土状況

ＲＡ 233 Ⅰ期竪穴住居跡全景
（北西から）

ＲＡ 233 Ⅰ期竪穴住居跡
伏甕出土状況　1

ＲＡ 233 Ⅰ期竪穴住居跡
伏甕出土状況　2

第６図版

ＲＡ 236 竪穴住居跡全景（北東から）

ＲＡ 236 竪穴住居跡　伏甕出土状況

ＲＡ 238 竪穴住居跡（左）
ＲＡ 246 竪穴住居跡（右）全景
（南西から）

ＲＡ 238 竪穴住居跡検出段階
遺物出土状況

ＲＡ 238 竪穴住居跡床面
石冠出土状況

第８図版

ＲＡ 244 竪穴住居跡全景（南東から）

ＲＡ 244 竪穴住居跡　伏甕１出土状況

ＲＡ 252 竪穴住居跡全景（南西から）

ＲＡ 252 竪穴住居跡　石囲炉

ＲＡ 252 竪穴住居跡Ａ層遺物出土状況

第 10 図版

ＲＡ 253 竪穴住居跡全景（南東から）

ＲＡ 253 竪穴住居跡　伏甕出土状況

ＲＡ 253 竪穴住居跡　複式炉

ＲＡ 259 竪穴住居跡全景（南東から）

ＲＡ 259 竪穴住居跡　伏甕出土状況

第 12 図版

ＲＡ 265 竪穴住居跡全景
（東から）

ＲＡ 265 竪穴住居跡
複式炉

ＲＡ 269 Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡
全景（北西から）

ＲＡ 274 Ⅰ期・Ⅱ期、ＲＡ 277 竪穴住居跡全景（北東から）

ＲＡ 274 Ⅰ期・Ⅱ期竪穴住居跡全景（北西から）

第 14 図版

ＲＡ 274 Ⅰ期竪穴住居跡
土層堆積状況

ＲＡ 274 Ⅰ期竪穴住居跡
Ｂ層遺物出土状況

ＲＡ 274 Ⅱ期竪穴住居跡
石棒埋設状況

ＲＡ 277 竪穴住居跡及び周辺部遺構検出状況（西から）

ＲＡ 277 竪穴住居跡全景（北東から）

第 16 図版

ＲＡ 281 竪穴住居跡全景（北西から）

ＲＡ 281 竪穴住居跡土層堆積状況

ＲＡ 281 竪穴住居跡検出状況

ＲＡ 281 竪穴住居跡検出段階遺物出土状況

R A 236 竪穴住居跡出土伏甕

R A 253 竪穴住居跡出土伏甕

第 17 図版　土器展開写真

第 18 図版

R A 224 竪穴住居跡伏甕 1

R A 224 竪穴住居跡伏甕 2

R A 224 竪穴住居跡伏甕 3

R A 233 Ⅰ期竪穴住居跡伏甕

伏甕底部

R A 263 竪穴住居跡伏甕

R A 244 竪穴住居跡伏甕 1

R A 244 竪穴住居跡伏甕 2

伏甕 1 底部

伏甕 2 底部

R A 244 竪穴住居跡伏甕 3

第 20 図版

R A 258 Ⅱ期竪穴住居跡伏甕 1

R A 258 Ⅱ期竪穴住居跡伏甕 2

伏甕 1 底部

R A 259 竪穴住居跡伏甕 2

R A 259 竪穴住居跡伏甕 1

伏甕 2 底部

R A 223 竪穴住居跡

R A 233 Ⅰ期竪穴住居跡

R A 234 竪穴住居跡

R A 235 竪穴住居跡

R A 236 竪穴住居跡

R A 252 竪穴住居跡 (1)

R A 252 竪穴住居跡 (2)

R A 252 竪穴住居跡 (3)

R A 252 竪穴住居跡 (4)

第 22 図版

R A 258 Ⅱ期竪穴住居跡

R A 261 竪穴住居跡

R A 262 竪穴住居跡

R A 265 竪穴住居跡

R A 269 Ⅱ期竪穴住居跡

R A 274 Ⅰ期竪穴住居跡 (1)

R A 274 Ⅰ期竪穴住居跡 (2)

R A 281 竪穴住居跡 (1)

R A 281 竪穴住居跡 (2)

R A 281 竪穴住居跡 (3)

第 36 次発掘調査区出土土偶

第 36 次発掘調査区出土土製品 (1)

第 36 次発掘調査区出土土製品 (2)

第 36 次発掘調査区出土蛇紋岩製磨製石斧

第 34 次発掘調査区出土垂飾品

第 24 図版

R A 222 竪穴住居跡

R A 223 竪穴住居跡

R A 233 Ⅰ期竪穴住居跡伏甕内

R A 238 竪穴住居跡

R A 246 竪穴住居跡

R A 253 竪穴住居跡 (1)

R A 253 竪穴住居跡 (2)

R A 281 竪穴住居跡

遺物包含層（1）

遺物包含層（2）

遺物包含層（3）

遺物包含層（4）

報 告 書 抄 録

ふりがな	つなぎごいせき
書　　名	繋Ⅴ遺跡
副 書 名	繋小学校校舎等増改築工事事業に伴う発掘調査報告書
巻　　次	
シリーズ番号	
編著者名	佐々木紀子、神原雄一郎
編集機関	盛岡市遺跡の学び館
所 在 地	〒020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1　電話 019-635-6600　Fax 019-635-6605
発行年月日	2013 年 3 月 29 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
つなぎごいせき 繋Ⅴ遺跡 第 29・33・34・36・37 次	いわてけんもりおかし 岩手県盛岡市 つなぎあざたていち 繋字舘市 114 番地 1	0321		39° 40′ 16″	141° 01′ 19″	第 29 次 2004. 09. 07～ 2004. 10. 20 第 33 次 2006. 10. 02～ 2006. 10. 31 第 34 次 2007. 09. 18～ 2007. 11. 30 第 36 次 2008. 10. 01～ 2009. 12. 24 第 37 次 2010. 07. 05～ 2010. 07. 13	3,896 ㎡	学校増改築

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
繋Ⅴ遺跡	集落遺跡	縄文時代中期	竪穴住居跡　70 棟 竪穴跡　3 棟 土坑　173 基 ピット　735 口	縄文時代中期の土器・石器ほか	伏甕 16 個体出土

繋　V　遺　跡
―繋小学校校舎等増改築工事事業に伴う発掘調査報告書―
2013 年 3 月 29 日 発行

発行　盛岡市教育委員会　盛岡市遺跡の学び館
〒 020-0866　岩手県盛岡市本宮字荒屋 13 番地 1
電話 019-635-6600　Fax 019-635-6605
印刷　株式会社　橋本印刷
〒 020-0015　岩手県盛岡市本町通 15 － 29
電話 019-652-1354　Fax 019-652-1355